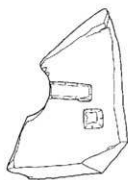


大野城跡 I

— 総括報告書 遺構編 上巻 —



2025

九州歴史資料館

大野城跡 I

— 総括報告書 遺構編 上巻 —

2025

九州歴史資料館



(1) 大野城跡と大宰府政庁（南から）



(2) 大野城跡遠景（東から）



(1) 百間石垣 (東から)



(2) 大宰府口城門 (北西から)



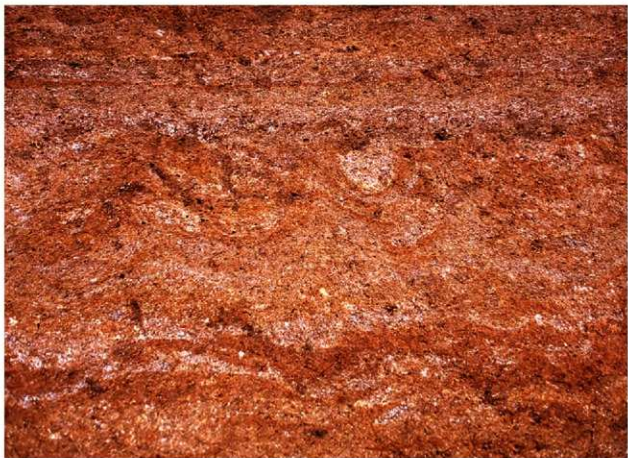
(1) ハツ波地区礎石建物群整備状況（北から）



(2) 主城原地区掘立柱建物跡 SB0604・0605（南西から）



(1) 増長天地区建物群 (北から)



(2) 土塁の突き棒の痕跡

序

大野城は『日本書紀』天智天皇4年(665)に築城の記録のある、我が国最古かつ最大の古代山城です。水城や基肆城とともに、大宰府防衛の重要な施設としてその役割を担ったほか、後年には宗教施設も構築されました。

この大野城は古くから注目され、大正時代から多くの専門家によって調査と研究が進められてきました。その重要性から昭和7年(1932)に国の史跡に、昭和28年(1953)には、大宰府跡・水城跡とともに国の特別史跡に指定されました。

福岡県教育委員会では、昭和46年(1971)に当時未指定地だった箇所
に林道の工事が入ったことを契機に調査を開始し、以後は史跡の整備なら
びに災害復旧に伴う調査に本格的に取り組んで参りました。調査の結果、
多くの知見が得られたものの、昭和63年度(1988)までの成果は概報に
掲載されるに留まり、未だ大野城跡の調査の全体像を示すことができてお
りませんでした。

今回の報告は、これまでの大野城跡の調査成果について、遺構編として
集約するものであります。本書が大野城跡をはじめ、大宰府史跡、ひいて
は日本の歴史の研究に寄与すること、また地域の文化財保護の一助となれ
ば幸いです。

本書の刊行にあたり、大宰府史跡調査研究指導委員会の委員各位をはじ
め、各学識経験者、文化庁、福岡県、大野城市、太宰府市、宇美町の各機関、
そして地域住民や地元関係者の方々からは、多大な御指導と御協力をいた
だきました。ここに記して深甚の謝意を表します。

令和7年3月31日

九州歴史資料館
館長 吉田 法稔

例 言

- 1 本書は、昭和48年度(1973)から福岡県が国庫補助を受け、福岡県教育委員会及び九州歴史資料館が発掘調査を実施した、大野城跡の総括報告書一遺構編一である。
- 2 本書には、大野城跡の解明及び整備にかかる資料を得ることを目的として発掘調査を実施した、大野城跡第5～32次、34～36次、39次、54次調査の成果を掲載した。また、災害復旧事業に伴い、必要な情報を得ることを目的として発掘調査を実施した、第33次、37次、38次、41～44次、46次、47次、49次、50次調査については、正式報告書が刊行されているが、大野城跡の総括報告を行う上で欠かせない内容については、その成果の要点を掲載した。また、太宰府市教育委員会が災害復旧事業に伴い行った第40次、45次、48次調査についても正式報告書が刊行されているが、総括報告を行う上で欠かせない内容については、その成果の要点を掲載した。その他、緊急調査として行った第1～4次調査の成果についても必要な情報を掲載した。
- 3 発掘調査は、大宰府史跡調査研究指導委員会の指導のもとで実施した。
- 4 本書掲載の写真は、各次調査担当者及び石丸洋(当館元参事)が撮影した。
- 5 本書掲載の図面の浄書は、転載したもの以外は、荒木睦子、吉田香智子、高石千穂が行った。
- 7 図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。
- 8 本書の執筆及び編集は宮地聡一郎が行った。

凡 例

- 1 本書掲載の平面図のうち、座標のあるものについては、国土調査法第Ⅱ座標系をもとに基準点を設け作成している。このうちFig.38・50・78・79・83・88については日本測地系、その他は世界測地系での表記としている。
- 2 本書掲載の図のうち、Fig.2については、太宰府市都市計画図、大野城市都市計画図、及び福岡県土整備事務所の航空レーザー測量の成果を編集した地形図を基に作成したものである。各地図データについては、太宰府市都市計画課、大野城市都市計画課、福岡県土整備事務所河川防災課から提供を受けた。
- 3 本書掲載図のうち、既刊の報告書等から転載・変更したものは、図のキャプションにその旨を記載している。行政機関が発行した報告書等の文献名は、P11・12にまとめている。
- 4 本書掲載写真のうち、PL.8、PL.28、PL.29-1、については、太宰府市教育委員会発行の報告書(太宰府市教育委員会2015『大野城跡1』)の掲載写真を使用した。掲載にあたっては、同市教育委員会の許可を得た。
- 5 遺構番号の頭に付した記号は、以下の遺構を示す。
SB：門・建物、SD：溝、SX：その他の遺構

目 次

	頁
第Ⅰ章 緒 言	1
(1) 特別史跡大野城跡	1
(2) 大野城跡研究史	3
(3) 調査の経過	4
(4) 調査組織	13
第Ⅱ章 位置と環境	19
(1) 自然的環境	19
(2) 歴史的環境	19
第Ⅲ章 調査の概要	23
(1) 調査区と遺構名称	23
(2) 各次調査の概要	24
第Ⅳ章 調査遺構	31
(1) 城壁	31
1) 南側外周土塁	31
a. 太宰府口東方地区	31
b. 太宰府口西方地区	37
2) 南側内周土塁	38
a. 太宰府口北方地区	40
b. 増長天西方地区	40
c. 大石垣上方地区	40
d. 坂本口北方地区	44
3) 西側土塁	47
a. 屯水地区	47
4) 北側外周土塁	51
a. 小石垣北方地区	53
5) 北側内周土塁	55
a. 小石垣東方地区	55
6) 東側土塁	62
a. 大谷東方地区	62
b. 原地区	67
c. 尾花地区	73
7) 石垣・石塁	77
a. 水ノ手口石塁	77
b. 大石垣	80
c. 百間石垣	82

d. 北石垣	87
e. 小石垣	98
(2) 城門	105
1) 南側の城門	105
a. 太宰府口城門	105
b. 原口城門	113
c. 観世音寺口城門	115
d. 坂本口城門	120
e. 水城口城門	120
2) 北側の城門	120
a. クロガネ岩城門	120
b. 北石垣城門	127
c. 小石垣城門	129
d. 宇美口城門	130
(3) 建物	131
1) ハツ波地区	131
2) 尾花地区	149
3) 増長天地区	149
4) 菊坂地区	152
5) 主城原地区	160
6) 村上地区	176
7) 毘沙門地区	181
8) 広目天地区	182
9) 前田地区	185
(4) その他	187
1) 石組遺構	187
2) 炉・土坑・溝跡	188
3) 土坑墓	192
4) 埋設土器	192
5) 窯跡	192
6) 経塚	193
7) 井戸・池	196
第V章 総括	198
英文目次	207
英文要旨	208

Tab. 目次

	頁
Tab.1 大野城跡調査次数一覧	6
Tab.2 大宰府史跡調査研究指導委員会委員一覧	14
Tab.3 大野城跡建物一覧	204

Fig. 目次

	頁
Fig.1 大宰府史跡指定地域図	2
Fig.2 大野城跡全体図 (1/6,000)	折込
Fig.3 大宰府関連遺跡分布図 (1/200,000)	20
Fig.4 大宰府関連遺跡分布図 (1/60,000)	21
Fig.5 太宰府口城門周辺地形図 (1/800) (福岡県教育委員会 2010 を改変)	32
Fig.6 太宰府口東方地区 (30 次 8・11 トレンチ) 土塁土層図, 堰板柱穴実測図 (1/60) (福岡県教育委員会 2010 から転載)	33
Fig.7 太宰府口東方地区 (24 次) 掘立柱遺構実測図 (1/80)	34
Fig.8 太宰府口東方地区 (30 次 7a トレンチ) 掘立柱遺構実測図 (1/80)	34
Fig.9 太宰府口東方地区北部周辺地形図 (1/250) (福岡県教育委員会 2010 を改変)	35
Fig.10 太宰府口東方地区土塁崩落部土層図 (1/90) (福岡県教育委員会 2010 を改変)	36
Fig.11 太宰府口東方地区 (28 次 2 トレンチ) 実測図 (1/400) (福岡県教育委員会 2006 から転載)	37
Fig.12 太宰府口西方地区 (1 次) 土塁土層図 (1/80) (福岡県教育委員会 2010 から転載)	38
Fig.13 増長天西方地区 52・53 次調査地点周辺地形図 (1/300)	38
Fig.14 増長天西方地区 (52・53 次) 土塁崩落部土層図 (1/40)	39
Fig.15 大石垣上方地区周辺地形図 (1/600) (福岡県教育委員会 2010 を改変)	41
Fig.16 大石垣上方地区 A 区 1・3 トレンチ実測図 (1/80) (福岡県教育委員会 2010 から転載)	42
Fig.17 大石垣上方地区 C 区土塁崩落部土層図 (1/90) (福岡県教育委員会 2010 から転載)	42
Fig.18 大石垣上方地区 E 区土塁崩落部土層図 (1/90) (福岡県教育委員会 2010 から転載)	43
Fig.19 坂本口北方地区周辺地形図 (1/500) (福岡県教育委員会 1983 から転載)	44
Fig.20 坂本口北方地区 A トレンチ実測図 (1/80)	45
Fig.21 坂本口北方地区 B トレンチ実測図 (1/80)	46
Fig.22 屯水地区周辺地形図 (1/600) (福岡県教育委員会 2010 から転載)	48
Fig.23 屯水地区 F 区周辺地形図 (1/250) (福岡県教育委員会 2010 から転載)	49

Fig.24	屯水地区 F 区土塁崩落部土層図 (1/90) (福岡県教育委員会 2010 から転載) …	50
Fig.25	屯水地区 C 区石垣実測図 (1/100) (福岡県教育委員会 2010 から転載) ……	52
Fig.26	屯水地区 (2 次) 周辺地形図 (1/600) ……	53
Fig.27	小石垣北方地区周辺地形図 (1/600) (福岡県教育委員会 2010 から転載) ……	54
Fig.28	小石垣北方地区 A 区周辺地形図 (1/250) (福岡県教育委員会 2010 から転載)	55
Fig.29	小石垣北方地区 A 区土層図 (1/80) (福岡県教育委員会 2010 から転載) ……	56
Fig.30	小石垣東方地区, 大谷東方地区周辺地形図 (1/800) (福岡県教育委員会 2010 を改変) ……	58
Fig.31	小石垣東方地区 A 区平面図 (1/250) (福岡県教育委員会 2010 から転載) ……	59
Fig.32	小石垣東方地区 A 区土塁崩落部土層図, 配石平面図, 1 トレンチ土層図 (1/90) (福岡県教育委員会 2010 から転載) ……	60
Fig.33	小石垣東方地区 A 区土塁崩落部土層図, 配石平面図 (1/90) (福岡県教育委員会 2010 から転載) ……	61
Fig.34	小石垣東方地区 B 区周辺地形図 (1/250) (福岡県教育委員会 2010 から転載)	62
Fig.35	小石垣東方地区 B 区土塁崩落部土層図, 配石平面図 (1/90) (福岡県教育委員会 2010 から転載) ……	63
Fig.36	大谷東方地区 B 区周辺地形図 (1/250) (福岡県教育委員会 2010 から転載) …	64
Fig.37	大谷東方地区 B 区土塁崩落部土層図 (1/90・1/60) (福岡県教育委員会 2010 から転載) ……	65
Fig.38	原地区周辺地形図 (1/600) (太宰府市教育委員会 2015 を改変) ……	68
Fig.39	原地区南地区土塁崩落部土層図 (1/100) (太宰府市教育委員会 2015 から転載)	69
Fig.40	尾花地区調査地点周辺地形図 (1/800) (福岡県教育委員会 2010 を改変) ……	70
Fig.41	尾花地区 (33 次) 土塁崩落部実測図 (1/40・1/80) (福岡県教育委員会 2006 から転載) ……	71
Fig.42	尾花地区 (28 次) 土塁内側法面土層図 (1/80) (福岡県教育委員会 2010 から転載) ……	72
Fig.43	尾花地区 (41 次 A 区) 土塁崩落部実測図 (平面図: 1/150 土層図: 1/90) (福岡県教育委員会 2010 から転載) ……	74
Fig.44	尾花地区 (41 次 B 区) 土塁崩落部実測図 (平面図: 1/150 土層図: 1/90) (福岡県教育委員会 2010 から転載) ……	75
Fig.45	尾花地区 (28 次) 1a・1b トレンチ実測図 (1/80) ……	76
Fig.46	水ノ手口石塁実測図 (1/120) ……	78
Fig.47	大石垣周辺地形図 (1/300) (福岡県教育委員会 1976 を改変) ……	80
Fig.48	大石垣立面図・断面図 (1/100) (福岡県教育委員会 1976 を改変) ……	81
Fig.49	百間石垣周辺地形図 (1/1,000) (福岡県教育委員会 2006 を改変) ……	82
Fig.50	百間石垣中央部トレンチ配置図 (1/250) (福岡県教育委員会 2006 を改変) …	83
Fig.51	百間石垣南端部実測図 (1/80) ……	84
Fig.52	百間石垣南端部断面図 (右側が外側) (1/80) ……	85

Fig.53	百間石垣断面図・土層図 (1/50・1/100) (福岡県教育委員会 2006 から転載)	86
Fig.54	百間石垣中央部石垣3トレンチ北側土層図 (1/80)	87
Fig.55	百間石垣中央谷石垣断面図・土層図 (1/100) (福岡県教育委員会 2006 から転載)	88
Fig.56	北石垣周辺地形図 (1/600) (福岡県教育委員会 2010 を改定)	89
Fig.57	北石垣A区周辺地形図 (1/150) (福岡県教育委員会 2010 から転載)	90
Fig.58	北石垣A区崩落部土層図① (1/120) (福岡県教育委員会 2010 から転載)	91
Fig.59	北石垣A区崩落部土層図② (1/120) (福岡県教育委員会 2010 から転載)	92
Fig.60	北石垣B区周辺地形図 (1/150) (福岡県教育委員会 2010 から転載)	92
Fig.61	北石垣B区石垣立面図・崩落部土層図 (1/120) (福岡県教育委員会 2010 から転載)	93
Fig.62	北石垣A-B区間下段石垣立面図 (1/90) (福岡県教育委員会 2010 から転載)	94
Fig.63	北石垣C区周辺地形図 (1/250) (福岡県教育委員会 2010 から転載)	95
Fig.64	北石垣C区土塁崩落部土層図 (1/90) (福岡県教育委員会 2010 から転載)	96
Fig.65	小石垣周辺地形図 (1/400) (福岡県教育委員会 2010 から転載)	99
Fig.66	小石垣A-1地点土層図 (1/90) (福岡県教育委員会 2010 から転載)	100
Fig.67	小石垣A-2・7地点石垣立面、A-8地点実測図 (1/80) (福岡県教育委員会 2010 から転載)	101
Fig.68	小石垣A-9・10地点実測図 (1/100) (福岡県教育委員会 2010 から転載)	102
Fig.69	小石垣B-1地点実測図 (1/120) (福岡県教育委員会 2010 から転載)	103
Fig.70	小石垣B-2地点土層図 (1/90) (福岡県教育委員会 2010 から転載)	104
Fig.71	太宰府口城門平面図・立面図 (1/120)	106
Fig.72	太宰府口城門立面図 (1/120)	107
Fig.73	太宰府口城門土層図・立面図 (1/80)	108
Fig.74	太宰府口城門第Ⅰ期遺構実測図 (1/80)	109
Fig.75	太宰府口城門第Ⅱ期遺構実測図 (1/80)	110
Fig.76	太宰府口城門第Ⅲ期遺構実測図 (1/80)	112
Fig.77	原口城門実測図 (1/80) (太宰府市教育委員会 2015 から転載)	114
Fig.78	観世音寺口城門周辺地形図 (1/500) (太宰府市教育委員会 2015 から転載)	116
Fig.79	観世音寺口城門平面図 (1/150) (太宰府市教育委員会 2015 から転載)	117
Fig.80	観世音寺口城門石散実測図 (1/80) (太宰府市教育委員会 2015 から転載)	117
Fig.81	観世音寺口城門崩落部土層図 (1/80) (太宰府市教育委員会 2015 から転載)	118
Fig.82	観世音寺口城門崩落部南壁土層図 (1/80) (太宰府市教育委員会 2015 から転載)	119
Fig.83	クロガネ岩城門周辺地形図 (1/300) (九州歴史資料館 2016 から転載)	121
Fig.84	クロガネ岩城門1～4トレンチ実測図及び唐居敷石材現況図・個別実測図 (1/90・1/40) (九州歴史資料館 2014・2016 から転載)	122
Fig.85	クロガネ岩城門1・3・4・5・6・8・8-2トレンチ実測図 (1/90)	

	(九州歴史資料館 2016 から転載).....	123
Fig.86	クロガネ岩城門9～12 トレンチ実測図 (1/90) (九州歴史資料館 2016 から転載).....	124
Fig.87	クロガネ岩城門断面復元図及び唐居敷想定復元図 (1/300・1/90) (九州歴史資料館 2016 から転載).....	125
Fig.88	クロガネ岩城門周辺の構造 (1/700) (九州歴史資料館 2016 から転載).....	126
Fig.89	北石垣城門実測図 (1/80) (福岡県教育委員会 2010 から転載).....	128
Fig.90	北石垣城門石製唐居敷実測図 (1/40) (福岡県教育委員会 2010 から転載)...	129
Fig.91	小石垣城門石製唐居敷実測図 (1/40) (福岡県教育委員会 2010 から転載)...	129
Fig.92	大野城跡出土石製唐居敷実測図 (1/40) (福岡県教育委員会 2010 から転載)	130
Fig.93	ハツ波地区周辺地形図 (1/1,000) (福岡県教育委員会 1977 を改変).....	132
Fig.94	ハツ波地区礎石建物 SB0001 実測図 (1/80).....	133
Fig.95	ハツ波地区礎石建物 SB0002 実測図 (1/80).....	134
Fig.96	ハツ波地区礎石建物 SB0003 実測図 (1/80).....	135
Fig.97	ハツ波地区礎石建物 SB0004 実測図 (1/80).....	136
Fig.98	ハツ波地区礎石建物 SB0005 実測図① (1/80).....	137
Fig.99	ハツ波地区礎石建物 SB0005 実測図② (1/80).....	138
Fig.100	ハツ波地区礎石建物 SB0007 実測図 (1/80).....	139
Fig.101	ハツ波地区礎石建物 SB0008 実測図 (1/80).....	140
Fig.102	ハツ波地区礎石建物 SB0009 実測図① (1/80).....	141
Fig.103	ハツ波地区礎石建物 SB0009 実測図② (1/80).....	142
Fig.104	ハツ波地区礎石建物 SB0010 実測図① (1/80).....	143
Fig.105	ハツ波地区礎石建物 SB0010 実測図② (1/80).....	144
Fig.106	ハツ波地区礎石建物 SB0011 実測図 (1/80).....	145
Fig.107	尾花地区周辺地形図 (1/600).....	146
Fig.108	尾花地区礎石建物 SB0208 実測図 (1/80).....	147
Fig.109	尾花地区礎石建物 SB0209 実測図 (1/80).....	148
Fig.110	増長天地区周辺地形図 (1/300) (九州歴史資料館 2016 から転載).....	150
Fig.111	増長天地区礎石建物 SB0401 実測図 (1/80).....	折込
Fig.112	増長天地区礎石建物 SB0402 実測図 (1/80).....	折込
Fig.113	増長天地区礎石建物 SB0403 実測図 (1/80).....	折込
Fig.114	増長天地区礎石建物 SB0404 実測図 (1/80).....	折込
Fig.115	猫坂地区周辺地形図 (1/600) (福岡県教育委員会 2010 から転載).....	153
Fig.116	猫坂地区礎石建物 SB0500 実測図 (1/80).....	155
Fig.117	猫坂地区礎石建物 SB0501 実測図 (1/80).....	156
Fig.118	猫坂地区礎石建物 SB0502 実測図 (1/80).....	157
Fig.119	猫坂地区礎石建物 SB0503 実測図 (1/80).....	158

Fig.120	猫坂地区掘立柱建物 SB0504 実測図 (1/80)	159
Fig.121	主城原地区中央部建物群周辺地形図 (1/800) (福岡県教育委員会 2010 から転載)	162
Fig.122	主城原地区礎石建物 SB0600 ~ 0602 実測図① (1/80)	折込
Fig.123	主城原地区礎石建物 SB0600 ~ 0602 実測図② (1/80)	163
Fig.124	主城原地区礎石建物 SB0603・0607 トレンチ実測図 (1/80)	164
Fig.125	主城原地区礎石建物 SB0604・0605・0608 実測図① (1/80)	165
Fig.126	主城原地区礎石建物 SB0604・0605・0608 実測図② (1/80)	166
Fig.127	主城原地区北部建物群周辺地形図 (1/600)	167
Fig.128	主城原地区礎石建物 SB0610 実測図 (1/80)	168
Fig.129	主城原地区礎石建物 SB0611 実測図 (1/80)	169
Fig.130	主城原地区礎石建物 SB0615 実測図 (1/80)	171
Fig.131	主城原地区南部建物群周辺地形図 (1/800) (福岡県教育委員会 1982 を改変)	172
Fig.132	主城原地区礎石建物 SB0618 実測図 (1/80)	173
Fig.133	主城原地区礎石建物 SB0619 実測図 (1/80)	174
Fig.134	主城原地区掘立柱建物 SB0620 実測図① (1/80)	175
Fig.135	主城原地区礎石建物 SB0620 実測図② (1/80)	176
Fig.136	村上地区周辺地形図 (1/600) (福岡県教育委員会 1983 を改変)	177
Fig.137	村上地区礎石建物 SB0903 実測図 (1/80)	179
Fig.138	村上地区礎石建物 SB0904 実測図 (1/80)	180
Fig.139	村上地区礎石建物 SB0905 実測図 (1/80)	折込
Fig.140	村上地区礎石建物 SB0906 実測図 (1/80)	折込
Fig.141	毘沙門地区平面図 (1/2,000) (岡寺 2018 から転載)	181
Fig.142	毘沙門地区 (19・20 次) 周辺地形図 (1/300)	183
Fig.143	毘沙門地区 (19・20 次) 平面図 (1/120)	184
Fig.144	毘沙門地区礎石群 A 平面図 (1/80)	185
Fig.145	広目天地区礎石建物平面図 (1/100) (鏡山 1968・岡寺 2018 から作成) ..	186
Fig.146	石組遺構実測図 (1/40)	187
Fig.147	北石垣地区 (14 次 D・F トレンチ) SX075・076 実測図 (1/40)	189
Fig.148	北石垣地区 (14 次 C トレンチ) SD077 実測図 (1/40)	190
Fig.149	土坑実測図 (1/40)	191
Fig.150	太宰府口東方地区土坑墓、埋設土器 (1/40・1/20)	192
Fig.151	窯跡実測図① (1/80) (福岡県教育委員会 2010 を改変)	194
Fig.152	窯跡実測図② (1/60)	195
Fig.153	村上経塚模式図 (川上 1933 から転載)	196
Fig.154	ケイサシの井戸実測図 (1/20) (鏡山 1968 から転載)	196

PL 目次

- 巻頭 PL. 1 (1) 大野城跡と大宰府政庁 (南から)
(2) 大野城跡遠景 (東から)
- 巻頭 PL. 2 (1) 百間石垣 (東から)
(2) 大宰府口城門 (北西から)
- 巻頭 PL. 3 (1) ハツ波地区礎石建物群整備状況 (北から)
(2) 主城原地区掘立柱建物跡 SB0604・0605 (南西から)
- 巻頭 PL. 4 (1) 増長天地区建物群 (北から)
(2) 土塁の突き棒の痕跡

第I章 緒 言

(1) 特別史跡大野城跡

大野城は、大宰府政庁背後の四王寺山と総称される山々に築かれた古代山城である。日本書記天智天皇4年(665)に築城記事が見え、古代律令国家における西海道諸国の統括や外交、西辺防備を担った大宰府と密接な関係を有する。我が国最大の古代山城としての重要性は計り知れない。

その重要性から、大野城跡は昭和7年(1932)7月に国の史跡に指定され(大野城跡四王寺山跡)、昭和28年(1953)には、大宰府跡とともに国の特別史跡に指定された(大野城跡附四王寺山跡)。ただ、当時の指定範囲は土塁や礎石等の分布範囲が中心であり、点的のものであった。

史跡指定

昭和30年代、都市近郊における大規模開発と遺跡の保存は全国的な課題となりつつあったが、大野城跡周辺においても昭和38年(1963)に四王寺山東南麓で大規模な宅地造成計画が表面化し、古都大宰府の景観が大きく変わってしまう危機的な事態となった。この頃、国の文化財保護委員会(後の文化庁)でも遺跡全体を面的に保存する必要性が認識され始めており、指定地の拡張が計画されたが、地域の人々による大規模な反対運動も展開された。史跡の保存は地域の人々の理解と協力を得ることが不可欠であるため、福岡県は史跡の重要性を目に見える形で示す方策として、昭和43年(1968)から大宰府跡の発掘調査を開始し、史跡の解明を進めていった。そして、昭和45年(1970)に特別史跡大宰府跡の追加指定、また新たに史跡大宰府学校院跡、史跡観世音寺境内及び子院跡の指定が行われ、複数の史跡を含む広大な大宰府史跡が誕生した。

大宰府史跡の保存と発掘

追加指定

大野城跡でもゴルフ場建設計画に端を発して、昭和45・46年(1970・1971)に宇美町によって公有地化がはかられた。昭和51年(1976)には、宇美町及び現在の大野城市域で大幅な追加指定が行われ、指定名称が「大野城跡」へと変更された。そして昭和56年(1981)には現在の太宰府市域でさらに指定範囲が拡張され、全山指定となった。その後も追加指定は行われ、現在は約7,510,600㎡が指定範囲となっている。

大野城跡は、昭和46年(1971)に発足した大宰府史跡整備対策委員会により答申された「大宰府歴史公園整備前期5ヶ年計画」、及び「大宰府歴史公園整備後期5ヶ年計画」に則り、昭和48年(1973)から整備事業が行われたほか、災害復旧事業等によって史跡の整備が行われ、保存・活用がはかられている。

大野城跡の事業

また、昭和51年(1976)には、「福岡県立四王寺県民の森」が開園し、都市近郊の森林公園として、多くの人々が自然及び史跡に触れられる場所としても親しまれている。管理事務所横には大野城跡についても学べる学習展示室が設けられ、令和4年(2022)には「ワンヘルスの森ミュージアム」としてリニューアルされている。そのほか、一部は九州自然歩道にも組み込まれ、多くの登山客に親しまれているほか、平成18年(2006)には日本城郭協会によって、日本100名城の一つに選出され、スタンプラリーで訪れる愛好家も多い。

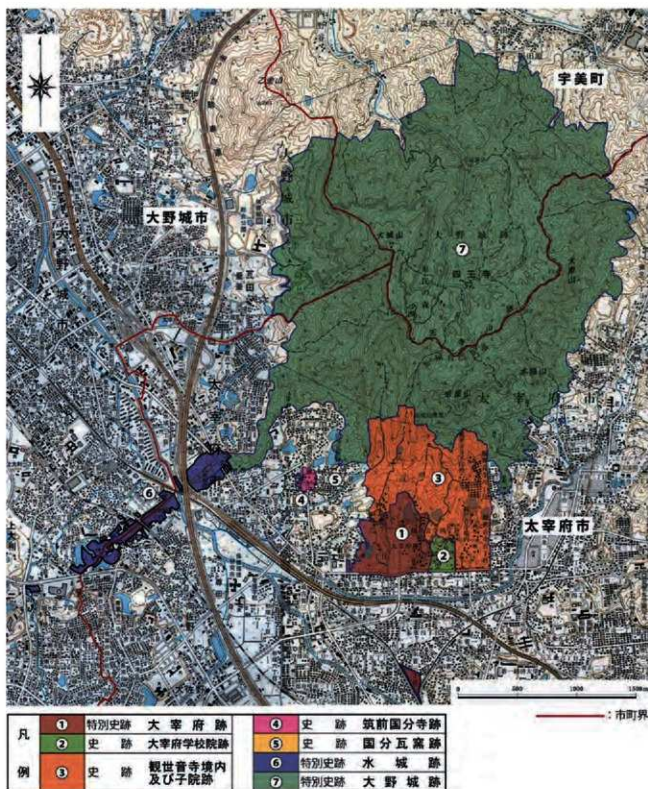


Fig.1 大宰府史跡指定地域図

(2) 大野城跡研究史

江戸時代

大野城跡に関する調査記録は江戸時代にまでさかのぼる。注目されるのは、文化3年(1806)頃に作成された『太宰府旧蹟全図』で、大野城跡の主要遺構である礎石群や城門跡、石垣等が細かく描かれている。『太宰府旧蹟全図』は南・北の2図からなり、太宰府付近の名所旧跡を絵図として書き起こしたものであるが、このうち北図には太宰府天満宮門前や四王寺山一帯が描かれ、江戸時代後期の大野城跡の様子を知ることができる。発掘調査によって確認された城門の中には、この図に「門ノ石スエ」といった記載がされていたものがあり、この『太宰府旧蹟全図』がいに現地を観察して描かれたものかが分かる。現代においても研究資料として大いに参考になるものである。

太宰府
旧蹟全図

第二次大戦前の調査

大正時代には島田寅次郎が大野城跡を踏査し、大正15年(1926)に福岡県の『史蹟名勝天然紀年物調査報告書』第2輯で各遺構の概要を報告している。この中では「大野城址」として、「大野城址」のほか「四天王寺跡」「原山無量寺跡」も包括し、経筒の発見についても触れている。大野城については、城壁が四周を巡ることや南側が2重になること、またその長さを詳細に記し、かつ地図に城壁線や主要遺構の場所を示した点が特筆される。

島田寅次郎
長沼賢海

また長沼賢海も島田寅次郎と行った共同調査などの成果を昭和6年(1931)に「大野城及四王寺遺蹟」として福岡県の『史蹟名勝天然紀年物調査報告書』第6輯で報告を行った。長沼は大石垣や小石垣等の石垣について、排水設備を含めた考察を行ったほか、太宰府口城門や坂本口城門、水城口城門の門礎の構造について計測値と図面を示し考察を行った点は特筆される。これら島田、長沼の調査及び報告によって、大野城跡の基本的な構造が知られることになった。

第二次大戦後の調査

戦後は、鏡山猛氏による調査が注目される。鏡山氏は、大宰府政庁をはじめ、観世音寺、筑前国分寺、大宰府条坊、水城、大野城、基肄城といった、大宰府都城を構成する多くの史跡を対象に測量調査や実測等を行った。その成果は昭和43年(1968)の『大宰府都城の研究』に取められ、各史跡の主要遺構の図面を公表するとともに詳細な考察を行った。当時の大宰府研究の到達点と言える内容であった。

鏡山猛
『大宰府都城
の研究』

大野城跡については、九州文化総合研究所の調査として、小田富士雄らとともに測量調査を行った成果も盛り込み、土塁や石塁、城門はもとより、建物礎石についての詳細な図面も示した。そして、城内に30余棟の建物跡が存在すること、その大部分が3間×5間の規模である点や、それらの柱間が7尺であることを明らかにした。これらの様相から建物は倉庫であったこと、またその数から不動倉の貯蔵があったことを想定した点は特筆され、現在の研究の礎となっている。この鏡山の研究によって大野城跡は文献に記載のある朝鮮式山城の代表として明確に位置付けられ、神籠石式(系)山城との比較研究等にも寄与した。

その研究方法は古代山城研究全体にも影響を与え、その後の研究の指針にもなったことは言うまでもない。

(3) 調査の経過

工事に伴う
調査

昭和46年(1971)、太宰府市連歌屋地区と宇美町四王寺地区とを結ぶ未舗装の林道(四王寺林道)の拡幅工事や、大野城市乙金から宇美町四王寺へ至る林道(大城林道)の新設工事が行われるという事態が発生した。福岡県教育委員会文化課(当時)では、これらの工事について再検討を求め、特に大城林道における土塁の掘削に強く抗議を行ったが、当時の大野城跡の指定範囲はまだ一部に留まっていたため、工事計画を止めることはできなかった。そのため、やむを得ず記録保存調査を行うこととし、大城林道が通る屯水地区では5月17日から21日にかけて土塁の測量調査を行った(第2次調査)。また、四王寺林道の拡幅事業は当初、尾花地区を縦断する予定であったが、当該箇所の遺構の規模を確認するために8月19日～10月2日かけて、南側内周土塁の太宰府口北方地区の発掘調査と尾花地区の建物の一部の測量調査を実施し(第3・4次調査)、道路部局との協議の上、路線の計画変更につなげた。この間、7月26日から29日にかけて、太宰府口西方地区で、四王寺林道によって削り取られた南側外周土塁の土層断面図を作成しているが、これが第1次調査に数えられている。



四王寺林道の拡幅工事

計画的な
調査と整備

昭和45・46年度(1970・1971)に、宇美町によって公有地化がはかれた土地については、翌年度から整備が開始されることとなった。そのために地元関係者、学識経験者及び県庁関係部局からなる、大宰府史跡整備対策委員会が昭和46年2月に設置され、種々の議論を行い、整備の方向性を打ち出した。その結果、昭和48年度(1973)を初年度とする、大宰府歴史公園整備前期5ヶ年計画、昭和53年度(1978)を初年度とする大宰府歴史公園整備後期5ヶ年計画が答申され、以後これに則り、環境整備に先立って遺構の構造等を把握するための発掘調査が行われることとなった。調査は昭和47年(1972)に設置された九州歴史資料館が担当した。

昭和48年度(1973)は、11月12日～1月17日にかけて増長天地区の礎石建物4棟を対象に発掘調査を行い、建物の規模や雨落溝を確認した(第5次調査)。

昭和49年度(1974)は、10月25日～11月25日にかけて百間石垣を(第6次調査)、昭和50年度(1975)は7月21日～8月5日に大石垣の調査を行った(第7次調査)。これは昭和47年及び48年の集中豪雨によって、百間石垣や大石垣にて部分的な崩壊があったことを受け、保全の立場から緊急に整備の必要が生じたため実施したものであった。

昭和50年度はこのほか、八ツ波地区を対象に調査を行った。八ツ波地区はそれまでに礎石建物が5棟程存在することが知られていたが、県立四王寺県民の森造成事業の一環として、散策路及び広場造成計画があることが明らかになったため、当初予定していた猫坂地区の事業を八ツ波地区に変更して、8月6日から10月6日にかけて実施することになった(第8次調査)。この調査では、広い面積を対象に建物跡の分布状況を確認するため、小規模なトレンチを各所に設けて発掘調査を行う手法をとった。昭和51年度(1976)は、前年度の成果をふまえ、

8月5日～9月18日までと、11月1日～13日までの2回にわたり、4棟の礎石建物の調査を行った(第9次調査)。

昭和51年度(1976)はそのほか、計画当初に予定していた猫坂地区の調査を11月13日～2月9日にかけて実施した(第10次調査)。

昭和52年度(1977)からは主城原地区の調査に入った。最終的に主城原地区は4次にわたる調査を行うこととなり、昭和53年(1978)1月17日～3月8日までの主城原地区第1次調査(第11次調査)、8月22日～10月31日までの主城原地区第2次調査(第12次調査)を行った後、北側に延びる尾根上に位置する2棟の建物を対象にした主城原地区第3次調査(第13次調査)を昭和54年(1979)9月10日～11月30日にかけて実施した。そして南端部の建物跡を対象に主城原地区第4次調査(第15次調査)を昭和55年(1980)9月1日～11月13日にかけて実施した。

その間、主城原地区第3次調査(第13次調査)と同時に北石垣の調査も行った(第14次調査)。北石垣は、昭和47年の豪雨の際に大きく崩壊し、その残り具合が不明であったが、一部で非常に良く残存していることが明らかとなった。

昭和56年度(1981)からは村上地区の調査に入った。村上地区では2回にわたる調査を行ったが、村上地区第1次調査(第16次調査)を9月7日～10月15日に、村上地区第2次調査(第17次調査)を昭和57年(1982)9月6日～10月20日にかけて実施し、5棟の礎石建物を検出した。

昭和57年度(1982)は、大宰府歴史公園整備後期5ヶ年計画に基づいた最後の調査年度にあたり、坂本口の土塁についての調査も行った。坂本口の土塁は、南側外周土塁と南側内周土塁が接し、また近くに坂本口城門が推定される場所でありながら、接続地点が推定の域を出ないことや、この場所が眺望の良い尾根であることから、今後の研究の手掛りを得るための調査となった。調査は9月24日～10月20日にかけて行い(第18次調査)、推定土塁線の変更の必要性が生じる等の成果が得られた。

なお、経緯は明らかではないが、この年の5月18日～20日にかけて、小石垣から東に延びる北側内周土塁の地形測量図を作成している。

昭和58年度(1983)からは、今後の環境整備のための基礎資料を得る目的で、毘沙門地区の調査を行った。調査は9月16日～10月28日にかけて(第19次調査)と、昭和59年(1984)9月1日～10月6日にかけて行い(第20次調査)、それまでの古代山城の様相とは異なる中世



雪の猫坂地区



主城原地区の造り方

Tab.1 大野城跡調査次数一覧

氏名	調査箇所 (遺構)	年度	調査期間	所在地	調査要因	調査施設	工数	本書対象
1	太宰府口北方地区 (土遺)	1971	710728~710729	太宰府市大字太宰府1790-14	緊急 (遺跡)	福岡県教育委員会	43	○
2	毛入地区 (土遺)	1971	710817~710821	平島町大字延王寺	緊急 (遺跡)	福岡県教育委員会	1	○
3	太宰府口北方地区 (土遺)	1971	710823~710905	平島町大字延王寺	緊急 (遺跡)	福岡県教育委員会	1, 43	○
4	尾北地区 (建跡)	1971	710819~711002	平島町大字延王寺	緊急 (遺跡)	九州歴史資料館	1, 39, 40	○
5	増基地区 (建跡)	1972	721112~714017	平島町大字延王寺	増基遺跡	九州歴史資料館	2, 39, 40	○
5-2	増基地区 (建跡)	2011	120118~120223	平島町大字延王寺	増基遺跡	九州歴史資料館	34	
5-3	増基地区 (建跡)	2013	140116~140209	平島町大字延王寺	増基遺跡	九州歴史資料館	26, 27, 34	○
6	百石石垣	2014		平島町大字延王寺	増基遺跡	九州歴史資料館	3, 39, 40	○
7	大石垣	1974	741023~741125	太宰府市大字延王寺	増基遺跡	九州歴史資料館	4, 39, 40, 43, 44	○
8	八ッ釜地区 (建跡)	1975	750721~750905	太宰府市大字延王寺	増基遺跡	九州歴史資料館	4, 39, 40, 44	○
9	八ッ釜地区 (建跡)	1976	760809~761013	平島町大字延王寺	増基遺跡	九州歴史資料館	5, 39, 40, 45	○
10	八ッ釜地区 (建跡)	1976	761113~770209	平島町大字延王寺	増基遺跡	九州歴史資料館	5, 39, 40, 45	○
11	惣太地区 (建跡)	1977	780117~780308	平島町大字延王寺	増基遺跡	九州歴史資料館	6, 40, 46	○
12	主基地区 (建跡)	1978	780822~781031	平島町大字延王寺	増基遺跡	九州歴史資料館	7, 40, 46	○
13	主基地区 (建跡)	1979	790919~791130	平島町大字延王寺	増基遺跡	九州歴史資料館	8, 40, 47	○
14	北石垣	1979	790919~791130	平島町大字延王寺	増基遺跡	九州歴史資料館	8, 40, 47	○
15	主基地区 (建跡)	1980	800901~801113	平島町大字延王寺	増基遺跡	九州歴史資料館	9, 41, 48	○
16	村上地区 (建跡)	1981	810907~811015	平島町大字延王寺	増基遺跡	九州歴史資料館	10, 41, 48	○
17	村上地区 (建跡)	1982	820909~821020	平島町大字延王寺	増基遺跡	九州歴史資料館	11, 41, 49	○
18	坂本口北方地区 (土遺)	1982	820924~821020	太宰府市大字坂本3251-33外	計画調査	九州歴史資料館	11, 49	○
19	周防門地区	1983	830919~831028	平島町大字延王寺	計画調査	九州歴史資料館	12, 41	○
20	周防門地区	1984	840901~841006	平島町大字延王寺	計画調査	九州歴史資料館	13	○
21	太宰府口城門	1985	850719~850831	太宰府市大字太宰府1790-4外	増基遺跡	九州歴史資料館	14, 50, 43	○
22	太宰府口城門	1986	860519~860721	太宰府市大字太宰府1790-4外	増基遺跡	九州歴史資料館	15, 50	○
23	太宰府口城門	1987	870917~871111	太宰府市大字太宰府1790-4外	増基遺跡	九州歴史資料館	16, 50	○
24	太宰府口城門	1988	881024~881220	太宰府市大字太宰府1790-4外	増基遺跡	九州歴史資料館	17, 50	○
25	尾北地区 (土遺)	1990	900514~900605	太宰府市大字太宰府1491-1	増基遺跡	九州歴史資料館	18	○
26	小石垣	1990	900607~900629	平島町大字延王寺	計画調査	九州歴史資料館	18	○
27	太宰府口城門周辺	1993	931206~931222	太宰府市大字太宰府1790-4外	増基遺跡	九州歴史資料館	19	○
28	太宰府口東方地区・尾北地区 (土遺)	1994	9407~9409	太宰府市大字太宰府1491-1, 1799-6	増基遺跡	九州歴史資料館	20, 42, 43	○
29	水ノ手口石垣・太宰府口城門	1995	951112~951207	太宰府市大字太宰府1790-4, 1799-13	増基遺跡	九州歴史資料館	42	○
30	水ノ手口石垣・太宰府口城門	1996	960809~961010	太宰府市大字太宰府1491-1, 1491-25	増基遺跡	九州歴史資料館	42, 43	○
31	太宰府口東方地区 (土遺)	1997	970924~971114	太宰府市大字太宰府1790-4外	増基遺跡	九州歴史資料館	21, 42	○
32	水ノ手口石垣	1998	980929~990331	太宰府市大字太宰府1790-6	増基遺跡	九州歴史資料館	22, 42, 43	○
33	尾北地区 (土遺)	1999	000224~000317	太宰府市大字太宰府1491-1	増基遺跡	九州歴史資料館	42, 43	○
34	百石石垣	2000	0008~0103	平島町大字延王寺	増基遺跡	福岡県教育委員会	42	○
35	百石石垣	2001	0201~0203	平島町大字延王寺	増基遺跡	福岡県教育委員会	42	○
36	百石石垣	2002	0212~0303	平島町大字延王寺	増基遺跡	福岡県教育委員会	42	○
37	百石石垣	2003	0402~0403	平島町大字延王寺	増基遺跡	福岡県教育委員会	42	○
38	船場ノ地区 (建跡)	2004	040705~040729	平島町大字延王寺	増基遺跡	福岡県教育委員会	43	○
39	百石石垣	2005	0512~0603	平島町大字延王寺	増基遺跡	福岡県教育委員会	42	○

の遺構群を確認し、古代以外にも各種遺構の整備の考え方をまとめる必要性が生じた。

昭和59年度(1984)は、昭和43年(1968)以来大宰府史跡の調査について指導を仰いできた、大宰府史跡発掘調査指導委員会の改組を行い、名称を大宰府史跡調査研究指導委員会に改称した。その大宰府史跡調査研究指導委員会の昭和60年度(1985)5月の会議の席上では、人の目に触れやすい太宰府口城門の調査を行い整備すべきとの意見が提出された。その背景には、大野城跡各地点の建物跡については、整備のための調査をかなり行ってきたこと、また、太宰府口城門の左右の石垣がはらんでいる恐れがあったことも関係しており、大野城跡の環境整備計画を検討し直し、太宰府口城門の調査を3ヶ年次計画で実施することとなった。

そして、昭和60年(1985)7月15日～8月31日にかけて、太宰府口城門初年度の調査を実施し(第21次調査)、地形測量や城門両側の石垣や城内部等の発掘調査を行うことで、これまで知られていた門列石の内側にも同様の列石が存在すること、石垣のはらみの可能性があった部分は、崩壊を防ぐために新規に取り付けられたものであること等が判明した。2年次の調査は昭和61年(1986)5月19日～7月21日にかけて行い(第22次調査)、城門と西側の水ノ手口石塁との接点が方形の堅固な石積であることが判明する等の成果が挙げられた。3年次の調査は昭和62年(1987)9月17日～11月11日にかけて行い(第23次調査)、掘立柱の柱穴が古期の城門遺構であること等が判明したが、上部からの崩落土中に多量の瓦が含まれていたことから、上方に他の建物が存在する可能性が出てきた。そのため当初の3ヶ年次計画を1年延長することとなった。4年次の調査は昭和63年(1988)10月24日～12月20日にかけて行った(第24次調査)。他の建物遺構は確認できなかったが、土塁の調査では上部で櫓列2条を確認する等の成果が挙げられた。

上記昭和63年度(1988)までの九州歴史資料館が実施した史跡環境整備事業に先立つ調査では、多くの建物群の構造が明らかとなり、太宰府口城門では、門の構造や変遷が明らかになる等の成果が挙げられた。それらについては、昭和50年度(1975)～平成3年度(1990)にかけて、『特別史跡大野城跡』Ⅰ～Ⅶとして概報を作成したが、正報告書を作成するまでには至らなかった。

その後、尾花地区の土塁については、以前から損傷が進み、年々その激しさが増してきたため、整備に際しての基礎資料を得るために、平成2年(1990)5月14日～6月5日にかけて土塁の土層の実測及び現況の地形測量を行った(第25次調査)。土塁の土層は数cm程の互層を成し、丁寧に積み上げられたものであることが明らかとなった。

また、北側内周土塁の北東部に位置する小石垣については、現況では中心部は流出しているものの、平成2年(1990)6月7日～6月29日にかけて、現在水田となっている平坦部にトレンチを入れて調査を行い(第26次調査)、地下に石塁が残っていることを確認した。

平成5年(1993)には、太宰府口城門の整備計画を立案するのに伴い、周辺地形図を作成するため、12月6日～12月22日にかけて地形測量を行った(第27次調査)。

平成6年度(1994)からの大宰府史跡の整備事業は、大宰府史跡整備指導委員会を組織化することになり、大野城跡に重点を置いて進めることになった。整備事業に先だって、発掘調査を行うこととなり、平成6年(1994)は7月～9月にかけて、尾花地区及び太宰府口東方地区の土塁の調査を行った(第28次調査)。その後平成7年度(1995)は11月12日～12

月7日にかけて、水ノ手口石塁及び太宰府口城門の調査(第29次調査)、平成8年度(1996)は8月9日～10月10日にかけて太宰府口東方地区の土塁の調査(第30次調査)、平成9年度(1997)は9月24日～11月14日にかけて、太宰府口城門北側一帯の調査を行った(第31次調査)、平成10年度(1998)は、9月28日～3月31日にかけて水ノ手口石塁の調査(第32次調査)を行った。

平成11年度(1999)は、この年の6月29日の豪雨によって尾花地区の土塁と百間石垣が崩落する被害が発生したため、当初の整備計画を変更してこれらの復旧を行うこととなった。そのため、平成12年(2000)2月24日～3月17日にかけて、急遽、尾花地区の土塁の復旧事業に必要な情報を得るための調査を行った(第33次調査)。

一方、百間石垣については、石垣の崩落は一部のみであったものの、石垣の下半部が大きく膨らみ、崩落寸前の箇所や、石垣上部の石材が散在している箇所等が見られたため、平成12年度(2000)から石垣の修復と保存環境の改善、活用のための環境作りを目的とした整備事業に取り組むことになった。そのため平成12年(2000)8月～平成13(2001)3月にかけて、現況調査と測量を行った(第34次調査)後、平成14年(2002)1月～3月にかけて石垣中央部を対象とした調査を行い(第35次調査)、平成14年(2002)12月～平成15年(2003)3月に石垣北半部を対象に調査を行った(第36次調査)。

百間石垣の整備事業は当初、平成12年度(2000)～15年度(2003)の4ヶ年の予定であったが、平成15年(2003)7月19日の豪雨災害によって百間石垣も被害を被ったため、急遽予定を変更し、平成15年度(2003)から平成16年度(2004)の2ヶ年計画で、崩壊のあった谷部分を中心とした災害復旧事業を行うことになった。このため、平成16年(2004)2月～3月にかけては、中央谷の石垣を対象に調査を行った(第37次調査)。その後、当初予定していた整備事業に伴う調査として、平成17年(2005)12月～平成18年(2006)3月に、中央尾根上の平坦部を対象にトレンチ調査を行い(第39次調査)、百間石



尾花地区の土塁の調査



百間石垣の調査



百間石垣の調査

平成11年
豪雨災害

垣の整備事業を終了した。上記、28次～37次及び39次調査の成果及び整備事業の内容については、報告書『特別史跡大野城跡整備事業』（福岡県文化財調査報告書第210集）にまとめ、平成18年（2006）に福岡県教育委員会から発刊している。

平成15年 上述したように、平成15年（2003）7月19日に大野城跡は集中豪雨に見舞われた。太宰府市では時間雨量が100mmに達し、大野城跡各所で崖崩れや土砂流出等が起こり、その被害は362箇所にも及んだ。これを受け災害復旧事業を行うことになったが、その事業の大きさ故、福岡県教育委員会文化財保護課では、平成13年（2001）に新設した「重要大規模遺跡対策班」を平成16年度（2004）から「大規模遺跡対策・災害復旧班」へと改組して、災害復旧専任の担当者を配置し、これにあたることとなった。

災害復旧後の調査 災害復旧事業を進めるにあたっては、復旧工事の設計に必要な情報を得るため、被災した遺構の残存状況や内容を確認する必要性が生じた。このため平成16年（2004）7月5日～29日の舩返り地区の調査（第38次調査）を皮切りに、平成17年（2005）1月31日～3月2日の太宰府口城門や尾花地区及び太宰府口東方地区の土塁の調査（第41次調査）、平成17年（2005）8月2日～平成18年（2006）11月24日の大石垣上方地区の内周土塁の調査（第42次調査）、平成17年（2005）8月29日～11月18日の猫坂地区の建物群の調査（第43次調査）、平成17年（2005）11月28日～平成18年（2006）3月30日の屯水地区の調査（第44次調査）、平成18年（2006）8月7日～12月20日の北石垣の調査（第46次調査）、平成19年（2007）12月6日～20日の北石垣の追加調査（第46-2次調査）、平成19年（2007）1月6日～3月20日の主城原地区の調査（第47次調査）、平成19年（2007）8月20日～平成20年（2008）3月28日の小石垣地区A・B区、小石垣東方地区A・B区、大谷東方地区A・B区の調査（第49次調査）、平成10年（2008）9月2日～12月19日の小石垣北方地区A・B区の調査（第50次調査）を福岡県教育委員会が担当した。

なお、災害復旧事業は太宰府市も取り組むこととなり、それに伴う調査として、平成16年（2004）12月20日～平成17年（2005）3月31日の原口地区の土塁及び原口城門の調査（第40次調査）、平成18年（2006）1月18日～3月31日の大石垣の調査（第45次調査）、平成18年（2006）9月26日～平成19年（2007）3月26日の大石垣の追加調査（第45-2次調査）、平成19年（2007）9月20日～平成20年（2008）3月31日の観世音寺口城門の調査（第48次調査）を太宰府市教育委員会が担当した。

上記の38次、41～44・46・47・49・50次調査の成果については、福岡県教育委員会が『特別史跡大野城整備事業V下巻』（福岡県文化財調査報告書第225集）として平成22年（2010）に報告書としてまとめ、40・45・48次調査の成果については、太宰府市教育委員会が『大野城跡1』（太宰府市の文化財第125集）として平成27年（2015）に報告書としてまとめた。

平成20年度（2008）からは、増長天西方地区の土塁を対象に、崩落した箇所等の環境整備事業がはじまり、それに伴う調査を九州歴史資料館が担当した。崩落箇所は2箇所あり、西側については、平成22年（2010）1月30日～3月27日にかけて（第51次調査）、東側については、平成23年（2011）1月28日～3月22日にかけて（第52次調査）と平成24年（2012）1月18日～3月2日にかけて（第53次調査）行い、土塁天端に柱列を確認する等の成果が挙げた。

これら環境整備事業の調査成果については、新たに崩落した箇所の災害復旧事業に伴う調査として、後述する60次及び60-2次調査の成果と合わせて別の機会に報告する予定である。

その後は、増長天地区の環境整備事業が本格化し、それに伴う調査として、礎石建物周辺の平坦地を対象に、平成24年(2012)1月18日～2月22日にかけて53次調査と平行して行ったが、当該地では遺構は確認できなかった(第5-2次調査)。増長天地区の礎石群については、上述のとおり昭和48年度(1973)に第5次調査を行っていたが、当時の調査だけでは構造解明に至らない点もあったため、平成26年(2014)1月16日～平成27年(2015)3月20日にかけて、礎石建物の構造解明のための調査を行った(第5-3次調査)。

また、先に触れた平成15年の豪雨災害に係る災害復旧事業の中では、北石垣城門や小石垣城門、原口城門、観世音寺口城門が新たに発見される中、『太宰府旧蹟全図北』に「クロカ子岩 門ノ石スエ」とある城門の有無が注目されるようになった。その後、県や関係市町の教育委員会職員をはじめ、古代山城の研究者が幾度も現地を踏査し、唐居敷の石材や石積の一部が確認されるに至ったため、構造や規模、遺存状況を確認するための調査を九州歴史資料館が実施することになった。調査は、平成24年(2012)9月25日～平成25年(2013)3月29日にかけて(第54次調査)と平成25年(2013)10月1日～平成26年(2014)3月31日にかけて(第54-2次調査)行われ、城門の構造が明らかとなった。詳細は54次調査については『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅷ』、54-2次調査については『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅸ』にて報告している。

その後は、四王寺山南東麓の原地区にて砂防ダムの設置計画に伴い、平成28年(2016)9月20・21日に行った確認調査(第55次調査)や、大宰府外郭線の実態を確認するため、水城の東側丘陵を対象に令和2年(2020)1月21日～3月16日及び令和3年(2021)9月21日～令和4年(2022)2月2日に行った確認調査(第56次調査(大宰府外郭線1次))や令和3年(2021)9月21日～令和4年(2022)3月17日に行った確認調査(第57次調査(大宰府外郭線4次))、県立四王寺県民の森センター内の施設設置計画に係り、令和4年(2022)9月27日及び令和6年(2024)8月27日に行った確認調査(第58次調査、第61次調査)、鮎返り地区におけるトイレ設置計画に係り、令和5年(2023)6月26日に行った確認調査(第59次調査)、増長天西方地区の土塁の災害復旧事業に係り、令和6年(2024)3月7日～3月21日及び9月17日～20日にかけて実施した確認調査(第60次、第60-2次調査)等を実施している。これらの成果については、55次調査は『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅹ』、56・57次調査は『大宰府外郭線Ⅰ』、58次調査は『大宰府史跡発掘調査報告書ⅩⅡ』にて報告している。

文献

1. 九州歴史資料館 1972『大宰府史跡昭和46年度発掘調査略報』
2. 九州歴史資料館 1974『九州歴史資料館年報 昭和48年度』
3. 九州歴史資料館 1975『九州歴史資料館年報 昭和49年度』
4. 九州歴史資料館 1976『九州歴史資料館年報 昭和50年度』
5. 九州歴史資料館 1977『九州歴史資料館年報 昭和51年度』
6. 九州歴史資料館 1978『九州歴史資料館年報 昭和52年度』
7. 九州歴史資料館 1979『九州歴史資料館年報 昭和53年度』
8. 九州歴史資料館 1980『九州歴史資料館年報 昭和54年度』

9. 九州歴史資料館 1981『九州歴史資料館年報 昭和55年度』
10. 九州歴史資料館 1982『九州歴史資料館年報 昭和56年度』
11. 九州歴史資料館 1983『九州歴史資料館年報 昭和57年度』
12. 九州歴史資料館 1984『九州歴史資料館年報 昭和58年度』
13. 九州歴史資料館 1985『九州歴史資料館年報 昭和59年度』
14. 九州歴史資料館 1986『九州歴史資料館年報 昭和60年度』
15. 九州歴史資料館 1987『九州歴史資料館年報 昭和61年度』
16. 九州歴史資料館 1988『九州歴史資料館年報 昭和62年度』
17. 九州歴史資料館 1989『九州歴史資料館年報 昭和63年度』
18. 九州歴史資料館 1991『九州歴史資料館年報 平成2年度』
19. 九州歴史資料館 1994『九州歴史資料館年報 平成5年度』
20. 九州歴史資料館 1995『九州歴史資料館年報 平成6年度』
21. 九州歴史資料館 1999『九州歴史資料館年報 平成10年度』
22. 九州歴史資料館 2001『九州歴史資料館年報 平成11年度』
23. 九州歴史資料館 2002『九州歴史資料館年報 平成12年度』
24. 九州歴史資料館 2003『九州歴史資料館年報 平成13年度』
25. 九州歴史資料館 2013『九州歴史資料館年報 平成24年度』
26. 九州歴史資料館 2014『九州歴史資料館年報 平成25年度』
27. 九州歴史資料館 2015『九州歴史資料館年報 平成26年度』
28. 九州歴史資料館 2017『九州歴史資料館年報 平成28年度』
29. 九州歴史資料館 2020『九州歴史資料館年報 令和元年度』
30. 九州歴史資料館 2022『九州歴史資料館年報 令和3年度』
31. 九州歴史資料館 2023『九州歴史資料館年報 令和4年度』
32. 九州歴史資料館 2024『九州歴史資料館年報 令和5年度』
33. 九州歴史資料館 2014『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅷ 平成24・25年度』
34. 九州歴史資料館 2016『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅹ 平成26・27年度』
35. 九州歴史資料館 2019『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅺ 平成28・29年度』
36. 九州歴史資料館 2024『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅻ 令和2～4年度』
37. 九州歴史資料館 2023『大宰府外郭線1』
38. 太宰府市教育委員会 2015『大野城跡1』太宰府市の文化財第125集
39. 福岡県教育委員会 1978『特別史跡大野城跡環境整備事業実施報告書』
40. 福岡県教育委員会 1980『特別史跡大野城跡環境整備事業実施報告書Ⅱ』
41. 福岡県教育委員会 1984『特別史跡大野城跡環境整備事業実施報告書Ⅲ』
42. 福岡県教育委員会 2006『特別史跡大野城跡環境整備事業 太宰府口城門・尾花地区・百間石垣整備事業報告』福岡県文化財調査報告第210集
43. 福岡県教育委員会 2010『特別史跡大野城跡環境整備事業Ⅴ』福岡県文化財調査報告書第225集
44. 福岡県教育委員会 1976『特別史跡大野城跡 大石垣、ハツ波地区建物跡 史跡環境整備に伴う発掘調査概報』
45. 福岡県教育委員会 1977『特別史跡大野城跡Ⅱ ハツ波、猫坂地区建物跡 史跡環境整備に伴う発掘調査概報』
46. 福岡県教育委員会 1979『特別史跡大野城跡Ⅲ 主城原地区発掘調査概報・整備概要(1)』
47. 福岡県教育委員会 1980『特別史跡大野城跡Ⅳ 主城原地区・北石垣発掘調査概報・整備概要(2)』
48. 福岡県教育委員会 1982『特別史跡大野城跡Ⅴ 主城原地区(第4次)・村上地区(第1次)発掘調査概報』
49. 福岡県教育委員会 1983『特別史跡大野城跡Ⅵ 村上地区(第2次)・坂本土塁発掘調査概報』
50. 福岡県教育委員会 1991『特別史跡大野城跡Ⅶ 太宰府口城門跡発掘調査概報』

(4) 調査組織

大野城跡をはじめとする大宰府史跡の調査は、上記の調査の経過のとおり、当初は福岡県教育委員会文化課が行ったが、昭和47年(1972)に九州歴史資料館を設置して以降は、主に九州歴史資料館が担当してきた。調査は、昭和43年(1968)以降、大宰府史跡発掘調査指導委員会に指導を仰ぎながら進めてきたが、昭和59年度(1984)に改組を行い、名称を大宰府史跡調査研究指導委員会とし、現在に至っている。

大宰府史跡
の調査組織

大野城跡の調査は、昭和48年度(1973)～昭和63年度(1988)(5次～32次調査)まで、福岡県教育委員会文化課を事業主体とする史跡環境整備に伴う発掘調査を実施したが、調査は九州歴史資料館が担当した。

その後、平成6年度(1994)からの整備事業に先立つ調査も福岡県教育委員会文化課が事業主体となり、平成11年度(1999)尾花地区の土塁の調査(33次調査)までは九州歴史資料館が担当したが、平成12年度(2000)からの百間石垣の調査は、福岡県教育委員会文化財保護課が担当した。

その後、平成15年(2003)に発生した豪雨災害の復旧事業に伴う調査は、平成13年(2001)に福岡県教育委員会文化財保護課に設立した「重要大規模遺跡対策班」を平成16年度(2004)から「大規模遺跡対策・災害復旧班」へと改組して実施した。この豪雨災害の復旧事業に伴う調査は、太宰府市教育委員会も実施し、40・45・48次調査を担当した。

上記災害復旧事業に伴う調査が終了した後は、増長天地区の整備に伴う調査やクロガネ岩城門の調査、大宰府外郭線の調査、また施設設置等の現状変更に伴う確認調査等を九州歴史資料館が担当して行っている。

大野城跡調査関係者

本報告で対象とする調査の福岡県教育委員会及び九州歴史資料館の関係者は以下のとおりである。

昭和46年度(1971)

各年度の
体制

福岡県教育委員会教育長 森田 實 文化課長 岩下光弘

第1次調査担当：宮小路賀宏、露久嗣郎、井上裕弘

第2次調査担当：石松好雄、高橋 章、森田 勉

第3次調査担当：渡辺正気、森田 勉

第4次調査担当：亀井明德、石松好雄、横田賢次郎、高橋 章、森田 勉

昭和48年度(1973)

福岡県教育委員会教育長 森田 實 文化課長 森 英俊

九州歴史資料館館長 鏡山 猛

第5次調査担当：九州歴史資料館：横田賢次郎、横田義章

昭和49年度(1974)

福岡県教育委員会教育長 森田 實 文化課長 藤井 功

九州歴史資料館館長 鏡山 猛

第6次調査担当：九州歴史資料館：横田義章

Tab.2 大宰府史跡調査研究指導委員会委員一覧

(就任年順, ◎は委員長経験者を表す)

氏名	分野	職 (就任時)	在任期間
◎ 竹内 理三	国史	早稲田大学教授	S43~S58
鏡山 猛	考古	九州大学教授	S43~S46
浅野 清	建築	大阪市立大学教授	S43~S62
井上 辰雄	国史	熊本大学教授	S43~S58
井上 光貞	国史	東京大学教授	S43~S56
大田 静六	建築	九州大学教授	S43~S58
◎ 岡崎 敬	考古	九州大学助教授	S43~H2
岸 俊男	国史	京都大学教授	S43~S61
坂本 太郎	国史	國學院大学教授	S43~S55
坪井 清足	考古	奈良国立文化財研究所 平城宮跡発掘調査部長	S43~H7
◎ 小田 富士雄	考古	九州大学助手	S43~R2
◎ 平野 邦雄	国史	東京女子大学教授	S59~H7
狩野 久	国史	奈良国立文化財研究所 飛鳥藤原宮跡発掘調査部長	S59~H30
俣山 晴生	国史	東京大学助教授	S59~H22
澤村 仁	建築	九州芸術工科大学教授	S59~H24
杉本 正美	造園	九州芸術工科大学教授	S59~R2
中村 一	造園	京都大学教授	S59~H19
◎ 横山 浩一	考古	九州大学教授	S59~H11
渡辺 定夫	都市工学	東京大学教授	S59~R2
八木 充	国史	山口大学教授	S63~H30
川添 昭二	国史	九州大学教授	S63~H17
鈴木 嘉吉	建築	奈良国立文化財研究所長	S63~H28
西谷 正	考古	九州大学教授	H4~H19
◎ 佐藤 信	国史	東京大学教授	H6~
坂上 康俊	国史	九州大学教授	H8~
田中 琢	考古	奈良国立文化財研究所長	H8~H10
町田 章	考古	奈良国立文化財研究所長	H11~H16
山中 章	考古	三重大学教授	H12~
田辺 征夫	考古	独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所長	H17~H22
林 重徳	土木工学	佐賀大学教授	H18~H29
石松 好雄	考古	元九州歴史資料館副館長	H20~H23
尼崎 博正	造園	京都造形芸術大学教授	H20~
松村 恵司	考古	独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所長	H23~R2
森 公章	国史	東洋大学教授	H23~
高橋 章	考古	求菩提歴史資料館長	H24~H26
箱崎 和久	建築	独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所	H24~
増淵 徹	国史	京都橋大学教授	R1~
亀田 修一	考古	岡山理科大学教授	R1~
伊東 隆一	建築	熊本大学大学院教授	R1~R4
包清 博之	造園	九州大学大学院芸術工学研究院教授	R1~
末次 大輔	土木工学	宮崎大学教授	R1~
本中 眞	造園	独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所長	R3~
森 弘子	地元有識者	元公益財団法人古都大宰府保存協合理事	R5~
重藤 輝行	考古	佐賀大学教授	R5~

昭和 50 年度 (1975)

福岡県教育委員会教育長 森田 實 文化課長 藤井 功

九州歴史資料館館長 鏡山 猛 副館長 野上 保

第 7 次調査担当 九州歴史資料館：横田義章，高橋 章

第 8 次調査担当 九州歴史資料館：高橋 章，高倉洋彰，石丸 洋

昭和 51 年度 (1976)

福岡県教育委員会教育長 森田 實 文化課長 藤井 功

九州歴史資料館館長 鏡山 猛 副館長 野上 保 調査課長心得 石松好雄

第 9 次調査担当 九州歴史資料館：高橋 章，高倉洋彰，石丸 洋

第 10 次調査担当 九州歴史資料館：横田義章，石丸 洋，沢田康夫（調査補助員）

昭和 52 年度 (1977)

福岡県教育委員会教育長 浦山太郎 文化課長 藤井 功

九州歴史資料館館長 鏡山 猛 副館長 野上 保

第 11 次調査担当 九州歴史資料館：渡辺正気，横田義章，石丸 洋

昭和 53 年度 (1978)

福岡県教育委員会教育長 浦山太郎 文化課長 藤井 功

九州歴史資料館館長 鏡山 猛 副館長 久保園達男 調査課長心得 石松好雄

第 12 次調査担当 九州歴史資料館：渡辺正気，横田義章，石丸 洋

昭和 54 年度 (1979)

福岡県教育委員会教育長 浦山太郎 文化課長 藤井 功

九州歴史資料館館長 鏡山 猛 副館長 久保園達男 調査課長心得 石松好雄

第 13・14 次調査担当 文化課：浜田信也，児玉真一

九州歴史資料館：横田義章，石丸 洋

昭和 55 年度 (1980)

福岡県教育委員会教育長 友野 隆 文化課長 藤井 功

九州歴史資料館館長 鏡山 猛 副館長 牛田重夫 調査課長心得 石松好雄

第 15 次調査担当 九州歴史資料館：横田義章，高橋 章，石丸 洋

昭和 56 年度 (1981)

福岡県教育委員会教育長 友野 隆 文化課長 藤井 功

九州歴史資料館館長 田村圓澄 副館長 牛田重夫 調査課長 石松好雄

第 16 次調査担当 九州歴史資料館：横田義章，高橋 章，石丸 洋

昭和 57 年度 (1982)

福岡県教育委員会教育長 友野 隆 文化課長 藤井 功

九州歴史資料館館長 田村圓澄 副館長 武久耕作 調査課長 石松好雄

第 17・18 次調査担当 九州歴史資料館：横田義章，横田賢次郎，森田 勉

昭和 58 年度 (1983)

福岡県教育委員会教育長 友野 隆 文化課長 藤井 功

九州歴史資料館館長 田村圓澄 副館長 武久耕作 調査課長 石松好雄

第19次調査担当 九州歴史資料館：石松好雄，横田義章，高橋 章

第20次調査担当 九州歴史資料館：石松好雄，横田義章

昭和60年度（1985）

福岡県教育委員会教育長 友野 隆 文化課長 前田栄一

九州歴史資料館館長 田村圓澄 副館長 前田栄一（兼務） 調査課長 石松好雄

第21次調査担当 九州歴史資料館：横田義章，横田賢次郎

第22次調査担当 九州歴史資料館：横田義章，横田賢次郎，石丸 洋

昭和62年度（1987）

福岡県教育委員会教育長 竹井 宏 文化課長 窪田康德

九州歴史資料館館長 田村圓澄 副館長 高木康生 調査課長 石松好雄

第23次調査担当 九州歴史資料館：横田義章，横田賢次郎，石丸 洋

昭和63年度（1988）

福岡県教育委員会教育長 竹井 宏 文化課長 葉石 勲

九州歴史資料館館長 田村圓澄 副館長 高木康生 調査課長 石松好雄

第24次調査担当 九州歴史資料館：横田義章，横田賢次郎，石丸 洋

平成2年度（1990）

福岡県教育委員会教育長 御手洗 康 文化課長 六本木聖久

九州歴史資料館館長 田村圓澄 副館長 前田栄一 調査課長 栗原和彦

第25・26次調査担当 九州歴史資料館：宮小路賀宏，横田義章，橋口達也，石丸 洋，
赤司善彦

平成5年度（1993）

福岡県教育委員会教育長 光安常喜 文化課長 森山良一

九州歴史資料館館長 吉久勝美 副館長 石松好雄 調査課長 栗原和彦

第27次調査担当 文化課：木下 修

九州歴史資料館：宮小路賀宏，横田義章，佐々木達彦，横田賢次郎

平成6年度（1994）

福岡県教育委員会教育長 光安常喜 文化課長 松尾正俊

九州歴史資料館館長 吉久勝美 副館長 石松好雄 調査課長 栗原和彦

第28次調査担当 文化課：木下 修

九州歴史資料館：宮小路賀宏，横田義章，佐々木達彦，横田賢次郎，小川泰樹

平成7年度（1995）

福岡県教育委員会教育長 光安常喜 文化課長 松尾正俊

九州歴史資料館館長 吉久勝美 副館長 石松好雄 調査課長 栗原和彦

第29次調査担当 文化課：新原正典，木下 修

九州歴史資料館：宮小路賀宏，横田義章，横田賢次郎

平成8年度（1996）

福岡県教育委員会教育長 光安常喜 文化課長 石松好雄

九州歴史資料館館長 高橋良平 副館長 松尾正俊 調査課長 栗原和彦

第30次調査担当 文化課：田上 稔

九州歴史資料館：横田賢次郎，小川泰樹

平成9年度（1997）

福岡県教育委員会教育長 光安常喜 文化課長 石松好雄

九州歴史資料館館長 高橋良平 副館長 松尾正俊 調査課長 横田賢次郎

第31次調査担当 文化課：田上 稔

九州歴史資料館：赤司善彦，齋部麻矢

平成10年度（1998）

福岡県教育委員会教育長 光安常喜 文化財保護課長 石松好雄

九州歴史資料館館長 光安常喜（兼務） 副館長 松尾正俊 調査課長 横田賢次郎

第32次調査担当 文化財保護課：田上 稔

九州歴史資料館：横田義章，赤司善彦

平成11年度（1999）

福岡県教育委員会教育長 光安常喜 文化財保護課長 柳田康雄

九州歴史資料館館長 光安常喜（兼務） 副館長 宮小路賀宏 調査課長 横田賢次郎

第33次調査担当 文化財保護課：田上 稔

九州歴史資料館：赤司善彦

平成12年度（2000）

福岡県教育委員会教育長 光安常喜 文化財保護課長 柳田康雄

九州歴史資料館館長 光安常喜（兼務） 副館長 宮小路賀宏 調査課長 横田賢次郎

第34次調査担当 文化財保護課：田上 稔

九州歴史資料館：齋部麻矢

平成13年度（2001）

福岡県教育委員会教育長 光安常喜 文化財保護課長 井上裕弘

九州歴史資料館館長 光安常喜（兼務） 副館長 柳田康雄 調査課長 横田賢次郎

第35次調査担当 文化財保護課：田上 稔，伊崎俊秋，平尾和久

九州歴史資料館：小田和利

平成14年度（2002）

福岡県教育委員会教育長 森山良一 文化財保護課長 井上裕弘

九州歴史資料館館長 森山良一（兼務） 副館長 柳田康雄 調査課長 高橋 章

第36次調査担当 文化財保護課：田上 稔，伊崎俊秋，平尾和久

平成15年度（2003）

福岡県教育委員会教育長 森山良一 文化財保護課長 井上裕弘

九州歴史資料館館長 森山良一（兼務） 副館長 橋口達也 調査課長 高橋 章

第37次調査担当 文化財保護課：田上 稔

福岡教育事務所：重藤輝行

平成16年度（2004）

福岡県教育委員会教育長 森山良一 文化財保護課長 井上裕弘

第38・41次調査担当 文化財保護課：小澤佳恵

平成17年度（2005）

福岡県教育委員会教育長 森山良一 文化財保護課長 久芳昭文

第39次調査担当 文化財保護課：田上 稔、重藤輝行

第42～44次調査担当 文化財保護課：小澤佳恵

平成18年度（2006）

福岡県教育委員会教育長 森山良一 副理事兼文化財保護課長 磯村幸男

第46・47次調査担当 文化財保護課：小澤佳恵

平成19年度（2007）

福岡県教育委員会教育長 森山良一 副理事兼文化財保護課長 磯村幸男

第49次調査担当 文化財保護課：小澤佳恵

平成20年度（2008）

福岡県教育委員会教育長 森山良一 副理事兼文化財保護課長 磯村幸男

第50次調査担当 文化財保護課：小澤佳恵

平成24年度（2012）

九州歴史資料館館長 西谷 正 副館長 篠田隆行 学芸調査室長 小田和利

第54次調査担当 九州歴史資料館：下原幸裕、岡田 諭

平成25年度（2013）

九州歴史資料館館長 西谷 正 副館長 篠田隆行 学芸調査室長 小田和利

第54-2次調査担当 九州歴史資料館：下原幸裕、岡田 諭

第5-3次調査担当 九州歴史資料館：下原幸裕、岡田 諭

平成26年度（2014）

九州歴史資料館館長 杉光 誠 副館長 伊崎俊秋 学芸調査室長 小田和利

第5-3次調査担当 九州歴史資料館：下原幸裕、岡田 諭

なお、本年度の報告書作成に関わる九州歴史資料館の関係者は下記のとおりである。

九州歴史資料館

総括 館 長 吉田法稔 副館長 吉村靖徳

総務 総務室長 山下雄二 総務班長 岡本裕子

事務主査 徳永裕美 池松幸一郎 主事 原口美紀

報告 埋蔵文化財調査室長 吉田東明 室長補佐 入佐友一郎

大宰府調査班長 宮地聡一郎

企画主査 坂元雄紀 技術主査 小嶋 篤

第Ⅱ章 位置と環境

(1) 自然的環境

大野城跡は、大城山、岩屋山、水瓶山、大原山の4つから構成される四王寺山と総称される山々に所在し、大野城市、太宰府市、宇美町の2市1町にまたがっている。博多湾からは約12km離れた内陸部にあり、東は宝満山、北側は三郡山、北西側は月隈丘陵、南西側は背振山地を望むことができる。西側は特別史跡水城跡と接続し、南麓一帯には特別史跡大宰府跡をはじめとする大宰府関連遺跡が広がっている。

四王寺山

四王寺山を俯瞰すると、南西側の背振山地とは磐固断層を含む二日市低地帯により、また北側の三郡山とは宇美断層を含む低地によって画されており、独立山地の地貌を呈している。

この四王寺山は、北流する内野川によって大きく開析され、山々の稜線は馬蹄形に連続する格好となっている。大野城跡の城壁はこの稜線に沿って築かれ、その内側は指鉢状の地形を呈している。内側は、山々から派生する小尾根群が複雑に入り組んでいる。

一帯は、早良花崗岩と呼ばれる中生代白亜紀に貫入された花崗岩類が広く分布している。この花崗岩は地表近くで独特の風化帯を形成する特徴があり、その強風化岩は、「マサ」、「マサ土」と呼ばれる。当該地の地盤の多くも表層地質はこのマサによって構成されているが、風化の程度によって粗粒砂から粘性土質砂と大きく質が異なる。

マサ土

(2) 歴史的環境

大野城が築かれた7世紀の状況を考える上で、東アジアの国際情勢は重要である。6世紀後葉～7世紀前葉にかけての、隋・唐といった中国の統一王朝の成立は、朝鮮半島諸国に大きな緊張をもたらした。当時の朝鮮半島は高句麗、新羅、百済の三国が鼎立した状態であったが、642年に高句麗が百済と結んで新羅に対する軍事行動を起こすと、新羅は唐に対して救援要請を行い、唐による軍事介入が始まった。そして660年に唐・新羅連合軍によって百済は滅亡した。その後、百済の遺臣らは蜂起し、百済復興を目指すようになる。

百済滅亡

660年、百済滅亡という朝鮮半島の情勢を知ったヤマト政権は、百済救援軍を派遣することを決定し、斉明天皇は661年に筑紫の朝倉橘広庭宮にて準備を進めた。しかしわずか2ヶ月後に斉明天皇は急死し、その後は中大兄皇子が指揮を執ることで、朝鮮半島への派兵を行った。この朝倉橘広庭宮は、現在の朝倉市朝倉町に比定するのが通説ではあるが、確定していない。

白村江での敗戦

663年、倭・百済連合軍は唐・新羅連合軍と、忠清南道の錦江河口付近の白村江にて会戦するも、大敗を喫し百済救援は失敗に終わった。この敗戦によって、唐・新羅連合軍による倭への侵攻という脅威にさらされることになり、中大兄皇子はこれに備えるため、防衛体制を整備していった。664年には対馬・杵岐に防人と烽を配置し、筑紫に水城を築かせ、翌665年には長門国に城を築かせ、また、百済から亡命した達率禮礼福留、達率四比福夫を筑紫に遣わして大野城と基肄城を築かせた。さらに667年には高安城、屋島城、金田城を築かせて、九州北部から瀬戸内海沿岸を経て畿内に至る各地に防衛施設を配備していった。これら文献に記載のある古代山城は、百済からの築城技術を導入して築造していることから、「朝鮮式山城」と呼ばれ、築造年や築造目的が明らかである。一方、九州北部から瀬戸内海沿岸にかけて、これ

水城
基肄城

朝鮮式山城
と
神籠石



Fig.3 大宰府関連遺跡分布図 (1/200,000)

とは別に神籠石式(系)山城と呼ばれる古代山城が分布している。福岡県では雷山神籠石、阿志岐山城、鹿毛馬神籠石、杷木神籠石、高良山神籠石、女山神籠石、御所ヶ谷神籠石、唐原山城、佐賀県では帯隈山神籠石、おつぼ山神籠石が挙げられ、これらは築造年代が明確ではないものの、出土土器の時期等から、朝鮮式山城と有機的な関係を有したことが考えられる。

以上の経緯から、大野城は当時の国際情勢を背景に、水城、基肆城とともに大宰府の防衛施設としての機能を果たすために築造された。これらは大宰府を取り囲むように、自然地形と一体となって配備されている。近年は前畑遺跡で土塁状遺構が確認され、それら施設の一部をなす可能性も出てきた(筑紫野市教育委員会 2020・2021)。この大宰府を取り囲む施設について

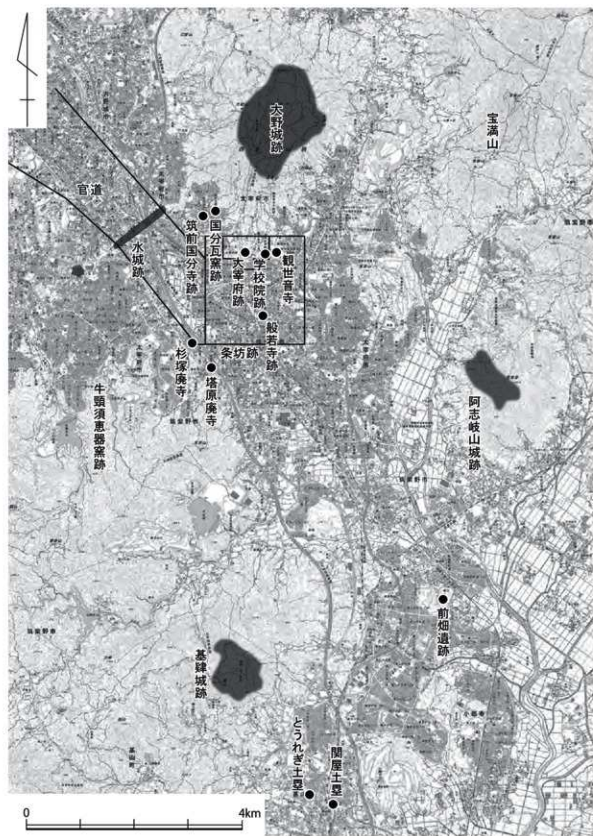


Fig.4 大宰府関連遺跡分布図 (1/60,000)

は、過去に「羅城」という用語が用いられたことがあったが（鏡山 1966・1968、藤井・亀井 1977、阿部 1991）、隋唐時代の中国の「羅城」が、都城を取り囲む城壁を指すことから、これをそのまま大宰府に適用させるには違和感があり、九州歴史資料館ではこれを「大宰府外郭線」と呼び、その実態を明らかにするための調査を実施した（九州歴史資料館 2023）。その結果、大宰府の四周を圍繞する施設として明確な遺構は確認できなかったが、条里の状況等からその推定線が境界として認識されていた可能性はあったと考えられる。

築城後、朝鮮半島では 676 年に新羅が全域を領有し、統一新羅が成立する。白村江での敗戦直後の緊張感は収まったと考えられるが、続日本紀には文武天皇 2 年（698）に大野城や基肆城、また鞠智城に対して緒治を行った記事が見られることから、城としての機能は維持されたと思われる。その後、宝龜 5 年（774）には、新羅の日本に対する呪詛に対抗し、四天王と金光明最勝王經の力によって国家を守護するため、大野城内に四天王寺が建立された。大野城に関する記録は 9 世紀までのものは見られるが、その後は四天王寺に関する記事が増え、次第に宗教活動の場としての機能が高まっていった。12 世紀には経塚が築かれ、一帯は九州北部における経塚の一大拠点となり、その出土した経筒のうち特徴的なものは「四王寺型」と呼称されている。その後江戸時代後期には西国三十三ヶ所観音霊場にならい、山中に三十三石仏が建立され、現在も参拝客の姿を見ることができる。

なお、戦国時代には大野城の南側に岩屋城が築城され、大友氏の筑前支配の拠点としても機能した。天正 14 年（1586）、高橋紹運はここで九州制覇を目指す島津氏の攻撃に対して籠城するも城は陥落し自害するに至る。現在も堀切や土塁、また紹運の墓が残されている。

参考文献

- 阿部義平 1991『日本列島における都城形成-大宰府羅城の復元を中心に-』『国立歴史民俗博物館研究報告書』第 36 集 国立歴史民俗博物館
- 鏡山 猛 1966『北九州の古代遺跡-墳墓・集落・都城』至文堂
- 鏡山 猛 1968『大宰府都城の研究』風間書房
- 九州歴史資料館 2023『大宰府外郭線Ⅰ』
- 筑紫野市教育委員会 2020『前畑遺跡第 13 次発掘調査 土塁状遺構の発掘調査』筑紫野市文化財調査報告書第 121 集
- 筑紫野市教育委員会 2021『前畑遺跡 重要遺跡確認調査』筑紫野市文化財調査報告書第 122 集
- 藤井 功・亀井明徳 1977『西都大宰府』NHK ブックス 277

第三章 調査の概要

(1) 調査区と遺構名称

大野城跡の調査では第1次調査以降、特に建物跡が集中する箇所を中心に地区が設定されてきた。ただ、全域にわたっては設定されておらず、特に土塁については計画的な調査がほとんど行われてこなかったために、平成15年豪雨災害の復旧事業に伴う調査の際には、調査箇所毎に近隣の既存の名称や字名などを参考にしながら新たな名称を適宜付与せざるをえなかった。そのため調査が多く行われた箇所については地区名称が細かくなっており、また調査が行われていない箇所は未だに地区が設定されていないといった課題がある。

この地区名称については、例えば尾花地区の場合、礎石群を指して「尾花礎石群」と呼ぶ場合も多いが統一されていなかった。また、単に「尾花地区」とした場合、建物を指すのか、土塁を指すのか、あるいは両方を指すのか分かりづらい点があったため、『特別史跡大野城跡整備事業Ⅴ下巻』ではこの点の整理をし、原則として、地点名＋遺構の性格＋地区、という呼び方で統一をはかった(例えば、尾花(地点名)＋土塁(遺構の性格)＋地区＝「尾花土塁地区」)。地区毎の報告であったため、この際は有効な方法であった。

ただ今回の報告は、遺構毎の報告であるため、上記方法では不都合が生じる遺構も存在する。本書では、個別の名称として定着している「太宰府口城門」や「百間石垣」等、城門や石垣・石塁については、それぞれの名称を使用する。土塁については、大きく南側外周土塁、南側内周土塁、北側外周土塁、北側内周土塁、東側土塁、西側土塁と区分し、各調査箇所については地区名を冠することで表現する。その際、過去の調査の総括報告という性格から、地区名称はできるだけ踏襲し、『特別史跡大野城跡整備事業Ⅴ下巻』の名称から若干の変更を行い、「土塁」を省いて、「尾花地区」「太宰府口東方地区」「大石垣上方地区」等と表現する。ただ、『特別史跡大野城跡整備事業Ⅴ下巻』では、小石垣の周辺をかなり広範囲にわたって「小石垣周辺地区」とし、その中で「小石垣東方A・B区」や「大谷東方A・B区」等と細分したため煩雑になっている。本書では、細別した名称を基本にし、「小石垣東方地区A区」等と表現する。

建物については、「～礎石群」という名称も用いられているが、実際には掘立柱建物も含んでおり、本書では、建物群として「増長天地区」「尾花地区」等と地区毎に記述していく。

なお、調査回数については、過去に主要地区毎に付与されたこともあったが、『特別史跡大野城跡整備事業Ⅴ下巻』で、一連の調査回数に整理された。ただ一部で錯誤があったため、今回若干修正を行った回数も存在する。

また遺構番号については、『特別史跡大野城跡Ⅱ』以降、地区毎に3ケタの番号を付与し、百と十の位で地区を、一の位で個別の遺構を示す方法をとっていたが、地区内に10棟以上の遺構が存在する場合に対応ができず、混乱が生じていた。そのため、『特別史跡大野城跡整備事業Ⅴ下巻』では建物の番号を整理し、新たな番号を付与している。本書でもこれを踏襲するが(Tab.3)、建物以外については整理できておらず、また調査毎に個別に遺構名が付与されることも多かった。この点は課題ではあるが、本書では建物以外は一貫過去の遺構名で報告することとする。

(2) 各次調査の概要

調査の経緯は第1章で触れたため、ここでは本書で対象とする調査について、回数毎にその概要を示す。

第1次調査 1971年7月26日～29日（太宰府口西方地区（土塁））

林道拡幅・付け替えに伴い、削り取られた版築土塁の土層の断面図を作成した。

第2次調査 1971年5月17日～21日（屯水地区（土塁））

林道の建設に伴い、地形測量調査を行った

第3次調査 1971年8月25日～9月5日（太宰府口北方地区（土塁））

林道拡幅に伴う調査で、土塁に伴う堰板柱穴を確認した。

第4次調査 1971年8月19日～10月2日（尾花地区（建物））

林道拡幅事業に伴い、建物の規模や配置を確認した。3門×5間の礎石建物10棟が規則的に配列されているのを確認した。

第5次調査 1973年11月12日～1974年1月17日（増長天地区（建物））

トレンチにより、建物を作る前に地山の削り出しと盛土による造成を行っていたことが判明した。建物は3門×5間の礎石礎柱建物が2棟ずつ段違いに計4棟確認でき、建物の雨落溝の位置で、溝よりも古い掘立柱を確認した。

第5-3次調査 2014年1月16日～2015年3月20日（増長天地区（建物））

礎石建物SB0402では、これまで知られていた雨落溝の外側に、もう一つ雨落溝が存在することが分かり、掘立柱列に伴う段階の雨落である可能性が高まった。また、礎石建物SB0401には、掘立柱列は伴わず、新しい段階に出現した建物と推定された。

第6次調査 1974年10月25日～11月25日（百間石垣）

百間石垣南端の石塁の調査を行った。石塁は基底幅9m、高さ6mで、外側の壁面に接する石垣基底外縁に、大きな板状の石を敷き並べ、張り出しを設けていることが分かった。

第7次調査 1975年7月21日～8月5日（大石垣）

現代の登山道によって石垣線は切れ、食い違いが見られていたが、石垣は連続することが確認でき、また城門は存在しないことが明らかとなった。また、石垣背面に積石が検出され、幅4m前後の石塁をなすことを確認した。

第8次調査 1975年8月6日～10月6日（八ツ波地区（建物））

トレンチ調査を要所に行うことで、表面観察と合わせて礎石建物が計15棟存在することを確認した。そのほとんどが3間×5間の倉庫と推定でき、柱間は7尺で規格性が高いことが明らかとなった。雨落溝は基壇側に玉石を使用しているものと使用していないものがあることが判明した。

第9次調査 1976年8月5日～9月18日、11月1日～13日（八ツ波地区（建物））

第8次調査の成果を踏まえ、4棟の礎石建物について全面調査を行った。礎石建物SB0009やSB0010では、雨落溝の床面で掘立柱の柱跡が確認された。柱筋の通りから、10棟は強い規律のもとに計画されていたことがうかがえた。

また、SB0009では建物よりも新しい石組み遺構SX016を確認し、焼骨を入れた土器が出土した。

雨落溝より
古い掘立柱

大石垣は
連続する

第10次調査 1976年11月13日～2月9日(猫坂地区)

4棟の礎石建物はこれまで他地区で確認されていたものとは異なり、3間×4間であることが判明した。これらは礎石間に小礎石が見られるのが多く特徴的である。また、3間×3間の掘立柱建物SB0504は、柱間が東西方向8尺、南北方向6.5尺であり、礎石建物とは異なることが判明した。

3間×4間の
礎石建物

第11次調査 1978年1月17日～3月8日(主城原地区(建物))**第12次調査** 1978年8月22日～10月31日(主城原地区(建物))

2次にわたる665㎡程の調査で、建物が多く重複した箇所を2箇所確認した。南半部ではまず基壇を持つ3間×8間の長大な礎石総柱建物SB0600、そして3間×5間の礎石総柱建物SB0601、次に3間×4間の軸の異なる礎石総柱建物SB0602、そして最後に山の斜面を削って建設した3間×5間の礎石総柱建物SB0603という変遷が明らかになり、3間×5間の普遍的な建物でも時期差がある可能性が示唆された。

長大な
建物

また北半部では、尾根先端に3間×7間の掘立柱建物SB0604の後に3間×9間の掘立柱建物SB0605が建てられ、次にその南に3間×5間の礎石総柱建物SB0606、最後に1門×1間の掘立柱の櫓が築かれる変遷が明らかになった。

掘立柱の長大な官衙風建物、掘立柱の長倉風建物、また礎石長倉風建物など、これまでになく変化にとんだものを確認した。

第13次調査 1979年9月10日～11月30日(主城原地区(建物))

14次調査と平行して、尾根筋の礎石建物SB0610及びSB0611の建物について調査を行った。いずれも桁行4間で、柱間は7.5尺とそれまで類例のないものであることが判明した。その他、炭窯SX072を確認した。

第14次調査 1979年9月10日～11月30日(北石垣)

昭和47年の豪雨で大崩落し存否不明であった北石垣について、残存している石垣の範囲を確認した。東部石垣は、中央付近は一見乱雑な積み方なのに対し、西の方は整然としていること、西部石垣の石垣裏込めは所々に大小の石を混じえる版築であることなどが明らかとなった。また、石垣の上ではSX075・076の焼成遺構が確認され、10世紀頃の土師器も出土した。

第15次調査 1980年9月1日～11月13日(主城原地区(建物))

主城原地区南端部の建物跡群について550㎡程を調査し、3間×4間の礎石総柱建物2棟(SB0618・SB0619)と礎石建物の間に7間以上の長大な掘立柱建物跡を確認した。礎石建物SB0618は深く埋没していたが、これは東南側から傾斜する地形を造成した箇所に作ったため、壁面が崩落したことによって埋没したことが想定された。SB0619も同様な地形で、平坦面を作って建てられたと考えられた。掘立柱建物は礎石建物と異なり、造成の必要のない箇所に礎石建物に先行して、尾根筋に直行する方向に建てられたと想定された。掘立柱建物は間仕切りの小さな柱穴を持ち、中央寄りとし西中央部に炉がある。生活的な場を備えた何らかの管理的な建物かと推測される。その他、SB0618北西隅礎石脇で、建物よりも後出する粉末状の炭が入ったビットSX081を確認した。

第16次調査 1981年9月7日～10月15日(村上地区(建物))

村上地区の南側にある3間×4間の礎石総柱建物2棟(SB0903・0904)と3間×5間の

礎石総柱建物 SB0905 について、計 540m 程調査を行った。SB0903・0904 は小礎石を持ち、SB0904 の小礎石は猫坂地区で見られたものに類似し、主礎石を挟むように存在することが分かった。

SB0905 は増長天地区と同様、四周の雨落溝埋土下に先行する掘立柱列を検出した。

第 17 次調査 1982 年 9 月 6 日～10 月 20 日（村上地区（建物））

16 次調査と一部重複する格好で 350m 程調査を行い、礎石建物 SB0905 の北側に同規模の SB0906 を確認した。SB0905 の補足調査では、掘立柱の柱掘り方の外側に径 20～30cm 前後の小ピット群を検出した。

尾根先端では礎石建物 SB0907 を確認した。残りが悪いが、3 間×4 間であった可能性が高いと考えられた。

第 18 次調査 1982 年 9 月 24 日～10 月 20 日（坂本口北方地区（土塁））

土塁線の構造や、土塁に伴う施設等を追求するため 5 箇所にトレンチを設定し、計 90m 程を調査した。南北に延びる尾根上の A トレンチでは溝を 2 条確認し、東西に延びる尾根の南側の B トレンチでは地山を削り出した土塁 SA130 を確認した。B トレンチでは随所で工具により地山を削った痕跡が確認された。また、斜面の埋土は一見散策状に見えるが、当時は道路として使用された痕跡と考えられた。平坦面では望楼等の施設が存在した可能性もあったが、調査を行った結果、遺構は確認できなかった。調査の結果、土塁線の想定を再考する必要があるが出てきた。

第 19 次調査 1983 年 9 月 16 日～10 月 28 日（毘沙門地区）

毘沙門堂東側の平坦地の 150m 程を調査し、多くの柱穴群を確認した。遺物は平安～鎌倉時代と推定される遺物が多く出土し、他の地区とは様相が異なることが明らかとなった。遺物では水晶製の巻物軸端の出土が特筆される。

なお調査期間中に、毘沙門堂から北東に約 170m 離れた平坦面でボーリング調査を行い、他の地区の倉庫群とは異なる様相を呈する建物礎石を確認した。

第 20 次調査 1984 年 9 月 1 日～10 月 6 日（毘沙門地区）

19 次調査地の西側に隣接して 155m 程を調査し、多くの柱穴群を確認した。19 次調査地よりも地山の岩盤が露出する箇所が多く、遺構はそれらを掘り込んでいる状況が確認された。

第 21 次調査 1985 年 7 月 15 日～8 月 31 日（太宰府口城門）

調査地の地形測量を行った後に、水ノ手口石塁を含む城門両側の石垣の清掃や城内部の小規模な発掘調査を行った。その結果、以前から判明していた門列石のさらに城内側で柱座を持つ礎石や列石を検出した。また、列石内側から城内部にかけては掘立柱の遺構が存在することも判明した。

第 22 次調査 1986 年 5 月 19 日～7 月 21 日（太宰府口城門）

水ノ手口石塁から城門にかけての内側部分についての調査を実施した。城門と西側の水ノ手口石塁との接点が方形の堅固な石積であることが判明し、また門を挟んだ東側でも城門との区切りとしてほぼ同様の構造を検出した。

また、城門内側部には掘立柱穴が引き続き検出され、一部は遮閉施設と推測された。

第 23 次調査 1987 年 9 月 17 日～11 月 11 日（太宰府口城門）

掘立柱のうち、城門の位置と城門の北に接して存在するものは、古期の城門遺構であることが判明した。またその北方に2条存在する小規模な掘立柱列は遮閉機能を有していると考えられた。さらに、その北方部では、城門域の北端縁となる列石を1条確認した。

第24次調査 1988年10月24日～12月20日（太宰府口城門）

21次調査時から注目された掘立柱は城門の古期の遺構であることを確定しえた。

また、土塁は地山上に版築状に積土をしていることが判明し、上部では柵列2条を確認した。

以上の第21～24次までの調査によって城門の変遷が明らかになった。Ⅰ期は掘立柱建物による城門で、Ⅱ期に礎石使用の城門に作り替えられ、Ⅲ期に門の両袖部で大きな改変が行われたことが判明した。Ⅳ期は大野城の機能終了後に、通路として修理したものと判断した。

城門の
3期の変遷

第25次調査 1990年5月14日～6月5日（尾花地区（土塁））

土塁の土層断面の調査及び現況の地形測量を行った。土塁は数cm程の互層を成し、丁寧に積み上げられたものであることが明らかとなった。

第26次調査 1990年6月7日～6月29日（小石垣）

現在水田となっている箇所に2m×10m程の南北方向のトレンチを設定して調査を行った。地下に石塁が残っていることや、石塁と土塁の境界を確認した。

第27次調査 1993年12月6日～12月22日（太宰府口城門周辺）

周辺地域の地形測量調査を行った。

第28次調査 1994年7月～9月（太宰府口東方地区（土塁）、尾花地区（土塁））

尾花地区の土塁では、城内側の土層で小孔が認められ、軀板を固定するための横木の痕跡と推定した。また土塁天端では柱列を確認し、柵の可能性が考えられた。

横木痕
の推定

太宰府口東方地区では、土塁に直行する格好で設定したトレンチにおいて、版築積土を確認した。また、内周土塁との接続部では、内・外周土塁の内端部の段落ちを確認したほか、外周土塁から延びる旧表土の上に内周土塁の盛土があることが観察され、外周土塁の構築が内周土塁に先行することが判明した。

第29次調査 1995年11月12日～12月7日（水ノ手口石塁、太宰府口城門）

水ノ手口石塁に直交するトレンチをあげ断面図を作成した。石塁内外面は丁寧な石積だが、内部は乱雑に割石を詰め込んだ状態であった。また、太宰府口城門前面の導入部の調査では、階段などの施設は確認できなかったため、入り口は緩やかなスロープであったこと想定された。

第30次調査 1996年8月9日～10月10日（太宰府口東方地区（土塁））

太宰府口城門の東側の土塁では、版築を確認し、土塁上では柱列、石敷を確認した。また南側外周土塁の南東隅部分の平坦地に設定したトレンチでは中世の土城壁を確認した。太宰府口城門東側の石積では、1m奥に別構造の古い石積を確認した。

第31次調査 1997年9月24日～11月14日（太宰府口城門周辺）

太宰府口城門から北側の、外周土塁内側の情報を得るためトレンチ調査を実施した。城門の北側は広い湿地状を呈しており、以前確認した城門北側列石は、湿地と城門とを区画する緑石の役割を担っていたことが推測された。

第32次調査 1998年9月28日～1999年3月31日（水ノ手口石塁）

水ノ手口石塁とその西側の土塁との接合部では、土塁の内側に手のひらほどの石を面を揃え

で敷き並べた状態を確認した。また、水ノ手口石垣の内側窪地では、以前の調査で集排水に関する石列を確認していたが、当該調査で、石列背後の裏込め石を確認した。

第33次調査 2000年2月24日～3月17日（尾花地区（土塁））

崩落した土塁外側を対象に調査を行い、盛土の構造について多くの所見を得ることができた。盛土は大きく3つに分かれることや、横長木孔痕を検出し、版築のための版板などの痕跡と考えられること、また、基底部の盛土の上面に列石を確認し、それが盛土によって被覆されていること等が判明し、土塁構築の手順は、まず基底部を段切りによって整形し、その上に支持基盤を安定させ、そして列石を並べた上に土を積み上げていく過程が明らかとなった。

第34次調査 2000年8月～2001年3月（百間石垣）

石垣の現況調査及び全体にわたる測量を行った。

第35次調査 2002年1月～3月（百間石垣）

石垣中央部を対象にトレンチを入れ、石垣構築方法を確認した。石垣はまず、岩盤掘削後に石垣最下段に長石でテラスを設け、その上に根石を置き根固めを行った後に石を積み上げていること等が判明した。石垣裏込め土のさらに裏側に、版築状の積土が確認できた箇所もあった。

第36次調査 2002年12月～2003年3月（百間石垣）

石垣北半の復元工事に伴う調査を行った。35次調査の石垣中央部とは異なり、石垣の裏側に版築状の積土は確認されず、全て栗石を用いていることが判明した。また、石垣最上層では拳大の栗石のみを敷設し、その上に黄褐色粘土を積み上げ、防水層を形成していることが判明した。

第37次調査 2004年2月～3月（百間石垣）

中央谷の石垣に直交する格好でトレンチを設定し、断面図を作成した。石垣の下に透水層と考えられる灰色の砂礫層が存在し、この層を通して水を外に排出させていることが判明した。なお、復旧工事中に木柱を発見したが、これも排水に関するものと考えられた。

第38次調査 2004年7月5日～7月29日（鮎返り地区（窯跡））

崩落した山腹斜面にて、炭窯跡1基を確認した。付近からは8世紀初頭前後の須恵器片を確認したが、窯の時期は不明である。

第39次調査 2005年12月～2006年3月（百間石垣）

中央尾根上の平坦部においてトレンチ調査を行い、平坦部の保護の役割を果たしたと考えられる石敷を確認した。

第40次調査 2004年12月20日～2005年3月31日（原地区（土塁）、原口城門）

太宰府市教育委員会によって2箇所の土塁崩落部が調査され、土塁の構築方法についての所見が得られた。また南東側に開口する城門を新たに確認し（原口城門）、石垣や敷石、石製唐居敷、柱穴等が確認された。城門は3時期の変遷が考えられた。

第41次調査 2005年1月31日～3月2日（太宰府口城門、尾花地区（土塁）、太宰府口東方地区（土塁））

尾花地区の土塁では、崩落が起きた2箇所を調査を行い、土塁の構築方法について多くの情報が得られた。北側のA区では、基礎盛土上に100cm程の塊石の配石を置き、その上に版築盛土を行っていることを確認した。また、版築に伴う横木痕等を確認したほか、基礎盛土の外

側に崩落後の修復盛土も確認した。

修復盛土
の確認

太宰府口東方地区では、崩落面を対象に土塁の土層を約 30m にわたって記録したにもかかわらず、土塁を横断する堰板の痕跡は見られなかった。また、堰板柱穴痕が版築盛土の中にまで延びていることから、堰板が堰板柱よりも外側にあったことが想定された。

太宰府口城門では、東側の崩壊・不安定化した第Ⅲ期城門に伴う石積を除去したところ、第Ⅰ期の石積を良好な形で検出した。

第 42 次調査 2005 年 8 月 2 日～2006 年 11 月 24 日（大石垣上方地区（土塁））

土塁が崩落した 3 箇所と、復旧工事の進入路となる 1 箇所について調査を行った。A 区ではトレンチ調査によって、土塁内側の堰板柱を確認した。C 区では基礎盛土の最下層に焼土や炭化物を含む層が見られ、基礎盛土施工時に草や雑木を燃やした痕跡と想定された。

第 43 次調査 2005 年 8 月 29 日～11 月 18 日（猫坂地区）

崩れた部分のトレンチ調査を行い、造成盛土を確認した。盛土は高い箇所を削り谷部を埋めたもので、結果的に平坦面を形成していることが判明した。ただ不安定な地盤となるため、礎石建物はここを避けるように「く」字形に配されていると考えられた。また、盛土最下部には炭化物の集中があり、盛土施工前に、草木を焼き払う等、地山に手を入れた痕跡を確認した。

第 44 次調査 2005 年 11 月 28 日～2006 年 3 月 30 日（屯水地区（土塁））

水門のある谷部の両側が夾築土塁となっており、特に東側の残存状況は良いことが判明した。水門の北東側（B 区）では、不自然に土塁が突出する部分があり、また F 区北側にも平坦面があり、これらは「雉城」状の防御施設である可能性が考えられた。

土塁の調査では、版築盛土を被うように盛られた土を確認し、これを「外被盛土」と呼ぶことにした。また水門の調査では、石垣等の構造を把握することができた。

外被盛土
の確認

第 45 次調査 2006 年 1 月 18 日～3 月 31 日（大石垣）

太宰府市教育委員会による調査で、堆積した土砂を取り除き、石垣の残存状況の確認が行われた。また石垣背面を対象にトレンチ調査が行われ、木製品等が多く出土した。

第 45-2 次調査 2006 年 9 月 26 日～2007 年 3 月 26 日（大石垣）

45 次調査に引き続き、太宰府市教育委員会が調査を行い、大石垣の輪郭等が明らかになった。石垣は下部で東西に連続していることが確認され、平面形は 120 度あまりの角度をもって曲がっていることが確認された。また前面の掘削も行ったが、水門は確認されず、最下部の巨石を利用して水が抜けるような構造であったことが推測された。

第 46 次調査 2006 年 8 月 7 日～12 月 20 日（北石垣、北石垣城門）

第 46-2 次調査 2007 年 12 月 6 日～12 月 20 日（北石垣、北石垣城門）

崩落した 3 箇所を対象に調査を行った。西側の A 区では石垣の基礎部だけ残存しているのが確認でき、その上方には層状盛土が存在することが判明した。石垣は盛土の段の上の平坦部に位置することが分かり、その下には柱列が 2 列確認され、また地山を段切り造成した痕跡も確認した。

中央の B 区では石垣背後の層状盛土を確認した。A 区と同様に石垣の下方で地山の岩盤を段切り加工した痕跡が見られ、下段の構造物が存在した可能性が高まった。また、A 区と B 区の間を木を伐開したところ、石垣が続くことが分かり、一連の石垣であったことが明らかとなっ

た。

一番東側のC区では、版築土塁、その下の基礎盛土、基礎盛土上面から掘り込む堰板柱穴を確認したほか、谷最深部の土塁基部で、水門と考えられる石組暗渠を確認した。また、新たに懸門構造の城門と石製唐居敷を確認し（北石垣城門）、唐居敷の軸摺穴には鉄製の軸摺金具がはまっている状況をはじめて確認するなど特筆すべき成果が挙げた。

北石垣
城門と
軸摺金具

第47次調査 2007年1月6日～3月20日（主城原地区）

崩落部を対象にトレンチ調査を実施し、造成盛土を確認したほか、主城原地区南部建物群と主城原地区中央建物群を結ぶ尾根上の1棟について測量調査を行った。建物群のある平坦面は造成したものだが、盛土は土塁に見られるような版築盛土の手の込んだものではなく、削り出した土を斜面に流し込んだだけの簡易なものであることが判明した。

第48次調査 2007年9月20日～2008年3月31日（観世音寺口城門）

観世音寺口
城門の確認

太宰府市教育委員会による調査で、新たに城門の石敷や石階段等を確認した（観世音寺口城門）。城門は2時期あったことが判明し、1期の遺構は一部のみの確認に留まったものの、Ⅱ期の床は石敷で、壁は石垣、城内から城門に下る箇所には石階段を設けていることが判明した。観世音寺口城門は崩落部法面で土塁を掘り込んで設置しているが、この土塁の構築の際には、粘土を土糞等に詰めた可能性も指摘された。

第49次調査 2007年8月20日～2008年3月28日（小石垣、小石垣東方地区（土塁）、大谷東方地区（土塁））

小石垣城門
唐居敷

小石垣A区では、埋没していた石垣を確認したほか、唐居敷を確認し、かつて城門があったことが確定した（小石垣城門）。小石垣B区の土塁では、基礎盛土、層状突き詰め盛土のほか、外被盛土を確認した。

小石垣東方地区A区では、基礎盛土の上に配石が認められた。また、版築土に貼り付けられたような状態で石垣状の構造物が存在し、前面は外被盛土に覆われているのを確認した。そのほか、版築盛土を突き固める際の突き棒の痕跡を確認した。

小石垣東方地区B区は、北側内・外周土塁の接点にあたるため、その接続の過程で、版築盛土の施工を一時中断した可能性が指摘された。

大谷東方地区の土塁では横木痕や土塁修復痕跡を確認した。

第50次調査 2008年9月2日～12月19日（小石垣北方地区（土塁））

A区では、土塁の版築等を確認し、B区では炭窯を検出した。また、付近で経塚状遺構を2つ確認した。

第54次調査 2012年9月25日～2013年3月29日（クロガネ岩城門）

クロガネ岩
城門の確認

新たに確認した城門の基礎情報を入手するためのトレンチ調査を実施した。城門の前面は崩落しているものの、高低差があることから懸門構造であったことが想定できた。また、石製唐居敷石材を確認した。

第54-2次調査 2013年10月1日～2014年3月31日（クロガネ岩城門）

門の構造が明らかになったほか、周辺のトレンチ調査によって土塁や城内への通路等の状況が判明した。

第Ⅳ章 調査遺構

(1) 城壁

大野城跡の城壁は、基本的には自然の尾根線に沿って土塁を築き、谷を横断する箇所には石垣を築き、全体を取り囲んでいる。南側と北側は二重に巡らせ、総延長は8km程に及ぶ。場所によってその構造は異なり、土塁の場合、尾根からやや下がった斜面に内托式に築く箇所があれば、尾根上に夾築式に築く箇所もある。また、北石垣等は土塁の外側に貼石垣を施す点も特徴的である。谷部に構築する石塁や石垣については、水の処理が課題となるが、屯水地区等、水門を設ける箇所があれば、水ノ手口石塁等、特別な施設を作らず基部の石材の隙間から水を排出するものもある。

本書では、土塁については、南側外周土塁、南側内周土塁、北側外周土塁、北側内周土塁、東側土塁、西側土塁と大きく分け、調査を行った地区毎に報告するが、石垣や石塁については、個別に行うこととする。

なお、本書に掲載する土塁の土層図は、多くが斜めに崩落した部分の見通し図であり、実際には上層に被る層が、図面では下位に位置する場合もある。

1) 南側外周土塁

南側の二重構造となる外側の土塁であるが、太宰府口西方地区から観世音寺口城門までの間は土塁の位置が不明瞭である。鏡山猛氏は『太宰府都城の研究』(1968)の付図Ⅳで、観世音寺口城門の東側の谷部分を突っ切る想定をしているが、福岡県教育委員会の『特別史跡大野城跡Ⅱ』(1977)では、谷を避ける格好で大きく北側に迂回する想定線を示している。

また、大石垣の西側についても現況の地表面上には土塁を確認することは困難であり、先の鏡山氏の図でもこの部分に城壁線は表現されていない。福岡県教育委員会はこの部分について復元案を示しているが、後述する坂本口地区の土塁の調査でもこの部分は明確になっていない。

a. 太宰府口東方地区 (Fig. 6～11, PL. 1)

太宰府口東方地区は、南側外周土塁の東端部分で、太宰府口城門から南側内周土塁との東側接続部までである。太宰府口城門との接続部は鍵状に折れ、この部分の表面は貼石垣で覆っている。土塁は太宰府口城門から東に40m程駆け上がった箇所ではほぼ直角に屈曲し、北に60m程延びて内周土塁に接続する。

調査は21次～24次の太宰府口城門の調査の一環で行ったほか、27次(地形測量調査)、28次、30次及び平成15年豪雨災害復旧に伴う41次調査で行った。それらの成果は、『特別史跡大野城跡Ⅶ』(1991)、『特別史跡大野城跡整備事業』(2006)、『特別史跡大野城跡整備事業Ⅴ下巻』(2010)で記述されており、以下では調査成果の要点を記述する。

太宰府口城門～城壁線南東隅屈曲部の土塁は、太宰府口城門から東方向の尾根頂上に向けて斜面をかけ上がり、土塁は夾築の構造をとっている部分が多い。30次調査では、頂部から外側に設定した8トレンチで版築の積土を確認した(Fig. 6)。地山から土塁頂部までは5.5m程あり、土塁法面の勾配は70°前後の急傾斜をなす。土塁の裾では柱穴と思われる1m程の大き

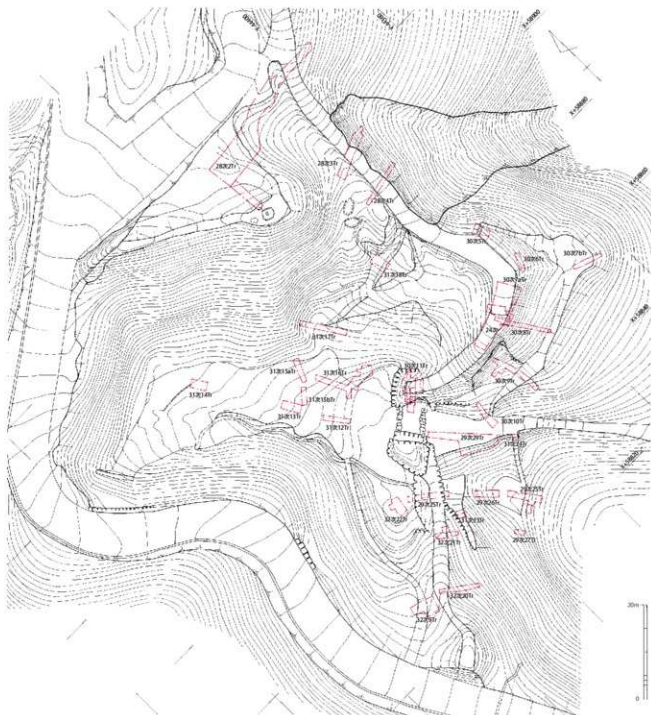


Fig.5 太宰府口城門周辺地形図 (1/800) (福岡県教育委員会 2010 を改変)

さの握り込みが確認でき、版築時のものと思われる。この柱穴は6層から握り込まれていることを鑑みると、地山上の6～8層は他の箇所の事例から、基礎盛土と思われる。隣接する9トレンチでも同様の柱穴を二つ確認しており、両者の柱間は1.6mである。柱穴の底面には30cm程の石が据えられており、柱の根固めと思われる。

30次調査11トレンチでは、太宰府口城門との接続部で版築盛土を確認したが、この部分

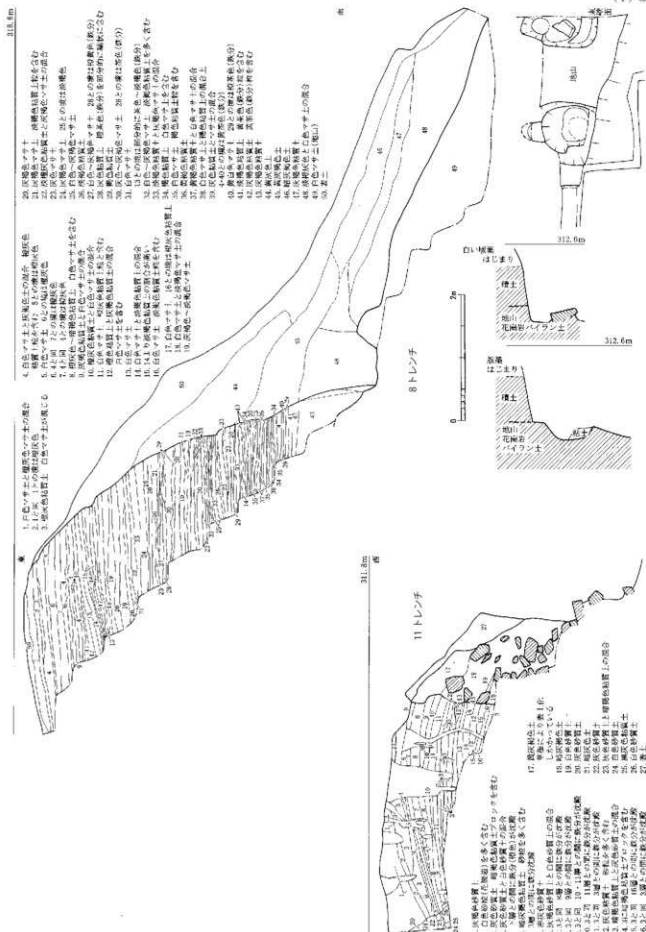


Fig.6 太宰府口東方地区 (30次8・11トレンチ) 土壁土層図, 堀板柱穴実測図 (1/60)

(福岡県教育委員会 2010 年から転載)

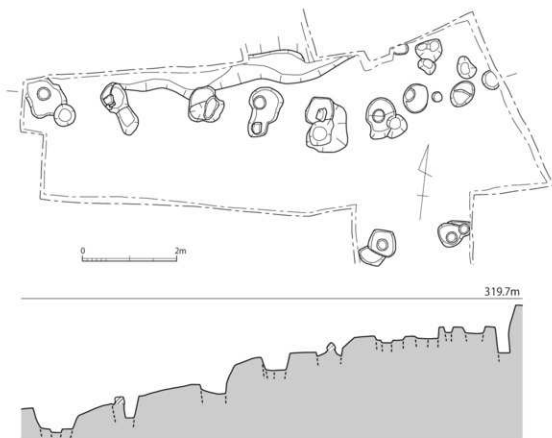


Fig.7 太宰府口東方地区（24次）掘立柱遺構実測図（1/80）

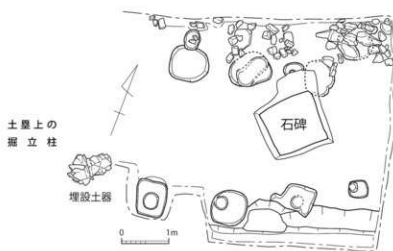


Fig.8 太宰府口東方地区（30次 7a トレンチ）
掘立柱遺構実測図（1/80）

は締まりのない白色～白褐色の砂質土が主体で、まれに赤褐色粘質土層を挟むといった、ほかでは見られない特徴的な在り方であった。

また、土塁頂部では24次調査で櫛列状の掘立柱列が確認されたことが特筆される（Fig. 7）。土塁は西側でやや北寄りに屈曲するが、その形状に合わせる格好で柱掘り方が並んでいる。一部土塁に直行する方向にトレンチを拡張したところ、これらの柱列に対応する格好で2.8m程離れて柱掘り方

を確認したため、二列の柱列だったことが判明した。柱掘り方は径50～80cm程、柱痕は径20cm程である、柱間の間隔は1～2m程で一定ではない。この柱列の延長は30次調査の7a トレンチでも確認しており（Fig. 8）、やはり2.8m程離れて南北二列の柱掘り方を確認している。なお、7a トレンチでは北側に石敷を確認したほか、トレンチ南西隅で8世紀のものとみ

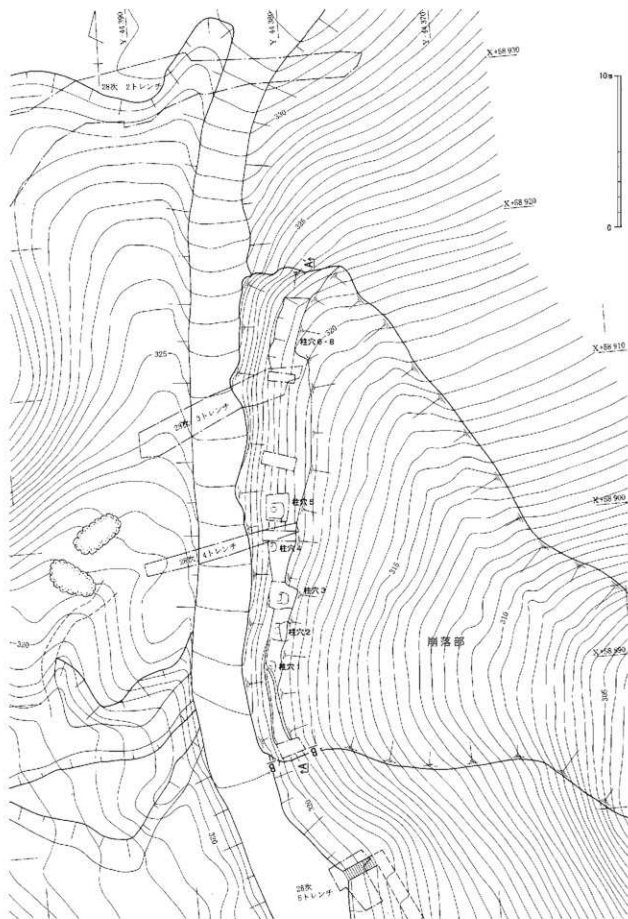


Fig.9 太宰府口東方地区北部周辺地形図(1/250)(福岡県教育委員会 2010 を改変)



られる合わせ口の小型竈が横位に据わった状態で出土しているのを確認している (Fig.150)。

南東隅の土塁が屈曲する部分では、外側に突出する平坦地が認められるが、この箇所について30次調査で7bトレンチを設定して調査を行ったところ旧表土が残されておらず、平坦地は築城当時のものではなく、あ

る時期に造成を受けたものであることが指摘されている。なお突出部南端では、中世以降と考えられる土坑墓が確認されており、これについては後述する。

南東隅から内周土塁との接続部までの土塁は、尾根線に沿って傾斜しながら延びている (Fig. 9)。28次調査で土塁に直交する形で設定した3トレンチや4トレンチ、また40次調査地区の南端のトレンチで版築盛土を確認したほか、41次調査では土塁外側の崩落部分について、土塁に沿って30m程にわたって版築盛土を観察することができた (Fig.10)。版築盛土は尾根線よりわずかに外側に下がった箇所、地形の傾斜に沿って斜めに積まれているが、これだけの長さがあるにもかかわらず、土層に縦方向の不整合なラインを確認できないことから、土塁の横断方向には堰板を作っていないと考えられる。版築の土は10～15cm程の厚さに叩き締めながら積まれている。上層は黄褐色系統の粘砂質土で積まれているのに対し、下層は茶褐色系統のやや粘性の高い土で積まれている。版築盛土の下には堰板柱穴を確認した。北寄りの柱穴6～8は土層で確認したが浅く、かなりの部分が崩落により失われていると考えられる。40次調査2トレンチの柱穴3と、4トレンチの柱穴5は、柱穴が腐朽して土砂に置き換わった縦長の土層が版築土中まで延びており、堰板柱の外側まで版築が施工されていたことを示している。このことから堰板は堰板柱の外側にあてられたと考えられる。柱穴5の柱掘り方は一辺80～100cm程あり、20cm程の柱痕が残る。柱穴5や柱穴3の柱痕には根固め石とも考えられる角礫が存在しており、30次調査8トレンチの柱穴も同様のものと思われる。40次調査では合計5つの堰板柱を確認し、柱間は2.5m、2.0m、3.8m、2.5mであった。

南側内周土塁との接続部については、28次調査2トレンチで、内・外周土塁の内端部の段落ちを確認したほか、外周土塁から延びる旧表土の上に内周土塁の盛土があることが観察され、外周土塁の構築が内周土塁に先行することが指摘されている (Fig.11)。

堰板柱は
堰板の外側

外周土塁
が先行

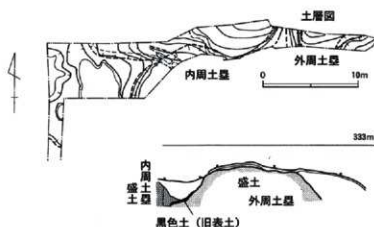


Fig.11 太宰府口東方地区 (28次2トレンチ) 実測図 (1/400)
(福岡県教育委員会 2006 から転載)

b. 太宰府口西方地区 (Fig.12)

太宰府口西方地区は、南側外周土塁の東寄りに位置し、水ノ手口石塁の西側の土塁を指す。調査は1次調査で、林道拡幅に伴う工事に伴い土層図の作成を行い、その成果は『特別史料

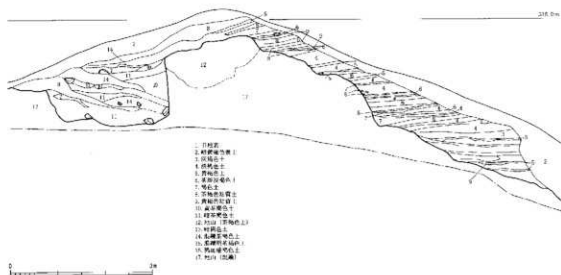


Fig.12 太宰府口西方地区（1次）土層土層図（1/80）（福岡県教育委員会 2010 から転載）

大野城跡整備事業V下巻』（2010）に掲載されている。土層の断面の状況をうかがい知れる貴重な調査で、地山を段切り加工した痕跡や、層状の積土が内側に傾斜していることが確認できる。

2) 南側内周土塁

南側の二重構造となる内側の土塁である。全体的に土塁線は現在も明瞭に確認できる部分が多い。南側外周土塁との接点に位置する坂本口北方地区は、調査の結果、外周土塁に関係する遺構は確認できず、内周土塁に関係する遺構のみ確認できたことから、ここに含めて報告する。

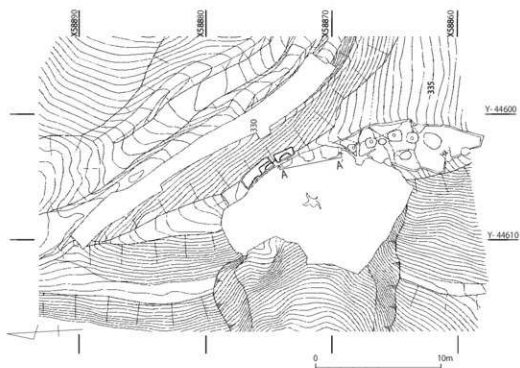


Fig.13 増長天西方地区 52・53 次調査地点周辺地形図（1/300）

A

332.0m A

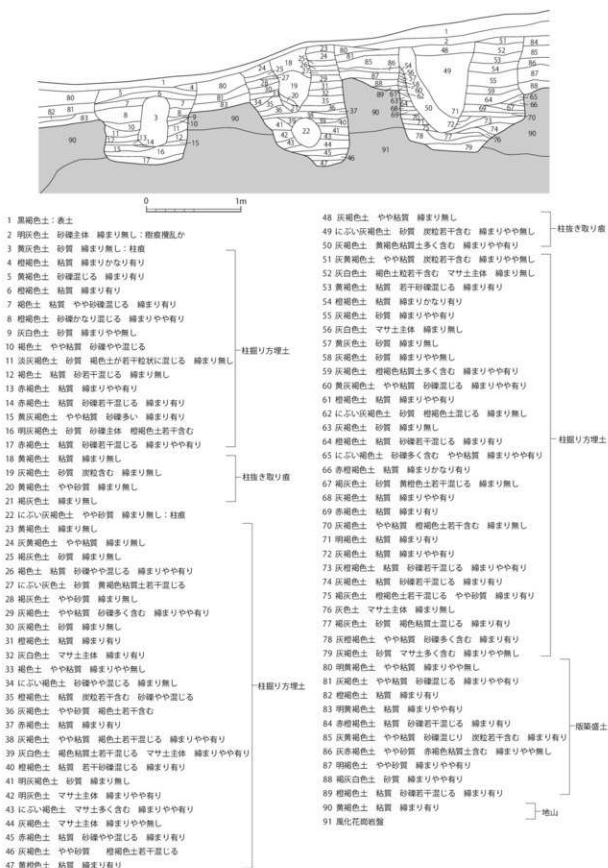


Fig.14 増長天西方地区 (52・53次) 土塁崩落部土層図 (1/40)

a. 太宰府口北方地区 (PL. 2)

太宰府口北方地区は、南側内周土塁の東寄りに位置する。四王寺林道拡幅に伴い、3次調査として記録作成を行った。その内容は『特別史跡大野城跡整備事業V下巻』(2010)で触れており、図も掲載している。図面では土塁の外側と思われる箇所に、柱穴が3つあり、大野城跡における堰板柱穴の最初の検出事例と考えられる。土塁上部はかなり失われていたが、天端に設定したトレンチでは、一部で層状をなす版築盛土を確認している。

b. 増長天西方地区 (Fig.13・14)

増長天西方地区は、南側内周土塁の中央に位置する。増長天地区を北東方向から南西方向に延びる土塁線は、SB0401の南で北西方向に向きを変え、大石垣上方地区に至る。土塁は部分的に天端から外側に崩落が生じていた。

調査は環境整備事業に伴う調査として、西側については51次調査、東側については52・53次調査、また新たに崩落した箇所については災害復旧事業に伴う調査として60次調査を行った。これらの調査の成果については、別の機会に報告を予定しており、本書の対象ではないが、参考までに52・53次調査で確認した柱列を中心に要点のみを記す。

土 塁 上 の
掘 立 柱

52・53次調査では崩落部の精査を行い、土塁の盛土の状況を把握したほか、土塁の天端内側寄り、及び壁面で9つの柱穴を確認した。土層の図は中央部分のみを示しているが、崩落部全体を見ると、盛土は地山を段切りした上で行っており、上部は細かな層で硬く突き固められている。地山の岩盤が崩落部に多く露出していることから、土塁はかなり崩落していることが伺える。堰板柱を確認することはできないが、他地点の状況から、上部は版築で築かれたと考えられる。天端で確認した柱穴の柱掘り方は、径が80～140cm程あり、版築土塁の上から地山の風化花崗岩をも掘り込んでいる。9つの柱穴は若干蛇行し、径20～30cm程の柱痕と思われるものが確認できるものもある。これらの柱穴は、天端の外側寄りにもう一列存在するかは不明であるが、太宰府口東方地区及び尾花地区で確認したものと同様のものと思われ、櫓列や櫓状の建物跡の可能性がある。

c. 大石垣上方地区 (Fig.15～18, PL. 2・3)

大石垣上方地区は、南側内周土塁の西寄りに位置する。南側外周土塁の大石垣がある西側の谷を登った箇所、谷の形状に合わせ、北に湾曲しながら東西に延びる。東側(B～C区間)は背後に尾根があり、この部分の土塁は内托構造をとるのに対し、中央から西側にかけて(C～D区間)はやせ尾根となり、土塁は夾築構造となっている。

調査は、平成15年豪雨災害によって崩壊した箇所において42次調査として行った。崩落は4箇所(B区、C区、D区、E区)で起こったが、D区は崩落が斜面の途中から始まっており、土塁に目立った損傷が認められなかったことから調査は行っていない。その他の箇所は崩落法面での土層の図化を行い、また災害復旧事業の際の進入路となるC区北側平坦地及び東端のA区についても調査を行った(Fig.15)。それらの調査成果については、『特別史跡大野城跡整備事業V下巻』(2010)で詳細に報告されており、以下ではその要点を記す。

A区では3本のトレンチを設定し、3トレンチで夾築構造の土塁内側の堰板柱穴の一部と版



Fig.15 大石垣上方地区周辺地形図 (1/600) (福岡県教育委員会 2010 を改変)

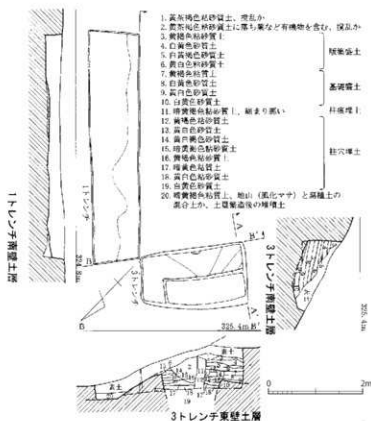
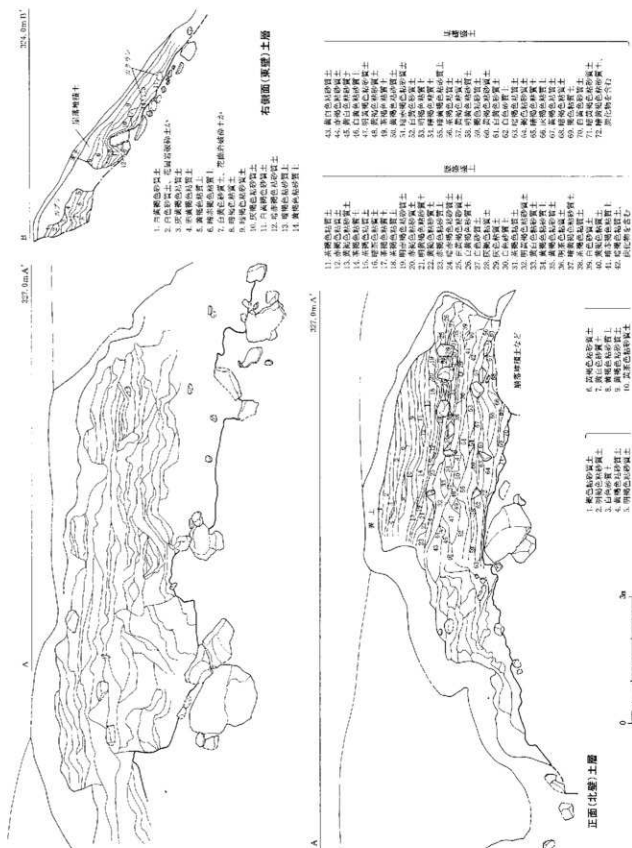


Fig.16 大石垣上方地区A区1・3トレンチ実測図(1/80)

(福岡県教育委員会 2010 から転載)



Fig.17 大石垣上方地区C区土層崩落部土層図(1/90)(福岡県教育委員会 2010 から転載)



土塁内側の
堰板柱

築盛土を確認した (Fig.16)。堰板柱穴の柱掘り方は一辺 100cm 以上になり、埋土は 5cm 程の厚さの緻密な層状積土で構成されていた。柱痕は深く 100cm 以上になる。トレンチ東壁では、柱穴の上位に版築盛土が確認できた。1 トレンチの地山は 3 トレンチの地山よりも 30cm 程低いことから、地山は段状に整形されたと考えられる。基礎盛土はこの地山の上に盛られている。なお、2 トレンチは大きく崩落した部分にあたるため、遺構は確認できなかった。

B 区では、基礎盛土の最下層に幅 2m 程、深さ 60cm 程の掘り込みがあるのを確認した。内部は 3～5cm 程の突き固めた層が重なっている。性格は不明であるが、基礎部を強化するための施工の可能性がある。

焼土や
炭化物

C 区は夾築構造の部分にあたり、土層の版築盛土の下に、版築盛土よりも厚い層で構成される基礎盛土を確認した (Fig.17)。その下の地山は段切り造成されており、基礎盛土の最下層には一部に焼土や炭化物を含む層が見られ、草や雑木を燃やした痕跡と推測される。堰板柱穴は基礎盛土の上面から掘り込んでいるのを確認した。なお、C 区北側平坦地の調査でも盛土を確認したが、ほかと異なりその下に旧表土が存在することから、後世に平坦面を造成した際のものと考えられる。

E 区は崩落がかなり奥まで及んでいるためか堰板柱穴が確認できなかったが、崩落面東側では、版築盛土と考えられる層の下に、層の厚さがまちまちで水平に通らない、基礎盛土の特徴を示す層が存在する (Fig.18)。版築盛土と基礎盛土の間には白色味の強い砂質土を主体とする層が 1～2 層入っており、その中に人頭大よりやや大きめの角礫が並べられているのを確認した。

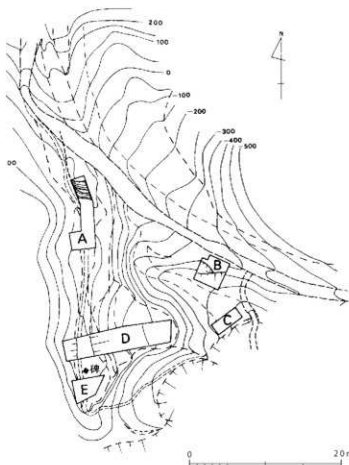


Fig.19 坂本口北方地区周辺地形図 (1/500)
(福岡県教育委員会 1983 から転載)

d. 坂本口北方地区

(Fig.19～21, PL. 4)

坂本口北方地区は南側外周土塁と内周土塁の接続部に位置し、増長天地区の礎石群から西に約 350m、猫坂地区の礎石群からは南西に約 250m 離れている。当該地は南側内周土塁と外周土塁の接続する箇所にあたるが、土塁線の正確な位置が定まっておらず推測の域を出ないことなどから、土塁線の構造や、伴う施設等を追求するため、18 次調査で坂本口土塁としてトレンチを 5 本設定して (A～E トレンチ) 調査を行った (Fig.19)。調査の結果、溝を伴う土塁の屈曲部などを確認した。以下ではトレンチ毎に調

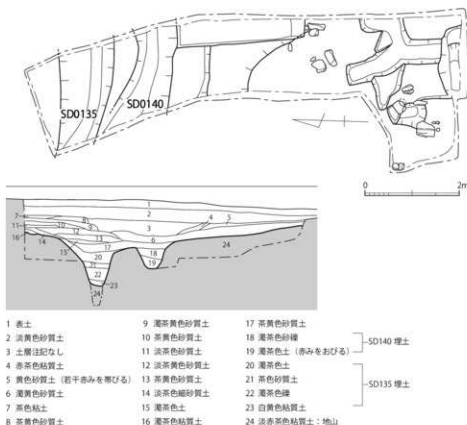


Fig.20 坂本口北方地区Aトレンチ実測図（1/80）

査内容を記す。

A トレンチ（Fig.20, PL. 4）

外周土塁と内周土塁の接合部と推定していた付近で、南北に延びる尾根上の北部に 1.8m × 9.0m のトレンチを設置した。トレンチ北部の尾根が最も低くなる箇所で溝を 2 条確認したが、概報『特別史跡大野城跡Ⅵ』（1983）では北にある SD135 が古く、南に位置する SD140 が新しいとしている。

SD135 は幅 1.2 m、深さ 1.0 m の断面 U 字状を呈し、北へ向けて屈曲する。この溝の延長は、毘沙門地区へ通じる道にその肩が認められ、東西方向の溝がこの場所で急激に屈曲し、北に延びていると思われる。

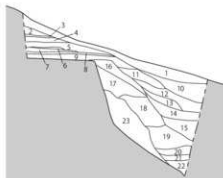
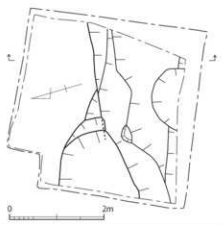
SD140 は SD135 が埋没した後に新たに掘削されたもので、幅 0.85 m、深さ 0.6 m で SD135 と同様、北へ折れ曲がる。なお、トレンチ南部では西側に石組らしきものが露出していたため、トレンチを拡張したが、これは人為的なものではないことが明らかとなった。

これら溝の機能については明らかでないが、A トレンチ東側の土層の解釈には注意すべき所見がある。概報では、B トレンチで後世のものとされた版築状の埋土が、A トレンチ北側にも見られたとある。おそらく 7 ～ 16 層のことを指していると考えられるが、B トレンチでも触れるように、仮にこれが版築盛土であったとすれば、溝は基礎構造の一端をなすものと理解すべきことになる。

溝は盛土の下か

B トレンチ（Fig.21, PL. 4）

毘沙門地区へ通じる道の南側に 3.8 m × 3.8 m のトレンチを設定した。ここでは、土塁線の一部を確認した。

段状の
削り出し

- | | |
|----------------|----------------------|
| 1 表土 | 13 淡黒色土 |
| 2 褐色色砂質土 | 14 黒色土 |
| 3 黄色砂礫 | 15 褐色黄色砂質土 (礫含む) |
| 4 茶黄色砂質土 | 16 赤黄色砂質土 |
| 5 暗茶色砂質土 | 17 淡赤黄色砂質土 (礫砂礫) |
| 6 黄色砂礫 | 18 淡赤黄色砂質土 (礫含む) |
| 7 黒色土 | 19 黄色砂質土 |
| 8 黄色砂礫 | 20 褐色黄色砂質土 |
| 9 褐色色土 | 21 暗黄淡赤色砂質土 |
| 10 黄色砂質土 (礫含む) | 22 褐色黄色砂質土 (赤色粘土粒含む) |
| 11 淡赤黄色砂質土 | 23 明黄色砂質土 |
| 12 淡赤黄色砂質土 | |

Fig.21 坂本口北方地区 B トレンチ
実測図 (1/80)

土塁について概報では、西側は大きく崩落しているが、東側では地山を段状に削り出しているところがある。この段は地表下2m程まで掘削を行った状況では、南側に傾斜角度が異なる斜面を3面確認でき、最上段は高さ1.35m程、傾斜角度は73°程、2段目は高さ1.0m、傾斜角度は35°程、3段目は最深部のみで確認しただけで正確な数値は求められなかったが、傾斜角度は53°程とある。この南側斜面では「鍬」状工具で削ったような痕跡が不明瞭ながら観察された。上面は北に向かって2°の角度で徐々に上がり凹凸がない。この上に版築を行って土塁としたのか、平坦面だけであったかは不明としている。

上記の解釈は土層の把握の仕方とも関係している。概報では東壁の土層で、平坦面の上に版築状に見える互層（3～8層のことか）を確認しているが、これが南側斜面の埋土の上にも延びることから後世の堆積と判断している。ただ、平成15年豪雨災害の復旧事業に伴う城内各所での土塁の調査所見を踏まえれば、B トレンチの土塁南側斜面については地山の段切りであり、その部分の埋土（16～23層）は基礎盛土、そしてその上の互層は版築盛土の可能性もあると思われる。南側斜面の土層について概報では、大きく上下に分かれ、下層は短期間のうちに埋まったようであると所見があり、これは基礎盛土の特徴と見ることも可能と思われる。また、上層の最下部には黒色土の堆積（13・14層）があり、この部分は長期間にわたって窪みをなしていたと思われるとの所見もあるが、この部分については、版築盛土の範囲外であったと考えれば合点がいく。ただ土層断面図からは、版築土塁の可能性のある土がこの黒色土の上に存在すると解釈されることから、この点は課題として残っている。

土の堆積（13・14層）があり、この部分は長期間にわたって窪みをなしていたと思われるとの所見もあるが、この部分については、版築盛土の範囲外であったと考えれば合点がいく。ただ土層断面図からは、版築土塁の可能性のある土がこの黒色土の上に存在すると解釈されることから、この点は課題として残っている。

C トレンチ

土塁線の推定地に1.5m×4.0mのトレンチを設定した。地表下1mまで掘り下げたが、軟質の黄赤色砂質土が厚く堆積し地山まで達しなかった。おそらく谷が入り込んでいると思われる。

D・E トレンチ

A トレンチを設定した南北に延びる尾根の先端付近の平坦部に3m×14mの東西トレンチ(D トレンチ)と、その南にE トレンチを設定した。表土直下で地山に達し、遺構は存在しなかつ

た。

以上の状況から概報でも触れられたように、内周土塁については、AトレンチやBトレンチをかすめるような土塁線を復元するのが適当と考えられる。ただ、外周土塁がどこに取り付くかといった課題は残されており、これは坂本口城門の位置をめぐる課題とも関係する。上述したように、当該地の土塁の構造については検討すべき課題は多い。先述のようにBトレンチでは基礎盛土や版築盛土が存在した可能性があるほか、Aトレンチの溝についても土塁の基礎構造の可能性がある。

土 塁 線
の 復 元

3) 西側土塁

坂本口城門付近から百間石垣北側の外周土塁と内周土塁の接合推定地までを巡る土塁である。水城口城門から現在毘沙門堂がある付近までは明瞭に確認できるが、そこから北側の屯水地区までの間は、地表面での観察では土塁が不明瞭であり、また発掘調査も行われておらず、詳細は不明である。

a. 屯水地区 (Fig.22 ~ 26, PL. 5)

屯水地区は、毘沙門地区の北方に位置する。C区の大きな谷が入る箇所に石垣があり、暗渠式水門の存在が知られている。

調査は、平成15年豪雨災害によって崩壊した箇所及びその周辺を対象に、復旧事業を進めるため44次調査として行った。特にF区とした地点は、土塁外側の法面が20m程の幅で天端から崩れる被害を受けたため、壁面を削って土層を観察し、記録作成を行った。また、C区とした暗渠水門を伴う石垣は、城壁線が大きな谷をまたぐ箇所に築かれたもので、豪雨災害の際に、覆われていた土砂が流され、石材が露わになり不安定な状況となってしまったため、露わになった石垣を埋め戻して安定化を図るために、石材の記録を行った。そのほか、復旧事業を進めるにあたって工事用仮設道路を通すA区、B区、D区、E区について、壁面精査やトレンチ調査を行った (Fig.22)。それらの調査成果については、報告書『特別史跡大野城跡整備事業V下巻』(2010)で詳細に報告されており、以下ではその要点を記す。

A区については、3トレンチで地山の岩盤に段切り加工を行った可能性のある段や、一部で層状盛土を確認したが、土塁はほとんど失われている可能性が高いと判断された。B区では層状盛土を確認したが、層の厚みにばらつきがあり、層中に拳大～人頭大の角礫が含まれるといった、やや特異な様相を呈していることが分かった。D区は、土塁よりも城の内側にあたるため、土塁の痕跡は確認できなかった。E区は土塁の内側にあたる箇所にトレンチを入れ、地山を深く掘り込んだ状況を確認した。

F区は、土塁線と平行する格好で土塁外側の土層が良く観察でき、版築盛土や基礎盛土、堰板柱列の存在を確認した (Fig.23・24)。版築盛土は白黄～黄褐色粘砂質土が主体で10cm程の厚さで積まれており、尾根線の傾きと同様に南側から北側にかけて傾斜する。版築盛土の下の基礎盛土は、粘性の高い土で不規則に積まれている。堰板柱穴は基礎盛土の上面から掘り込まれており9つが列をなしている。掘り方は径が100cm程で、中央部に径20～30cm程の締めりの悪い土が確認でき、柱桩と思われる。柱穴6の162層は径40cm程の空洞になっており、

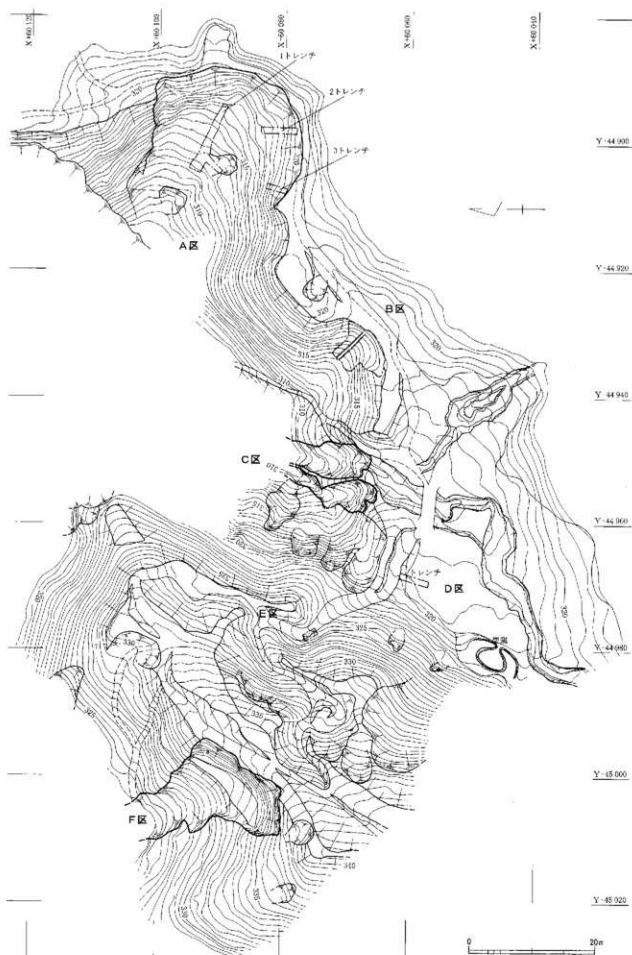


Fig.22 屯水地区周辺地形図 (1/600) (福岡県教育委員会 2010 から転載)

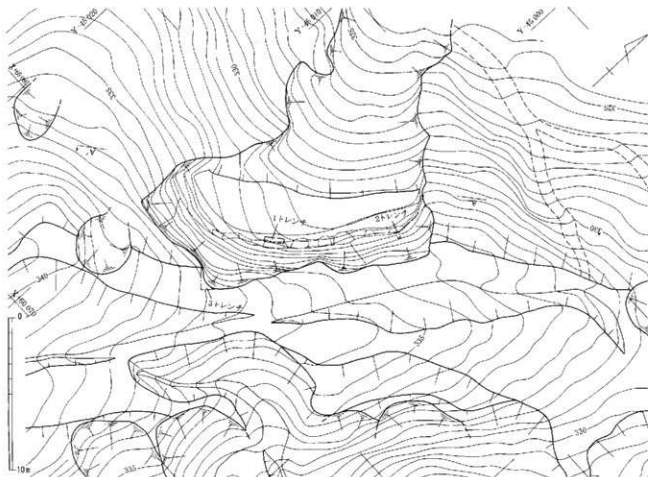


Fig.23 屯水地区F区周辺地形図(1/250)(福岡県教育委員会2010から転載)

堰板柱が腐朽し空洞化したものと思われる。

土層を観察した面では、左右両側で版築盛土が明瞭でない部分がある。この部分は土塁に直交する格好で設定した2トレンチで、版築盛土の外側に被った盛土があることを確認した。やや前下がりがだが水平を志向してやや締まりのない土が積まれており、報告書では「外被盛土」と判断している。この外被盛土と下層の基礎盛土との境界で、版築盛土の前面に角礫を配しているのが確認でき、外被盛土がこれを覆っている。同様の外被盛土の事例は、北石垣C区、小石垣B区、大谷東方地区B区、大石垣上方地区E区、小石垣東方地区A・B区で確認されている。なおこのF区の北側には、土塁線が急激に石垣のある谷方向に屈曲する箇所がある。その箇所は平坦面が城外側に突き出るように存在しており、周囲の地形から、地山を削り出して形成したと考えられる。また、B区の北側でも不自然に城外側に長方形に突き出す平坦面が存在しており、こちらは周囲の地形から盛土によって形成したと考えられる。屯水石垣を挟むように存在するこれら平坦面は、防衛施設として設けられた可能性が高いと考えられる。

外被盛土

外に突き出る平坦面

C区の石垣は、隣接する炭窯に石材が多く転用されたためか、城外側石垣面の残存状況が非常に悪かった(Fig.25)。ただ、背面は堆積土砂に埋もれており、内部は良好に残されている可能性があった。石材は、確認できる部分では人頭大かそれよりやや大きい程度のものが主だが、これは大きな石材を多く用いる表面部が失われているためである可能性がある。城外側か

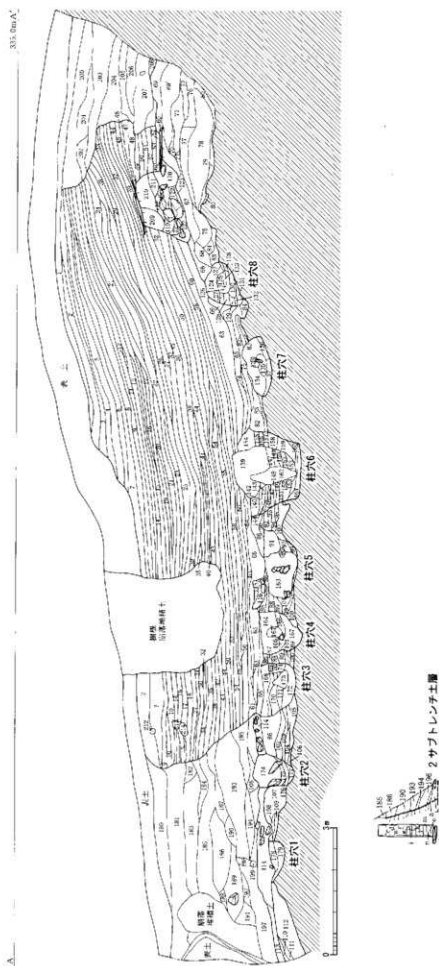
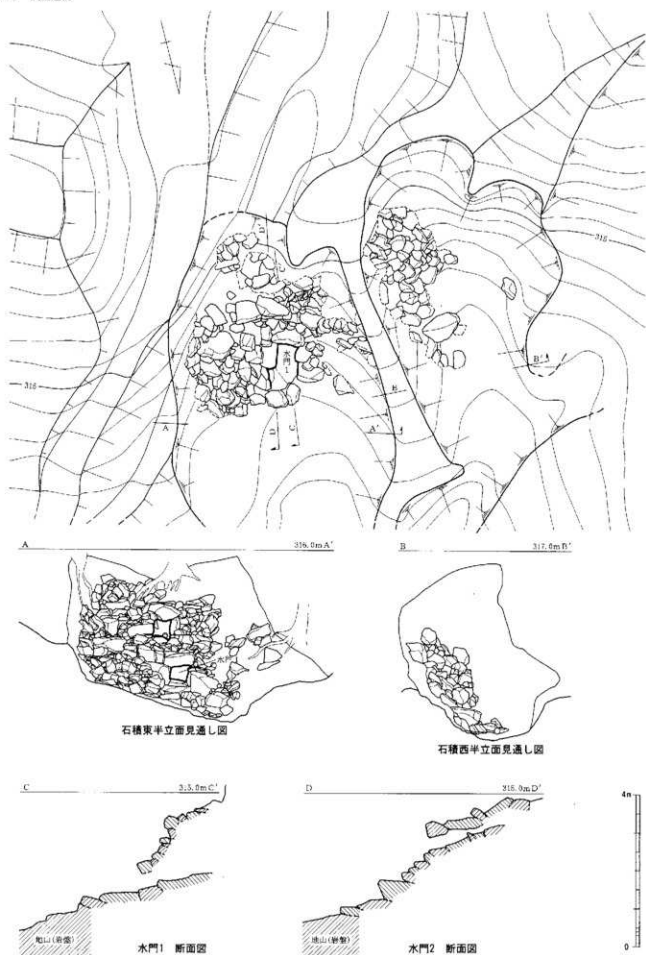


Fig.24 屯水地区F区上段崩落部上層図 (1/90) (福岡県教育委員会 2010 年 10 月 10 日 現在)



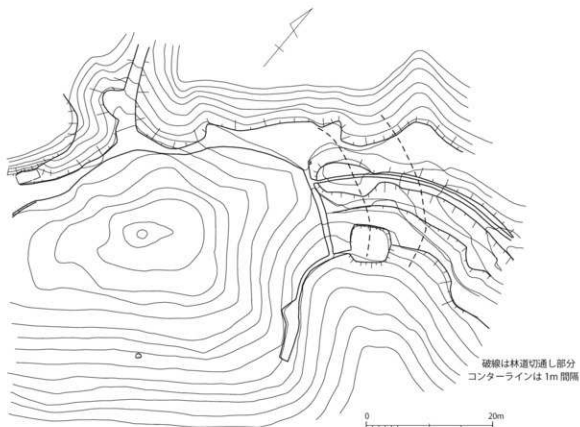


Fig.26 屯水地区（2次）周辺地形図（1/600）

ているが、これまで発掘調査が行われたのは、平成 15 年豪雨災害復旧事業に伴う小石垣北方地区の 1 箇所のみである。

a. 小石垣北方地区（Fig.27～29, PL. 6）

小石垣北方地区は、北側外周土塁の東寄りに位置する。平成 15 年豪雨災害によって土塁線上と、土塁線から内側の尾根の 2 箇所が崩落し、前者を A 区、後者を B 区としている。A 区は北側内周土塁との東側接続部から北西方向に 130m 程の位置にある（Fig.27）。

土塁の調査は平成 15 年豪雨災害によって崩壊した A 区について、復旧事業を進めるため 50 次調査として行った（Fig.28）。調査は崩落箇所の堆積土砂の除去と壁面の削り出しを行った後、土層の図化を行った。その成果については、報告書『特別史跡大野城跡整備事業 V 下巻』（2010）で小石垣地区小石垣北方土塁 A 区として詳細に報告されており、以下ではその要点を記す。

調査地点は馬の背状の尾根の外側にあたるが、土塁天端の上には表土が厚く堆積している（Fig.29）。報告書ではこの堆積土の供給元を不明とし、後世の積土の可能性も指摘しているが、北西側の高い方から土の流入があった可能性も考えられる。

西面では、堆積土の下には版築盛土が存在するが、全体的に白色の砂質土を非常に多く含み、層毎の土質の差がほとんどない特異な状況である。報告書では層に厚みがある点などから 120 層～122 層を一応基礎盛土としているが、版築盛土との区別は容易ではない。

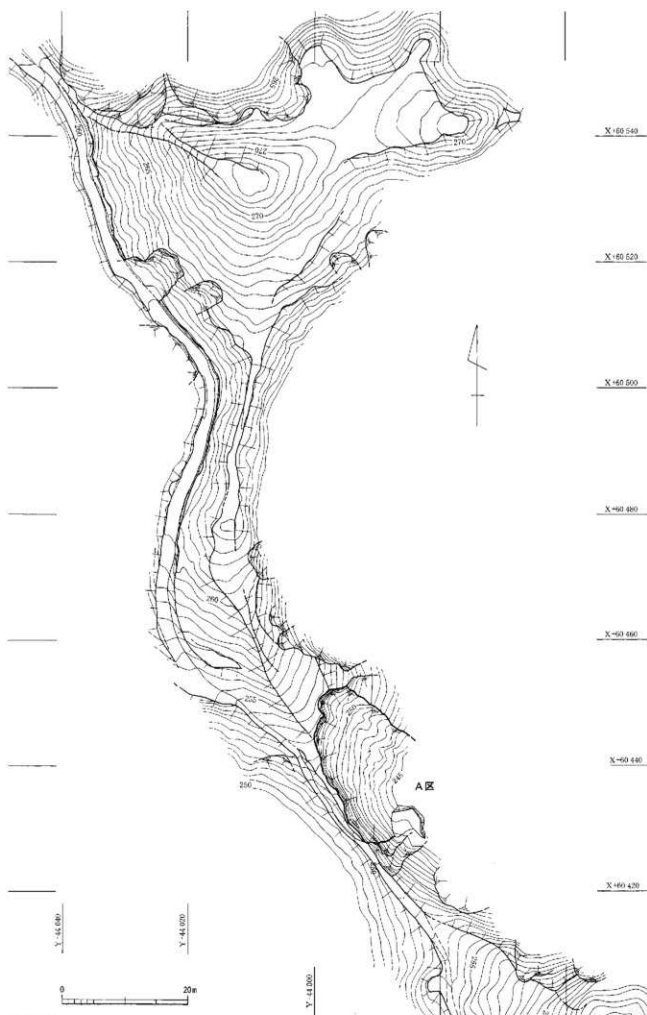


Fig.27 小石垣北方地区周辺地形図 (1/600) (福岡県教育委員会 2010 から転載)

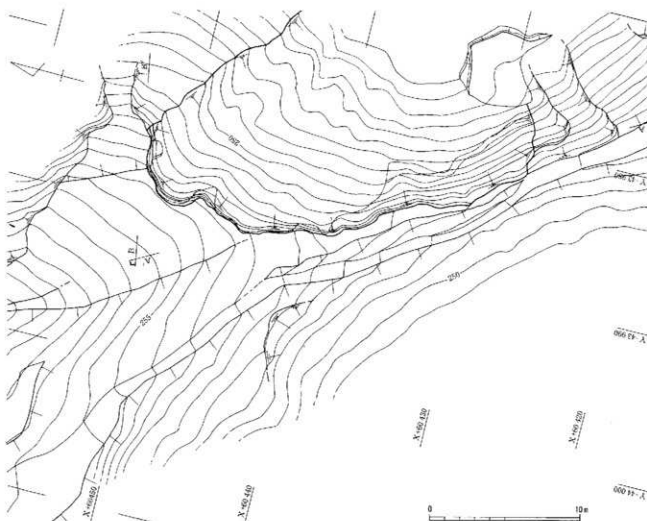


Fig.28 小石垣北方地区A区周辺地形図 (1/250) (福岡県教育委員会 2010 から転載)

一方、北面の土層では堰板柱穴が確認でき、この柱穴の掘り込み面である109層以下～113層までは基礎盛土と考えられる。版築盛土と比べて粘性が高く、地山を段切りした平坦面に盛土を行っている。

なお、版築盛土中には横木痕と考えられる円形の空洞があり、奥行きが2.7m程あることが横木痕確認できている。

5) 北側内周土塁

北側の二重構造となる内側の土塁である。城壁線としては、谷部分に百間石垣や小石垣、また尾根上に貼石垣の北石垣があり、土塁はそれらを結ぶように存在する。現況の地表面の観察では、北石垣から小石垣にかけての区間等、土塁が明確でない箇所も存在する。

a. 小石垣東方地区 (Fig.30～35, PL. 7)

小石垣東方地区は、北側内周土塁の東寄りに位置する。後述する小石垣のB区の土塁が尾根

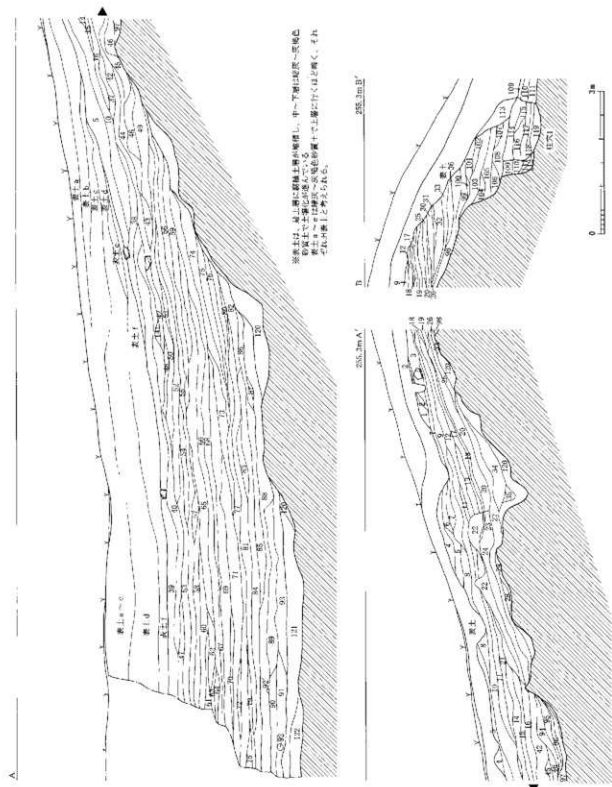


Fig.29 小石垣北方地区A区土層図(1/80)(福岡県教育委員会2010から転載)

1. 黄褐色砂質土	45. 黄褐色砂質土(散置層上)	89. 灰白色砂質土	125. 黄褐色砂質土
2. 灰色砂質土、層の上下に砂分が混着	46. 灰白色砂質土	90. 灰白色砂質土	126. 黄褐色砂質土
3. 黄褐色砂質土	47. 灰褐色砂質土	91. 灰褐色砂質土	127. 褐色砂質土
4. 黄褐色砂質土、わずかに小礫を含む	48. 灰白色砂質土	92. 砂質、軟質の砂質土(砂層、礫層) (厚さ270cm)	128. 黄褐色砂質土
5. 黄褐色砂質土	49. 灰色砂質土	93. 文相、軟質の砂質土(砂層、礫層) (厚さ140cm)	129. 黄褐色砂質土
6. 灰白色砂質土	50. 灰褐色砂質土	94. 灰褐色砂質土	130. 黄褐色砂質土
7. 黄褐色砂質土	51. 灰褐色砂質土	95. 灰白色砂質土、やや粗い	131. 黄褐色砂質土
8. 灰白色砂質土	52. 灰褐色砂質土	96. 灰褐色砂質土	132. 黄褐色砂質土
9. 灰白色砂質土	53. 灰褐色砂質土	97. 灰褐色砂質土	133. 黄褐色砂質土
10. 灰白色砂質土	54. 灰褐色砂質土	98. 黄褐色砂質土	134. 黄褐色砂質土
11. 灰褐色砂質土	55. 灰褐色砂質土	99. 黄褐色砂質土	135. 黄褐色砂質土
12. 黄褐色砂質土	56. 灰褐色砂質土	100. 灰褐色砂質土、層の上下に砂分が混着	136. 黄褐色砂質土
13. 黄褐色砂質土	57. 灰褐色砂質土	101. 灰褐色砂質土	137. 黄褐色砂質土
14. 灰褐色砂質土	58. 灰褐色砂質土	102. 黄褐色砂質土	138. 黄褐色砂質土
15. 黄褐色砂質土	59. 灰褐色砂質土	103. 黄褐色砂質土	139. 黄褐色砂質土
16. 灰褐色砂質土	60. 灰褐色砂質土	104. 黄褐色砂質土	140. 黄褐色砂質土
17. 灰褐色砂質土	61. 灰褐色砂質土	105. 黄褐色砂質土	141. 黄褐色砂質土
18. 灰褐色砂質土	62. 灰褐色砂質土	106. 黄褐色砂質土	142. 黄褐色砂質土
19. 灰褐色砂質土	63. 灰褐色砂質土	107. 黄褐色砂質土	143. 黄褐色砂質土
20. 灰褐色砂質土	64. 黄褐色砂質土	108. 灰褐色砂質土	144. 黄褐色砂質土
21. 灰褐色砂質土	65. 灰褐色砂質土	109. 灰褐色砂質土	145. 黄褐色砂質土
22. 灰褐色砂質土、層の上下に砂分が混着	66. 灰褐色砂質土	110. 灰褐色砂質土	146. 黄褐色砂質土
23. 灰褐色砂質土	67. 灰褐色砂質土	111. 灰褐色砂質土	147. 黄褐色砂質土
24. 灰褐色砂質土	68. 灰褐色砂質土	112. 黄褐色砂質土	148. 黄褐色砂質土
25. 灰褐色砂質土	69. 灰褐色砂質土	113. 黄褐色砂質土	149. 黄褐色砂質土
26. 灰褐色砂質土	70. 灰褐色砂質土	114. 黄褐色砂質土	150. 黄褐色砂質土
27. 灰褐色砂質土	71. 灰褐色砂質土	115. 黄褐色砂質土	151. 黄褐色砂質土
28. 灰褐色砂質土	72. 灰褐色砂質土	116. 黄褐色砂質土	152. 黄褐色砂質土
29. 灰褐色砂質土	73. 灰褐色砂質土	117. 灰褐色砂質土	153. 黄褐色砂質土
30. 灰褐色砂質土	74. 灰褐色砂質土	118. 灰褐色砂質土	154. 黄褐色砂質土
31. 黄褐色砂質土	75. 灰褐色砂質土	119. 灰褐色砂質土	155. 黄褐色砂質土
32. 黄褐色砂質土	76. 灰褐色砂質土	120. 灰褐色砂質土	156. 黄褐色砂質土
33. 灰褐色砂質土	77. 灰褐色砂質土	121. 灰褐色砂質土	157. 黄褐色砂質土
34. 灰褐色砂質土	78. 灰褐色砂質土	122. 灰褐色砂質土	158. 黄褐色砂質土
35. 黄褐色砂質土	79. 灰褐色砂質土	123. 灰褐色砂質土	159. 黄褐色砂質土
36. 黄褐色砂質土	80. 灰褐色砂質土	124. 灰褐色砂質土	160. 黄褐色砂質土
37. 灰褐色砂質土	81. 灰褐色砂質土	125. 灰褐色砂質土	161. 黄褐色砂質土
38. 灰褐色砂質土	82. 灰褐色砂質土	126. 灰褐色砂質土	162. 黄褐色砂質土
39. 灰褐色砂質土	83. 灰褐色砂質土	127. 灰褐色砂質土	163. 黄褐色砂質土
40. 灰褐色砂質土	84. 灰褐色砂質土	128. 灰褐色砂質土	164. 黄褐色砂質土
41. 灰褐色砂質土	85. 灰褐色砂質土	129. 灰褐色砂質土	165. 黄褐色砂質土
42. 灰褐色砂質土	86. 灰褐色砂質土	130. 灰褐色砂質土	166. 黄褐色砂質土
43. 灰褐色砂質土	87. 灰褐色砂質土	131. 灰褐色砂質土	167. 黄褐色砂質土
44. 灰褐色砂質土	88. 灰褐色砂質土	132. 灰褐色砂質土	168. 黄褐色砂質土
	89. 灰褐色砂質土、層の上下に砂分が混着	133. 灰褐色砂質土	169. 黄褐色砂質土

線上で東に向きを変える箇所から、北側外周土塁との東側接続部までを指す。土塁は屋根線上を西から東に向けて高度を上げていくが、頂部に達した付近で北側から比較的大きな谷が入り、そこを避けるように南側に湾曲していると考えられる。

調査は平成15年豪雨災害によって崩壊したこの湾曲部(A区)と、外周土塁との接続部の西側崩落箇所(B区)について、復旧事業を進めるため49次調査として行った(Fig.30)。その調査成果については、報告書『特別史跡大野城跡整備事業V下巻』(2010)で、小石垣地区小石垣東方土塁として詳細に報告されており、以下ではA区、B区に分けてその要点を記す。

A区では、崩落部に堆積した土砂を取り除き、土塁積土の図化を行った(Fig.31~33)。西壁の土層では、版築盛土と思われる9~12層の前面に、外被盛土と考えられる3~8層の層状に突き固めた層が確認でき、さらに下位の26~34層(29層を除く)も同様のものと思われる(Fig.32)。これら外被盛土の基底部には、36~45層の粘性の高い盛土が確認できるが、地山の上にあることや、この層の上面から堰板柱の柱穴1~3を掘り込んでいることから、基礎盛土と考えられる。

この基礎盛土の上面には、舗装するかのように平たい角礫を並べた配石が認められた。また、その背後には版築盛土に貼り付けられたような状態で石垣状の構造物が確認でき、前面は外被盛土により覆われている。この石垣は柱穴1の背後で高い位置まで認められるが、これは堰板柱に押される格好で窪んだため残りが良かった可能性と、元々この部分のみ石垣を高くして堰板柱が内側に倒れ込まないようにした可能性が考えられる。柱穴2・3は、この石垣よりも前面に位置しており、この箇所の堰板は、堰板柱の内側にあてていた可能性があり特異である。なお、柱穴1・2では、柱痕の周囲に配石が施されており、根固め石と考えられる。

外被盛土

基礎盛土上の配石

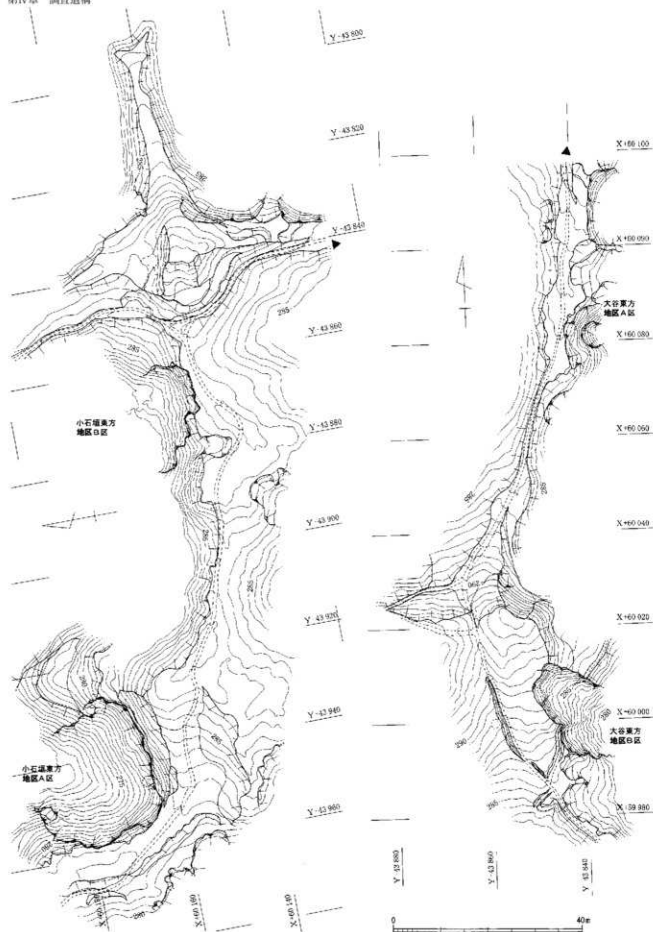


Fig.30 小石垣東方地区, 大谷東方地区周辺地形図 (1/800) (福岡県教育委員会 2010 を改变)

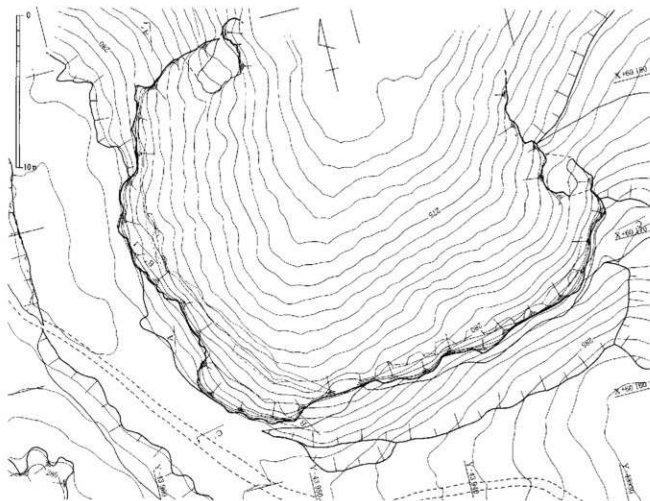


Fig.31 小石垣東方地区A区平面図 (1/250) (福岡県教育委員会 2010 年から転載)

南西壁の土層では、盛土の上位の層に湾曲する部分が多く確認できた。湾曲部の幅は 20cm 程であるが、凹部最上位の土の幅は 7～8 cm 程であり、この大きさの棒で突いた影響が下層の版築土まで及んだものと考えられる（巻頭 PL.4 (2)）。

南壁の土層では堰板柱穴の痕跡が 7 基確認できた (Fig.33)。柱間の距離は柱穴 1・2 間が 340cm 程と長い、その他は 205～235cm 程である。柱穴の埋土は水平堆積でよく叩き締められていた。ここでも基礎盛土の上面に敷石とみられる配石が西側で確認できた。なお、図では分かりにくい、1～49 層の版築盛土の前面に 51～69 層が堆積しており、これらは外被盛土と考えられる。

B 区でも崩落部に堆積した土砂を取り除き、土塁積土の状況の図化を行った (Fig.34・35)。南壁の土層では、図の右手で堰板柱穴 1・2 が基礎盛土の 147 層上面から掘り込まれていることと、基礎盛土の上に配石を施していることが確認できる。その上は版築盛土となっている。堰板柱穴は大きく、特に柱穴 2 は最大径が 180cm 以上になる。ともに柱穴上面に柱を取り巻くように根固め石を配している。

一方東壁では、典型的な版築盛土 (38～53 層) の前面に、外被盛土と考えられる水平堆積の 2～4 層が認められ、その下に傾斜に沿うように左下りの 61 層以下の盛土が確認でき

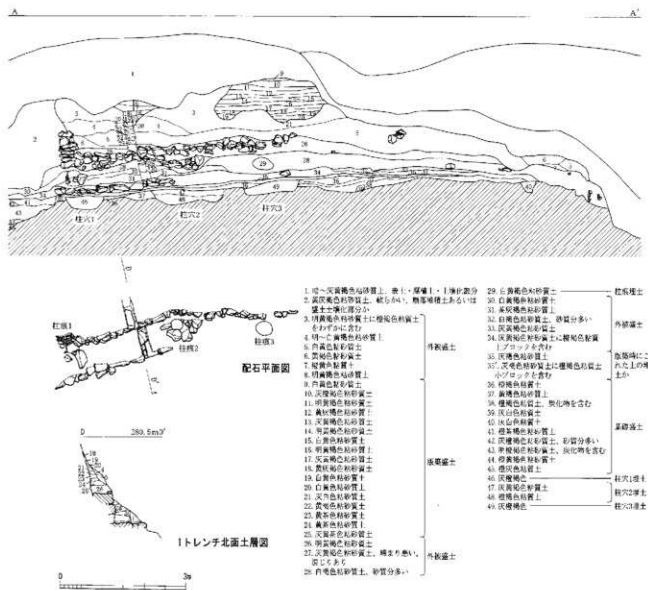


Fig.32 小石垣東方地区A区土層崩落部土層図、配石平面図、1トレンチ土層図(1/90)
(福岡県教育委員会 2010 年から転載)

る。この盛土は、その構造から他地点で普遍的に見られる基礎盛土と解釈できそうだが、ほかの地点の基礎盛土とは趣が異なり、上層の版築盛土とほとんど変わらない砂質土が多い特徴を有する。この盛土は南壁では67層の地山に取り付いているが、右手の基礎盛土とはかなりの標高差が生じている。この状況から報告書では、左手（西側）の盛土を「基礎盛土兼版築盛土」とし、盛土施工に一端中断があったことを想定した。その理由として内周土壁と外周土壁の接続部にあたることを挙げ、この盛土を土台にして、その上に版築盛土を行ったと考えた。

なお、9～14層は南壁の土層では柱穴状の掘り込みのような形状を呈しており、土塁天端の柱穴の可能性や後世の修築の可能性も考えられる。

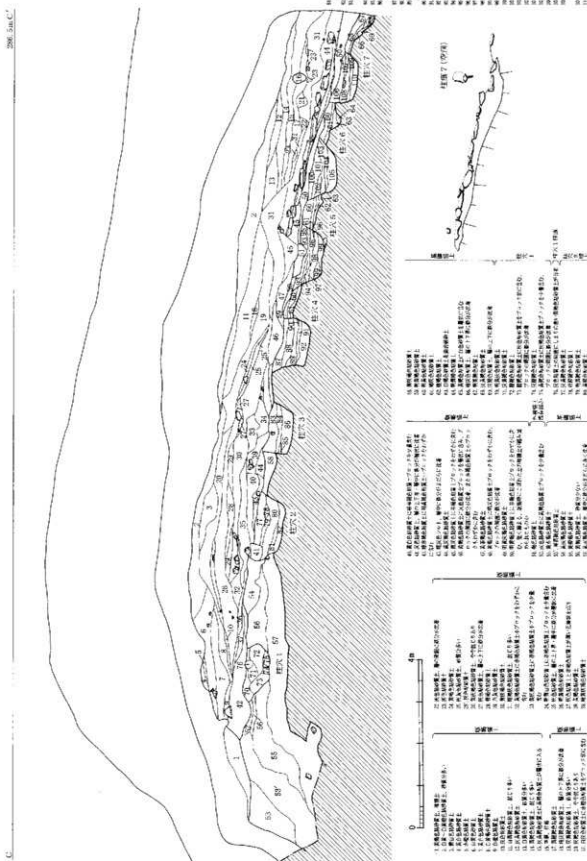


Fig.33 小石垣東方地区A区土塁崩落部土層図, 配石平面図 (1/90) (福岡県教育委員会 2010 年 4 月 20 日 撮影)

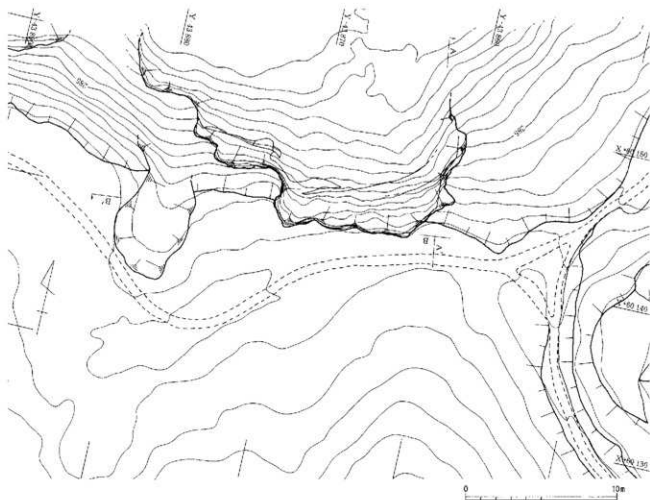


Fig.34 小石垣東方地区 B区周辺地形図 (1/250) (福岡県教育委員会 2010 から転載)

6) 東側土塁

小石垣東方地区東側の北側外周土塁と内周土塁の接合部から、尾花地区までを巡る土塁である。全体的に土塁線は現在も明瞭に確認できる部分が多い。

a. 大谷東方地区 (Fig.30・36・37, PL. 7)

大谷東方地区は、北側内周土塁と北側外周土塁の東側接続部の南側に位置し、南北方向に尾根伝いに内托構造をとりながら延びている (Fig.30)。平成 15 年豪雨災害によって 2箇所が崩落し、北側の崩落箇所を A 区、南側を B 区とした。B 区は内・外周土塁東側接続部の南約 80m の位置にある。

調査は平成 15 年豪雨災害によって崩壊した B 区について、復旧事業を進めるため 49 次調査として行った。崩落箇所の堆積土砂の除去と壁面の削り出しを行った後、土層の図化を行い、部分的に小さなトレンチを入れ土層の確認を行った (Fig.36・37)。その調査成果については、報告書『特別史跡大野城跡整備事業Ⅴ下巻』(2010) で、小石垣地区大谷東方土塁として詳細に報告されており、以下ではその要点を記す。なお A 区については、精査の結果、崩落が人為的な盛土よりも下方で発生したことが判明したため、写真撮影のみを行っている。

B 区では、基礎盛土と堰板柱列の施工の単位が合計 4 つ確認できた。このうち築造当初のも

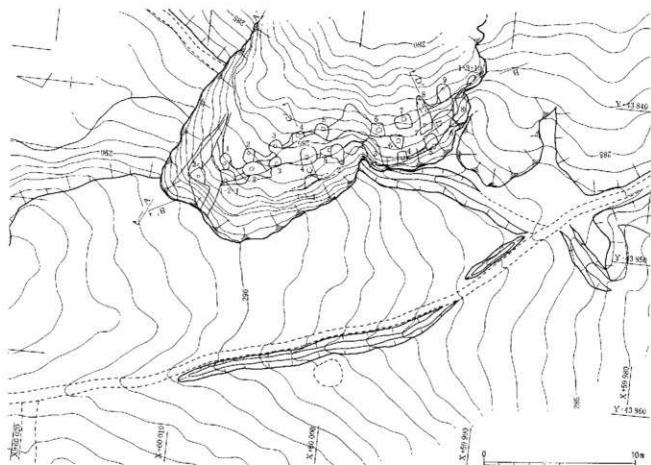


Fig.36 大谷東方地区B区周辺地形図(1/250)(福岡県教育委員会2010から転載)

のは、180層～186'層の基礎盛土1-1と柱穴1-1-1～1-1-6の6つの柱穴からなる単位、77層～82層、248層～268'層の基礎盛土1-2と柱穴1-2-1～1-2-8の8つの柱穴からなる単位、そして281層～286層、313層～328層の基礎盛土1-3と柱穴1-3-1～1-3-10の10の柱穴からなる3単位である。それぞれの柱穴の間隔は2m程のものが多くがばらつきがある。柱穴の深さもばらつきがあり、浅いものは60cm程、深い物は120cmを越える。埋土はほぼ全てが硬く突き固められている。これらの多くで径20～30cm程の柱痕を確認でき、柱穴1-1-4のように空洞化しているものも見られる。

築造当初の基礎盛土は、地山の斜面の向きと同様に南に下っており、粘性の高い土で不均衡に積まれている。ただ基礎盛土1-2はほかと比べて均質に積まれており、版築によって積まれている可能性が高い。版築盛土は基礎盛土1-1の上に典型的なものが見られ、厚さ7～15cm程の硬く突き固められた盛土が何層にもわたって積まれ2.5m程の高さが残る。これを版築盛土1とするが、この盛土の中には、尾花地区で横木痕とした(楕)円形状の痕跡が不規則に見られる。ただ当土塁は内托構造であるため、この点報告書では、横木は地山に固定することを想定している。ただ樹木痕の可能性もあり、ここでは横木痕の可能性もあるとしておきたい。

基礎盛土と堰板柱の施工で最も新しいものは、土塁に直交する土層で確認できる。20～26層の基礎盛土2とそれを切る27層～35層の堰板柱の柱穴2-1の単位がそれであるが、先に



Fig.37 大谷東方地区B区土塁崩落部土層図 (1/90・1/60) (福岡県教育委員会 2010 年から転載)



見た基礎盛土1-1~3とそれに伴う堰板柱列よりも新しく、土塁を修復した段階のものと思われる。

それはこの基礎盛土2が版築盛土1の外側に施工されているからである。築造当初の版築盛土1の外側には、これに伴う外被盛土1(57層~76層)があり、その外側に基礎盛土2を土台として36層~53層の版築盛土2が積まれている。さらに外側の5~19層の水平積土は、版築盛土2に伴う外被盛土と考えられる。なお、この土層では版築盛土1の中に、空洞化し周囲の土が混じり込んだ層(247層)が確認でき、これが土塁の延長方向に対して平行に延びていることから、報告書では堰板同士を結びつける骨組の痕跡の可能性を指摘している。

以上のことから当土塁は、基礎盛土1-1~3とそれらに伴う堰板柱列を施工し、版築盛土1及び外被盛土1を積み上げ完成させた後、修築のために基礎盛土2とそれに伴う堰板柱、そして版築盛土2及び外被盛土2を施工したと考えられる。なお、堰板柱穴2-1では柱穴の上面に柱を取り巻くように配石を施しており、他の地区でも見られる根固め石と思われる。

土塁の修築

b. 原地区 (Fig.38・39, PL.8)

原地区は大野城跡の南東部に位置し、尾花地区の礎石群から東に約200m離れている。平成15年豪雨災害復旧事業に伴い、尾根をはさんだ南北2条の谷斜面をそれぞれ北地区、南地区とし、太宰府市教育委員会が40次調査として調査を行った(Fig.38)。

調査では両地区とも高さ6~7mほどの土塁が確認された。南地区では城門も確認されたが、これについては別途城門の節で述べる。詳細は太宰府市教育委員会『大野城跡1』(2015)にて報告されており、ここでは土塁の調査成果の要点を記す。

北地区の土塁は長さ30m程にわたって土塁外面を調査した。土塁基底部の地山と積土との境では炭化物が散漫に確認されたが、明確な旧表土は確認されていない。基底部には1.5m程の間隔で柱穴を掘り込んでおり、柱痕と考えられるものも確認された。また、地山は段切りを行っていることも明らかとなった。

地山段切り
柱穴の確認

南地区の土塁は長さ26m程にわたって土塁外面を調査した(Fig.39)。北地区同様、土塁基

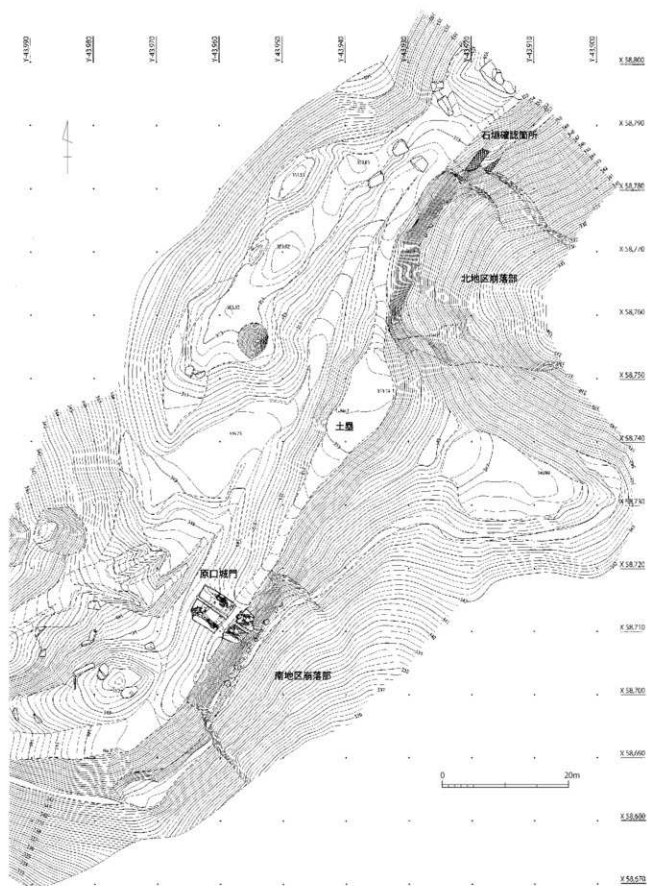
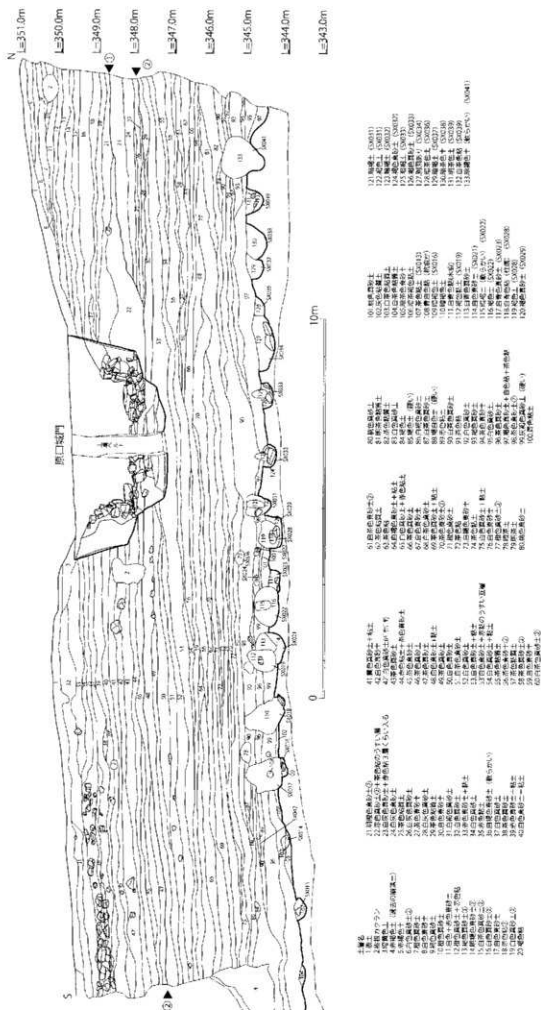


Fig.38 原地区周辺地形図 (1/600) (太宰府市教育委員会 2015 を改変)



①・・・門造作のためのスロープと考えられる面
②・・・門を造る時の基礎部と考えられる面

Fig.39 原地区南地区土翠部落土圍図 (1/100) (太宰府市教育委員会2015から転載)

底部には柱穴があり、その間隔は 1.4 ～ 2 m 程である。柱穴は基底部から穿ったものもあれば、数層積土して穿ったものがある。また柱穴の一部には柱を固定するためと考えられる石が入れられた状態のものもあり、柱痕は積土の中に埋め殺しの状態で土塁側に少し傾いているものもあれば、ほぼ直角になっているものもあった。

版築盛土はほぼ水平に積まれているが、城門基底部より上では、北側でスロープ状の積み方をしている部分があり、城門を設置する際に設けられたものと考えられている。

なお、南側の上層では拳大～人頭大の花崗岩がはまっており、土塁の材料として使用された可能性がある。

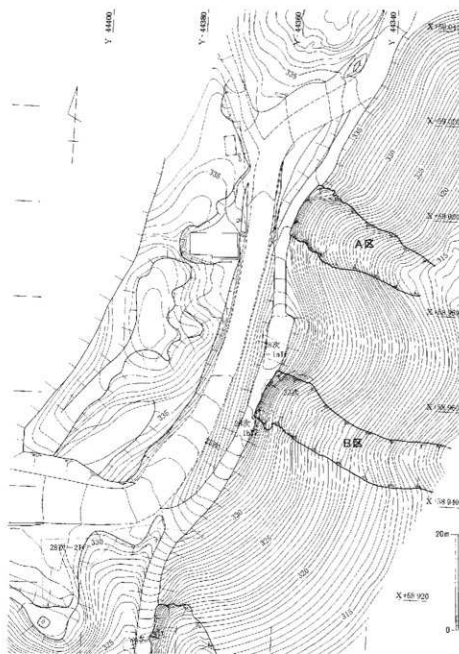


Fig.40 尾花地区調査地点周辺地形図 (1/800) (福岡県教育委員会 2010 を改変)

337.0m

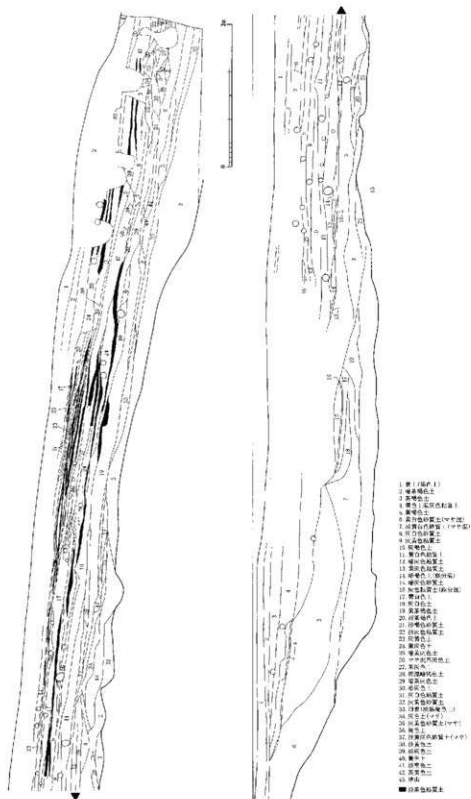


Fig.42 尾花地区 (28 次) 土塁内側法面土層図 (1/80) (福岡県教育委員会 2010 から転載)

c. 尾花地区 (Fig.40 ~ 45, PL.9・10)

尾花地区の土塁は、南側外周土塁と内周土塁の東側接続部の北に隣接し、北側には建物群がある。土塁の西側は尾根が北北東-南南西方向に延びるが、土塁はその頂部から東に5m程下った箇所に平行して走る(Fig.40)。土塁は北側の方は斜面に凭せかける内托構造が目立つが、南側の方は自立部分が大きい夾築構造となっている。この南側の土塁内側は、元々築造時にも掘削されたであろうが、後世に山道として改変した影響もあり、天端から基底部までの高低差が特に大きくなっている。

調査は、25次調査で土層断面の調査や地形測量を行って以降、太宰府口城門周辺の整備に係る調査の一環として28次調査、また平成11年豪雨災害の復旧に係る33次調査のほか、平成15年豪雨災害の復旧に係る41次調査を行い、大野城跡の土塁の構築方法についての所見がいち早く得られた箇所として特筆される。

まず、25次調査で土塁の版築状の積土の存在が明らかになり、28次調査で土塁内側の清掃及び土層図作成を行った結果、小孔が認められ、堰板を固定するための横木の痕跡と推定された。この小孔の性格については、33次調査で土塁外側にも見られることが明らかになったことで、横木痕の蓋然性が高まり、41次調査でこの痕跡が水平に延びることが明らかとなりほぼ確定した。また、28次調査では盛土の下に旧表土が見られないことから地山整形されていること、33次調査では盛土が大きく3つの工程で形成されていることや、基底部に列石を並べていることが分かり(Fig.41)、41次調査では堰板の柱穴や盛土を修復した痕跡を確認したほか、後述する外被盛土の存在に気付いた点も重要である。また、そのほか、土塁の天端では28次調査で柱列を確認したことも特筆される。

横木痕の
確認基底部
に列石

これらの調査成果については、『特別史跡大野城跡整備事業』(2006)及び『特別史跡大野城跡整備事業V下巻』(2010)で多くが報告されており、以下では要点を記す。

横木痕と思われるものが確認された28次調査の土塁内側の土層であるが(Fig.42)、この土層の正確な位置については不明確なものの、標高などから33次調査地点及び41次調査地点あたりから南側の土層と考えられる。盛土の所々に数多くの小孔を穿った痕跡が見られ、木根によるものもあろうが、堰板を固定するための横木の可能性が考えられた。この小孔は土層図を作成した範囲では、北側で少なく南側に多い傾向が見られる。この北側の土塁外側が、平成11年豪雨の際に崩落し33次調査の対象となったと考えられる。33次調査では、土塁外側の土層で「横長木孔痕」を確認した。径10cm前後の楕円形で、外縁は茶褐色を呈し、内部は締まりのない白色粘質土が充填していたという(Fig.41)。

同様の小孔は41次調査でも確認された。41次調査は平成15年豪雨の際に崩落した2箇所を対象とし、小孔はそのうち北側のA区で多く確認された(Fig.43)。小孔は周囲に鉄分が沈着して硬くなっているほかは締まりのない土で充填されており、ピンボールを差し込むと60～100cm程、土塁延長方向に対し直角・水平に延びていることが確認できた。この小孔の埋土(M)は、北壁の土層でも存在することが確認でき、これが横木の痕跡で、木質が腐朽した痕跡と考えられた。

土塁の築造方法は33次調査の所見が特筆される(Fig.41)。33次調査は平成11年豪雨で崩落した土塁東側斜面を対象としたが、土塁は大きく3つの工程で築造していることが明らか

3つの
工程

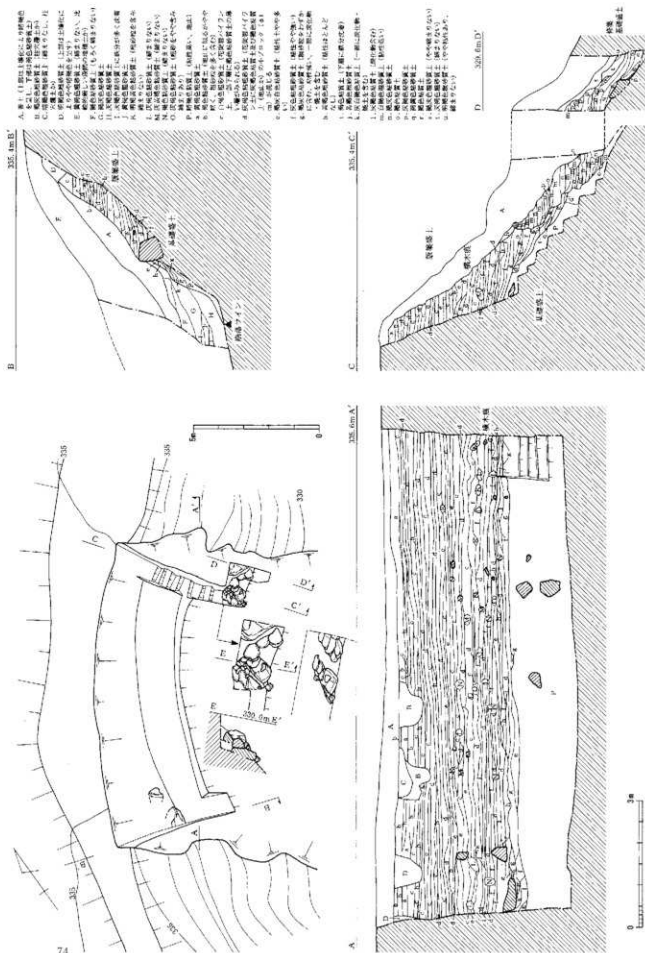


Fig.43 尾花地区(41次A区)土塁崩落部実測図(平面図:1/150 土層図:1/90)(福岡県教育委員会2010から転載)

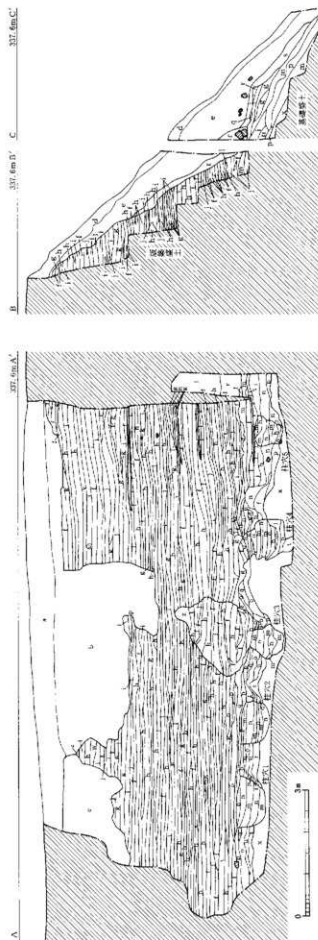
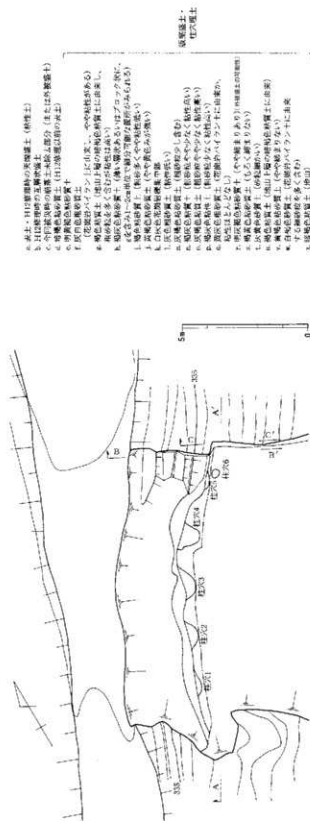


Fig.44 尾花地区(41次B区)土壘崩落部実測図(平面図:1/150 土層図:1/90)(福岡県教育委員会2010から転載)

となった。この3つは、土層の観察から土塁本体上部の盛土1、土塁本体下部の盛土2、そして基底部の盛土3と分けることができ、まず、盛土3Bとして表土を除去してテラス状に地山整形を行った上でマサ土と赤褐色粘質土を交互に置き、層状盛土としている。続いて、盛土3Aとして淡灰色と赤茶褐色土をつき固めて基底部をつくっている。33次調査ではこの後に列石を設置していることも分かった。列石は列をなしたまま滑り落ちたものもあったが、土塁の崩落を免れた箇所では原位置を保っていた。基底部の上には盛土2として、列石を被覆するように粘性のある赤茶褐色土とマサ土を交互につき固めている。最後は盛土1として強固に版築が行われる。なお、33次調査では基底部テラス面外側で径20cm程の杭列が見つかったが、後に触れる堰板柱とは太さが異なるため、堰板柱を受けるための止杭等が想定されている。

33次調査地点については、平成15年豪雨の際に再び崩落したため、その崩落部について41次調査のB区として調査を行った。この際の調査で、標高332.4m付近の灰〜褐灰色の粘性の高い層の下端を上面として、層状につき固められた埋土で構成された柱穴が5つ並んでいるのが確認された (Fig.44)。これが堰板を固定する堰板柱と考えられる。この層の上下では盛土の状況が変わっており、上側は水平に版築盛土が積まれるのに対し、下側は地山と同様に斜めに下がりつつも上面を平坦にするような積み方をする基礎盛土となっている。33次調査の基底部の盛土と同様のものと考えられる。堰板柱はこの基礎盛土の上面から掘り込まれている。基礎盛土は41次調査のA区でも確認でき、標高332.3mより下は、粘性の高い土を主体とし、前面に行くほどに厚みを増す土が何層も積み重なることで、全体として三角形の断面形状をなし、地山と版築盛土を接合する役割を果たしている。

なお41次調査のA区北側壁面では、この基礎盛土の外側に不整合面を挟み、別の層状盛土を確認しており、崩落を受けた部分を後で修復した修築盛土と理解している (Fig.43)。この修築盛土も上層は水平なのに対して下層は地山の傾斜に近い堆積をしており、それぞれ基礎盛土と版築盛土に対応する。なお、この修築基礎盛土と地山との間には、平たい花崗岩礫が数段

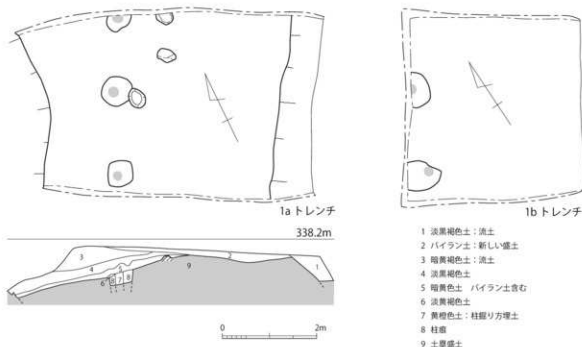


Fig.45 尾花地区 (28次) 1a・1b トレンチ実測図 (1/80)

にわたって積まれていた。基礎盛土の滑り止めの機能を期待したものととも考えられる。

土塁天端については、28 次調査の土塁頂部に設定した 1a、1b の 2 つのトレンチで柱列を確認した (Fig.45)。柱列は天端の内側に寄った箇所に位置しており、土塁延長方向に 1.5～1.8m 間隔で 50cm 程の柱掘り方が並ぶ。土塁外寄りの盛土がどの程度崩落しているかは不明であるが、本来は 2 列存在した可能性も否定できない。類例は太宰府口東方地区で確認した 2 列の柱列が挙げられる。

土塁上の
柱列

7) 石垣・石塁

石垣及び石塁は、城壁のうち谷部分を中心に見られる。北石垣は尾根上の土塁に貼石垣として構築されているが、ここに含めて報告する。

a. 水ノ手口石塁 (Fig.46, PL.11・12)

水ノ手口石塁は、南側外周土塁の東寄りに位置する。南東側に開析する広い谷を塞ぎ、東に太宰府口城門が接続する (Fig. 5)。この城門との取り付け部は内側に小さく屈曲して方形を呈しており、石積が高く盛り上がっている。この部分は戦国時代における岩屋城攻めの際の「石こづめのぼば」の伝説の舞台となった場所である。

遺構自体は古くから注目され、21 次調査からの太宰府口城門の調査の際に、詳細な測量調査もされていたが、発掘調査は整備事業に伴う 29 次調査や 32 次調査で行っている。その成果の詳細は『特別史跡大野城跡整備事業』(2006) にて報告されており、ここでは以前の測量調査の成果も含めて要点を記す。

石塁の長さは外面側で 20m 程、現存最大高は 5.5m 程である。基底部幅は 7m 程で、天端は崩落しているため定かではないが、復元すると幅 5m 程になると思われる。東端は城門に取り付くが、西端は山の斜面部にある土塁に取り付く。この西側の取り付け部については 32 次調査 21 トレンチで北側に張り出す部分に石敷を確認しているが、その広がり等は明らかでない。

石積は大きな石を用いて丁寧に作り、外観は整然とし横目地が通る部分が随所に見られる。谷の形状に合わせ、中央部がやや窪んでいる。石塁の内部については、29 次調査で石塁と直交する格好で 28 トレンチを設定して観察した。その結果、外観とは異なり、やや小振りの石で乱雑に割石を詰め込んだ状態が確認できた。

水門は確認できないが、現在地表に現れている石積の下では大小様々な石材が乱雑に放り込まれたような状態で堆積しているため、水はそれらの石の隙間を通して城外に排出されたようである。

水門は
ない

また、城内側の窪地には内側石積から 3m の箇所に、2 段ないし 3 段に積まれた 0.5m 程の高さの石列があり、これは谷の集排水に関する施設と考えられる。『特別史跡大野城跡Ⅶ』(1991) で「堰」としたこの石列の北側では、32 次調査 22 トレンチで、石列の背後に大小の栗石で構成した石敷を確認している。22 トレンチ付近は石列の並びにやや乱れが見られるが、それよりも北側では整然と積まれた状況が確認できる。『特別史跡大野城跡Ⅶ』(1991) では、水流が石塁に直接当たるのを緩和した役割も想定しているが、『特別史跡大野城跡整備事業Ⅴ

内側の
石列

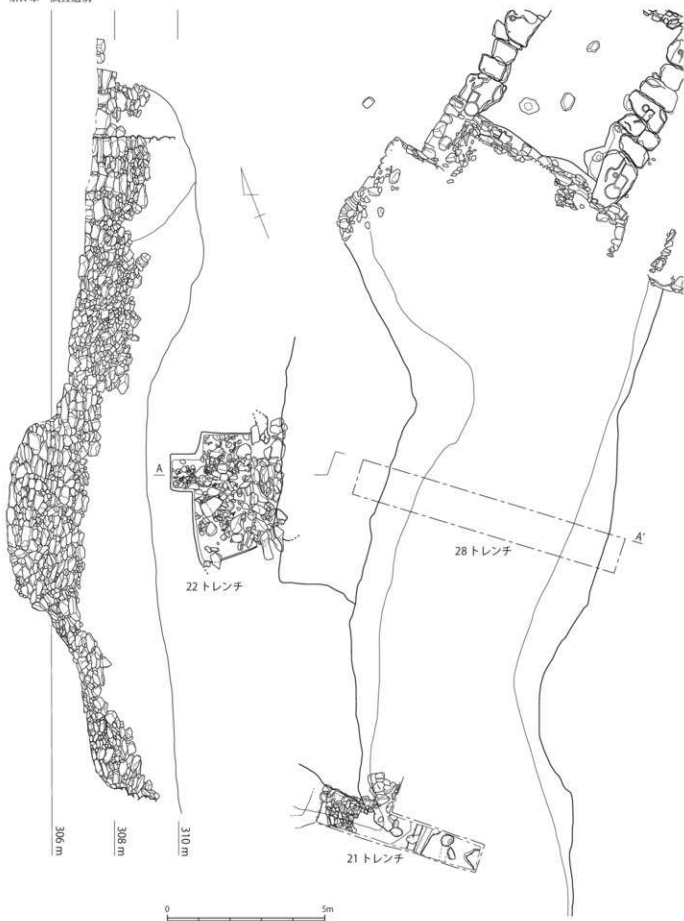
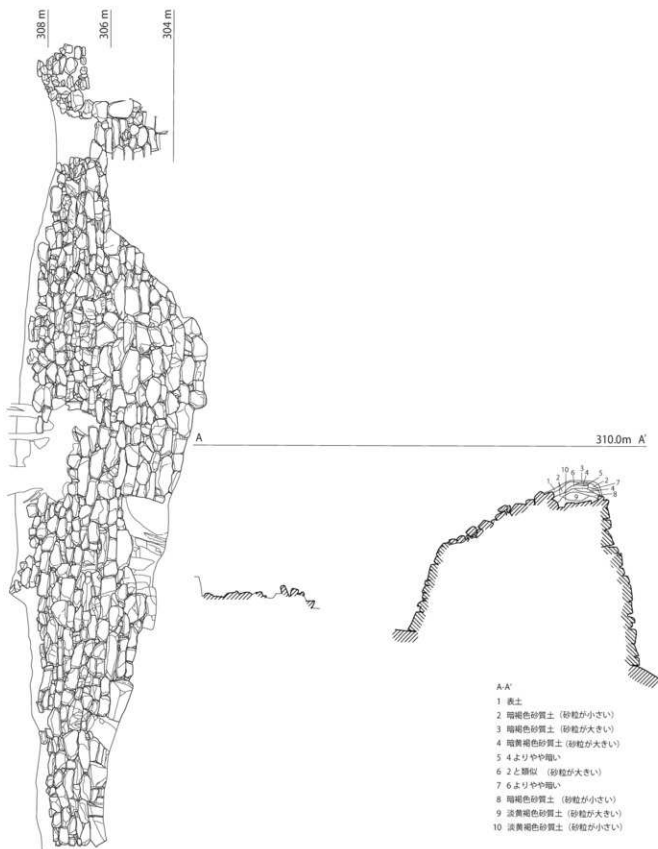


Fig.46 水ノ手口石塁実測図 (1/120)



下巻』(2010)の所見では、石列を窪地の護岸として位置付け、窪地自体は貯砂池としての機能があったことを想定している。

なお石垣の外側、南に約16mの箇所には、谷部を東西に塞ぐように全長10m程、高さ1m程の小規模な土塁と土塁内側に平坦面が存在する。29次調査で25・26トレンチを設定して調査を行ったところ、土塁の土の締まり具合などから、太宰府口城門廃絶後の比較的新しい時代の所産であると判断している。

b. 大石垣 (Fig.47・48, PL.13)

大石垣は、南側外周土塁の南西部に位置する。南西方向に流れる大きな谷を塞ぐように石を積み上げ築いている。かつて鏡山が『大宰府都城の研究』で触れたように、谷を通る登山道を境に東西で石垣線が食い違っており、往時から城壁に切れ目があった可能性や、城門の存在が指摘されていた。

調査は、昭和47年及び48年の集中豪雨によって部分的な崩壊があったことを受け、保全の必要性から7次調査として実施し、その後に整備を行った。しかし、平成15年豪雨災害によって再び甚大な被害を被ったため、その被災状況の把握と復旧に必要な情報を得るために、太宰府市教育委員会が45次調査及び45-2次調査を行った。この調査についての詳細は太宰府市教育委員会『大野城跡1』(2015)にて報告されている。

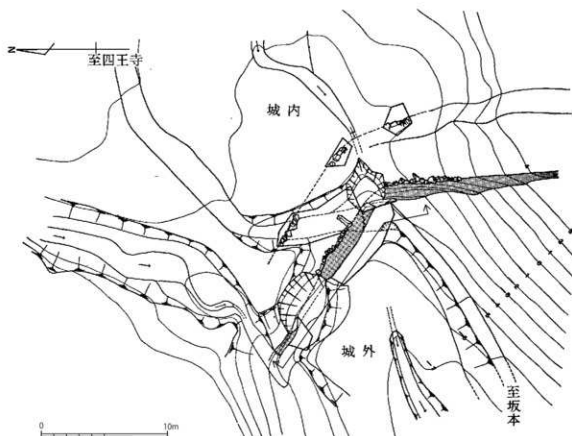


Fig.47 大石垣周辺地形図 (1/300) (福岡県教育委員会 1976 を改変)

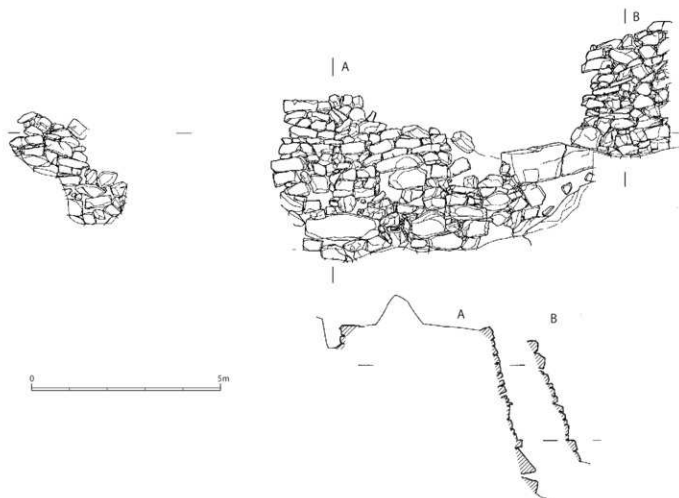


Fig.48 大石垣立面図・断面図 (1/100) (福岡県教育委員会 1976 を改変)

ここでは、7次調査の調査成果を主に報告し、45次調査及び45-2次調査の成果も加味することで全体像を説明する。7次調査では石垣前面の堆積した土砂を排除するとともに石垣基底部の検出を試みた。石垣の上部は整然と規格性をもって積石がされるのに対し、下部は雑然としており、本来の積石と崩落石との区別が困難なほどであった。これは谷間を乱石によって堰き止めることで、盲水門的に水流を通したためと想定され、実際に45次及び45-2次調査で水門の有無を確認するため行った基底部の確認調査でも水門は確認されていない。基底部の谷底は花崗岩盤で、その上には栗石状の礫が見られ、さらにその上に1×2m程の巨石を要所に据えている。巨石を利用することでその間を水が抜けるような暗渠機能を持っていたと見られる。

水門はい

また、調査前から指摘されていた東西の石垣線の食い違いについては、下部において石垣が連続していることが確認され、45次調査でも平面形が120度あまりの角度をもって曲がっていることが確認された。切れ目はなく、城門は存在しないことが明らかである。

石垣は連続

石垣の背面については、トレンチ調査を行った結果、積石が存在することが分かり、全体に石塁をなすことが確認された。石塁の上端幅は4m前後あり、基底部については45次調査によって幅6m程、そして前面の高さは6m程であることが分かった。石垣の内部については、

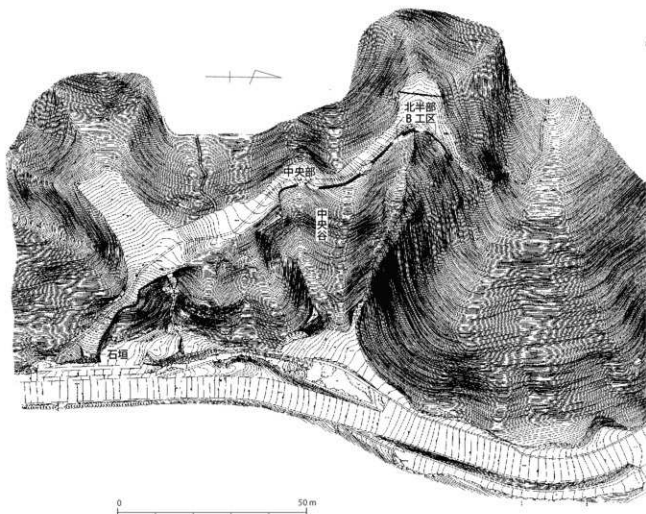


Fig.49 百間石垣周辺地形図 (1/1,000) (福岡県教育委員会 2006 を改変)

崩落部の状況から、土砂をほとんど含まず、石のみで構築されたことが分かっている。

なお 45 次調査及び 45-2 次調査では、石垣の背面に堆積した土砂を取り除く過程で遺物を取り上げており、木製品等が含まれている。

c. 百間石垣 (Fig.49～55, PL.14～18)

百間石垣は、北側外周土塁と内周土塁の接合推定箇所の南に位置する城内最大の石垣である。接合推定箇所から 30m 程南に下がった箇所を起点として、南東方向に湾曲しながら石垣が 150m 程延びている (Fig.49)。石垣北端は標高 240m 程で、南端まで 30m 程の高低差がある。途中、大きな谷を 3 箇所程横断するが、石垣背後の谷は埋められ傾斜が緩くなっている。また石垣天端は幅 2～8m の平坦面が石垣に平行して走っている。石垣は現況で途中、中央尾根付近で途切れているが、所々に石積の一部が顔をのぞかせており、35 次調査では石垣 4 トレンチ、石垣 5 トレンチで実際に石垣を確認している (Fig.50)。石垣の高さは、尾根部分は 2～5m 程、谷部分は 4～6m 程である。石垣は現在、城内を北流する内野川によって寸断されているが、

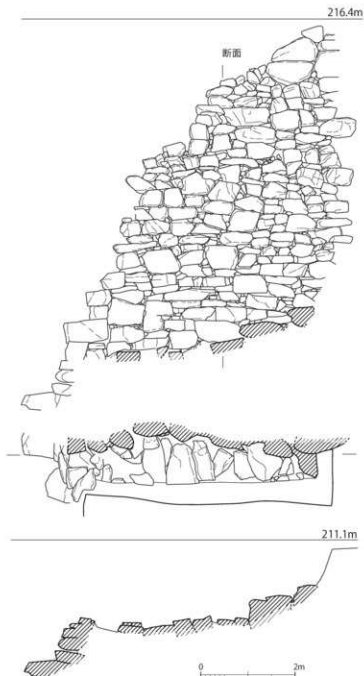


Fig.51 百間石垣南端部実測図 (1/80)

かつては川を塞ぐように、対岸まで取り付いていたと考えられる。この寸断された箇所からはかつて門礎が発見されており、この場所に城門（宇美口城門）が築かれたことが推定されている。

調査は昭和48年の豪雨災害発生後の6次調査で行ったほか、平成11年の豪雨災害後の整備事業に伴い、34次～37次調査及び39次調査で行っている。後者の調査成果については、『特別史跡大野城跡整備事業』（2006）で報告されており、ここでは要点を記す。

石垣は岩盤の上に大きな花崗岩を積み上げているが、横目地が通る箇所がある一方で、重箱積みが認められる箇所もある。ほとんどの箇所は外側のみに石垣が見られるが、南端の内野川

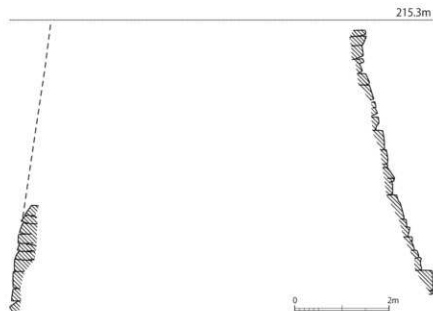


Fig.52 百間石垣南端部断面図(右側が外側)(1/80)

の西側に隣接する部分では背後にも石垣が築かれ、断面台形状を呈している (Fig.51・52)。この部分の外壁の基底部には、大きな板石を敷き並べるように張り出しを設けている。

基底部
に板石

基底部の石垣は、岩盤掘削後に長石でテラスを設け、その上に根石を置き、根固めを行った後に石を積み上げているのを確認できた場所がある。石垣中央部で行った 35 次調査では、石垣 1 トレンチ B-B' 間で岩盤を削り出したテラスを確認し (Fig.53 左上)、石垣 3 トレンチでは石垣最下段に長石 3 枚で 60cm 程のテラスを設けているのを確認した (Fig.53 下)。また石垣北半 B 工区で行った 36 次調査時の石垣解体の際には、80cm 程の奥行きを持つテラスを削り出しているのを確認している (Fig.53 右)。

石垣の内部は場所によって状況が異なる。石垣中央部の 35 次調査石垣 3 トレンチ北側では、石垣裏込め土のさらに裏側に版築状の積土を確認したのに対し (Fig.54)、石垣北半の 36 次調査では内部に積土は見られず、栗石による空積みを行っている。ただ石垣最上層には拳大の栗石の上に土を載せ、その上に黄褐色粘質土を叩き締めたものを被せており、防水層を形成しているようである (Fig.53 右)。

内部が栗石の箇所と版築盛土の箇所との違いは、内部からの排水が可能か否かといった機能とも関係してくる。37 次調査で中央谷の石垣に直交する格好で設定したトレンチでは、石垣上方で黄色土を含む 5～7 層が、拳大の大きな礫を含む透水性の高い 8 層の灰色砂礫層を覆っており、同様の状況は石垣下方でも 14 層の黄褐色粘質土が透水性の高い 15 層の淡灰色砂礫層を覆っているのが確認できた (Fig.55)。これら灰色の砂礫層は、8 層が岩盤を流れる水を石垣下に導き、15 層を通して石垣の外に排出させるためのものである可能性がある。百間石垣には 3 つの大きな谷が見られるが、排水口を設けるのは最も南側の谷のみであり、そのほかの箇所に特に施設を設けていないのは、上記のような構造を持つためであろう。なお、37 次調査では谷筋から木柱が出土しており、排水に関するものと考えられている (PL.18 (1))。

石垣下の
透 水 層

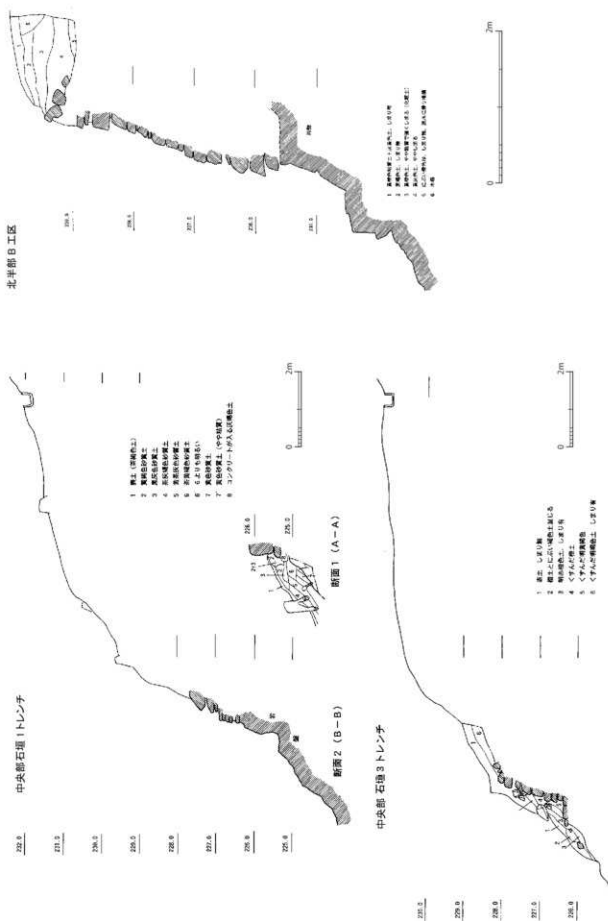


Fig.53 百間石垣断面図・土層図 (1/50・1/100) (福岡県教育委員会 2006 年から転載)

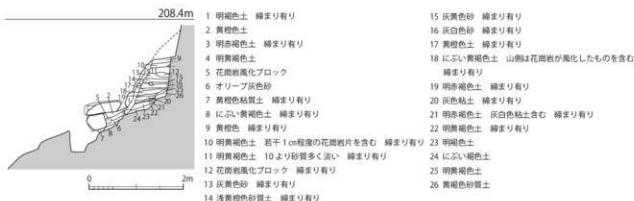


Fig.54 百間石垣中央部石垣3トレンチ北側土層図(1/80)

石垣天端は平坦面を形成している。上述したように35次調査では版築状の積土が確認されたが、中央尾根上の石垣天端の平坦面はこの積土と一体的に造成が行われたと考えられる。この平坦面については、39次調査で中央尾根平坦部の南端にトレンチを入れたところ石敷を確認している(PL.18(3))。平坦部の保護を目的としたものと考えられている。

天 端 に
石 敷

d. 北石垣 (Fig.56～64, PL.19～22)

北石垣は、北側内周土塁の中央付近、百間石垣と小石垣に挟まれた尾根上に位置する(Fig.56)。北石垣の上部は2つの石垣に分かれている。調査は昭和47年の豪雨災害後の復旧に係る14次調査、及び平成15年豪雨災害の復旧に係る46次調査で行っている。14次調査では、2つの石垣について東部石垣、西部石垣として調査を行い、石の積み方や構造についての所見を得たが、平成15年豪雨災害の際に大きな被害を受け、14次調査で記録した石垣の多くが崩落してしまった。

46次調査では残された石垣とその裏込めの状況を確認したほか、2つの石垣の下方で新たに連続する石垣を確認し、また東側で露わになった土塁の土層を精査し、その構造を明らかにする等の成果を挙げた。それらの詳細は報告書『特別史跡大野城跡整備事業V下巻』(2010)にて報告されており、ここでは要点を記す。なお、東側の土塁の調査の際に発見した北石垣城門については、別項で説明する。

14次調査でSA074-Wとされた西部石垣については、46次調査ではA区として調査を行った(Fig.57)。石垣の基礎部が残存しているのが確認でき、その上方には層状盛土が存在し、14次調査時でも確認した土塁外側の貼石を施した状況を再度確認することができた(Fig.58・59)。石垣は段の上の平坦部に位置するが、その段の部分にも層状盛土が存在し、下方には柱列が存在する。この段の部分は、大野城のほかの箇所では所謂基礎盛土に当たる部分だが、下方に柱列が存在するため版築盛土と考えられ、報告書では「下段版築盛土」としている。この下段版築盛土は、版築盛土とは異なり、厚い箇所でも20cm近い層も見られ、土質もやや悪い傾向がある。柱列は柱穴2-1～6で構成される。柱穴には径30cm程の柱痕が見られ、柱痕周囲には石を配するものが見られる。この柱列の柱穴は地山に直接掘り込んでいるようであり、ほかの箇所では基礎盛土の上面から掘り込む例が多いことから特異である。なお、下段版築盛土

貼 石 垣

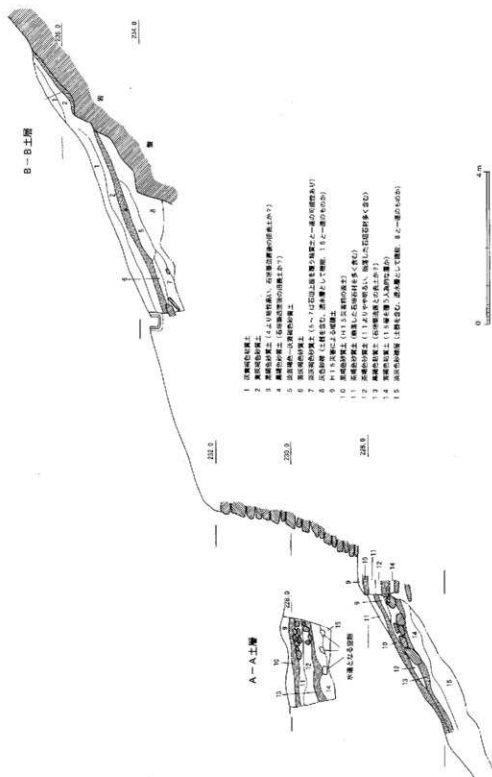


Fig.55 百間石垣中央谷石垣断面図・土層図 (1/100) (福岡県教育委員会 2006 年から転載)

の下は、地山を段切り造成した痕跡も確認している。

複数の
柱列

また、上記柱列のほか、柱痕のみが確認できた柱穴 1-1～6 が存在する。掘り方の掘り込みが、下段版築盛土の内部か、その下からかは不明であるが、柱穴 2 の柱列と互い違いに並ぶ状況が伺え、両者を組み合わせて下段版築盛土を積み上げるための堰板柱として機能した可能性がある。

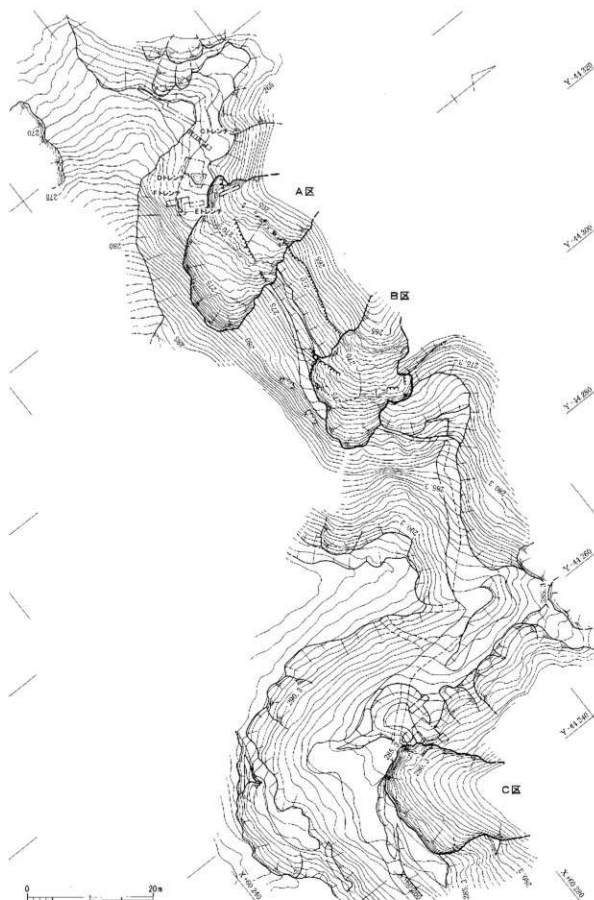


Fig.56 北石垣周辺地形図 (1/600) (福岡県教育委員会 2010 を改変)

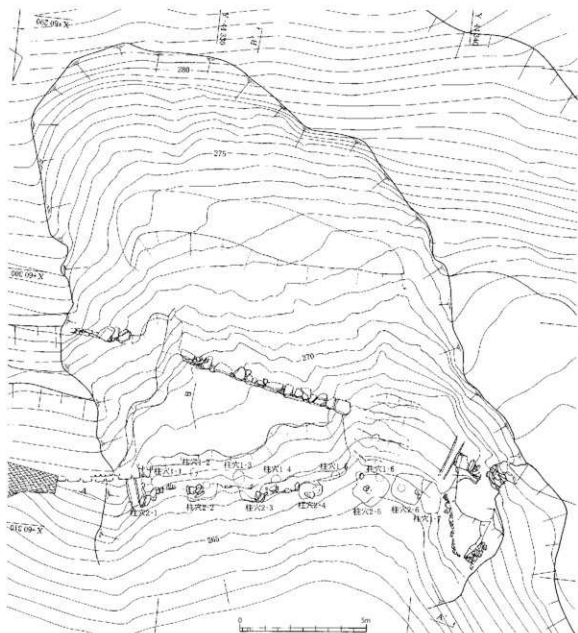


Fig.57 北石垣A区周辺地形図(1/150)(福岡県教育委員会 2010 年から転載)

下段版築盛土の上には土塁の本体となる層状盛土があるが、報告では「上段層状盛土・貼石垣」としている。版築と呼称しなかったのは、堰板柱が設置されていないためであるが、貼石と盛土施工の順序や貼石の施工方法については明確ではない。この盛土の天端は盛土の残存状況や石垣面の想定から、平坦面を形成していたと考えられる。

14 次調査で SA074-E とした東部石垣については、46 次調査では B 区として調査を行った (Fig.60)。14 次調査の際に記録を作成した石垣は、かなりの部分が平成 15 年豪雨災害で崩落し、46 次調査では石垣背後の層状盛土を確認した (Fig.61)。また崩落部を精査した結果、A 区と同様に石垣の下方で地山の岩盤を段切り加工した痕跡が見られ、A 区と同様に下段の構造物が存在した可能性が高まった。

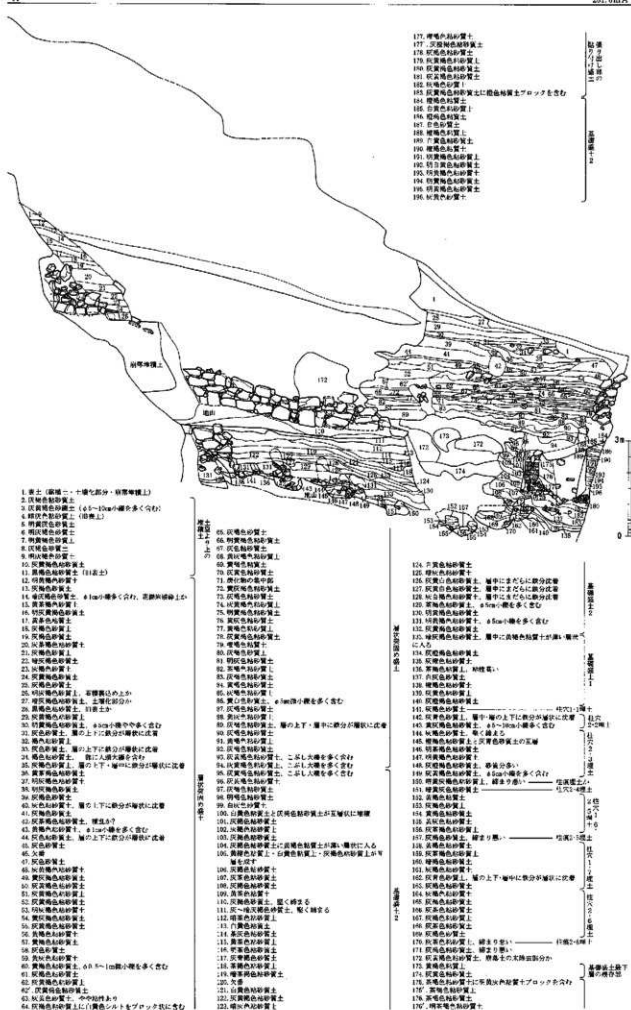


Fig.58 北石垣A区陥落部土層図① (1/120) (福岡県教育委員会 2010 年 4 月 1 日現在)

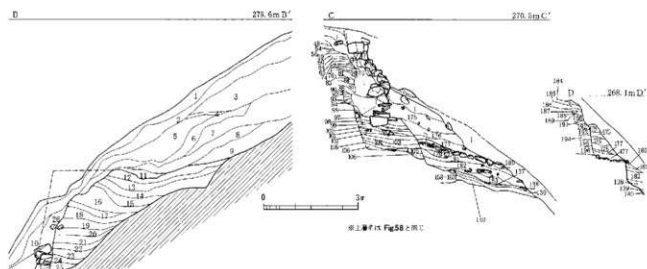


Fig.59 北石垣A区崩落部上層図② (1/120) (福岡県教育委員会 2010 から転載)

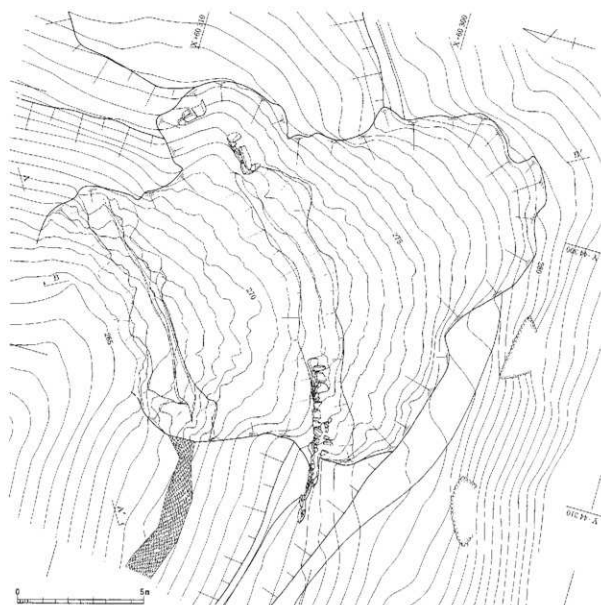


Fig.60 北石垣B区周辺地形図 (1/150) (福岡県教育委員会 2010 から転載)

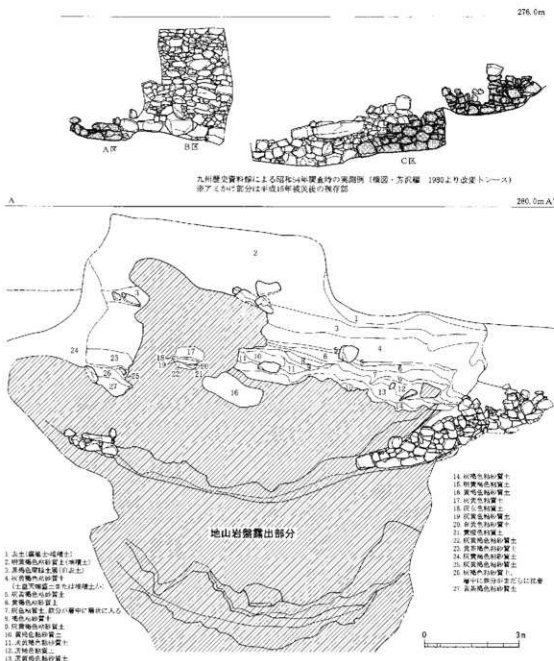


Fig.61 北石垣B区石垣立面図・崩落部土層図（1/120）（福岡県教育委員会 2010 から転載）

上方の石垣は14次調査の記録からうかがい知ることができる。石垣は地形に合わせて湾曲させており、基礎部は岩盤を掘り込んだ平坦面に、よく整形した石材を据えている。基礎部より上の石材はやや小さいびつなものが多い（Fig.61上）。基礎部付近は石垣背後に裏込めを配する空間は存在しないが、それより上方は地山の傾斜があるため、石垣背後の空間が存在し、そこに層状盛土が存在する。この層状盛土はA区と同様に縦板柱列が存在しないことから、版築によるものではないと考えられる。なお、石垣は東端部で直角に折れ、城外側へ数石続くことから、外側に張り出していた可能性がある。

46次調査の特筆すべき点は、上記東西の石垣の下方で、A-B区間にまたがる新たな石垣を確認したことである（Fig.62）。この石垣の総延長は17m程で、東側から12m程の箇所まで折

一 体 の
石 垣 の
可 能 性

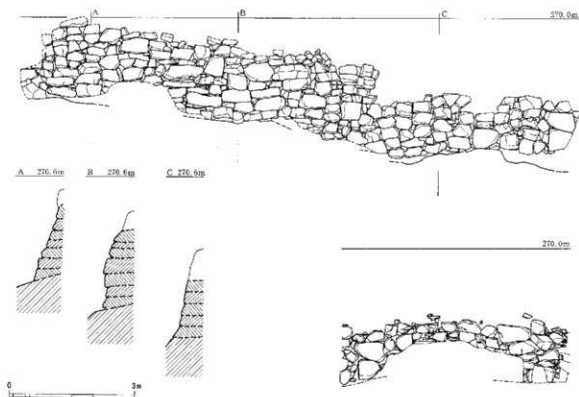


Fig.62 北石垣A-B区間下段石垣立面図 (1/90) (福岡県教育委員会 2010 から転載)

れが認められる。石垣はA区下段版築盛土に接続していることから、この石垣とA区の構造物は一体のものであることが分かる。石垣はB区崩落部のすぐ西で終わっているが、上述のようにB区にも下段の構造物が想定されることから、B区の施工も一連のものであった可能性が高い。即ち、それまで東・西、2つの石垣と考えられていた構造物が、本来一体のものである可能性が高くなったと言える。A区とB区の間の上方には現在のところ石垣は見られないが、斜面崩落により埋まっていることも考えられる。

堆城状 突出部

なお、上記A区の西側には土塁が城外側に突出しており、この東側面崩落部を精査したところ、A区下段版築盛土の前面に貼り付けるように盛土を行っているのが確認できた(Fig.58-175層～183層)。B区の東側も上述したとおり、土塁が外側に張り出している可能性があり、北石垣の東西両側が城外側に突出することになり、報告書ではこれを雉城状突出部としている。

46次調査ではそのほかC区として、B区から東に60m程の崩落箇所を確認した土塁についても調査を行った(Fig.63)。このC区付近の土塁線については以前、尾根の落ち際に沿って南側に大きく湾曲すると想定していたが、崩落によって、実際にはもう少し北側に位置することが判明した次第である。調査では新たに門跡も確認したが、この門跡については、北石垣城門の項で説明を行う。

土塁の 折れ

土塁は崩落面を精査することで、版築盛土、その下の基礎盛土、基礎盛土上面から掘り込む堰板柱穴、また外被盛土を確認した(Fig.64)。堰板柱穴は①～④が直線的に並んでいるのに対し、⑤で屈曲しており、土塁もまたここで「折れ」が存在する。この部分を境に様相が若干異なり、東側の版築土塁は5～10cm程度の厚さで硬く叩き締められているのに対し、北西側

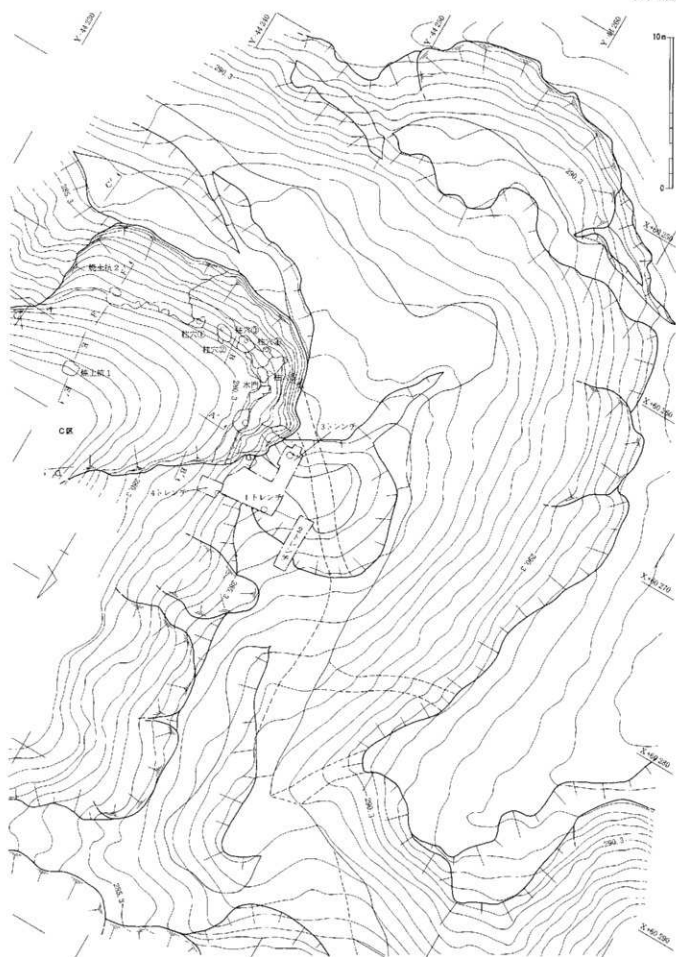
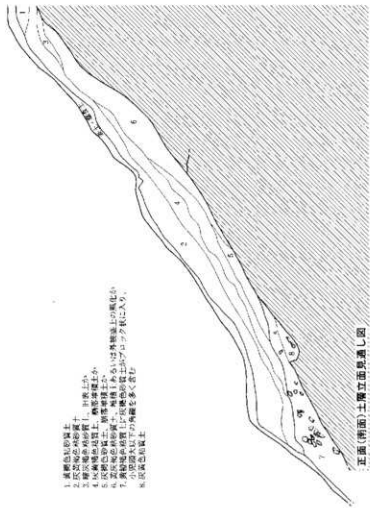
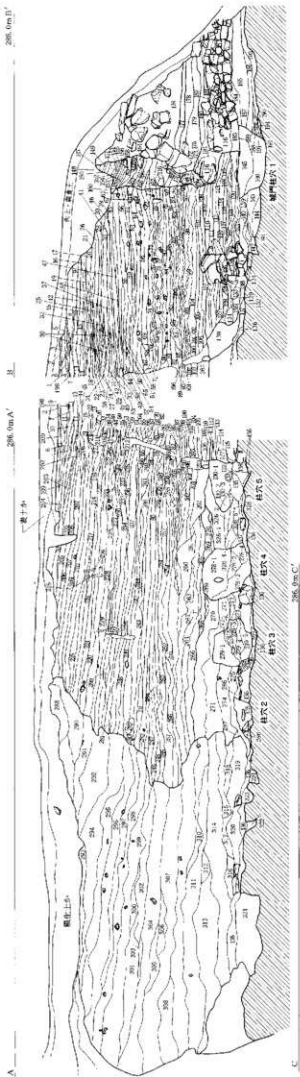
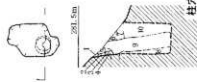


Fig.63 北石垣C区周辺地形図 (1/250) (福岡県教育委員会 2010 から転載)



1. 墳頂部砂質土
2. 墳頂部砂質土
3. 墳頂部砂質土
4. 墳頂部砂質土
5. 墳頂部砂質土
6. 墳頂部砂質土
7. 墳頂部砂質土
8. 墳頂部砂質土
9. 墳頂部砂質土
10. 墳頂部砂質土

1. 墳頂部砂質土
2. 墳頂部砂質土
3. 墳頂部砂質土
4. 墳頂部砂質土
5. 墳頂部砂質土
6. 墳頂部砂質土
7. 墳頂部砂質土
8. 墳頂部砂質土
9. 墳頂部砂質土
10. 墳頂部砂質土



- 286.0m D'
- 286.0m A'
- 286.0m B'
- 286.0m C'
- 286.0m D'
- 286.0m E'
- 286.0m F'
- 286.0m G'
- 286.0m H'
- 286.0m I'
- 286.0m J'
- 286.0m K'
- 286.0m L'
- 286.0m M'
- 286.0m N'
- 286.0m O'
- 286.0m P'
- 286.0m Q'
- 286.0m R'
- 286.0m S'
- 286.0m T'
- 286.0m U'
- 286.0m V'
- 286.0m W'
- 286.0m X'
- 286.0m Y'
- 286.0m Z'

Fig. 64 北石垣 C 区土器附落部土層図 (1/90) (福岡県教育委員会 2010 年 10 月 10 日現在)

の版築土塁は厚さが非常に薄く、また中位付近の層には拳大の石が多く含まれている。報告書では両者は同時施工だが別個に築かれ、その境に赤褐色粘質土群を入れて接合したとしている。

基礎盛土は版築盛土とは異なり、やや厚めで粘性の高い土で構成されている。また堰板柱痕は非常に深く、検出面から100cm以上ある。なお、東側では1層が20～30cmと厚い積土層が見られるが、これは版築盛土の外側を覆う外被盛土と考えられる。突き固めの程度はさほどなくやや軟質である。他地点の外被盛土とは異なり、基礎盛土の前面にまで積んでおり、報告書では崩落を修復した可能性に触れている。

石 組 そのほか、谷の最深部の土塁基部では、水門と考えられる石組暗渠を確認した。開口部の
暗 渠 幅は40cm程で、高さは天端石が斜めに落ち込んでいるものの20cm程と考えられる。四面とも石貼構造で、基部の石は地山に直接のせられている。暗渠の周囲は基礎盛土で囲まれ、上部は版築盛土が乗っている。本来は城内側に取水口があったと想定されるが、城内側の谷地形は完全に埋積しており、現状で確認することはできない。

e. 小石垣 (Fig.65～70, PL.22～24)

小石垣は、北側内周土塁の東寄りに位置する。城壁線は北石垣より南東方向に川に向かって下るが、この川の流れによって、かつてここに存在した施設は失われている (Fig.65)。ただ、昭和46年の地形図では、西側に城壁線の残存部のようなものが数m川に向かって突出していることから、以前はもっと遺構が残っていたと考えられる。現在は川の対岸に石塁の一部が崩落面に露出しており、さらに東側の小さな谷では、北東方向に伸びる石塁が確認できる。東側の小さな谷から東は土塁が斜面を上がっており、尾根線上で東に向きを変えている。西側の大きな谷の石塁付近をA区、東の小さな谷の石塁付近をB区と呼称している。

調査は26次調査で、A区の現在水田となっている箇所に南北方向のトレンチを設定して行い、地下に石塁が残っていることや、石塁と土塁の境界を確認した。また、平成15年豪雨災害の復旧事業による調査では、49次調査として、A区の川で洗い流された部分について図化作業を行った。そのほか、26次調査地点の被害の状況を確認するためにトレンチの再掘削調査も実施している。

B区については、平成15年豪雨災害によって被害を受けた石垣について、トレンチ調査を実施した。これらの調査成果については、報告書『特別史跡大野城跡整備事業Ⅴ下巻』(2010)で、小石垣地区として詳細に報告されており、以下ではA区、B区に分けてその要点を記す。

A区では、川によって寸断された土塁の断面が、A-1地点で確認できた (Fig.66)。最上層には不規則に石材が配されており、他地点の様相も踏まえると、おそらくは土塁の表面は石で覆われていたと考えられる。内部の土層は比較的綿密な層状積土が確認できるが、下層は前面を厚くする層状の盛土があり、そのためそれよりも上層は全体が城内側に傾いている。最下層はほぼ礫からなっている状況であり、調査時は地山と判断したが、土塁の基礎盛土に該当する可能性も残されている。

A-1地点の対岸ではA-8地点で石塁断面が崩壊した状態を確認できた。前面の東西に伸びる石垣は、A-10地点から延びるおそらく近世以降の水田区画法面保護の石垣であり、その背後の小さい石材の集中はその裏込め部分と考えられる。この地点では残念ながら、大野城築



Fig.65 小石垣周辺地形図 (1/400) (福岡県教育委員会 2010 年 4 月 1 日 現在)

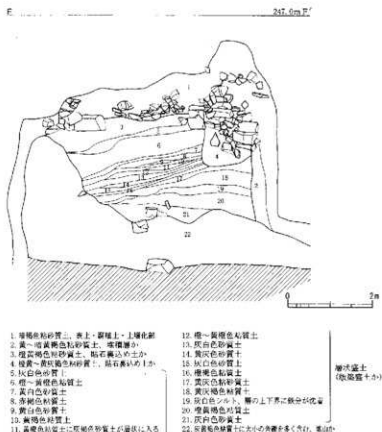


Fig.66 小石垣 A-1 地点土層図 (1/90) (福岡県教育委員会 2010 年から転載)

造当初の石垣前面の石垣は確認できなかったものの、石垣の城内側の法面の石積は確認することができた。石垣内部は崩落が著しいため、石の積み方の規則性等は確認できなかったが、基本的には石のみからなるものと考えられる。

上記 A-8 地点で確認した内側法面については、西岸部の A-2 地点、東岸部の A-7 地点でも確認でき、その状況を記録している (Fig.67)。A-7 地点では、一部だが重箱積みの状況を確認できる。

石垣の幅については、26 次調査で調査し、49 次調査で再掘削を行った A-9 地点トレンチで確認できる (Fig.68)。トレンチ北端の石は近世以降の A-10 地点石垣であり、その背後の小礫は A-8 地点と同様の石垣裏込めである。石垣本体の外面の石垣はその奥で大きな石を組んだ状況で確認できた。基底部は深く埋没していると考えられる。内面の石垣はそこから 6 m 程内側で確認できたが、外面よりも小さな石を用いている。石垣内部は大小様々な大きさの石材で充填されている。報告書では、石垣本来の高さはこの上に 2m 程の高さがあったと推定し、そこに用いられたであろう大きな石材は、A-10 地点に存在する石垣では少なすぎることから、上部は盛土によって構築し表面を貼石垣で覆った可能性に言及している。

なお、A-9 トレンチでは東側で石垣と土塁の接点を確認している。トレンチ東壁の 10～13 層は層状積土で、この付近から東は土塁である。

A 区ではそのほか、川のやや上流で護岸のためと思われる石垣を A-3～6 地点で確認して

石垣幅
は 6 m

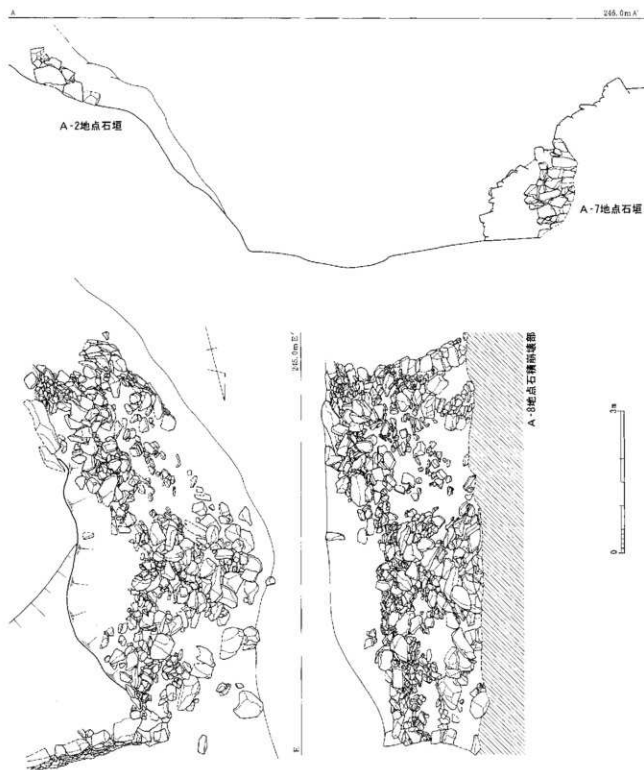


Fig.67 小石垣A-2・7地点石垣立面, A-8地点実測図 (1/80) (福岡県教育委員会 2010 から転載)

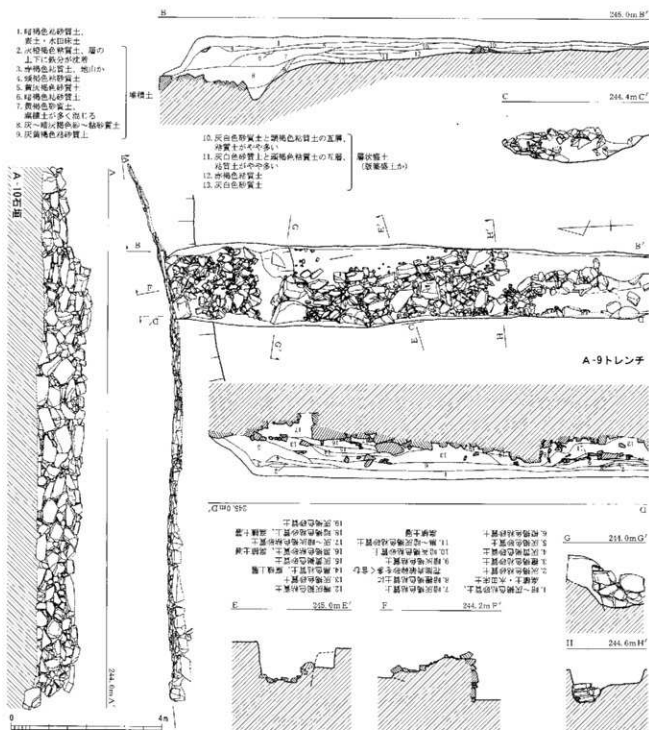


Fig.68 小石垣 A-9・10 地点実測図 (1/100) (福岡県教育委員会 2010 から転載)

いるが、この地に水田が開かれた時期の遺構の可能性が高い。

B 区では、崩落した部分の石垣を対象に図面作成を行い、内側天端想定場所に 1・2 トレンチ、石垣基部前面に 3 トレンチを設定して調査を行ったほか (B-1 地点)、石垣南側の土塁の崩落箇所について調査を行った (B-2 地点) (Fig.69)。

石垣は 1・2 トレンチで上面の石積を確認し、その後天端に堆積した土砂を広く除去した。天端では大きな石を用いず、拳大～人頭大程の角礫を敷き詰めるような状態を呈していた。天

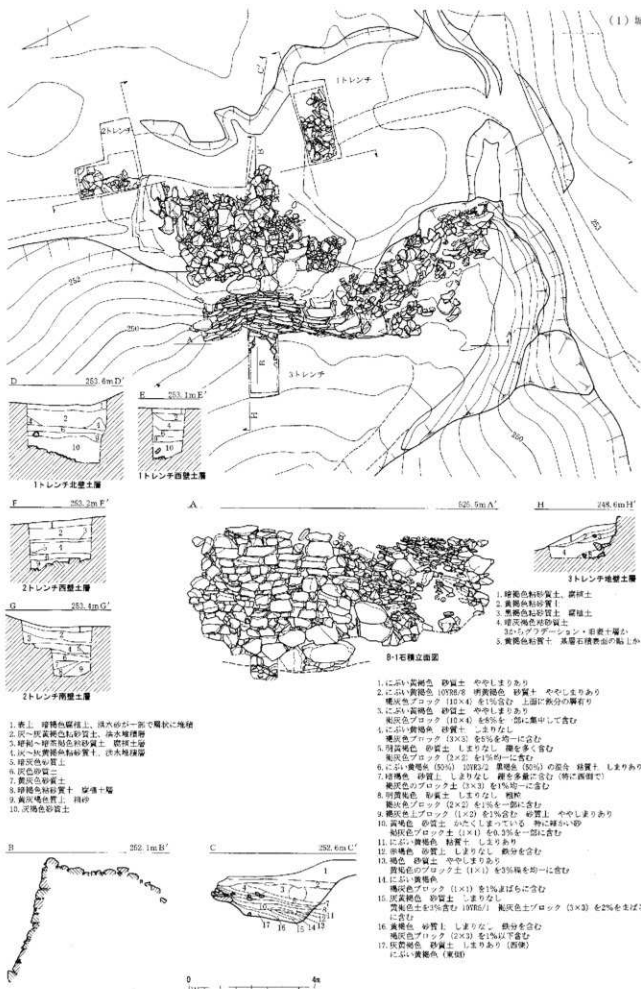


Fig.69 小石垣 B-1 地点実測図 (1/120) (福岡県教育委員会 2010 から転載)

端は内側に向かって緩やかに傾斜しており、この点報告書では、内側の法面は緩やかな傾斜であった可能性と、天端の傾斜は崩落によって生じたもので、下位に切り立った面が残存している可能性に触れている。

石塁前面では石材の組み方が観察でき、上半分はある程度、大きさの揃った石材を用いるため整った印象を与えるが、下半分は石材の大きさや形状がまちまちであり、やや乱れた印象である。重箱積み多用する一方で、約80cm毎に横目地を通そうとする意識を感じることができ、これは表面のみでなく石塁内部までつながっているような状況が確認できた。

土塁との接点は面的な構造があるわけではなく、石材が突出して土塁の中に埋まっている箇所もあり、本地点での石塁と土塁は歩調を合わせて構築されたような状況である。

B-2地点とした石垣南側の土塁については、崩落面で土層が観察できたため図面を作成した(Fig.70)。崩落部の最下層には地山である岩盤が露出しており、土塁はこの岩盤を段状に掘り込んだ上で築いていた。その上に47～55層のやや粘性のある土で基礎盛土を構築し、その上に一段奥まった位置から層状に突き固める盛土を行っている。層の内部には拳大の角礫が非

内部まで
横目地を
通

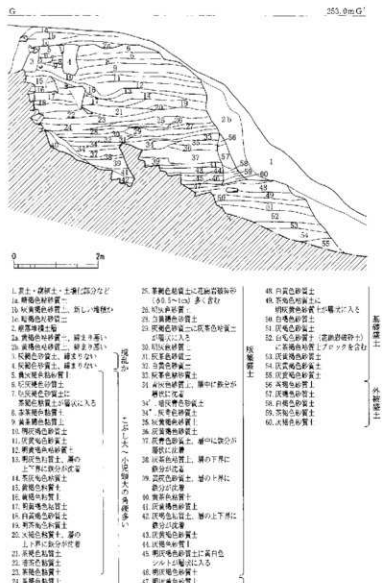


Fig.70 小石垣B-2地点土層図(1/90)(福岡県教育委員会2010から転載)

常に多く突き込まれており特徴的である。版築盛土と思われるが、板柱列や横木痕は確認できていない。その前面の 56～60 層は人工的な水平盛土と考えられ、おそらく外被盛土と思

外被盛土

(2) 城門

大野城跡の城門は、以前から太宰府口城門、坂本口城門、水城口城門、宇美口城門が知られていたが、平成 15 年豪雨災害の災害復旧事業に伴う調査以降、新たに原口城門、観世音寺口城門、クロガネ岩城門、北石垣城門、小石垣城門が発見され、現在までのところ 9 箇所が知られている。それらの位置は大きく南北に分かれるが、これは麓から城へと続く登城路が大きく南北に分かれることに起因する。本書では大きく南北に分け、主に発掘調査の成果を報告するが、発掘調査が行われていない城門跡についても残っている石製唐居敷等についての情報をまとめる。

1) 南側の城門

南側の城門は、いずれも四王寺山の南側からの尾根伝いの登城路を伴う。四王寺山の南側は水城や筑前国分寺、太宰府政庁、観世音寺等、古代の主要な施設が多く存在しており、それら各所から山を登り、大野城内に入る門として機能したことが想定される。太宰府口城門や観世音寺口城門、坂本口城門は南側外周土塁に設けられたものであり、城内に入るには南側内周土塁にも城門が想定されるが、現在のところ明確な城門跡は確認されていない。

a. 太宰府口城門 (Fig.71～76, PL.25～27)

太宰府口城門は、南側外周土塁の東寄りに位置し、増長天地区の建物群からは南東に 150 程 m 離れている。南東側に開析する広い谷を遮る格好で土塁や石塁を築くが、谷筋を水ノ手口石塁で塞ぎ、城門はその谷の東側の一段高い緩斜面を整地して設けている (Fig. 5)。水ノ手口石塁と城門との取り付け部は内側に小さく屈曲して方形を呈し、この部分の石積が高く盛り上がっている。この部分は戦国時代における岩屋城攻めの際の「石こづめのぼば」の伝説の舞台となった場所である。城門東側と土塁との接点も同様に内側に小さく屈曲して方形を呈し、土塁西端に石積を施している。

現地は、長沼賢海が調査する前は城門外側の敷石が 3 枚程露出していたが、昭和 5 年の発掘調査時に門礎を確認し、石列を露出させたことが写真から分かる。昭和 60 年の調査着手時は、その石列以外は堆積土でかなり覆われており、また門礎の一部は門の両側の石垣によって覆われている状態であった。調査は主に 21～24 次調査で行い、その他に 29～32 次、そして 41 次調査でも災害復旧に伴う調査として行った。その結果、Ⅲ期にわたる変遷を確認することができ、以下では時期毎の構造について説明する。

3 時期
の変遷

Ⅰ期城門 (Fig.74)

Ⅰ期城門の遺構は、Ⅲ期石積を除去することで確認できたものが多い。東側の柱穴は実際には確認できていないが、Ⅱ期城門がⅠ期城門の位置を踏襲したと考えると、西側の柱穴をⅡ期城門の中心線を折り返すことで、梁行 3 間 (9.0m)、桁行 4 間 (9.0m) の掘立柱建物と想定で

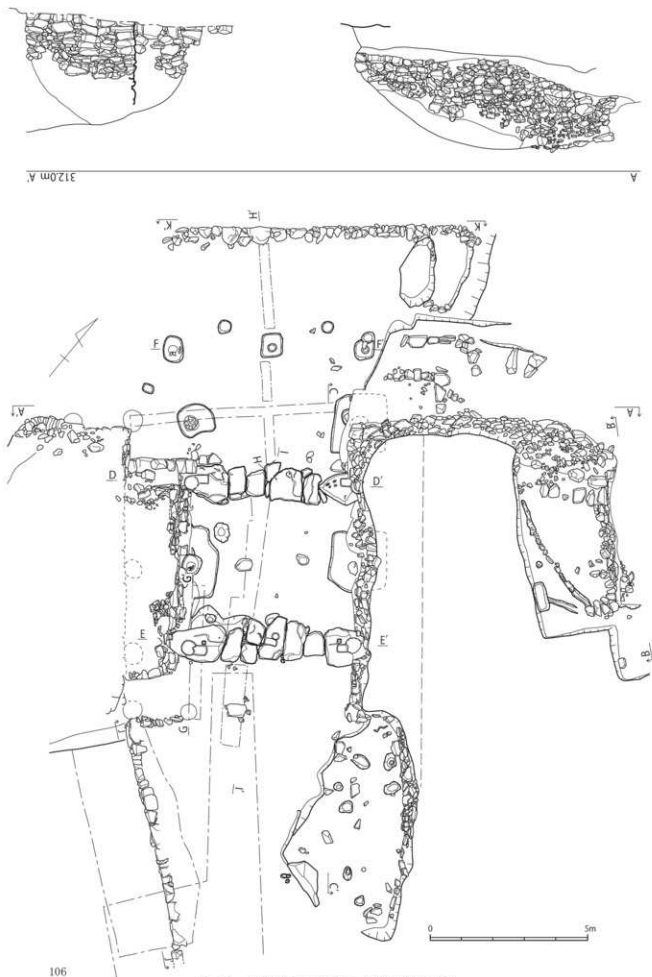


Fig.71 太宰府口城門平面図・立面図 (1/120)

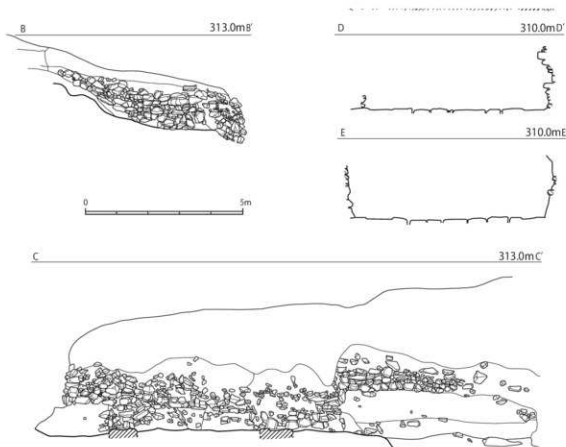


Fig.72 太宰府口城門立面図 (1/120)

きる。柱間は、桁行は南北両側2間が1.8m（6尺）、中央の2間が2.7m（9尺）、梁行は東西両側2間が1.8m（6尺）、中央が5.4m（18尺）である。西側の柱列は、北から2番目の柱穴が確認できないものの、ほか4つは水ノ手口石塁の東端部に接する。この石塁東端部は直線的で面を形成している。また、城門東側については、21次～24次調査では、Ⅲ期石積をあまり除去せず、Ⅰ期石積の確認は一部に留まっていたが、30次調査の11トレンチで、現在の表面から1m奥の箇所、粘性土を間詰めしたⅠ期の石積を確認した。さらに、40次調査で崩壊・不安定化したⅢ期石積を除去したところ、高さ約2mほどのⅠ期石積を良好な形で確認することができた。Ⅰ期石積の石材は比較的小さく、隙間に赤褐色の粘質土を充填した縦積で、版築盛土に石の半分程が埋没するようにほぼ垂直に積み上げられている。石材は下部にいくほどやや大きくなり、一部で重箱積を用いることで縦に目地が通る箇所が見られる。

これら石積に接する柱穴は、柱掘り方の埋土が明確でなく、柱穴のみが確認できる状況であった。一方、中央2つの柱穴は柱掘り方が明瞭に確認でき、一辺160cm程と大きなものである。城内側の西から2番目の柱穴からは、径50cm程のコウヤマキの柱材が良好な状態で残存しており、「浮石部」とも読める文字が刻まれていた。この柱材は年輪年代測定によって、648年に降に伐採されたことが判明している。

柱材出土

なお、22次調査では、城門北西隅の柱穴より西側1.8m（6尺）の箇所にも、石塁の北側壁面に覆われる格好で柱穴が一つ確認されている。Ⅰ期城門に伴うことが想定されるが、その性

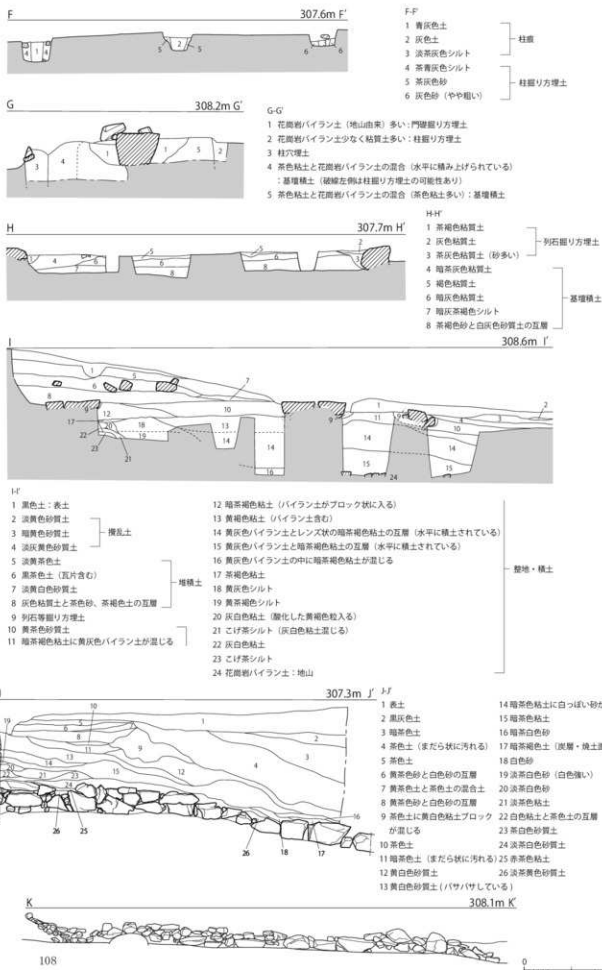


Fig.73 太宰府口城門土層図・立面図 (1/80)

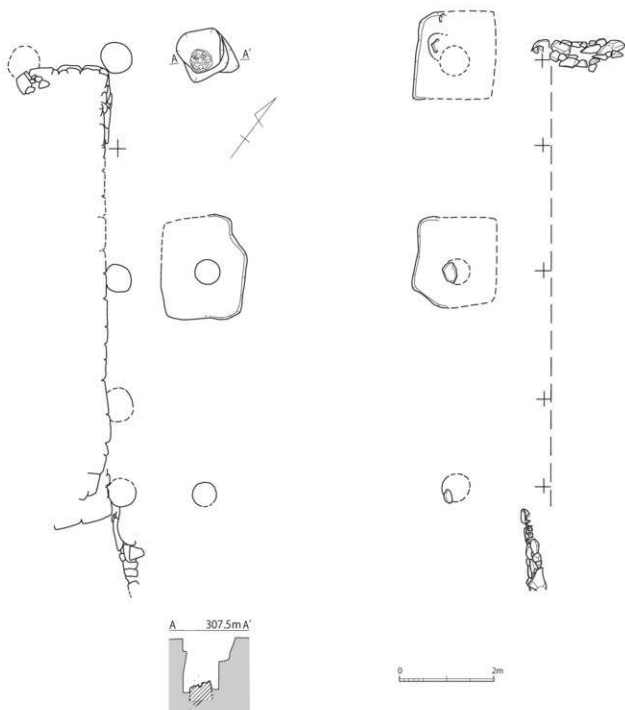


Fig. 74 太宰府口城門第1期遺構実測図 (1/80)

格は現段階では不明と言わざるを得ない。

II期城門 (Fig.75)

I期の掘立柱による城門を廃して、礎石建物の城門に作り替えたものである。礎石は4個確認できるが、これらは城内、城外側のほかの大きな石と組み合わせ、2列の石列として設置している。礎石には柱座や方立穴が削り込まれ、前面の礎石にはさらに軸摺穴も見られる。柱座の直径は50cm程、深さは2cm程で、方立穴は柱座に接して、大略長方形で33cm×22cm、深

II期は
礎石建物

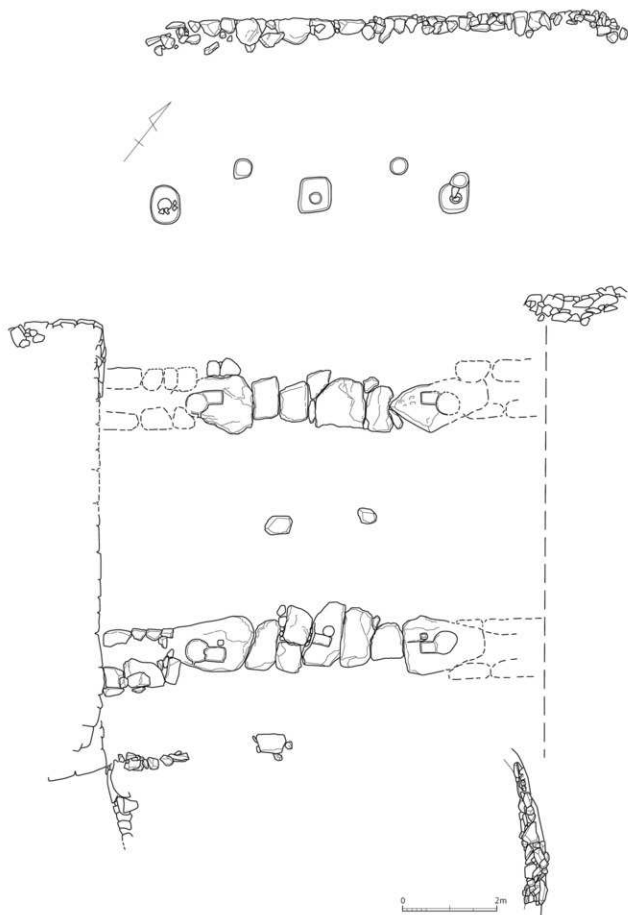


Fig.75 太宰府口城門第Ⅱ期遺構実測図 (1/80)

さ4～5cm程度である。軸摺穴は正方形で一辺が12cm程、深さは15cm程と深い。この軸摺穴は方立穴よりも城内側に見られることから、扉は城外側の2つの礎石のみにつき、内開きであったことが分かる。

なお、前面の列石中央の石には方立穴及び軸摺穴が見られる。この唐摺敷は、かつて長沼賢海が坂本口から運んだものと考えたが、江戸時代は坂本口に2個存在していたとみられることから、鏡山猛はこれを否定し、太宰府口城門の古期のものとした。この見解は今に引き継がれ、この中央の唐摺敷は1期のそれを列石の一つとして転用したのと考えられている。

城門は1間(5.25m)×1間(5.25m)と1期と比べて小さく、城門の左右の袖部は1期と変わっていなかったと想定され、そのため礎石から袖部石積までは空隙が存在することになる。この部分については、22次調査で前面西側の柱筋の延長で、20～30cm程の平石を幅120cm程、長さ160cm程列状に敷いた遺構を確認できた。これらの石は外側に面を合わせており、全面に敷き詰めるのではなく中央部には石が存在しない。このことから、礎石と袖部石積との間には、壁状のものを構築していた可能性が考えられる。この空隙部の石積は、40次調査で前面東側の礎石上でも一部を確認した。

なお、柱間は概報『特別史跡大野城跡Ⅶ』(1991)では桁行(東西)方向を5.25m程、梁行(南北)方向を5m程としている。確かに東側の南北方向の柱座中央間の距離は5.1m程と狭いが、南側の東西方向の柱座中央間と西側の南北方向の柱座中央間の距離は共に5.25mであるため、5.25m(17.5尺)等間の規格を意識した可能性がある。

また、門の床面では中央付近に40cm程の板石が東西方向に並んで設置され、城門外側にも同様の板石が一つ確認できる。規則正しく配置されていることから、門の機能に関するものであったことが想定される。

その他注目される点として、Ⅲ期の石積を除去した際、Ⅱ期城門の遺構面で、地鎮具と考えられる鉄製の小型模造品を径1m程の範囲で確認したことがあげられる。Ⅲ期改変時の地鎮の痕跡と考えられる。

地鎮具出土

Ⅲ期城門 (Fig.76)

礎石はⅡ期のそれを踏襲するが、東・西袖部の石積を大きく増築している。Ⅱ期は礎石と袖部石積までの空隙を壁状の構築物で遮断していたが、その部分を石で埋めてしまい、礎石の際まで石積が迫る構造に改変している。その結果、城門内部の空間は通路部の幅のみになった。41次調査では、城門東側のこの部分の石積が横目地を通す意識が看取され、また解体の際に多量の土砂が排出しことから、土砂を使って隙間を埋める、やや粗雑な積み方であったとの所見がなされている。

Ⅲ期は袖部を増築

なお、概報ではⅣ期として、礎石の柱座の一部を覆った東西の石積について説明がされている。この石積は、長沼が調査した際には見られなかったのに対し、鏡山氏が調査した際には存在しており、概報では長沼の調査後に石壁の崩落防止のためにつくられたものであろうことが指摘されている。

城門に伴う遺構 (Fig.77)

Ⅱ期・Ⅲ期の内側礎石列の内側約8mの場所では、北側に面を揃える30cm程の石で構成された石列を東西方向に9m程確認した。この石列の北側は谷が迫っており、31次調査の12

内側に石列

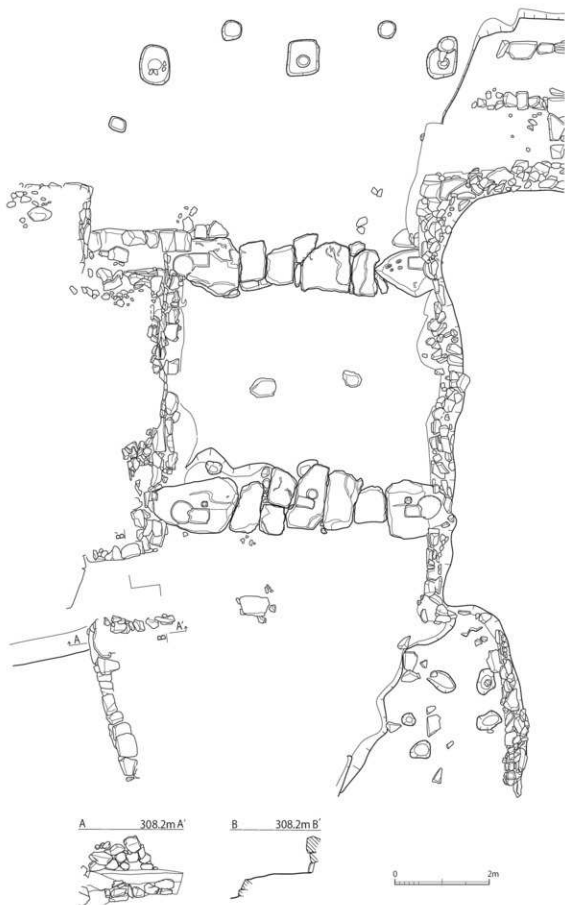


Fig.76 太宰府口城門第三期遺構実測圖 (1/80)

トレンチでは湿地を確認していることから、湿地と城門を区画する意味合いがあったことが想定され、『特別史跡大野城跡整備事業』(2006)では、斜面から城門に向かって流入する雨水をせき止め、西側にある水溜場へ誘導し、城門部分を乾いた状態に保つ役割も想定されている。またこの石列と門との間には、掘立柱列が2列存在し、門からの行く手を阻むように存在し、目隠し塼の役割があったことが考えられる。概報では石列及び掘立柱列ともにⅡ期以降の可能性を示唆しているが、正確な設置時期は明らかでない。

内 側 に
掘 立 柱 列

この目隠し塼の先の城内へ侵入するには、おそらく右側へ曲がり、東側の斜面を登ったものと思われる。31次調査の17・18トレンチでは、幅1mの路面幅の旧山道を確認している。

また、Ⅱ期・Ⅲ期の外側礎石列の城外側約2.5mの場所では、東西方向に延びる石列の西端部がわずかに残っているのを確認した。この石材はⅠ期の柱穴に一部落下していることから、Ⅱ期・Ⅲ期の城門の外側端になる可能性がある。その場合、前述した城門の内側端の石列との距離は15.8m程になり、この間が城門の基壇と考えられる。基壇の高さは、城門外端部で50～60cm程である。ただ、城門の基壇は、I-I'の土層では基壇の端を窺わせる土層は確認できず、門南側の整地と一連の土で構成されているようである(Fig.73)。この整地はJ-J'の土層や29次調査の29トレンチでもかなりの高さがあり、城門導入部を含め、城門を築造した際には、谷の斜面をかなり埋めて造成したことがうかがえる。

その城門南側の導入部では、長さ40～70cm、高さ20～40cm程の石で築いた石積が22次調査で確認されている(Fig.73 J-J')。これは水ノ手口石累のある谷の東側の法面肩に、導入部に沿って化粧したもので、上部は崩落し原形を留めていない。この石積は、城門西側のⅠ期の石積面と接続していることから、Ⅰ期につくられたと考えられる。この導入部は分厚い盛土を行うことによって、城門へのスロープ状の道を形成していることが、29次調査の29トレンチで明らかとなっている。

前 面 は
スロープ状

b. 原口城門 (Fig.77, PL.28)

原口城門は東側土塁に位置し、尾花地区の建物群から東に約200m離れている。平成15年豪雨災害復旧事業に伴い、太宰府市教育委員会が40次調査として原地区の土塁の調査を行い、南地区と称する南東方向に開析する谷の頂部付近で確認したものである(Fig.38)。詳細は太宰府市教育委員会の報告書『大野城跡1』(2015)にて報告されており、ここでは要点を記す。

門は南東側に開口し、両側で石垣、床面で敷石や石製唐居敷、柱穴を確認した。石垣は土塁線から城内側と城外側で様相が異なり、城外側では10～40cm程の割石を3～5段程、床面から1～1.5m程積んでいるのが確認できるが、崩落した石を50個程確認したため、本来はさらに2～3段、床面から1.8～2.0m程積みまっていたと考えられる。一方、城内側では、1m程の大きな石を立てており、中には拳大の根石が見られるものもある。これらの石は敲打加工を行って面を形成している。

床面では城外寄りに石敷を確認したが、本来は全面に敷かれていたと考えられる。石と石の隙間には黄茶色砂質土が入っており、目詰めした可能性もある。また、小穴を複数確認したが、SX003やSX004は土塁の上にあたり、土塁の版築盛土を行う際に立てられた柱穴とも考えられる。

床 面 に
石 敷

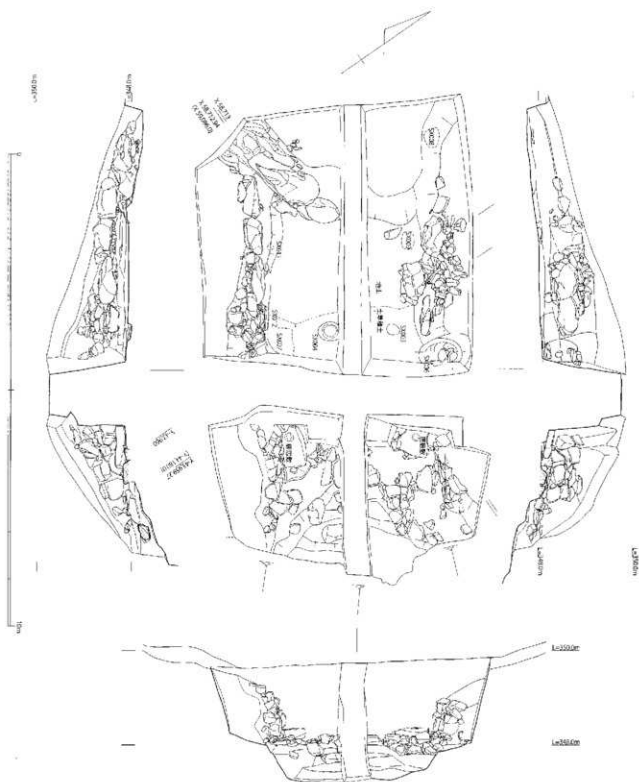


Fig.77 原口城門実測図 (1/80) (太宰府市教育委員会 2015 から転載)

城外寄りの石垣基底部では南北両側で石製唐居敷を確認した。北側の唐居敷は長さ 54cm 以上、幅 71cm、厚さ 16cm で、径 16cm、深さ 6cm の軸摺穴を持つ。南側の唐居敷は長さ 92cm、幅 49cm、厚さ 21cm 以上で、径 18cm、深さ 8cm の軸摺穴を持つ。両軸摺穴ともに鉄錆の痕跡が見られた。両唐居敷とも側面に円形の削り抜きが見られ、この部分に掘立柱が存在したことが想定されるが、いずれも削り抜き部分が石垣に接しており柱を立てる空間はない。

柱穴自体は、城門中央付近の南北両側の石垣基底部で確認した SX006 と SX007 が相当すると考えられている。北側の SX006 の柱掘り方は 91cm 程の大きさの方形プラン、南側の SX007 の柱掘り方は 65cm × 72cm 以上の方形プランで、両掘り方とも柱抜き取り痕が確認できる。両者の柱間は 3.6m 程である。

以上の状況から、報告書では城門について 3 時期の変遷を考えている。Ⅰ期は SX006 と SX007 を門柱とした時期で、確認できた唐居敷も元々はこれらに添えられた可能性がある。Ⅱ期は唐居敷を転用した時期だが、石垣との間に柱を置く空間がなく、礎石としてこの上に柱が立てられた可能性が指摘されている。Ⅲ期は石垣を積み直した時期である。上述したように、石垣は城内側と城外側で様相が異なっており、石垣裏込め土中に縄目叩きの瓦を含んでいることから、8 世紀以降に石垣の修理が行われたことが想定されている。

3 時期
の変遷

c. 観世音寺口城門 (Fig.78 ~ 82, PL.29)

観世音寺口城門は、南側外周土塁の中央に位置し、増長天地区の建物群からは南に 150m 程離れている。増長天地区の南には、南側に開析する大きな谷が存在するが、その谷の南西側の尾根を越えた西側に小さな谷が入っており、その頂部に城門を築いている (Fig.78)。西側の土塁内側には通称「馬責 (うまぜめ)」と呼ばれる平坦地が広がっている。平成 15 年豪雨災害復旧事業に伴い、太宰府市教育委員会が 48 次調査として調査を行い、土塁の切り通し部分で石材を用いた城門遺構を確認した。詳細は太宰府市教育委員会の報告書『大野城跡 1』(2015) にて報告されており、ここでは要点を記す。

調査は、復旧事業で切り通し部分に排水路を設けるため、その部分にトレンチを設定したところ、城門の石敷や石階段等を確認した (Fig.79)。城門は石敷の時期とそれ以前の時期の 2 時期 (Ⅰ期、Ⅱ期) あったことが判明した。Ⅰ期の遺構は一部のみの確認に留まった。

2 時期
の存在

Ⅱ期の床は石敷で壁は石垣、城内から城門に下る箇所には石階段を設けている。石敷は、一様ではなく、中央付近は、ほかよりも大きな石をほぼ水平に揃えた石畳が、門道方向に直交して幅 1.88m 程にわたって敷かれていた (Fig.80)。上面を平滑に揃え、ここが南北に迫る土塁の最頂部ラインともほぼ一致していることから、城門の中心部であり、門扉がここにあったことが推定される。なお、報告書では、石畳幅 1.88m の 1/2 の 0.94m を一単位として、石敷が規格制を有している点が指摘されている。

Ⅱ期は
石敷

石垣は前面の崩落部法面で確認でき、内法幅は 4.37m 程である。石段は、1.5m の比高差がある部分に 10 段設けてある。このⅡ期の城門に特徴的なのは、石積裏込土等に黄色系の土が使用されていることであり、同様の埋土を持つ遺構が、この時期の城門に伴う可能性がある。崩落箇所の城門南側で確認した SB001b は、この埋土で構成された直径 1.6m 程度の柱掘り方で、柱痕部分は径 30cm ~ 40cm 程ある。Ⅱ期の門柱の一つと考えられる。

外周土塁案(九歴)

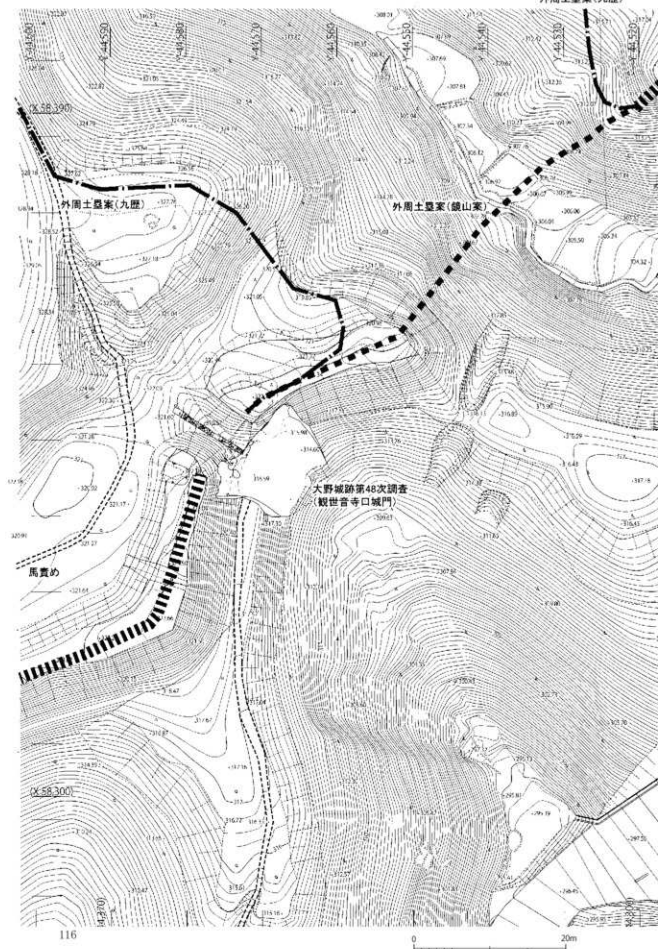


Fig.78 観世音寺口城門周辺地形図 (1/500) (太宰府市教育委員会 2015 から転載)

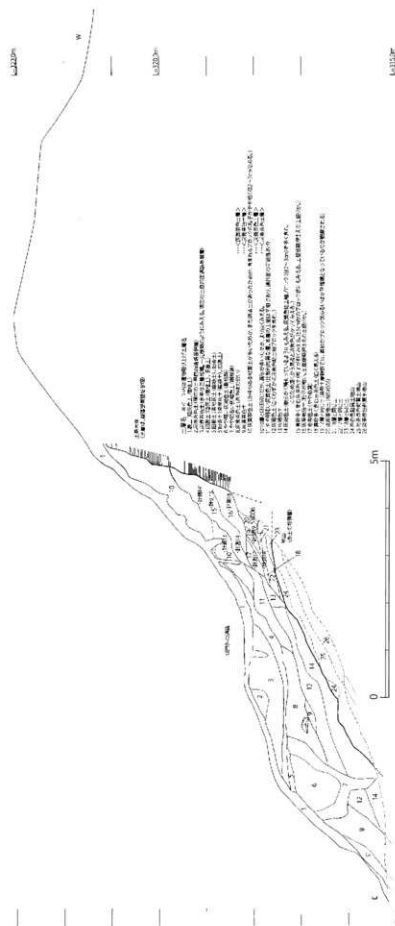


Fig.82 観世音寺口城門崩落部南壁土層図 (1/80) (太宰府市教育委員会2015から転載)

I期の城門遺構は、土塁への掘り込みを崩落部法面で確認したほか、同じく崩落部法面で柱穴(SB001a)を確認した(Fig.81)。SB001aは掘り方は大きさが1m程で、柱痕は径50cm程であるが、城門の石敷に塞がれており、また埋土がII期の黄色系の土とは異なり、土塁版築土と極めて近似していることからI期に伴うものとされている。

その他、城門及び土塁に関係するものとして柱列が挙げられる。SX003は、土塁前面基礎部に位置し、土塁築造当初のものと思われる。また、SA015(SX006・007)及びSA020(SX008・009・011)は、黄色味を帯びた埋土で、II期の門柱SB001bとほぼ同じ高さで同一線上にあり、また土塁前面に凭れかかる土を切り込んでいることから(Fig.82)、II期のものと思われる。

この観世音寺口城門は崩落部法面の土層から、土塁を掘り込んで設置していることが分かるが、この部分の土塁は、版築盛土の下に位置する50・59・66層の基礎盛土が粘土を土糞等に詰めていた可能性が考えられること、また版築盛土の中に柔らかい層(Fig.81 34～39及び41層)が間層として入ることが注目される。

盛土に
土糞か

d. 坂本口城門 (Fig.92)

坂本口城門は南側外周土塁の西端に位置する。以前から石製唐居敷が一つ露出しているが、過去に発掘調査はされていない。『太宰府旧跡全図北』には当該地に「門ノ石スエ」が2個描かれており、かつては石製唐居敷が揃って存在していたようである。現存する石製唐居敷は、半円形の削り込み、円形の軸摺穴、方立穴を持っており、城門は掘立柱建物であったと考えられる。この坂本口城門の石製唐居敷は、当初の位置から動いている可能性があり、その検証はできていない。周辺の土塁線も不明瞭なことから、当初の位置が確定することで土塁線の推定位置も変わるため、重要な課題である。

e. 水城口城門 (Fig.92)

水城口城門は西側土塁に位置する。現在の登山道の両側に二つの石製唐居敷が水平に据わっており、おそらく原位置を保っていると思われる。過去に発掘調査は行われていない。石製唐居敷は両方とも半円形の削り込み、円形の軸摺穴、方立穴を持っており、城門は掘立柱建物であったと考えられる。柱間は4.8m(16尺)程であり、現在掘りくぼめられている登山道の部分は、かつては水平であったと考えられる。

2) 北側の城門

北側の城門に続く登城路は全て大野城内を北流する内野川の谷から派生している。最も主要な登城路と想定される内野川沿いは、現在はその川により消滅しているが、百間石垣から派生する石塁及び城門があったと想定され、宇美口城門と呼称されている。また、内野川の支流に位置する小石垣城門も同様の立地が想定される。その他、北石垣城門、クロガネ岩城門は尾根伝いの登城路を伴い、出入口口に大きな段差を設ける懸門構造となっている。

a. クロガネ岩城門 (Fig.83～88, PL.29・30)

クロガネ岩城門は、西側土塁に位置し、百間石垣から西に180m程離れている。付近は尾

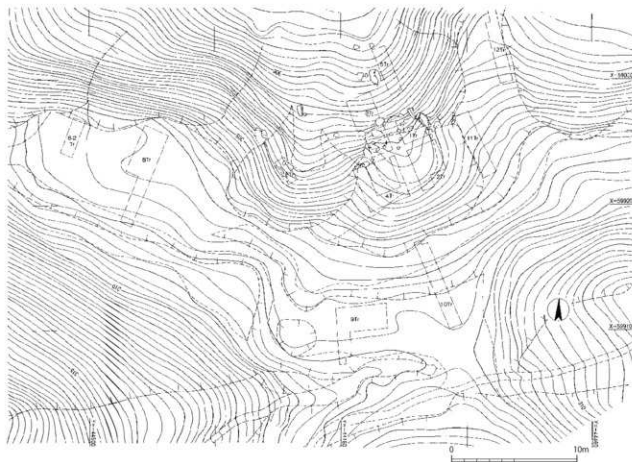


Fig.83 クロガネ岩城門周辺地形図 (1/300) (九州歴史資料館 2016 から転載)

根が北東方向に延びているが、土塁及び城門は尾根線から北側に約6～7m下がった位置にある。当該地は、『太宰府旧蹟全図北』の図中に「クロカ子岩 門ノ石スエ」とある箇所であり、平成15年豪雨災害に係る災害復旧事業の中で北石垣城門や小石垣城門、原口城門、観世音寺口城門が新たに発見される中、当該地についての城門の有無が注目されるようになった。その後、県や関係市町教育委員会職員をはじめ、古代山城の研究者が幾度も現地を踏査し、唐居敷の石材や石積の一部が確認されるに至ったものである。

調査は、54次調査及び54-2次調査が行われ、城門の構造が明らかとなった。詳細は54次調査については『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅶ』(2014)、54-2次調査については『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅹ』(2016)にて報告されており、ここでは要点を記す。

54次調査では城門部に1～4トレンチ、54-2次調査で城門前面に5・6トレンチ、城門背後に9・10トレンチ、城門周辺土塁に8・8-2・11・12トレンチを設定した(Fig.83)。

調査の結果、城門部は前面の半分以上が崩落していることが判明したが、1・3トレンチでは城門の東西側壁の石積が確認でき、これにより門道部は4.25m程になることが判明した(Fig.84)。石積は大きな板状の割石を用い、基底部の石を立て、その上は平積みになっている。上に積み重ねる際に後ろへ控えて積んでおり、内側への崩落を防ぐための工夫と見られる。石積は現状では1.6m程が遺存している。

門道部は3トレンチの土層から、一度岩盤まで掘り込んだ後に明褐色土や淡褐色土などを

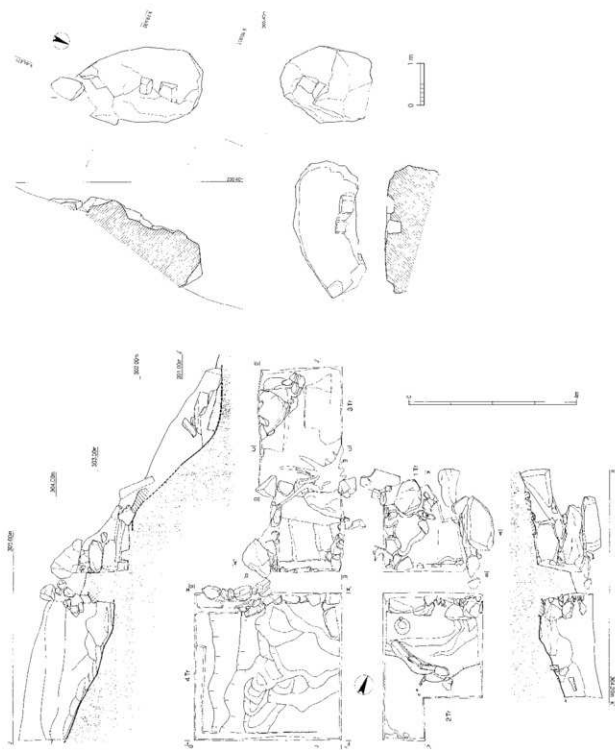
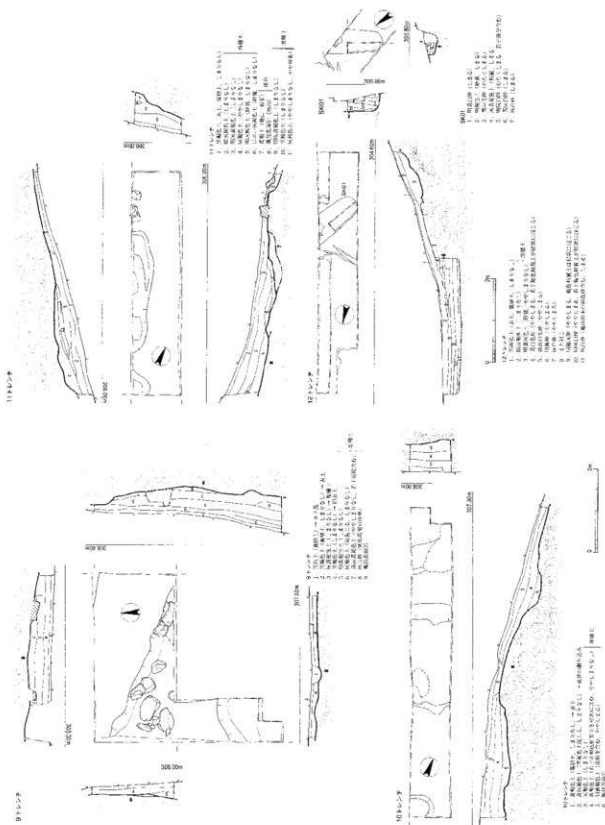


Fig.84 クロガネ岩城門1～4トレンチ集測図及び唐店敷石材現況図 (1/90・1/40)
(九州歴史資料館 2014・2016 から転載)

硬く突き固めて整地をしたことが分かり、1トレンチで部分的に同じ高さに並ぶ石材を確認したことから、通路面は石敷であった可能性がある (Fig.85)。なお、床面中央部は流水によって抉られており、その中には崩落した石材が落ち込んでいる状況を確認した (B-B' 土層)。城門前面部の崩落も流水の影響による可能性がある。

また、2トレンチでは城内への通路に伴うと推定される石列を確認した。基盤層を浅く掘り込み設置しており、現状では南東方向に4石は確実に並んでいる。4トレンチでは石列は確認



性が考えられる。なお、前面には唐居敷が存在するが、これは原位置から動いていることが明らかとなった (Fig.84)。唐居敷は花崗岩製でやや風化が進み部分的に欠損しているが、現状で長軸 144cm、短軸 67cm、厚さ 52cm、上面には軸摺穴や方立穴が残っているが、門柱側を失っている。軸摺穴は上面で一辺 13～14cm 程、底面で 11cm 四方と少し小さくなる。方立穴は長さ 18cm 以上、幅は 20cm である。軸摺穴には部分的に鉄錆の付着が認められ、鉄製の軸摺金具がはまっていたと考えられる。軸摺穴と方立穴の配置から、城門東側のものであり、向きが同じことからずり落ちてきた状況と考えられる。唐居敷は門柱に添える特徴から、城門は掘立柱であったと考えられる。

石製唐居敷
を確認

城門の西側には広い平坦面が存在する。ここに設定した 8 トレンチ及び 8-2 トレンチでは、土塁を確認し、断り割りの結果、盛土は厚さ 5～15cm 程で水平に積まれていることが明らかとなった (Fig.85)。岩盤は急激に落ち込む箇所があり、段切り加工が行われていたと考えられる。また頂部では拳大～人頭大の板状の石が多く見られ、石敷を行っていた可能性が高い。城内側は幅 2.2m 程の平坦面が形成されており、通路の機能を有していたと推定される。

また、城門南側の平坦面では、9 トレンチで岩盤を掘くぼめた通路状の地形を確認した (Fig.86)。10 トレンチの南半部の平坦面が一連のものにあたり、また 10 トレンチの城門に近い北側では幅 1.2m 程の狭い平坦面が存在し、犬走り状の通路であったと推定される。なお、9 トレンチでは、掘り込みは伴わないが、焼土と炭化物が集中する箇所 (図中網掛け部) があつた。

城門東側の 11 トレンチでは、西側に地形の落ち込みを確認し、2 トレンチで確認した石列を抜けて入ってくる通路の延長部と見られる。また 12 トレンチでは、北側で土塁を確認した。8 トレンチと同様、積土は厚さ 5～15cm 程で水平に盛られている。トレンチの東側に地滑り

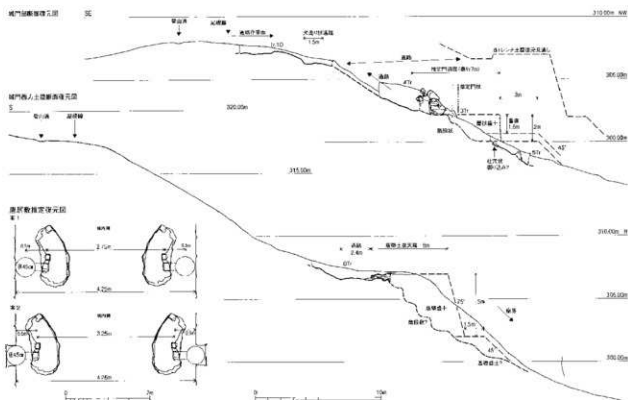


Fig.87 クロガネ岩城門断面復元図及び唐居敷想定復元図 (1/300・1/90) (九州歴史資料館 2016 から転載)

城門に入ると、城内には真っ直ぐには進めず、2・4トレンチで確認した左右に分かれる通路を上がり、土塁にある犬走り状の平坦面に至ると考えられる。また、9・10トレンチで確認したように、城内へ向かう通路が存在したと想定される (Fig.88)。

なお、調査では唐居敷の元々存在した場所の特定には至らなかったものの、東西の側壁間が4.25mということから、唐居敷の配置は図示したような2案を推定している (Fig.87)。両者の違いは、北石垣城門のように門柱が側壁に半ば入り込む構造が否かである。復元に際しては、他の城門の調査で得られた数値を参照し、門柱径を0.45m、門柱と軸摺穴の距離を0.5mとした。両軸摺穴間の距離は案1が2.75m、案2が3.25mとなる。

b. 北石垣城門 (Fig.89～90, PL.30～32)

北石垣城門は、北側内周土塁の中央付近に位置し、主城原北部建物群から北に120m程離れている。北石垣は2つの石垣からなるが、城門は東側石垣の東側尾根のさらに東側に位置する北東方向に開析する谷の源頭部に築いている。平成15年豪雨災害復旧事業に伴い測量調査を行ったところ、北石垣C区でくぼみ状の地形に石列が存在していたことから城門の可能性が考えられたため、46次調査でその場所にトレンチを設定してはじめて確認したものである (Fig.63)。詳細は『特別史跡大野城跡整備事業V下巻』(2010)にて報告されており、ここでは要点を記す。

城門は東側に開口しており、1トレンチで北側を区画する石垣を確認している (Fig.89)。この石垣は土塁の端部に施された貼石垣で、現存の高さは150cm程、積み方は不規則である。南側を区画する石垣は、1トレンチから南側に拡張した3トレンチで確認した。石垣は内側に倒れ込んだ状態で確認したが、その位置から両石垣の間、つまり城門の幅は基底部で4.68m程であることが分かった。

南北を区画する石垣の基底部ではそれぞれ唐居敷を確認している。唐居敷と石垣との間には掘立柱の柱痕があり、唐居敷の側面はこの柱痕の形状と合うよう半円形に削り込まれ、ほかに方立穴、軸摺穴を持つ (Fig.90)。北側の柱痕は径50cm程、唐居敷の方立穴は天端幅16cm程、底部幅14cm程、長さ34cm程の長方形を呈し、軸摺穴は一辺12cm程の正方形で深さ18cm程である。南側の柱痕は径45cm程、唐居敷の方立穴は天端幅15cm程、底部幅13cm程、長さ33cm程の長方形を呈し、軸摺穴は一辺14～15cm程の正方形で深さ19cm程である。この軸摺穴には鉄製の軸摺金具が遺されていた。上記両掘立柱の柱間は410cm程となる。柱穴はこれを囲むように石材が配されていることから、城門を作る際にまず柱を立てて、その後に石垣を施工したことが分かる。

軸摺穴に
軸摺金具

以上の柱穴は、城門の背面前列の柱穴になるが、前面前列の柱穴については4トレンチ等で確認できた。柱痕は城門の北側石垣の最先端部に接する位置で径45cm程、深さ100cm以上あり、基底部の石が柱痕の周りをめぐるように配されていた。また、前面前列の柱穴については崩落内部で145・146層の柱掘り方埋土の中に径50cm弱の柱痕を確認した。北側の柱との距離、即ち城門前面前列の柱間は470cm程となり、背面前列の距離よりもやや広がっている。

城門床面は焼土と炭が多く混じる177層上面であり、現状ではこの下層に明確な床面は存在せず、作り替えられた痕跡は認められていない。

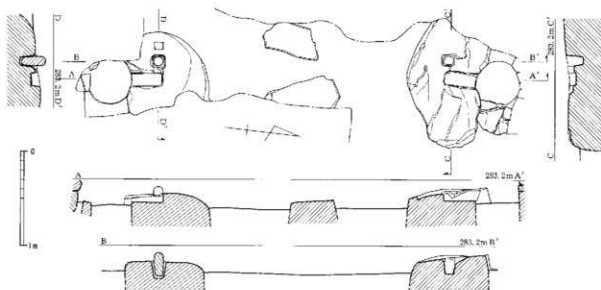


Fig.90 北石垣城門石製唐居敷実測図 (1/40) (福岡県教育委員会 2010 から転載)

なお、城門北側を区画する石垣は2トレンチで延長部分を確認しており、城門前から4m程のところまで北西に屈曲して直線的に延びる。城門を通して城内各所へと至る通路の一部を構成すると思われる。

城内への通路

城門の前は、1.4m程の崖面となっており、この崖面には人頭大の角礫を布積みした貼石垣が施されている。懸門の構造であり、この崖下には幅3m程の平坦面が存在している。ここから北側の方へと登城路が延びていたことも考えられるが、その延長には崖がありその想定は難しい。また南側にも傾斜がやや緩やかになっている箇所があり、この部分を通り東側の尾根筋に出るような登城路があった可能性もある。

懸門構造

c. 小石垣城門 (Fig.91, PL.32)

小石垣城門は、北側内周土塁の東寄りに位置する。当該地は『太宰府旧蹟全図北図』に「門ノ石アリ」という記述が見られ、従来よりここに城門があった可能性が指摘されていたが、平成15年豪雨災害の復旧事業による49次調査で、小石垣A区の地形測量の際に石製唐居敷を確認し、その存在が明らかになった。石製唐居敷は、川で寸断された小石垣地区A区の石塁の前面から10m程下流の川の左岸に位置しており (Fig.65)、元々の場所からは下流に動いていると考えられる。49次調査の際に記録が行われ、その成果は『特別史跡大野城跡整備事業V下巻』で報告されており、以下ではその要点を記す。

石製唐居敷を確認

唐居敷の平面形態は不整長方形で、長辺130cm、短辺95cm、厚さは50cm程である。半円形の削り込みに接して方立穴が掘られており、上面幅13cm、底面幅9cm、上面長

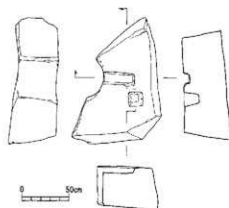


Fig.91 小石垣城門石製唐居敷実測図 (1/40) (福岡県教育委員会 2010 から転載)

さ 35cm、底面長さ 31cm程の長方形を呈し、深さは7cmである。また、方立穴の横には方形の軸摺穴が穿たれており、上面は一辺 15cm程、底面は一辺 8cm程、深さは 17cm程である。半円形の削り込みは敲打調整痕が見られ、削り込みの形状から主柱の直径は 45cm程に復元できる。その特徴は北石垣城門の石製唐居敷と極めて類似している。削り込みや軸摺穴の位置関係から、この唐居敷は城内に向かって右側のものと判断できる。城門があった場所としては、小石垣の石塁の西に接する、現在川が城壁を通過している地点が最も有力と思われる。

d. 宇美口城門 (Fig.92)

宇美口城門は、北側内周土塁のほぼ中央に位置する。内野川が流れる谷は、大野城内における最も大きな谷であり、かつては川を塞ぐように石塁が存在していたと考えられる。この石塁のうち西側が百間石垣であり、大野城内最大の石垣である。城門はこの川で寸断された箇所に位置したと思われ、昭和 34 年 (1959) の鏡山猛等、九州文化総合研究所による調査の際に川床に流された石製唐居敷が 2 つ発見された。その詳細は『大宰府都城の研究』(1968) に記されており、現在この石製唐居敷は宇美町立歴史民俗資料館に保存されている。またその後、百間石垣の整備の際にもう 1 つ確認され、これは現在県民の森センターに保存されている (福岡県教育委員会 1980)。都合 3 つの唐居敷が見つまっているわけだが、それぞれ特徴に違いが見られる。宇美町立歴史民俗資料館にある①は、かなり欠損しているが、半円形になると思われる削り抜きと方立穴、そして方形の軸摺穴が掘られているのに対し、②は円形の軸摺穴とみられる穴のみが確認できる。県民の森のセンターの③は、大野城跡では他に類例のない方形の柱座があり、隣接して方立穴そして方形の軸摺穴を持つ。それぞれが異なる時期の城門に用いられていたとすれば、門は少なくとも 2 回は改築が行われていたことになる。

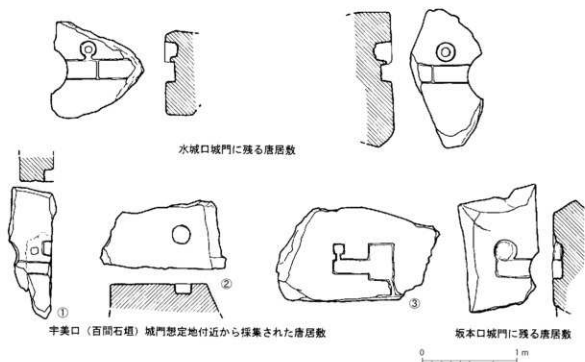


Fig.92 大野城跡出土石製唐居敷実測図 (1/40) (福岡県教育委員会 2010 から転載)

(3) 建物

大野城跡ではこれまで、倉庫と考えられる総柱礎石建物を中心に、70棟以上の建物跡が地表観察と発掘調査によって確認されている。これらは散在するのではなく、一定箇所に集中する様相を呈しており、現在のところ9つの地区名称が付されている。

なお、『第三章 調査の概要(1) 調査区と遺構名称』でも触れたように、建物の遺構番号は、概報では建物を示すSBに3桁の番号を組み合わせ、百と十の位で礎石群の地区を表し、一の位で地区内での個別番号を示す方法をとっていた。だが、地区内に10棟以上の建物が存在する場合に対応できない問題があったため、『特別史跡大野城跡整備事業V下巻』(2010)では4桁の番号に変更した経緯がある。本書ではその新番号を踏襲し、各地区毎に建物の報告を行う。

1) ハツ波地区

ハツ波地区の建物群は、大野城内中央部やや西方に位置する。東側に傾斜する地形を幾段にも造成し、それら平坦面で10棟の建物跡を確認している(SB0001～0011)。標高は290m～310mである。このほか東側のやや離れた尾根上に3棟(SB0012～SB0014)、南東側のやや離れた箇所に1棟(SB0015)の建物が存在する(Fig.93)。

調査は、8次調査で建物跡の分布状況を確認するために小規模なトレンチ調査を行い、その成果を踏まえ、9次調査で4棟の礎石建物の全面調査を行った。これら建物群は軸を揃えるものが多く、また規格性が高い。しかしSB0011とした建物については、ほかの建物とは軸方向及び柱間寸法が異なることから、性格が異なると考えられる。

SB0001 (Fig.94, PL.33)

8次調査で礎石を確認し、一部トレンチ調査を実施した遺構で、SB0002の北側に隣接する。礎石は15個確認でき、トレンチ内では4箇所の礎石据付穴を確認した。総柱建物で、梁行3間(6.3m)、桁行5間(10.5m)、柱間は2.1m(7尺)等間である。雨落溝は明らかでない。礎石は80cm～100cm程の大きさで、据付穴には20cm程の礫を根石として入れている。

SB0002 (Fig.95, PL.33)

8次調査で一部トレンチ調査を実施した遺構で、SB0001の南側に軸を揃えて隣接する。原位置を保っていると考えられる礎石は5個確認でき、トレンチ内では礎石据付穴を確認した。全ての礎石据付穴を確認できたわけではないが、その配置から、総柱建物で、梁行3間(6.3m)、桁行5間(10.5m)、柱間は2.1m(7尺)等間と判断できる。西側に延ばしたトレンチでは、側柱から120cm程の基壇際に側石列が見られ、その西側に幅100cm程の雨落溝が存在する。建物の北西にも東西方向に延びる溝跡が存在するが、こちらは軸が建物とやや異なる。礎石は80cm～100cm程の大きさで、据付穴には20～40cm程の礫を根石として入れている。

SB0003 (Fig.96, PL.33)

8次調査で一部トレンチ調査を実施した遺構である。SB0001・SB0002が存在する平坦面より西側の1段高い平坦面に位置し、SB0004とは南北に並ぶ。礎石は9個確認でき、トレンチ内では礎石据付穴を確認した。総柱建物で、梁行3間(6.3m)、桁行5間(10.5m)、柱間は2.1m(7尺)等間である。建物の南側では幅80～90cm程、深さ10cm程の東西に延びる雨落溝と考

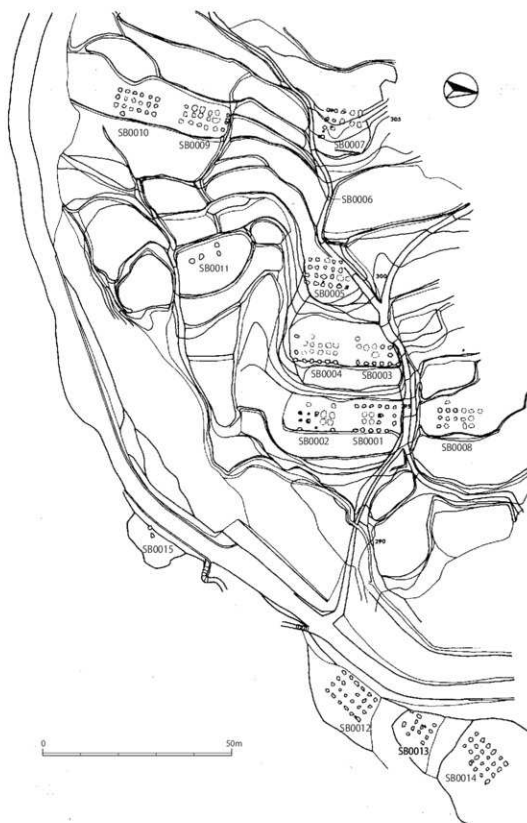


Fig.93 ハツ波地区周辺地形図 (1/1,000) (福岡県教育委員会 1977 を改変)

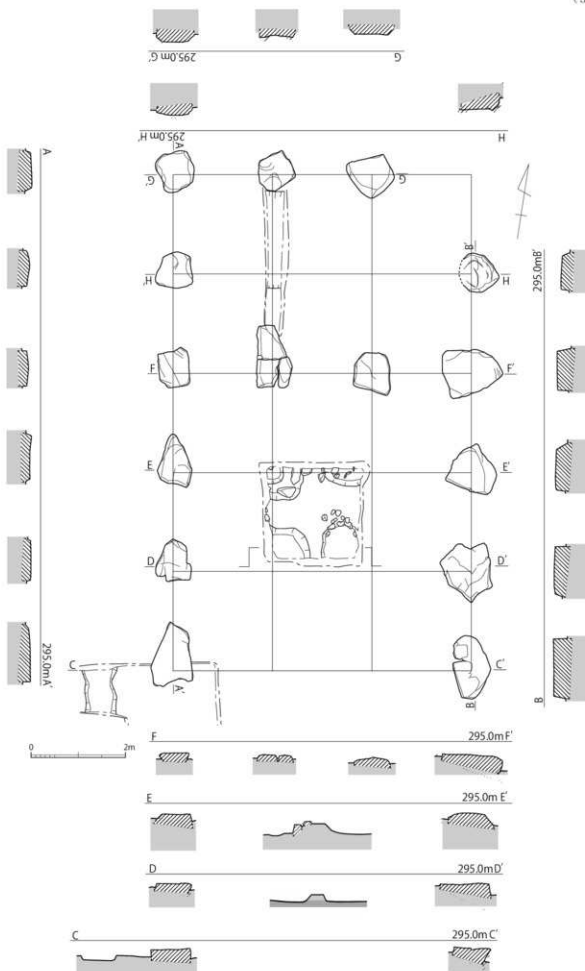


Fig.94 ハツ波地区礎石建物 SB0001 実測図 (1/80)

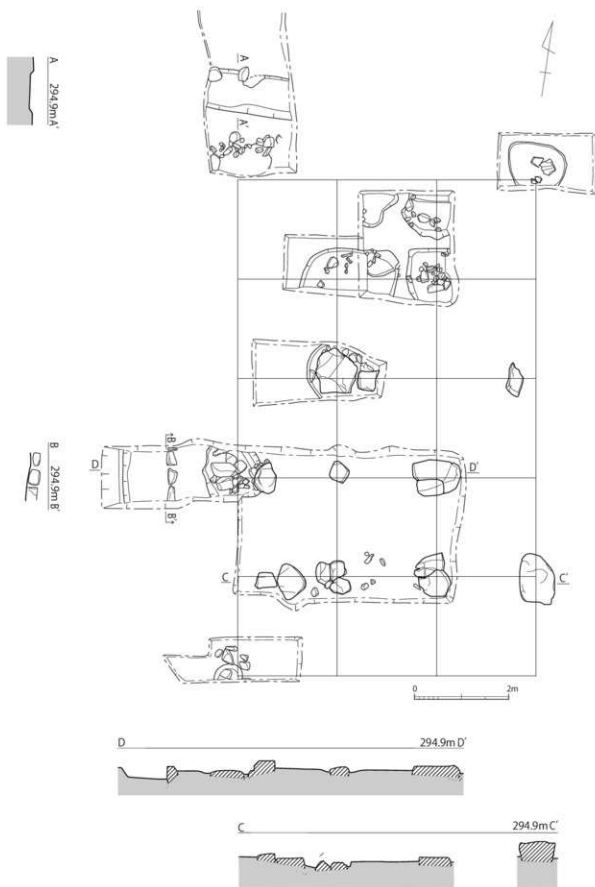


Fig.95 ハツ波地区礎石建物SB0002 実測図 (1/80)

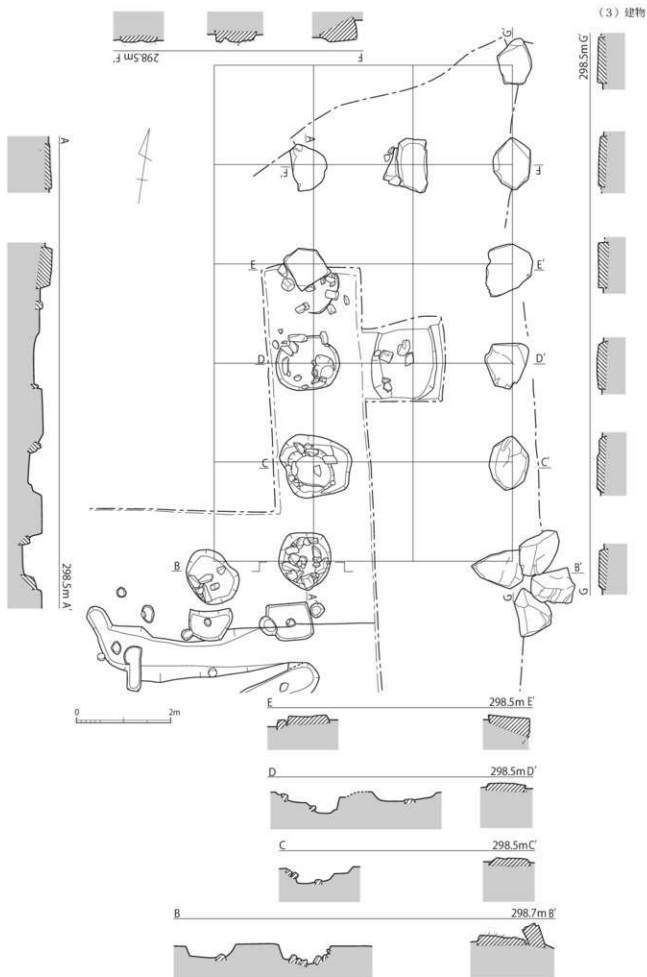


Fig.96 ハツ波地区礎石建物 SB0003 実測図 (1/80)

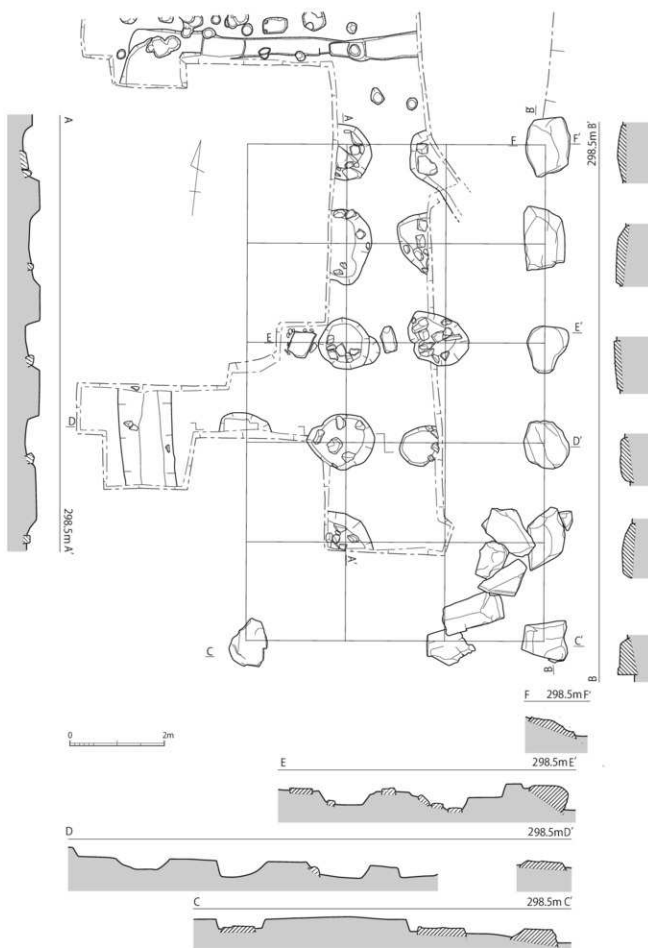


Fig.97 ハツ波地区礎石建物 SB0004 実測図 (1/80)

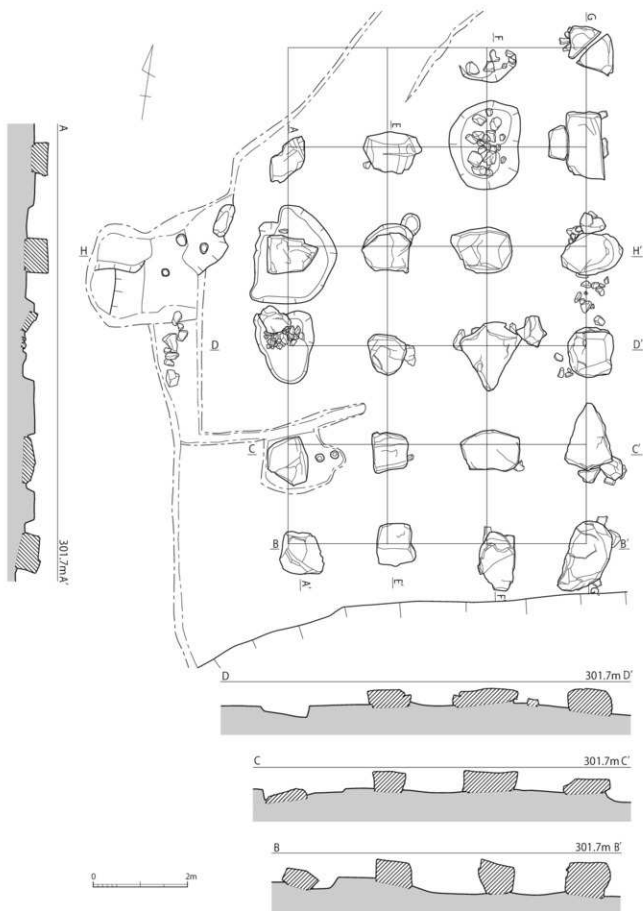


Fig.98 ハツ波地区礎石建物 SB0005 実測図① (1/80)

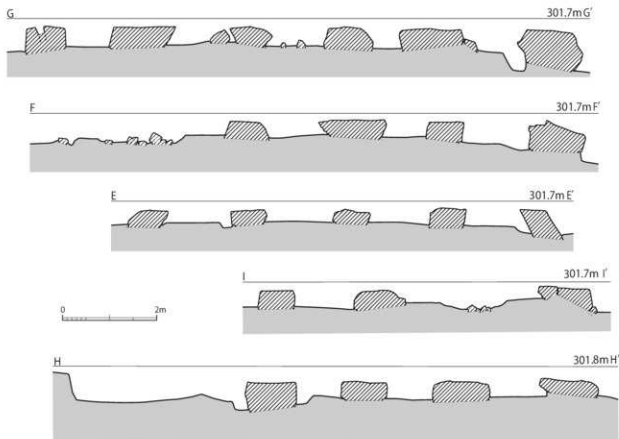


Fig.99 ハツ波地区礎石建物 SB0005 実測図② (1/80)

えられる浅い溝跡を一部で確認した。礎石は80cm～100cm程の大きさで、据付穴には20～30cm程の礫を根石として入れている。

SB0004 (Fig.97, PL.34)

8次調査で一部トレンチ調査を実施した遺構である。SB0003の南側に軸を揃えて隣接する。礎石は8個確認でき、トレンチ内では礎石据付穴を確認した。総柱建物で、梁行3間(6.3m)、桁行5間(10.5m)、柱間は2.1m(7尺)等間である。西側に延ばしたトレンチでは、側柱から150cm程の場所で、南北に延びる幅100cm程の雨落溝を確認した。また、建物北側では、妻柱から180cm程の場所で東西に延びる幅30～40cm程の雨落溝を確認し、北西隅で屈曲する様子がうかがえる。礎石は80cm～100cm程の大きさで、据付穴には20～30cm程の礫を根石として入れている。

SB0005 (Fig.98・99, PL.34)

8次調査で一部トレンチ調査を実施し、9次調査で全面調査を行った遺構である。SB0003・SB0004が存在する平坦面より西側の1段高い平坦面に位置する。礎石は19個確認でき、礎石が失われた部分では礎石据付穴を確認した。ただ、北西部は山道によって削られており、また、礎石のうち2個は原位置から動いた可能性がある。総柱建物で、梁行3間(6.3m)、桁行5間(10.5m)、柱間は2.1m(7尺)等間である。建物の西側では側柱から約240cmの場所で、約120cmにわたって20～40cm程の石が南北に並んでいる箇所が見られるが、雨落

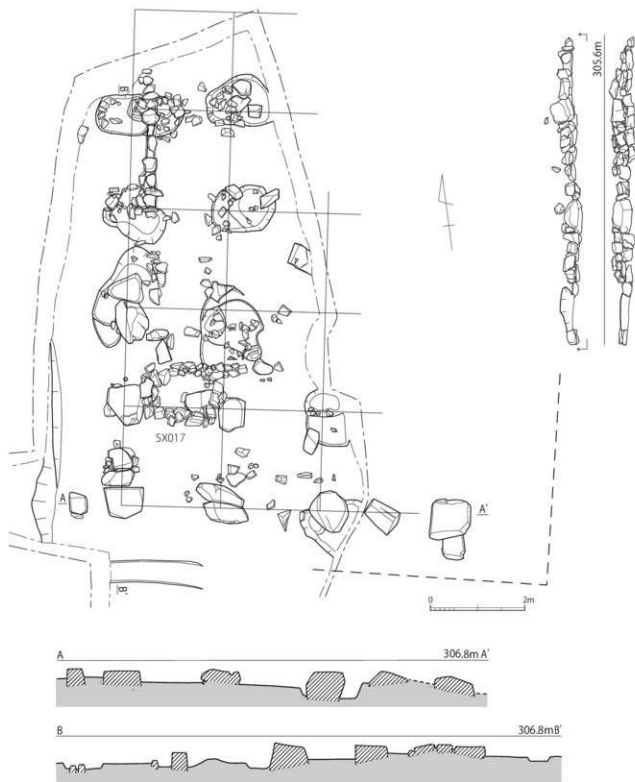


Fig.100 ハツ波地区礎石建物 SB0007 実測図 (1/80)

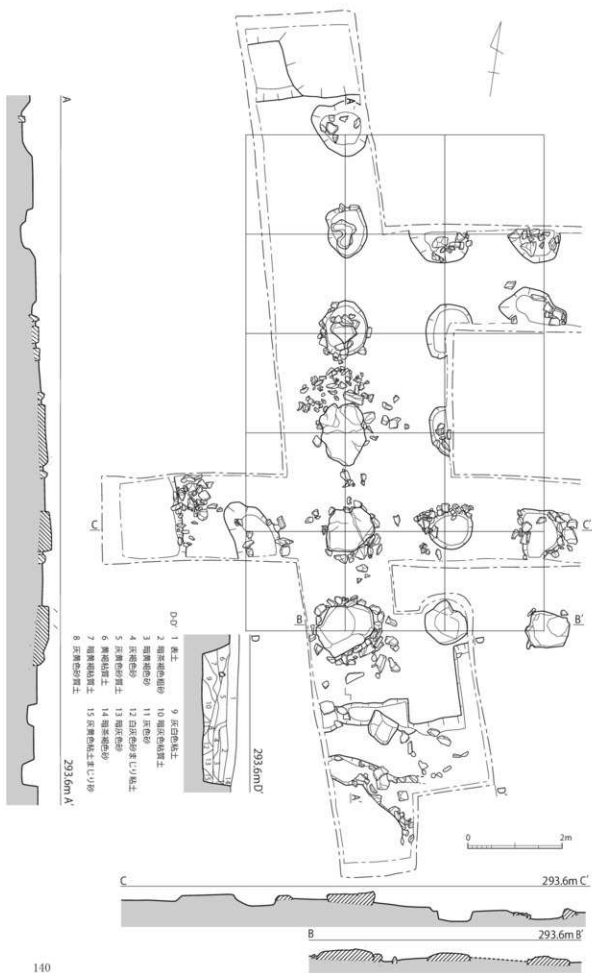


Fig.101 ハツ波地区礎石建物 SB0008 実測図 (1/80)

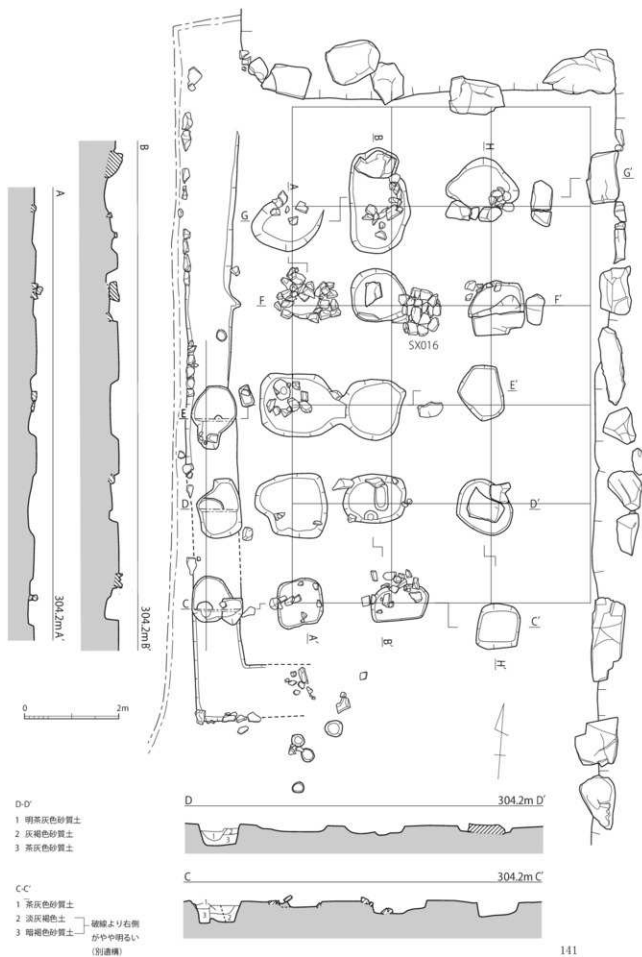


Fig.102 ハツ波地区礎石建物 SB0009 実測図① (1/80)

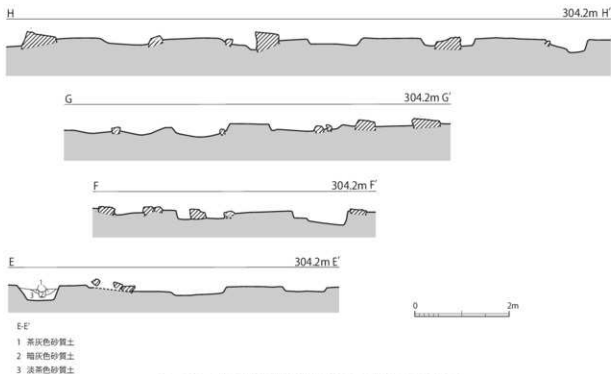


Fig.103 ハツ波地区礎石建物 SB0009 実測図② (1/80)

溝は判然としなない、基壇側石の可能性もあるが現段階では性格は不明である。礎石は 80cm～100cm程の大きさで、据付穴には 20cm程の礫を根石として入れている。

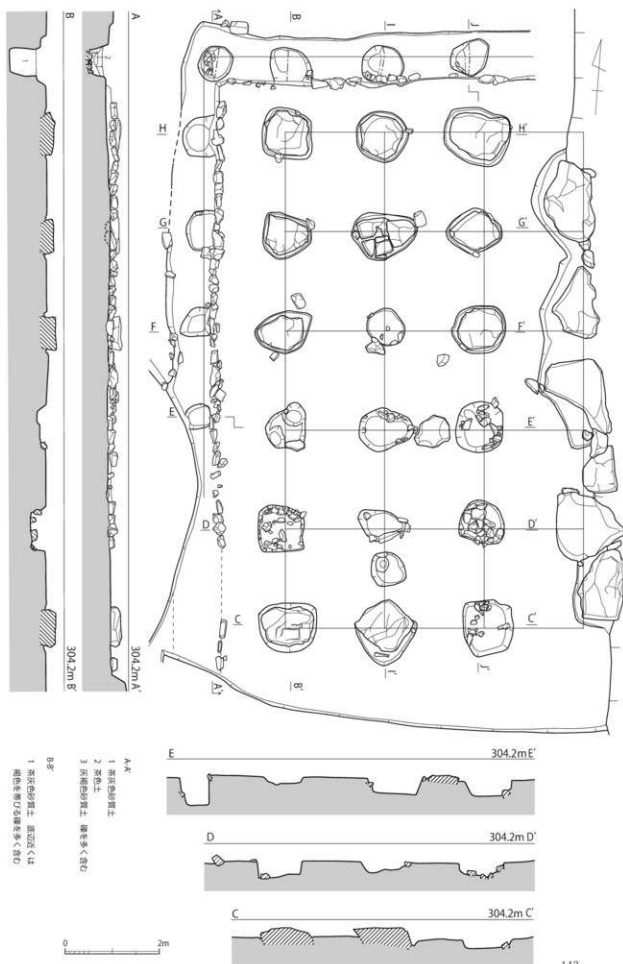
SB0006 (PL.34)

8 次調査で一部トレンチ調査を実施した遺構である。SB0005 が存在する平坦面より西側の 1 段高い平坦面に位置するが大きく削られており、礎石が 1 個のみ確認できる状況である。礎石は 80cm×90cmを測り、原位置を保っていると思われるが、建物のどの位置のものかは不明である。

SB0007 (Fig.100, PL.35)

8 次調査で一部トレンチ調査を実施し、9 次調査で全面調査を行った遺構である。SB0006 が存在する平坦面より西側のさらに高い平坦面に位置する。ハツ波地区では最も西側の建物にあたる。礎石は 8 次調査では 2 個確認できていたが、9 次調査ではその西側の後世の盛土を除去し、計 7 個の礎石を確認することができた。ただ、南東隅のものは原位置になく、ほかにも動いた可能性があるものもある。その他、礎石据付穴も 6 箇所確認することができた。以上、南北 4 間分の存在を確認したものの、北側はさらに延びると想定される。従って復元すると梁行 3 間、桁行 5 間の総柱建物となり、他の建物と同規模と考えられる。礎石は 80cm程の大きさで、据付穴には 20cm程の礫を根石として入れている。

建物の南側では、東西に延びる幅 40cm程の浅い雨落溝と思われる溝跡を確認した。なお、東側では 20～40cm程の礫を積んだ石積列を確認した。当遺構に付随する可能性もあるが、調査区北西に位置する、建物よりも新しい石列と関係する可能性も高い。また、建物よりも新しい時期の石組遺構 SX017 が存在するが、これについては後述する。



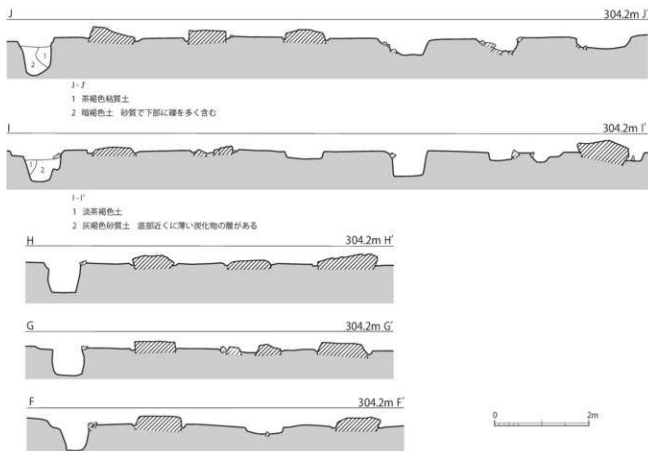


Fig.105 ハツ波地区礎石建物 SB0010 実測図② (1/80)

SB0008 (Fig.101, PL.35)

8次調査で一部トレンチ調査を実施した遺構で、SB0001の北側に位置する。礎石は5個確認でき、礎石が失われた部分では礎石据付穴を確認した。礎石は80cm～120cm程の大きさで、据付穴には20～30cm程の礫を根石として入れている。柱間は2.1m（7尺）等間で、その配置から、梁行3間（6.3m）、桁行5間（10.5m）の総柱建物と復元できる。西側に延ばしたトレンチでは、20cm程の礫の集まりと浅い落ちが見られるが、調査所見では雨落溝は不明とされている。また、建物の南側は谷にあたるため攪乱による影響が著しい。

SB0009 (Fig.102, PL.35)

8次調査で一部トレンチ調査を実施し、9次調査で全面調査を行った遺構である。SB0001～SB0007が存在する場所とは沢を挟んだ南側にSB0010と並んで位置する。残りは悪く、特に北側と東側は後世の石垣のために礎石が動かされ転用されている。動いていないと思われる礎石及び礎石据付穴の状況から、柱間は2.1m（7尺）等間で他の建物と同様、梁行3間（6.3m）、桁行5間（10.5m）の総柱建物と想定しておきたい。建物の西側では、側柱から220cm程のところを南北方向に延びる石列が存在し、南西部で直角に角度を変え東西方向に延びる。南側は妻柱から240cm程離れている。雨落溝の外側の側石に使用されたと思われるが、内側には認められず、わずかな埋土の違いから幅100cm程の雨落溝であったと想定される。雨落溝の底面では、礎石列と対応して径80cm、深さ45cm程の掘立柱の柱掘り方を3箇所確認した。

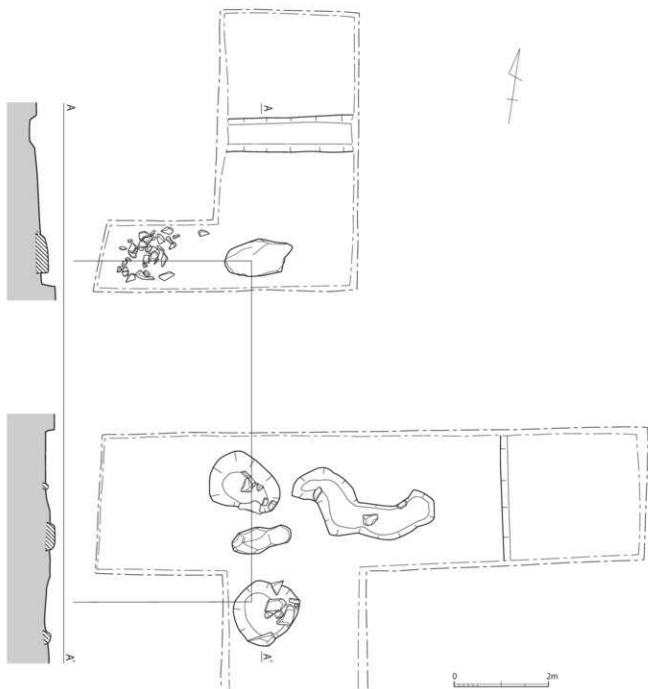


Fig.106 ハツ波地区礎石建物 SB0011 実測図 (1/80)

なお、中央付近で、建物よりも新しい時期の石組遺構 SX016 が見られたが、これについては後述する。

SB0010 (Fig.104・105, PL.36)

8 次調査で一部トレンチ調査を実施し、9 次調査で全面調査を行った遺構である。SB0009 の南側に隣接し軸を揃える。礎石は 11 個確認でき、一番東側の列は後世の石垣に転用されているものの、1 個は動いていない可能性がある。礎石が失われた部分では礎石据付穴を確認した。礎石は 80cm～100cm 程の大きさで、一部 140cm 程のものがある。据付穴には 20～30cm

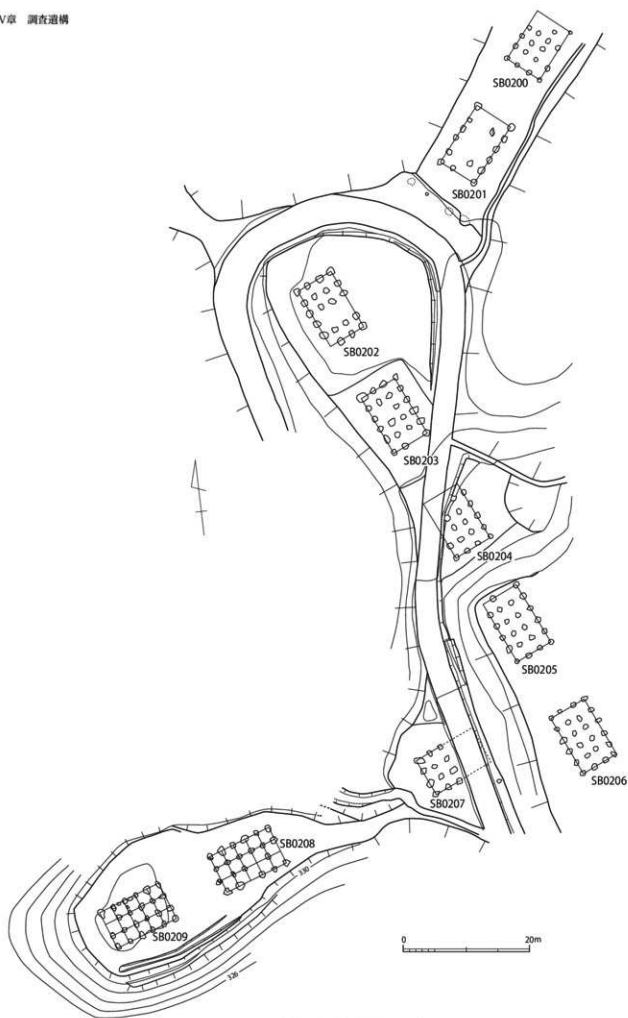


Fig.107 尾花地区周辺地形図 (1/600)

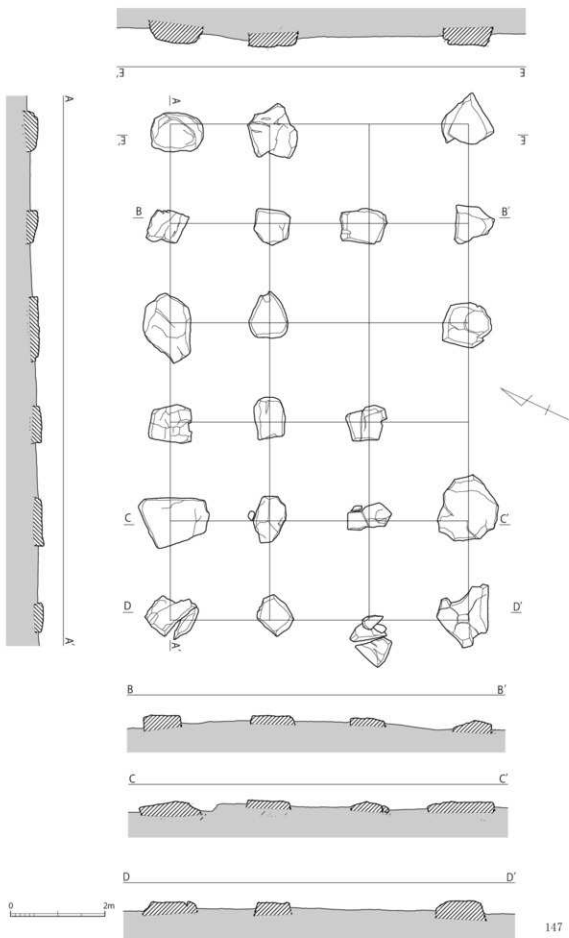


Fig.108 尾花地区礎石建物 SB0208 実測図 (1/80)

程の礎を根石として入れている。それらの配置から、梁行3間(6.3m)、桁行5間(10.5m)、柱間は2.1m(7尺)等間の総柱建物と考えられる。建物の西側では側柱から約150cm、北側では麦柱から約100cm外側のところで、20cm～30cm程の石で構成された石列が良好に残り、北西角で直角に角度を変える。SB0009と異なり、雨落溝の内側の側石と考えられ、溝の幅は100cm程、深さは一定しないが15cm前後である。雨落溝の底面では、各礎石列の延長、また北西角で、径60～80cm程、深さ50～60cm程の掘立柱建物の柱掘り方を確認した。柱掘り方は雨落溝の側石下に及んでおり、溝に先行することが明らかである。

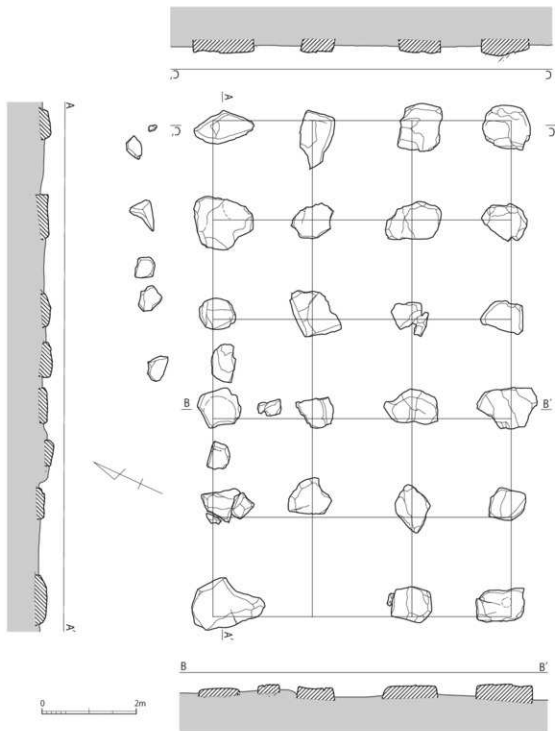


Fig.109 尾花地区礎石建物 SB0209 実測図 (1/80)

SB0011 (Fig.106, PL.36)

8 次調査で一部トレンチ調査を実施した遺構である。SB0001～SB0007 が存在する場所とは沢を挟んだ南側に位置し、SB0009・SB0010 よりも東の標高の下がった平坦面に存在する。調査では礎石を 1 個、その他礎石据付穴を確認した。その配置から、ほかの建物とは異なり、柱間寸法 2.4m (8 尺) の側柱建物で桁方向を東西に向ける可能性がある。図面では断面を起こして示しているが、レベルは明らかでない。測量図から当遺構の位置する地表面は 298m ～ 299m の間にある。

2) 尾花地区

尾花地区の建物群は、大野城内の南東、増長天地区の建物群から北東 150m 程に位置する。土塁北側の焼米ヶ原と呼ばれる付近から北西に延びる尾根上の標高約 330m の箇所に、10 棟の礎石建物が 3 箇所に分かれ、直線上に並んで存在することが確認されている (Fig.107)。

調査は 4 次調査で地形測量調査を行い、一部建物については個別に図面を作成した。ここでは西側に派生する尾根上に並ぶ SB0208, SB0209 の 2 棟について報告する。

SB0208 (Fig.108, PL.37)

4 次調査で図化を行った礎石建物で、SB0209 の東に隣接する。掘削はほとんど行わず、礎石の輪郭を確認するに留めた。礎石は 70 ～ 140cm 程のものが 21 個確認でき、その配置から梁行 3 間 (6.3m)、桁行 5 間 (10.5m) の総柱建物で、柱間は 2.1m (7 尺) と考えられる。

SB0209 (Fig.109, PL.47)

4 次調査で図化を行った礎石建物で、SB0208 の西に隣接する。掘削はほとんど行わず、礎石の輪郭を確認するに留めた。礎石は 60 ～ 120cm 程のものが 23 個確認でき、その配置から梁行 3 間 (6.3m)、桁行 5 間 (10.5m) の総柱建物で、柱間は 2.1m (7 尺) と考えられる。ただ、一部礎石は上記寸法で復元した箇所からずれるものがあり、また礎石中央で計測した場合、梁行・桁行双方とも若干小さくなる。これは発掘調査を行っていないため、本来の礎石の輪郭が確認できていない可能性も考えられる。なお、一番北西側の礎石列では、礎石間に小礎石が見られる。その他、建物の北側には 40cm 程の石が直線上に並ぶが、建物とどのような関係にあるのかは不明である。

3) 増長天地区

増長天地区の建物群は、大野城内の建物群の中で最も南に位置する。猫坂地区の建物群からは南東に 270m 程、尾花地区からは南西に 150m 程離れている。また、南側外周土塁にある太宰府口城門からは北西に 110m 程、観世音寺口城門からは北に 130m 程離れており、土塁の内側に沿う標高約 337 ～ 339m の細長い平坦面に 4 棟が位置する (Fig.110)。

建物の調査は、5 次調査で整備を行うのに必要な情報を得るために行ったが、平成 25 ～ 26 年度に、新たに環境整備事業を行うため、5～3 次として SB0401, SB0402, SB0403 の再調査を行い新知見が得られた。この際、SB0404 については、昭和 49 年の整備のコンクリートが非常に良好な状況であったことから、そのまま残すこととし、調査の対象からは除外している。基本層序は、昭和 49 年の整備に伴う土の下に整備以前の旧表土があり、それを割ぐと灰褐色

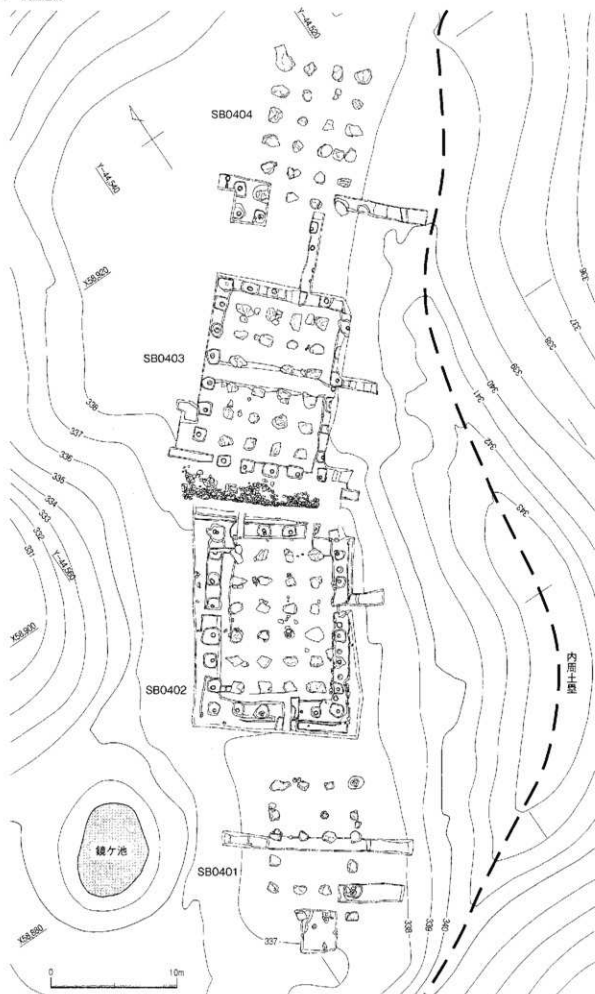


Fig.110 増長天地区周辺地形図 (1/300) (九州歴史資料館 2016 から転載)

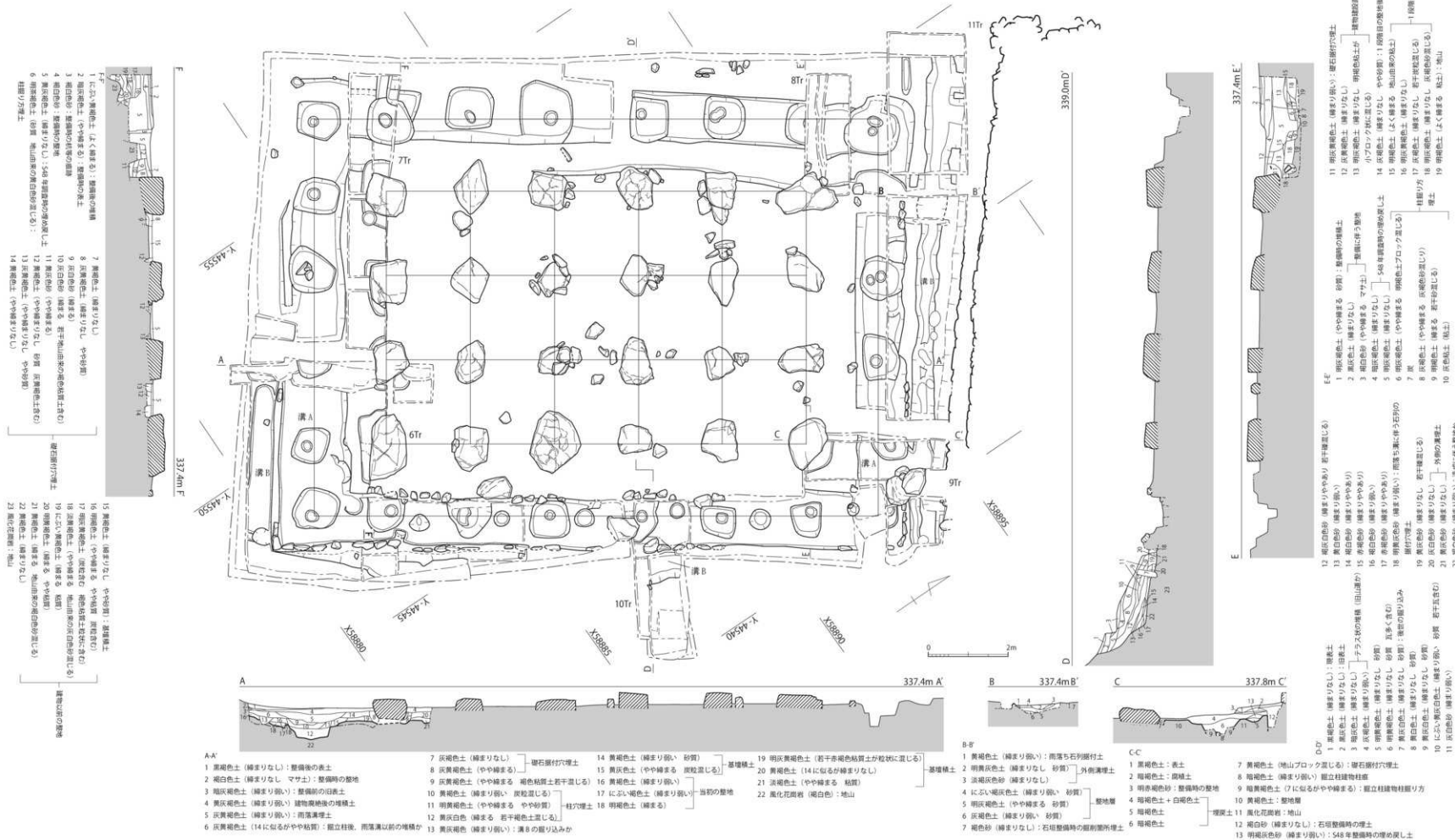


Fig.112 増長天地区礎石建物 SB0402 実測図 (1/80)

土や灰黄褐色土などの堆積層が見られ、その下が遺構面となる。図示した土層断面図のうち5～3次のものは、整備の際の整地土等も図示している。

SB0401 (Fig.111, PL.38)

鏡ヶ池の南東にあり、建物群の中では最も南に位置する。礎石は一部損傷がはげしいが、60～130cm程のものが18個確認でき、その配置から梁行3間(6.3m)、桁行5間(10.5m)の総柱建物で、柱間は2.1m(7尺)と考えられる。建物の周囲三方には雨落溝がめぐり、北東辺は幅0.8～1.0m、南東辺は幅0.9～1.4m、南西辺は0.8～1.15mを測る。深さは15cm程である。雨落溝からは瓦片が出土したが、ごく少量であった。ただ、2トレンチの南東端付近には瓦を含む堆積層が残っており、雨落溝の最終埋没層には多量の瓦が堆積していた可能性はある。

建物基壇は基本的に整地を行い、その上から礎石据付穴を掘削している。礎石据付穴は整地土由来の黄褐色土が埋められており、整地土がない箇所では掘削を行った箇所は、地山の風化花崗岩由来の土が混じっている。

基壇の
整地

なお、3トレンチでは岩盤の一部が地表下2.35m程まで下がっているが、一部の確認に留めたため、性格については不明である。

SB0402 (Fig.112, PL.39・40)

SB0401の北東に隣接する。礎石は80～150cm程のものが24個確認でき、その配置から梁行3間(6.3m)、桁行5間(10.5m)の総柱建物で、柱間は2.1m(7尺)と考えられる。建物の四周は、柱筋から120～130cm程外側に、側石を伴う幅100～150cm程、深さ20cm程の雨落溝(溝A)が巡る。この雨落溝の底面では、建物の柱位置と対応して建物を取り囲むように柱掘り方が確認された。柱掘り方は隅丸方形を呈するものが多く、一辺100cm程で、柱痕跡が確認できる。礎石と柱掘り方間の距離は1.8m(6尺)であり、軸を揃えることから建物と一連の構築物と考えられる。

雨落溝
底面に
柱掘り方

なお5～3次調査では、溝Aの外側にもう一つ溝Bがめぐることが判明し、雨落溝に関して新しい知見が得られた。溝Bは残りの良い北東辺では幅40cm程、深さ16cm程の断面半円形状の丸みを持つ形態である。南東辺は10トレンチ、南西辺は平面及び6トレンチで確認することができるが、いずれも内側は溝Aと重なるため幅は定かではない。ただ6トレンチの土層では、幅35cm程、深さ20cm程を測る。なお、11トレンチでは溝Bが北西側に折れずに真っ直ぐ斜側面に延びることから、土塁のある高い側をコ字状にめぐっていたと考えられる。

古い
雨落ち溝

溝Bについては重複関係から溝Aよりも先行することは明らかであり、礎石建物の周囲に掘立柱列をめぐらせる段階の雨落ちの可能性が考えられる。この想定であれば、掘立柱列は、長く延びる軒を支える機能を有していたと考えられる。なお、礎石と溝Aとの芯々距離は2.1m(7尺)程なのに対し、溝Bとの芯々距離は1.0～1.2m程と一定しない。

建物周辺の造成状況を確認すると、土塁に近い6・9・10・11トレンチでは、風化花崗岩の岩盤が露出する箇所もあり、地山削り出しによる平坦地の形成を行っているが、谷側の7・8・11トレンチでは1m以上の整地を行っており、建物部分は黄褐色の締まりの弱い土で基壇を構築してから礎石据付穴を掘り込んでいた。建物の半分以上は整地層上に位置することになる。

平坦地
の造成

SB0403 (Fig.113, PL.41)

SB0402の北東に隣接するが、比高差が1.8m程あり、SB0402とSB0403との間は乱石積

みの石垣が存在する。周辺はほぼ岩盤削り出しによる造成であるが、南西側は盛土を行って平坦面を確保している。また建物中央には礎石の間に後世の大きな掘り込みが存在し、その土層の観察から、この部分では地山の窪みを埋めて平坦面を造成し建物を築いていることが分かる。礎石は70～100cm程のものが23個確認でき、その配置から梁行3間(6.3m)、桁行5間(10.5m)の総柱建物で、柱間は2.1m(7尺)と考えられる。建物の四周は、柱筋から120～140cm程外側に、深さ10cm程の雨落溝(溝A)が巡る。一部で礎石が認められる。SB0402と同様に、この雨落溝の底面では、建物の柱位置と対応して建物を取り囲むように柱掘り方が確認された。柱掘り方は隅丸方形を呈するものが多く、一辺100cm程で、柱痕跡が確認できる。礎石と柱掘り方間の距離は1.8m(6尺)であり、軸を描えることから建物と一連の構築物と考えられる。

なお5～3次調査では、SB0402と同様に、溝Aの外側にもう一つ溝Bがめぐることが判明した。溝Bは土塁側でしか確認していないが、14トレンチでL字状に屈曲していることから、建物に伴うことは確実と思われる。13・14トレンチの土層からは、溝Bを埋め、整地を行った後に溝Aを掘削していることが確認できる。以上から溝Bは溝Aより古く、掘立柱列を伴う段階の雨落溝である可能性が高い。

ちなみに、15トレンチでは、溝Bに重なる格好で後世に山道が幾重にも重複しており、溝はかなり改変を受けたもようである。15トレンチの溝状遺構は、溝Bの名残とも考えられるが、改変を受けている可能性もある。

SB0404 (Fig.114, PL41)

SB0403の北東に隣接し、建物主軸や柱筋を描いている。5次調査で礎石の実測と一部トレンチ調査を行っている。礎石は一部で欠損が大きいものの、70～150cm程のものが24箇所確認でき、その配置から梁行3間(6.3m)、桁行5間(10.5m)の総柱建物で、柱間は2.1m(7尺)と考えられる。

雨落溝の状況は判然としないが、トレンチで建物の外側に掘立柱列が存在することが確認でき、SB0403と同様に四周を巡ると思われる。

なお、調査時の記録類に所見はないが、トレンチでは建物の西側に、幅20cm程の細い溝状の掘り込みが確認されている。その位置から、SB0402やSB0403の溝Bの一部に相当する可能性がある。

4) 猫坂地区

猫坂地区の建物群は大野城内の南西に位置し、八ツ波地区の建物群からは南に300m程離れている。城内には中央を北流する内野川に向かって無数の谷とそれらに挟まれた尾根が存在するが、建物群は、南側内周土塁から北東に延びる丘陵尾根上の標高310～311mに位置する(Fig.115)。この丘陵尾根はY字状に二つに分かれ、北西側の尾根東斜面を造成した箇所ではSB0500～SB0502、南東側の尾根線を造成した箇所ではSB0503・SB0504を確認している。2箇所の建物群の距離は近いものの両者は深い谷によって隔てられ、現在は尾根の基部で両者をつなぐ山道によって行き来することができる。

建物の調査は、10次調査でこの5棟について、整備を行うのに必要な情報を得るため全面調査を行った。また44次調査では、北西側の尾根の東側を対象に、災害復旧に先立ち調査を

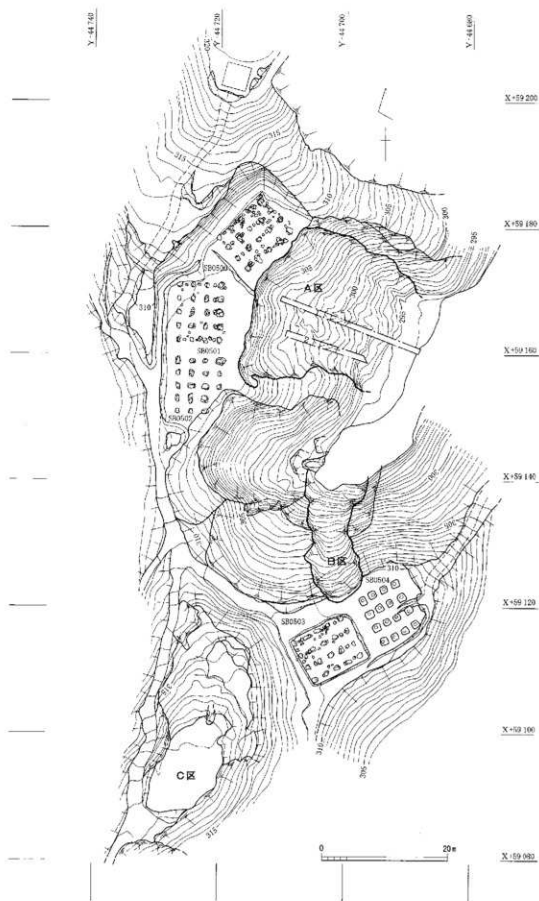


Fig.115 猫坂地区周辺地形図 (1/600) (福岡県教育委員会 2010 から転載)

行い、平坦面の形成状況について所見が得られている。

44 次調査の詳細は既刊の報告書『特別史跡大野城跡整備事業 V 下巻』(2010)に譲るが、ここでは平坦面形成の所見について触れておきたい。調査は SB0500～SB0052 が位置する丘陵の東側斜面の崩落した壁面の精査、及び崩れた部分に 2 本のトレンチを設定して行った。壁面では 4 回にわたる盛土、1 トレンチでは盛土の残存状況が明らかになった。1 トレンチの土層の状況や 10 次調査時の測量図をもとに、盛土の旧状を想定してみると、盛土外側法面の傾斜角度は約 35 度、また盛土の最大厚さは約 5.5m となる。盛土と地山削り出し部の境界は建物東側の雨落溝付近に想定される。盛土は高い箇所を削り谷部を埋めたもので、これによって平坦面を形成するも不安定な地盤のため、建物はそこを避けて地山を削り出した部分に配されたことが想定できる。

盛土部分
を避ける

また盛土は 4 回にわたって行われているが、1 回目の盛土が最も大規模である。1 回目の盛土の下層は粘性の強い暗褐色・茶褐色系統の元々表層付近にあった土で構成されていることから、尾根を削り出した際の土をそのまま流し込んだものと思われ、平坦面造成のためというよりも削り出した土砂の処理場として谷部を埋めた可能性が高い。結果的に広い平坦面が形成され、その後の盛土の崩落のたびに 2～4 回目の盛土が行われたことは、建物利用時に何かしらの活用がされた可能性を示唆する。

なお、盛土の最下層では焼土や炭化物が集中していた。盛土がのる地山の最上層に腐食土などは確認されなかったことから、盛土を施行する前にまず腐植土を除去して地山を露出させ、刈り取った草木などを燃やして処分したことが考えられる。

なお、尾根が Y 字状に分岐する基部付近の高所には平坦面があり (Fig.115 の C 区)、このような場所にまだ知られていない建物群が点在している可能性もある。

SB0500 (Fig.116, PL.42)

北西側の尾根上の一番北側に位置する。後述する SB0501・SB0502 の柱筋とは約 45° 東に振れている。SB0500～SB0052 が位置する尾根は北側の先端部で高くなり、そのため当建物を構築するにあたっては、斜面を特に大きく削って平坦面を造成している。そのため、崩落した多量の土砂によって埋没しており、良好な状態で礎石を確認することができた。礎石は 80 cm～120cm 程の大きさで、礎石間には 30～50cm 程の小礎石が多く見られる。これら小礎石は桁行方向及び梁行方向の柱筋上に多くが配置され、上面が平らである。ただ、上面の高さには若干の差がある。礎石の配置から梁行 3 間 (6.9m)、桁行 4 間 (9.0m) の総柱建物と判断できる。柱間には梁行については中央が 2.1m (7 尺)、外側が各 2.4m (8 尺)、桁行は中央 2 間分が 2.1m (7 尺)、外側が各 2.4m (8 尺) である。建物の西側では側柱から 70～80cm、南北側では妻柱から 90～100cm 外側のところで深さ 10cm 程の雨落溝が巡る。東側は判然としないが、途切れながら南北方向に延びる溝が一連の雨落溝に該当する可能性がある。西側の雨落溝の外側は地山が露出しており、削られた傾斜面となる。なお、西側の雨落溝からは瓦や土器等の遺物が多く出土している。

小 礎 石

SB0501 (Fig.117, PL.43)

SB0500 の南西に位置し、SB0502 の北側で柱筋を揃えて隣接する。建物の北西隅は多くの土砂によって埋もれていた。SB0500 と同様良好に礎石を確認することができた。礎石は 80

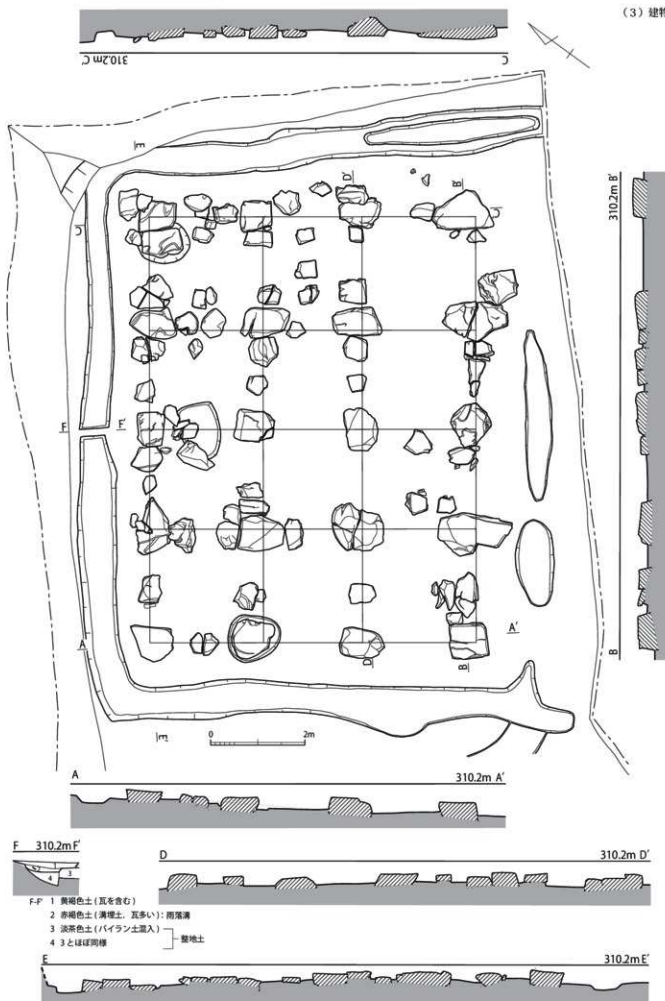


Fig.116 猫坂地区礎石建物 SB0500 実測図 (1/80)

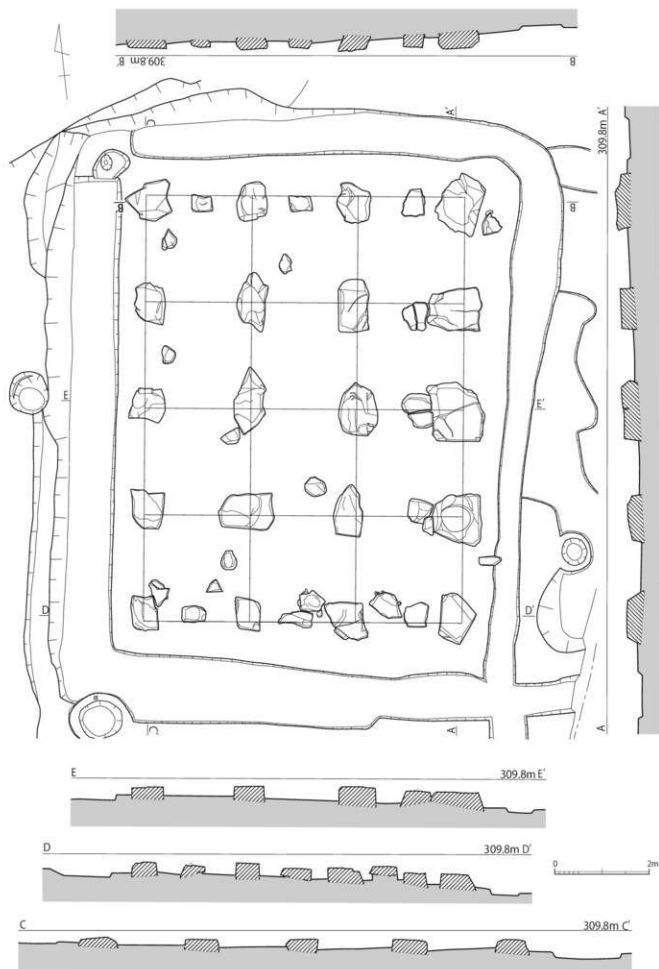


Fig.117 猫坂地区礎石建物 SB0501 実測図 (1/80)

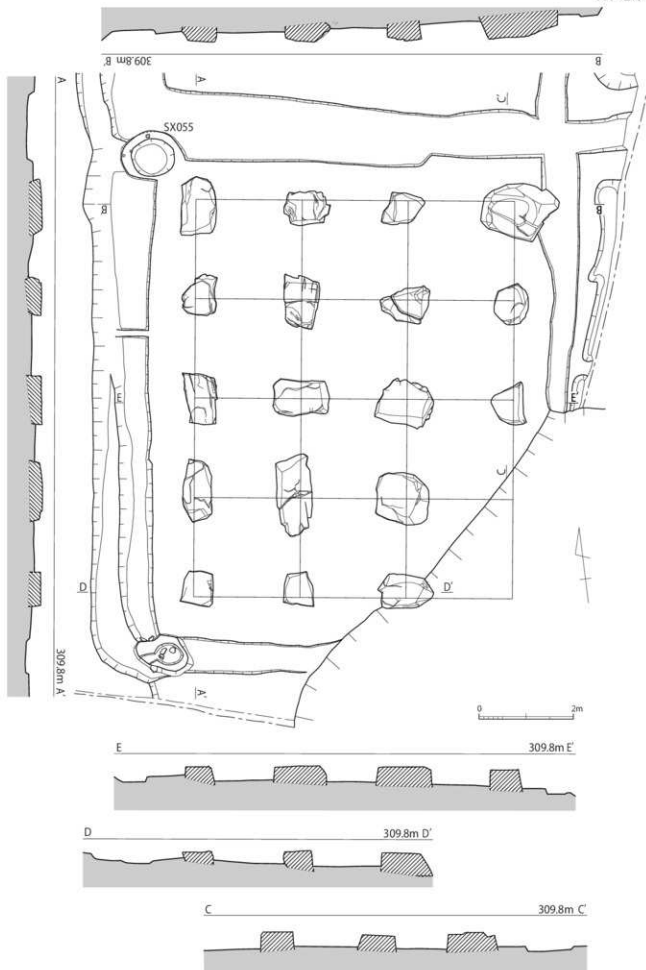


Fig.118 猫坂地区礎石建物 SB0502 実測図 (1/80)

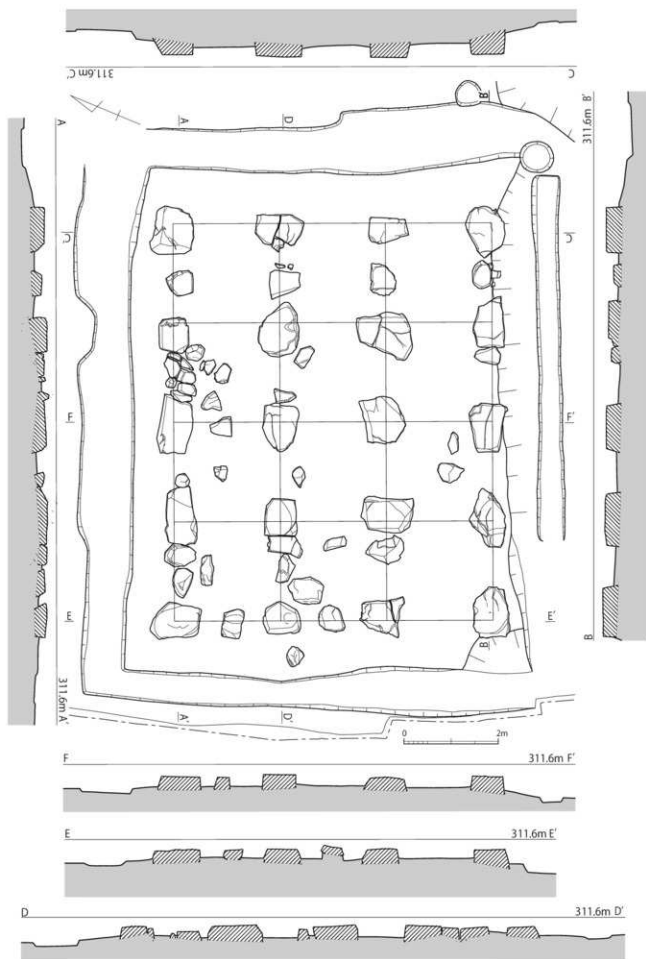


Fig.119 猫坂地区礎石建物 SB0503 実測図 (1/80)

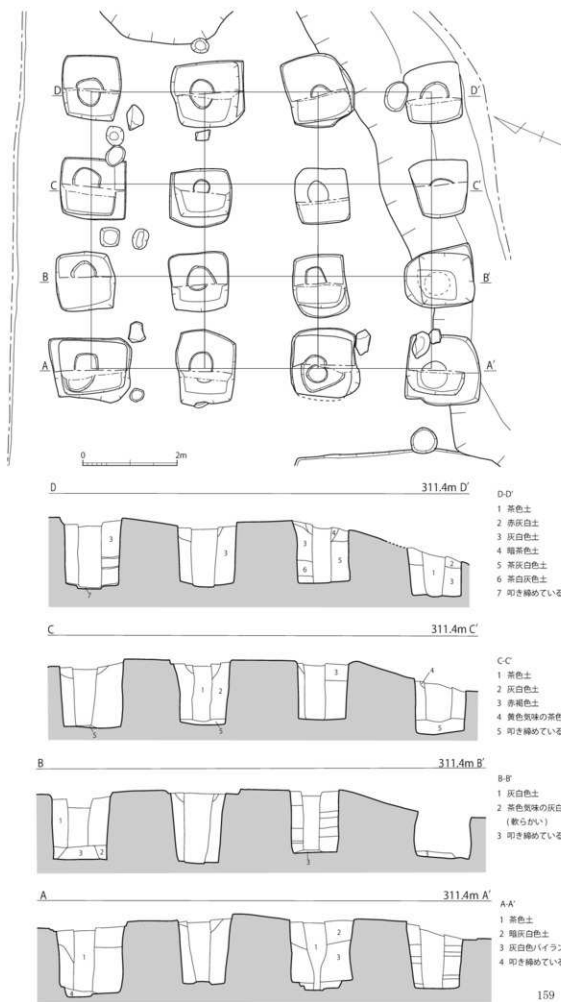


Fig.120 猫坂地区掘立柱建物 SB0504 実測図 (1/80)

～100cm程の大きさで、礎石間の小礎石はSB0500に比べて少ないが、南北外側の梁行方向の礎石間、及び一番東側の桁行方向の各礎石の西側に40～50cm程のものが見られる。これらの上面はSB0500と同様平らだが、高さは若干の差が見られる。礎石の配置から梁行3間(6.75m)、桁行4間(9.0m)の総柱建物と判断できるが、柱間はほかの建物と若干異なり、2.25m(7.5尺)等間である。建物の北側では妻柱から90cm程、西側では側柱から60cm程外側のところに雨落溝があり四周を巡るが、南側はSB0502と共有する。溝底は東側にいくにつれ低くなっている。南側の雨落溝では瓦片が比較的多く見られ、完形のものも出土している。

SB0502 (Fig.118, PL.43)

SB0501の南に隣接し、桁方向の柱筋を揃えている。調査時点ではSB0500やSB0501と違ってほとんどの礎石が地表に露出して残存していたが、東南隅部は崩落しており、2個の礎石が失われている。礎石は60～120cm程の大きさである。SB0500やSB0501で見られた礎石間の小礎石は全く見られない。礎石の配置から梁行3間(6.75m)、桁行4間(8.4m)の総柱建物と判断できる。柱間は梁行については、SB0501と同様2.25m(7.5尺)だが、桁行については2.1m(7尺)と考えられる。建物の周囲では妻柱及び側柱から90cm程外側のところに雨落溝があり四周を巡るが、北側はSB0501と共有する。

SB0503 (Fig.119, PL.43)

SB0500～SB0502とは谷を挟んだ南東方向の別の尾根上に位置する。造成を行った平坦面に、尾根の向きに合わせて東北東に軸を取り構築している。礎石は80～100cm程の大きさのものが良好に残り、その他60cm程の礎石間の小礎石がところどころで見られる。小礎石の上面は平らだが、高さは若干の差が見られる。礎石の配置からSB0502と同様、梁行3間(6.75m)、桁行4間(8.4m)の総柱建物と判断でき、柱間についてもSB0502と同様、梁行2.25m(7.5尺)、桁行2.1m(7尺)と考えられる。建物の周囲では妻柱及び側柱から100cm程外側のところに幅100cm程、深さ10cm程の雨落溝があり四周を巡る。東側の雨落溝はほかよりも幅が狭いが、これは東側が後世に削られたことと関係していると思われる。

SB0504 (Fig.120, PL.44)

総柱の 掘立柱建物

SB0503と同一尾根の先端に位置する掘立柱建物である。造成を行った平坦面に、尾根の向きに合わせて構築している。SB0503と柱筋の向きは同じではあるが、桁・梁行方向が90°異なり、やや北西寄りに築かれている。柱掘り方は固い風化花崗岩の地山をほぼ垂直に掘り込んだ一辺120cm程の方形で、深さも130cm程と大きい。柱穴は径が40cm程のものが全ての柱掘り方で確認でき、抜き取られた痕跡はみられなかった。柱穴の底面は、柱部分のみさらに掘り込んだものや、叩きしめたものが見られる。柱掘り方の埋土は、層状に土を入れたものが確認できたほか、上部では柱穴の周囲を取り囲むように粘質土を入れているものもある。梁行3間(5.85m)、桁行3間(7.2m)の総柱建物と判断でき、柱間は梁行1.95m(6.5尺)、桁行2.4m(8尺)と考えられる。雨落溝は明確でなく、建物周囲三方向が谷になっていることから、排水施設は不要だったと思われる。

5) 主城原地区

主城原地区の建物群は大野城内の中央北寄り、村上地区の建物群の北西に位置する。城内に

は中央に内野川、また東側に大きな支流が北流するが、それらに挟まれた南北に延びる尾根上、及び尾根から東西に派生する小さな尾根上の、標高約295～306mの箇所に建物を築いている。地元では以前、この一帯を城ヶ原（じょうがはる）と呼んでいたらしい。

主城原地区の建物群は子細に見るならば、地形に応じていくつかのまとまりに分けられ、報告書「特別史跡大野城跡整備事業Ⅴ下巻」(2010)では「主城原地区北部建物群」「主城原地区中央部建物群」「主城原地区南部建物群」の3つに分けている。主城原地区北部建物群は、尾根北端部のピーク南西側に形成された平坦面を中心に存在する建物跡が該当する。また主城原地区中央部建物群は、尾根中央付近の北西側に突き出す規模の大きな尾根支脈上平坦面に築かれた10基程の建物跡が該当する。そして主城原地区南部建物群は、尾根南部の東西に長い尾根支脈上の平坦面の建物跡が該当する。

建物の調査は、11・12次調査で主城原地区中央部建物群のSB0600～SB0608について行い、13次調査で、主城原地区中央部建物群と主城原地区北部建物群を結ぶ尾根上に位置するSB0610・SB0611、14次調査で主城原地区南部建物群のSB0618～SB0620について行った。また、災害復旧事業に伴う47次調査では、主城原地区中央部建物群の東側南落部を対象にしたトレンチ調査を実施し、造成盛土を確認したほか、主城原地区南部建物群と主城原地区中央部建物群を結ぶ尾根上のSB0615について測量調査を行った。

47次調査の詳細は既刊の報告書に譲るが、ここでは平坦面形成及び盛土の所見について触れておきたい。建物群のある平坦面は、丘陵尾根を削り出し、その土を盛土して造成を行っているが、これらの盛土は土塁の版築盛土のような手の込んだものではなく、削り出した土を斜面に流し込んだだけの簡易なものである。調査成果をもとに想定した断面では、盛土造成による斜面は約35度、一部で約45度となった。また盛土最下層に焼土や炭が多く含まれる土層が確認されており、盛土施工前に全体を火入れして雑草などを焼き払い、その土を最初に用いて盛土したことが考えられる。これらの盛土の在り方は猫坂地区で見られたものと同様である。

平坦面の造成

SB0600 (Fig.122・123, PL.45・46)

11・12次調査で確認した礎石建物跡で、SB0601及びSB0602と重複する。3棟の中では最も古く、重複する南側は一部しか調査できず不明な点が多い。礎石は残っておらず、確認できた礎石据付穴の配置から、梁行3間(7.2m)、桁行8間(20.4m)の総柱建物と考えられるが、南側はまだ延びる可能性もある。また、北側の2間分については、SB0601築造時に上面がかなり削られており、南側の重複部分と同一建物と考えて良いか不明瞭な点もある。柱間は、梁行は2.4m(8尺)、桁行は2.55m(8.5尺)の可能性が高い。地山の高い部分を基壇としており、基壇西隅及び南西側縁には石積が見られる。北側及び西側には幅70～90cm、深さ10～20cm程の浅い雨落溝が見られ、またSB0601及びSB0602南西側の断ち割りトレンチでもSB0600の雨落溝と考えられるものを確認している。

3×8間の礎石建物

SB0601 (Fig.122・123, PL.45・46)

11・12次調査で確認した礎石建物跡で、SB0600の上に構築しSB0602によって壊されている。礎石は残っておらず、確認できた礎石据付穴及び根石の配置から、梁行3間(6.3m)、桁行5間(10.5m)の総柱建物と考えられる。実際には一番南東側の礎石列は確認できていないが、基壇南東側の石積までの距離を勘案して、上記規模を復元できる。柱間は2.1m(7尺)



Fig.122 主城原地区礎石建物 SB0600 ～ 0602 実測図① (1/80)

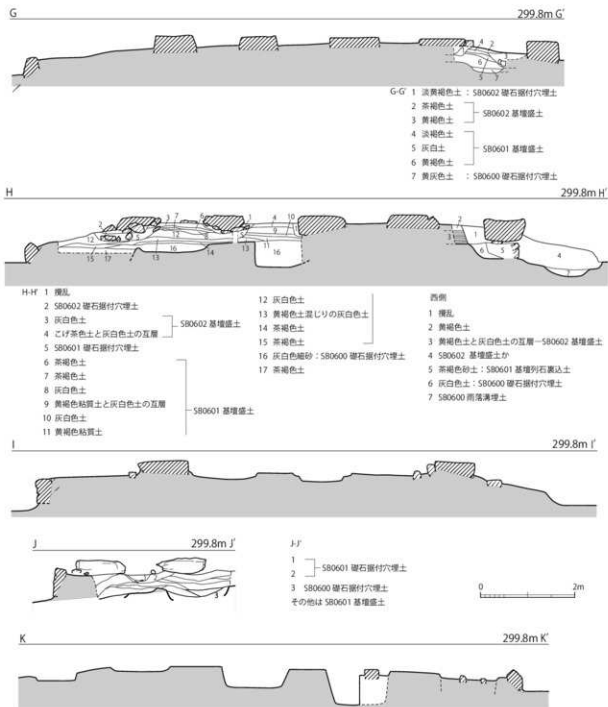


Fig.123 主城原地区礎石建物 SB0600～0602 実測図② (1/80)

等間である。SB0600 の上に版築によるかさ上げを行っている様子がうかがえ、基壇の四周側縁には石積が見られる。調査時の所見では北西側石積中央部の状況がほかと若干異なることから、ここに階段が存在した可能性を考えている。

SB0602 (Fig.122・123, PL.45・46)

11・12 次調査で確認した礎石建物跡で、SB0600 及び SB0601 と重複する。3 棟の中では最も新しいが、建物の方向は SB0600 及び SB0601 と大きく異なっている。礎石は 20 個残っ

かさ上げし
3×5間の
礎石建物

かさ上げし
3×4間の
礎石建物

ており、梁行3間(6.3m)、桁行4間(7.8m)の礎柱建物である。柱間は、梁行は2.1m(7尺)、桁行は1.95m(6.5尺)の可能性が高い。SB0601の上にさらにかさ上げを行っているが、基壇の周囲は削られたためか低くなっており、縁の石積等が残っていない。

SB0603 (Fig.124, PL.46)

11・12次調査で確認した礎石建物跡で、SB0601及びSB0602の南東に位置する。発掘調査は建物南側の一部のみトレンチ調査を行った。礎石は24個残っているが、他の建物と比べてやや小さいようである。個別の実測図は作成していないが、3間×5間の礎柱建物で、柱間は、2.1m(7尺)である。トレンチでは礎石列の南側、山の斜面が迫る位置で雨落溝を確認した。この部分は旧地形をかなり削り出しているようである。

SB0604 (Fig.125・126, PL.47)

3×7間の
掘立柱建物

12次調査で確認した掘立柱建物跡で、尾根の北端部に位置する。SB0605及びSB0608と重複し、SB0605の柱掘り方に切られる。梁行3間(6.3m)、桁行7間(17.85m)の側柱建物である。柱筋が通り、柱間は、梁行は2.1m(7尺)、桁行は2.55m(8.5尺)の可能性が高い。柱掘り方は一辺110～140cm程の方形で、深さも140cm程と深い。埋土は地山の土を硬く突き固めたようなもので、柱痕の径は30cm程である。遺物は柱痕からのみで、柱掘り方からは出土しなかった。

SB0605 (Fig.125・126, PL.47)

3×9間の
掘立柱建物

12次調査で確認した掘立柱建物跡で、SB0604及びSB0608と重複する。SB0603と同位置で建て替えたものであり方位も一致する。ただ、礎柱建物である点が異なり、梁行3間(5.4m)、桁行9間(16.65m)と全体の規模はやや小さくなる。柱間は、梁行は1.8m(6尺)等間だが、桁行は若干不揃いである。中央5間分は1.95m(6.5尺)の可能性が高いが、両端から2間目は1.8m(6尺)、両端は1.65m(5.5尺)で施工された可能性が考えられる。柱掘り方は一辺80cm程の方形で、深さは80～90cm程である。埋土は地山の砂質土が混じった灰黄色土である。柱痕はSB0604よりも少し小さい。また、桁行方向の柱筋に乗る格好で柱掘り方にビットが存在する。別の建物の柱穴の可能性もあるが、全体の規模に比べて小さいため、SB0605に付随する束柱等の可能性がある。遺物はSB0604と同じく柱痕からのみで、柱掘り方からは出土しなかった。

SB0606

11・12次調査で確認した礎石建物跡で、SB0604及びSB0605の南に位置し、これらよりも新しい。礎石は24個残っており、個別の実測図は作成していないが、3間×5間の礎柱建

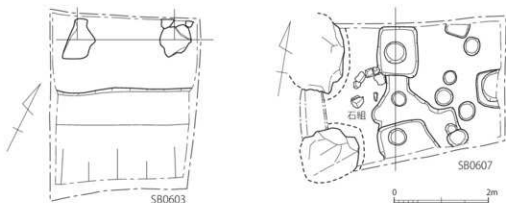


Fig.124 主城原地区礎石建物 SB0603・0607 トレンチ実測図 (1/80)

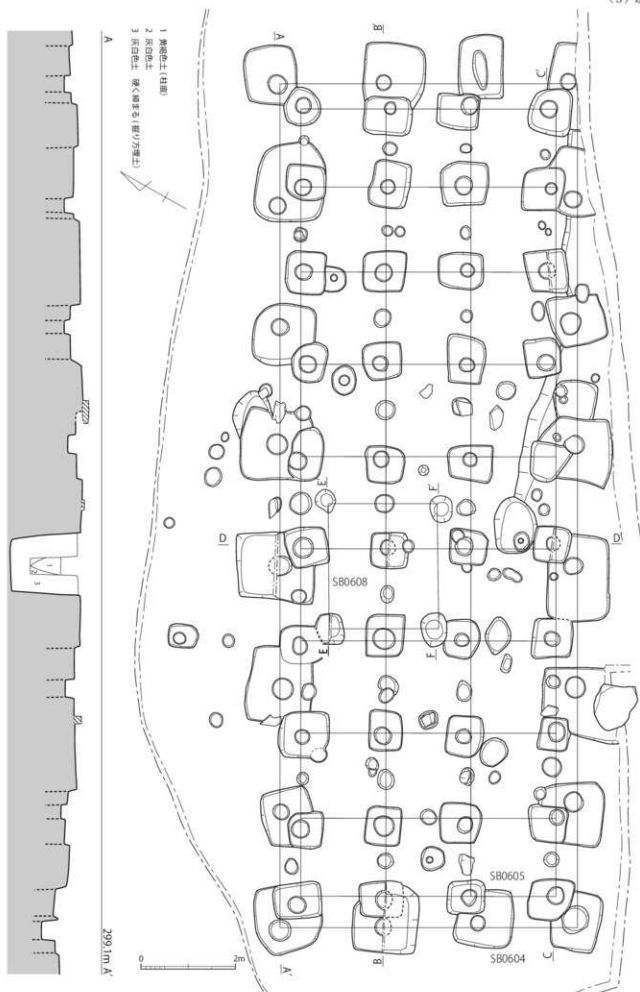


Fig.125 主城原地区礎石建物 SB0604・0605・0608 実測図① (1/80)

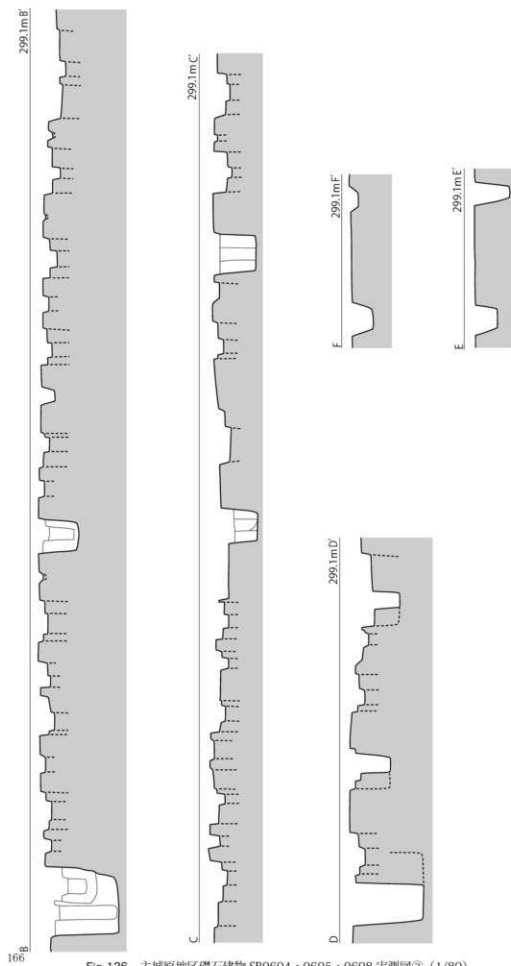


Fig.126 主城原地区礎石建物 SB0604・0605・0608 実測図② (1/80)

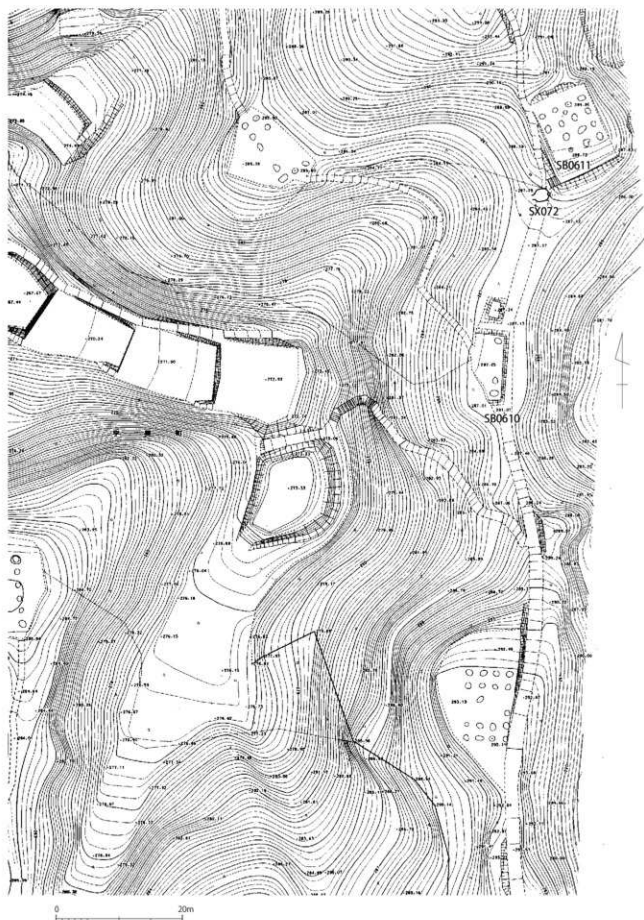


Fig.127 主城原地区北部建物群周辺地形図 (1/600)

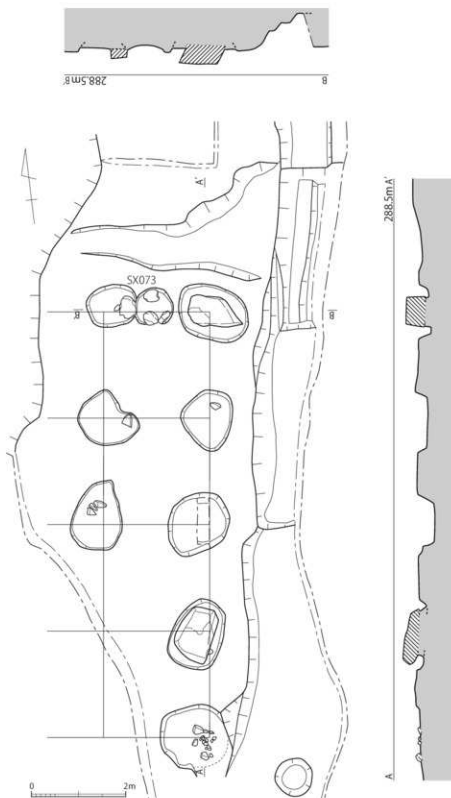


Fig.128 主城原地区礎石建物 SB0610 実測図 (1/80)

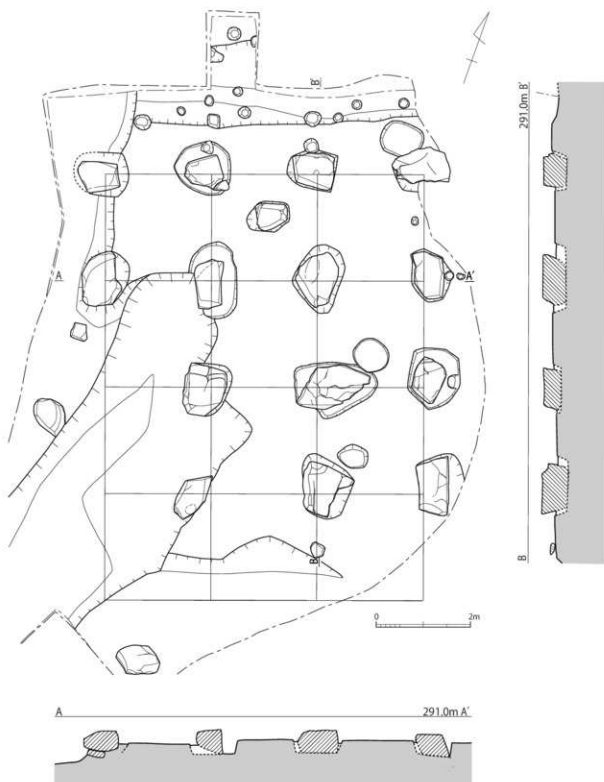


Fig.129 主城原地区礎石建物 SB0611 実測図 (1/80)

物で、柱間は2.1m（7尺）である。北側には溝状の落ちが存在し、雨落溝の痕跡と思われる。

SB0607 (Fig.124, PL.47)

11・12次調査で確認した礎石建物跡で、SB0604及びSB0605のある尾根から西に40～50m程延びる支尾根の先端に位置する。発掘調査は建物東側の一部のみトレンチ調査を行った。個別の実測図は作成していないが、3間×5間の総柱建物で、柱間は2.1m（7尺）である。トレンチでは礎石列の東側、雨落溝の箇所掘立柱列を確認した。また、建物よりも新しい円形石組遺構を1箇所確認した。

SB0608 (Fig.125・126)

12次調査で確認した掘立柱建物跡で、SB0604及びSB0605と重複する。ほかの遺構との前後関係は確定できなかった。1間×1間で、柱間は梁行2.4m、桁行2.6m程である。柱穴は径50～60cm程で深さは20～80cmである。簡単な檜状の建物かと推定されるが、性格は不明である。

SB0610 (Fig.128, PL.48)

13次調査で確認した礎石建物で、南北に延びる細い尾根上に位置する。建物の西側は地形が大きく落ちており、また現道上ということもあり残りは良くない。礎石は60～100cm程の細長いものが2個残っており、その他に6箇所、礎石据付穴を確認した。据付穴は各々で深さに若干の差が見られる。それらの配置から、桁行は4間と考えられるが、梁行は建物西側の地形が後世に落ちたと考えられるため明らかではない。梁行3間を想定するには尾根が狭すぎるきらいがあるが、ほかに2間×4間の礎石建物の事例がないため、梁行3間（6.75m）、桁行4間（9.0m）の総柱建物で、柱間は2.25m（7.5尺）と考えておきたい。礎石上面から遺構面まで30cm程もあることから、当時の上面はかなり削られたと思われる。建物の北側では不整形ながら、雨落溝と思われる浅い溝を確認した。東側は深く落ちるようである。

SB0611 (Fig.129, PL.48)

13次調査で確認した礎石建物で、SB0700の北30m程に位置する。主城原地区中央建物群から主城原地区北部建物群に延びる細い尾根が丘陵に到達する付近に狭い平坦面を設けて建物を築いている。北東部は1m程の厚い堆積土に埋もれており、平坦面は斜面を削って造成したことが類推される。礎石は80～100cm程の原位置を保つものが14個確認でき、これらの配置から建物の規模を復元できる。南側の礎石列は地形が落ちて残っていないものの、他の建物の例を鑑みると、梁行3間（6.75m）、桁行4間（9.0m）の総柱建物で、柱間は2.25m（7.5尺）と考えられる。建物の北側では、側柱から約100cmの場所で浅い雨落溝を確認した。

SB0615 (Fig.130)

整備概要報告書で、SB070として平板測量を行ったとの記述があるが、その際の詳細は不明のため、47次調査で測量を行った際の記録を報告する。主城原地区南部建物群から主城原地区中央建物群へ至る尾根上の平坦面に礎石が露出している状態を確認した礎石総柱建物跡である。建物周囲が削られており、本来の規模は不明である。西側の礎石が若干傾いているのは後世に若干沈んだことが考えられる。礎石は11個が原位置をほぼ保っていると考えられ、3間×3間以上の規模になることは明らかである。柱間はSB0610とSB0611と同じく7.5尺であり、これらと同一の設計によって築造されたならば、本来は梁行3間（6.75m）、桁行4

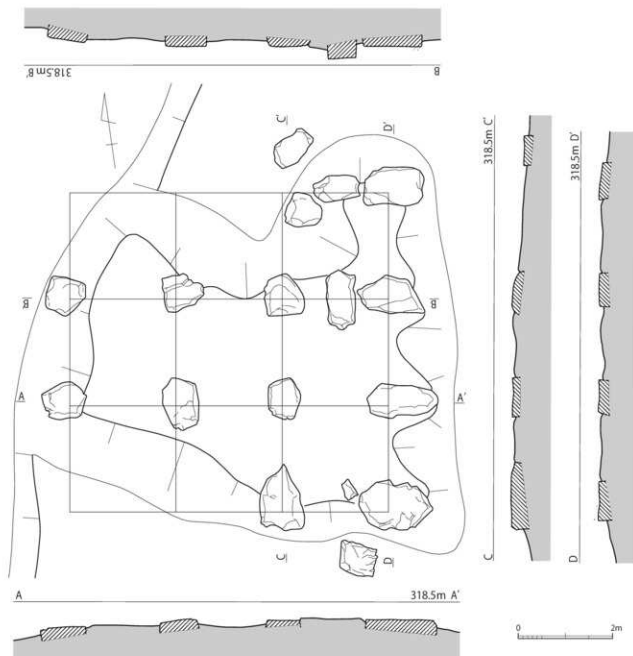


Fig.130 主城原地区礎石建物 SB0615 実測図 (1/80)

間 (9.0m) であった可能性があろう。

SB0618 (Fig.132, PL.48)

15 次調査で確認した礎石建物で、主城原地区南部礎石群の一つである。西に延びる屋根上の斜面を大きく削ることで作り出した平坦面上に位置する (Fig.131)。調査当時は地山切断位置を確認できなかったが、遺構面までの深さは約 1.7m もあり、埋土はほとんど同質のマサ土からなっていたため、建物東南近くに高い切断面があり、これが崩壊することで短時間に堆積したものと思われる。礎石は 80 ~ 120cm 程のものが 20 個確認できたが、2 個はやや浮き上がっている。その配置から梁行 3 間 (6.75m)、桁行 4 間 (8.4m) の総柱建物で、柱間は梁方向が 2.25m (7.5 尺)、桁方向が 2.1m (7 尺) と考えられる。礎石掘付穴は礎石よりわずかに

屋根を大きく削り造成

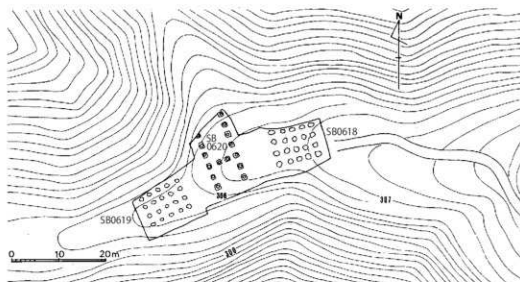


Fig.131 主城原地区南部建物群周辺地形図(1/800)(福岡県教育委員会 1982 を改変)

大きい程度であり、ほぼ石の形に合わせている。建物の東、南、西側の三方向では、幅 80 ～ 100cm 程、深さ 10cm 程の雨落溝を確認した。北側は未調査のため不明だが、地形の落ちが迫っているため、既に失われているか、元来設けなかった可能性もある。なお、建物北西隅の礎石間には、建物よりも新しい円形のピット SX081 が存在する。

SB0619 (Fig.133, PL.49)

15 次調査で確認した礎石建物で、SB0620 の南西に位置する。西に延びる尾根の端部近くの斜面を大きく削ることで作り出した平坦面上に築造している。礎石は 80cm 程のやや小さいものが 20 個確認でき、その配置から梁行 3 間 (6.3m)、桁行 4 間 (8.4m) の総柱建物で、柱間は 2.1m (7 尺) と考えられる。概報では柱間寸法を礎石の中心で測った場合、210cm をわずかに下回るとされているが、210cm で復元しても礎石上に収まるため、7 尺間で築造されたと考えておきたい。柱筋上には所々に小礎石が見られ、上面は礎石の上面よりわずかに低い。建物の東側では、側柱から 100cm 程の場所で浅い雨落溝を確認したが、ほかの 3 辺には設けなかった可能性がある。また、建物の南側では不規則なピットが見られるが、建物との関わりは不明である。なお、建物南東部の礎石間には径 50cm 程の範囲に焼土の広がり確認できたが、建物よりも新しい時期のものと思われる。

SB0620 (Fig.134・135, PL.49)

15 次調査で確認した掘立柱建物で、SB0618、SB0619 に挟まれた箇所に位置する。建物方位が SB0618、SB0619 とはほぼ 90° 異なるが、これは北に延びる小さな尾根が派生する基部に位置し、派生する尾根の方向に合わせているためである。SB0618、SB0619 が尾根を大規模に造成しているのとは異なり、それほど造成せずに建てられたと推測され、この点から SB0618、SB0619 よりも古い時期のものと思われる。柱掘り方は 90cm 程の方形で、柱痕は 25 ～ 28cm 程である。南側の妻柱が想定できる付近は、立木があった関係で確認ができなかったが、桁柱の南端は、この付近より南には存在しない。北側については調査では 6 間分確認したが、さらに調査区外まで延びることが考えられる。概報では北側は傾斜面の存在から、あと

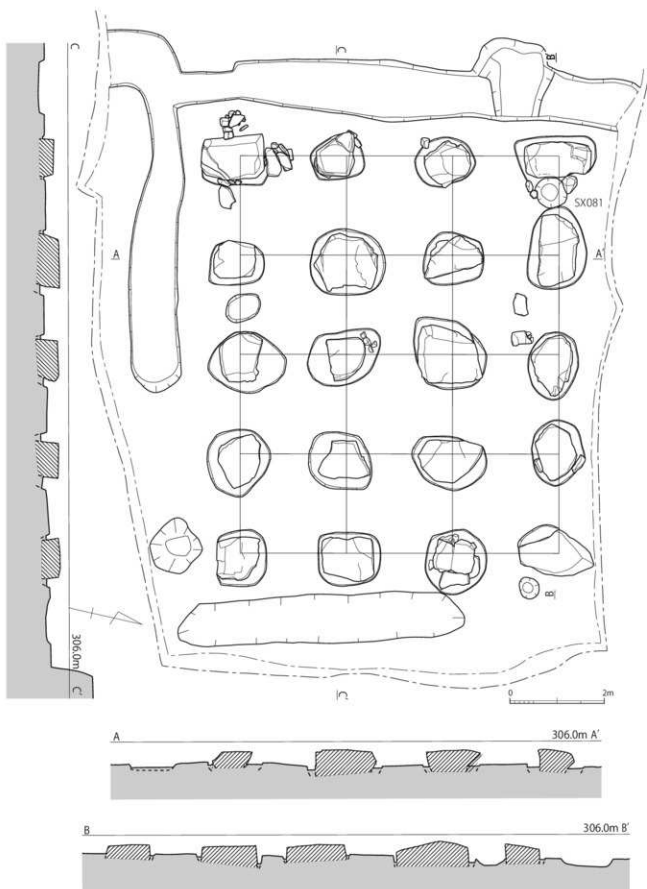


Fig.132 主城原地区礎石建物 SB0618 実測図 (1/80)

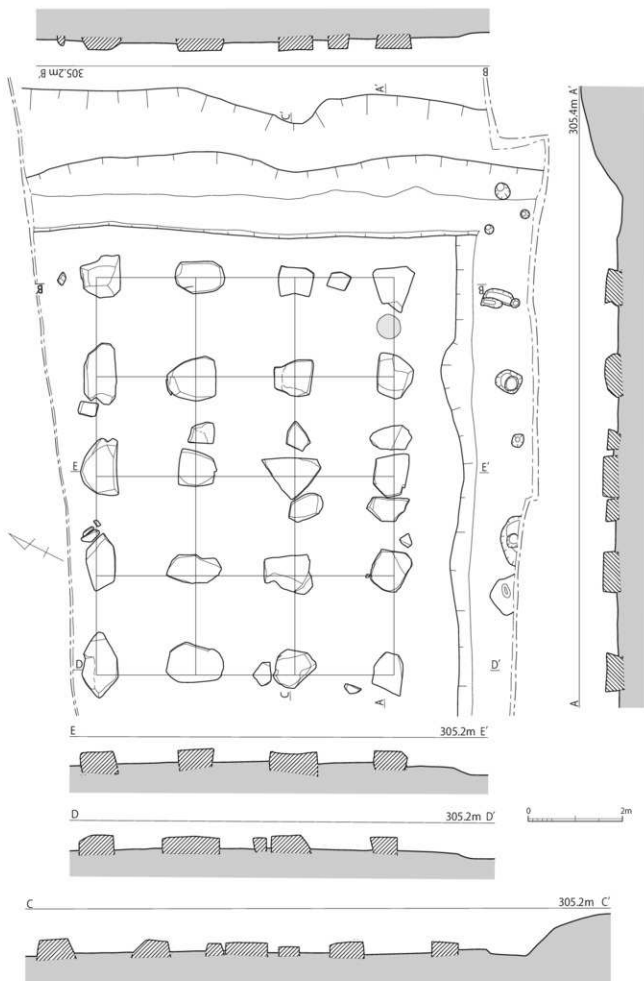


Fig.133 主城原地区礎石建物 SB0619 実測図 (1/80)

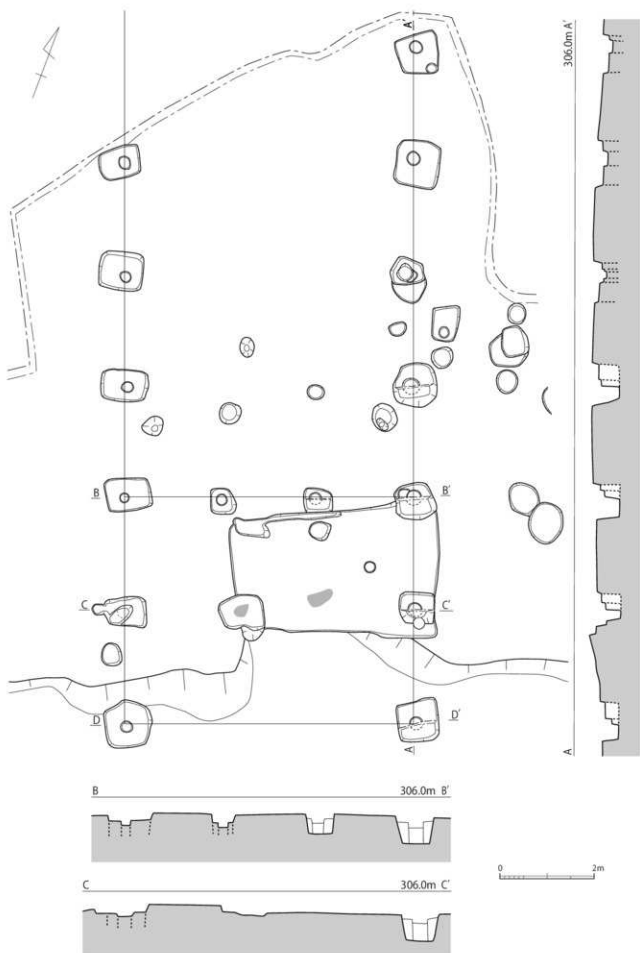


Fig.134 主城原地区掘立柱建物SB0620 実測図① (1/80)

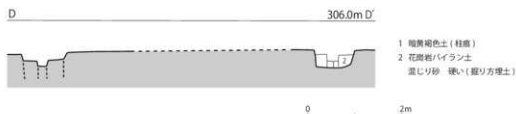


Fig. 135 主城原地区礎石建物 SB0620 実測図② (1/80)

間仕切り
のある
掘立柱建物炉跡を
伴う

2～3間も延びていた可能性は低いとし、桁行7間との推定をしている。なお、南から3列目には、間仕切りのやや小さな柱掘り方が2個あり、この部分の梁行は3間となる。以上から、正確な規模は分からないものの、梁行3間(6.1m)、桁行7間(16.8m)の側柱建物の可能性が高い。柱間は桁行は2.4m(8尺)であるが、梁行は7尺ではやや長く、2.05m程と考えられる。なお、間仕切り列に沿った南側では、方形に6cm程下がる部分があるが、この部分の中央南寄りと南西隅に炉が認められる。これらは赤く堅く焼けており、南西隅の炉は掘り込みが確認できる。灰や炭などはほとんど見られなかった。

6) 村上地区

村上地区の建物群は大野城内の東寄りに位置する。城内には中央を北流する内野川に向かう無数の支流が存在するが、村上地区の西側と東側はそれぞれ大きな支流の上流部にあたり、多くの谷と尾根が複雑に入り組む。村上地区の建物群はそれら谷に挟まれた比較的広い尾根上の標高317～323mに位置する。丘陵を取り囲むようにSB0903～SB0907が存在するほか(Fig. 136)、西側に100m程離れた箇所にも礎石建物が数棟存在することが分かっている。全体ではこれまでのところ10棟の存在が確認されている。

調査は16次調査でSB0903～SB0905の3棟を全面調査し、第17次調査でSB0905の周囲のほかSB0906の全面調査を行った。またSB0907については、残存状態が良好でないことから発掘調査は行わず、地形測量調査を行った。

SB0903 (Fig. 137, PL.50)

小礎石は
柱筋から
ややずれる

SB0903は、丘陵から南西に派生する尾根の基部で、丘陵から一段さがった狭い平坦面に位置する。建物の北西端一列分は調査できなかったものの、礎石は80～100cm程の大きさのものが15個、その他50cm程の礎石間の小礎石がところどころで確認できた。この小礎石は猫坂地区で見られたような柱筋に並ぶものではなく、ややずれた位置に配されている。礎石列のうち、梁行南端列の礎石は浮き上がり、動いているとの所見があるが、礎石の配置から梁行3間(6.75m)、桁行4間(9.6m)の総柱建物と考えられ、柱間は梁行2.25m(7.5尺)、桁行2.4m(8尺)と考えられる。建物の北東側では側柱の150cm程外側のところに幅60～70cm程、深さ20cm程の雨落溝が存在する。この雨落溝は建物東端部分で曲がるが、それより先は確認できていない。

なお、この溝が消失する地点で円形の炉跡を確認したが、これについては別項で説明する。

SB0904 (Fig. 138, PL.50)

SB0904は、SB0903の東方約30mに位置し、丘陵南東部を削り出した平坦面に築いている。

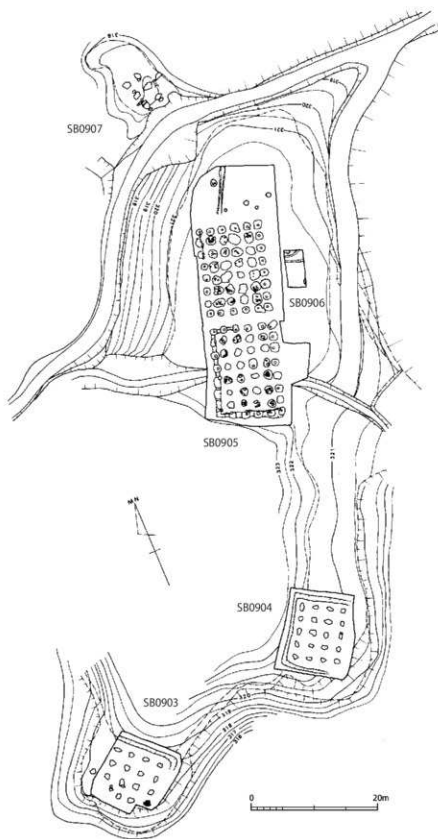


Fig.136 村上地区周辺地形図 (1/600) (福岡県教育委員会 1983 年改定)

小礎石は礎石は80～120cm程の大きさのものが良好に残り、その他50～60cm程の礎石間の小礎石が多く確認できた。これらの小礎石はSB0903と比べると柱筋上に位置するものが多く、礎石に接するものが多い。特に桁行列の中央では、礎石の両側に配する箇所が見られる。礎石の配置から梁行3間(6.75m)、桁行4間(8.4m)の総柱建物で、柱間は梁行2.25m(7.5尺)、桁行2.1m(7尺)と考えられる。建物の北東側、北西側、南西側の3方向では、柱列から100cm程外側のところに幅100cm程、深さ20cm程の雨落溝が存在する。雨落溝の存在しない南東側は緩斜面になっている。また、北西側雨落溝の肩部分には、径30cm程、深さ40cm程の柱穴が、桁行方向に筋を通して位置する。建物を構築する際の足場組みの穴の可能性もある。そのほか、南西側の雨落溝の肩では、溝よりも後出する円形状の焼土及び炭が径50cm程の範囲で認められた。

SB0905 (Fig.139, PL.51)

SB0905は16次調査で調査を行ったが、17次調査でその周囲に調査区を広げて追加調査を行った。SB0903の北方約35mに位置し、丘陵北東部を削り出した平坦面に築いている。礎石は80～120cm程の大きさのものが南西部に2個のみ残り、その他は後世の攪乱によって取り去られていた。礎石や礎石据付穴及び根石の配置から、梁行3間(6.3m)、桁行5間(10.5m)の総柱建物で、柱間は2.1m(7尺)と考えられる。建物の四周は、北東部が削られ判然としないが、柱筋から約150cm外側に、幅50～100cm、深さ20cm程の雨落溝が巡る。建物南辺は、基壇縁に20～30cm程の石を用いた石列を配し、雨落溝と区切る。この雨落溝の底面では、建物の柱位置と対応して建物を取り囲むように柱掘り方が確認された。柱掘り方は隅丸方形を呈するものが多く、一辺100cm程、深さは60～80cm程である。柱痕跡や柱抜き取り痕が見られ、中には礎板に使用された可能性のある石を据えているものもある。この柱掘り方は基壇の下にもぐっており、礎石建物及び雨落溝より先行することが明らかである。礎石と柱掘り方間の距離は1.8m(6尺)である。この柱掘り方列の外側には、径20～30cm程のビット群が多く存在する。建物を構築する際の足場組みの穴の可能性もある。

SB0906 (Fig.140, PL.52)

SB0906はSB0905の北側に隣接し、柱筋を合わせる。礎石は残っておらず、礎石据付穴及び根石の配置から、梁行3間(6.3m)、桁行5間(10.5m)の総柱建物で、柱間は2.1m(7尺)と考えられる。所見では、建物中央部分に岩盤の筋が南北に走っており、その部分の礎石据付穴は浅く根石も少ないのに対し、東側や西側の礎石据付穴は深く根石の量が多いとされ、礎石沈下を防ぐための配慮の可能性に触れている。建物の四周は、後世の攪乱のため雨落溝は確認できなかったが、建物北西部では一部基壇側石が残存している。この基壇側石の下には掘立柱の柱掘り方が入り込んでいるが、この一連の柱掘り方は、建物の礎石推定地よりも外側に概ね1.8m(6尺)離れて位置し、建物四周を取り囲み概ね柱筋を揃えている。細かく見ると、建物の梁・桁方向の柱筋とはきちんと合わせる傾向にあるが、外側1.8mの間隔には若干の出入りがある。柱掘り方は隅丸方形を呈するものが多く、一辺100～120cm程、深さは120cm程である。柱痕跡や柱抜き取り痕が見られ、柱を掘り方底部に置くもののほか、柱を掘り方底部より浮かし、礎板状に石を置くもの、また掘り方底部に若干土を入れ、その上に柱を置くものなどがある。この柱掘り方列の外側には、径20～30cm程のビット群が多く存在する。建物を構築する際の足場組みの穴の可能性もある。

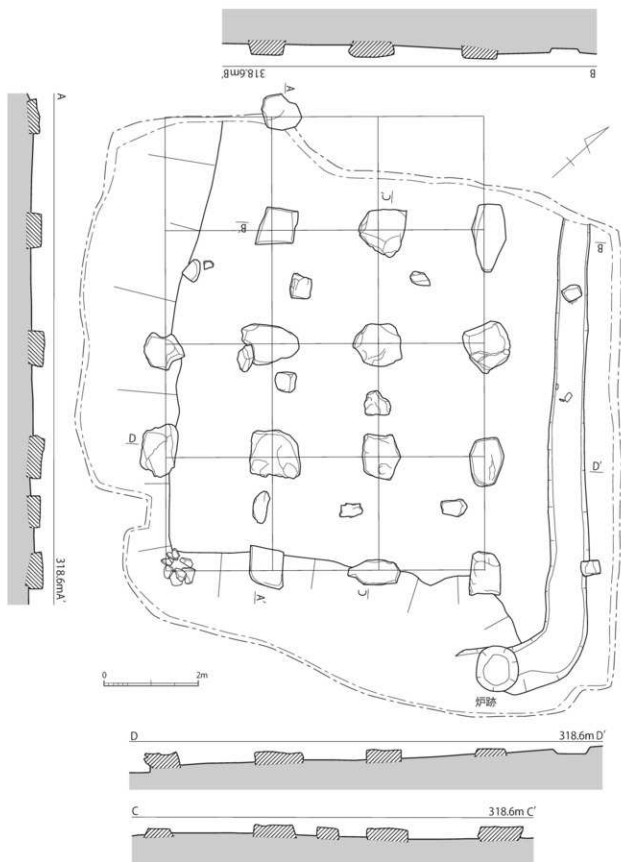


Fig.137 村上地区礎石建物 SB0903 実測図 (1/80)

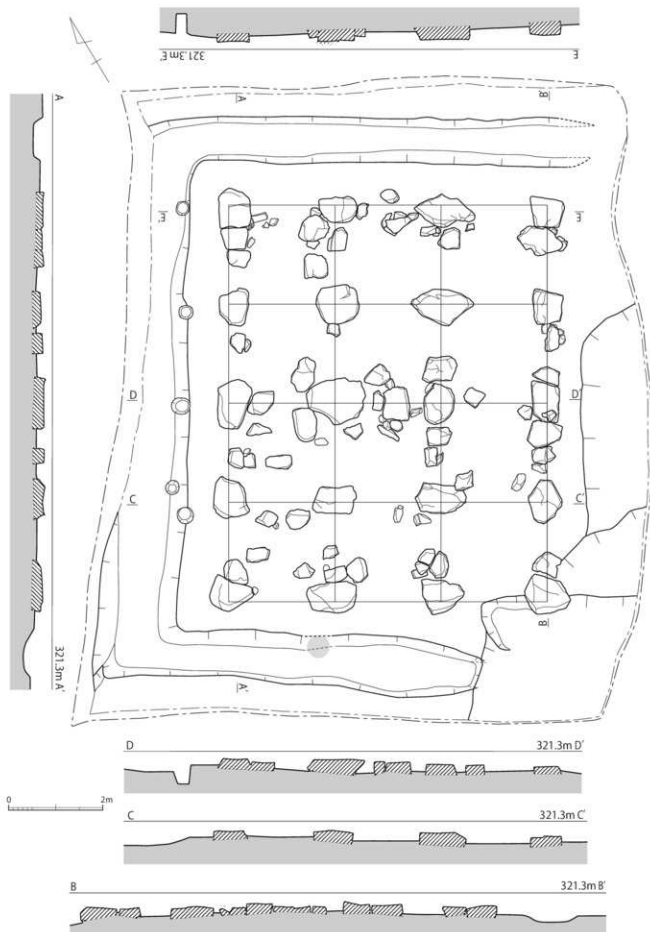


Fig.138 村上地区礎石建物 SB0904 実測図 (1/80)



Fig. 139 村上地区礎石建物 SB0905 実測図 (1/80)

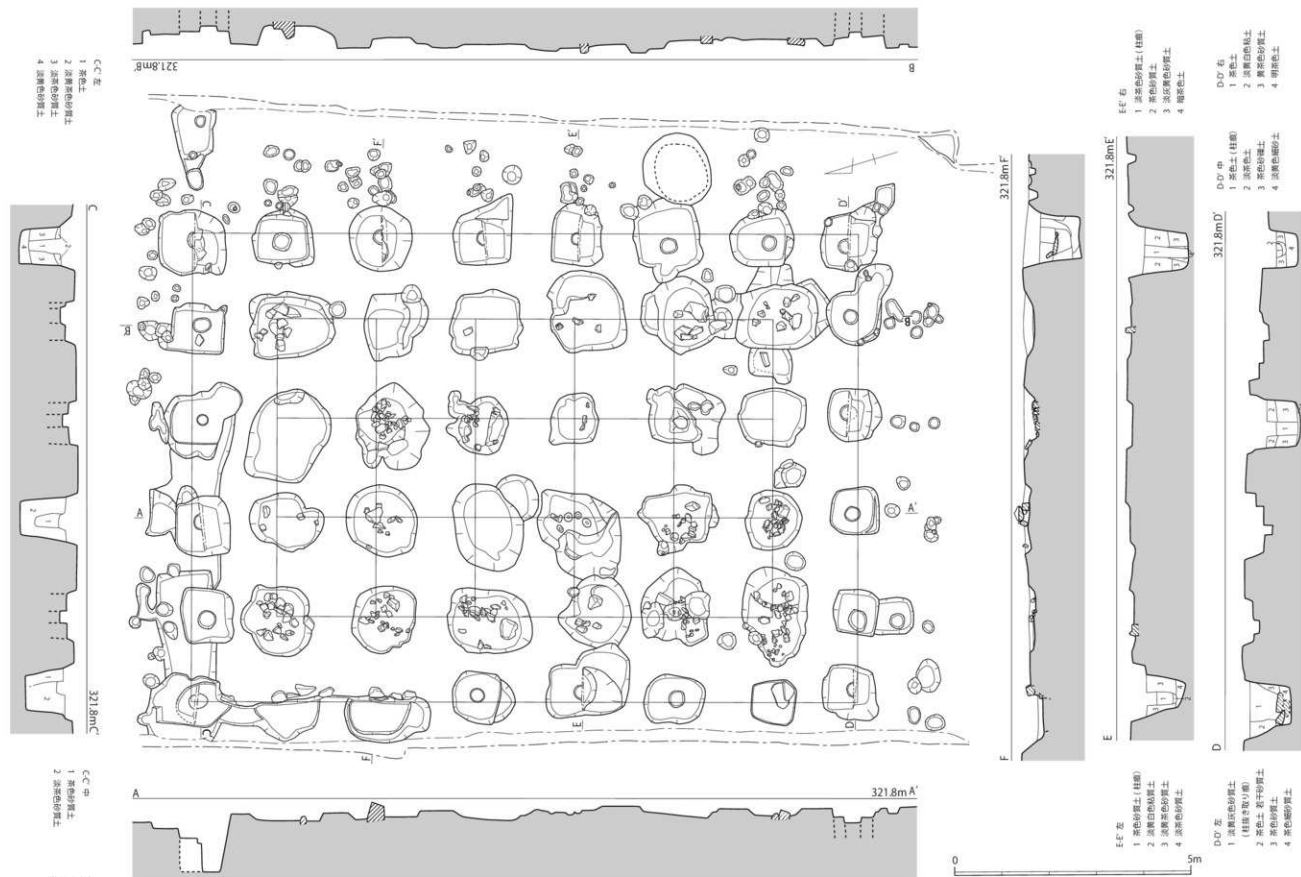


Fig. 140 村上地区礎石建物 SB0906 実測図 (1/80)

SB0907 (Fig.136)

SB0906の北西約25mに位置し、丘陵部が北西に張り出した尾根上の標高がやや下がった箇所に築いている。礎石は7個確認できるが、残りが悪く規模を明らかにすることはできない。ただ礎石間に小礎石を配しているや、柱間が2.1m(7尺)にならない点等から、猫坂地区に類例のある、梁行3間、桁行4間の総柱建物であった可能性が高い。

7) 毘沙門地区 (Fig.143, PL.53)

毘沙門地区の建物群は、大野城内の西方に位置する。大野城内で最も高い標高 410m の大



Fig.141 毘沙門地区平面図 (1/2,000) (岡寺 2018 から転載)

城山(鼓峰)の山頂付近に毘沙門堂があり、現在も信仰を集めている。周辺には造成された平坦地が多く認められ(Fig.141)、島田寅次郎氏の踏査以来、四天王寺の中心堂宇が存在した地として注目されてきた。礎石建物も確認されており、それらは御殿場礎石群とも呼ばれてきた。また、この地区は経塚が数多く発見されていることでもよく知られている。

調査は19・20次調査として、毘沙門堂から30m程東の平坦面を対象に行った(Fig.142)。表土の下には暗褐色土及び褐色土が存在しており、それらの土を除去すると、地山に掘り込まれた無数の遺構を確認することができた(Fig.143)。地山は西側の20次調査区で岩盤が多く、遺構はこれを掘り込んでいる。調査区の全体にわたって径20～40cm程の柱穴を確認し、多くの掘立柱建物が存在したことがうかがい知れるが、残念ながら建物を構成する柱穴の組み合わせを確認するまでには至らなかった。他の地区の建物群の様相とは全く異なる。その他、20次調査区の北端で径100cm程の焼土、19次調査区の南側で土坑を確認したが、土坑については別項で説明する。

その他発掘調査は行っていないが、毘沙門地区では礎石建物跡がこれまで2箇所確認されている。これらは後年に岡寺良が踏査を行い、平坦面との関係を整理した(礎石群A・B)(岡寺2018)(Fig.141)。ここではそのうちの礎石群Aについて報告を行う。

この礎石建物跡は以前から知られてはいたが、19次調査の際、ボーリング調査によって礎石を確認し、おおよその規模が判明した。大城山から北東に派生する尾根上の平坦面に位置し、現在の毘沙門堂から北東に約170m離れている。付近は造成によって形成されたと考えられる平坦地が多くあり、ほかに建物が存在した可能性は高い。発掘調査は行っていないが、後に九州歴史資料館が測量を行っており(Fig.144)、ここではその記録を報告する。

建物は一辺約11～12m程の基壇状の高まりに、50～120cm程の礎石が21個確認でき、その配置から、内陣は梁行1間(3.6m)、桁行1間(4.2m)、外側は梁行4間(8.4m)、桁行5間(9.0m)の建物と考えられる。柱間は内陣の梁行が3.6m(12尺)、桁行が4.2m(14尺)、外側の梁行は中央2間が1.8m(6尺)、なのに対し、両端は2.4m(8尺)、桁行は1.8m(6尺)等間である。従って、内陣の桁方向の柱筋は、外側の柱筋と一致するのに対して、内陣の梁方向の柱筋は外側の柱筋と一致しない。他の地区の総柱建物群とは構造が大きく異なることから、その性格も違うことが考えられ、内陣の存在から寺院関係の建物の可能性が考えられる。なお、基壇状の高まりの西側には石列、南側には溝と土塁状の高まりが確認でき、この建物に付随する可能性がある。

8) 広目地区

広目地区は大野城内の南西に位置し、水城口城門からは北北東に80m程、毘沙門堂からは南に500m程離れている。水城口城門付近からは尾根線が北に延びるが、その頂部の北側、標高305m程の箇所を造成した平坦面に1棟の建物跡が存在し、頂部の南側にはケヤシの井戸が存在する。

これまで発掘調査は行われていないが、鏡山猛等、九州文化総合研究所による実測調査が行われており、その成果は鏡山の『大宰府都城の研究』(1968)の中で示されている。また、後年には岡寺良が周辺地形も含めて平板測量を実施している(岡寺2018)。ただ鏡山が図示し

無数の
柱穴

内陣を
持つ
礎石建物

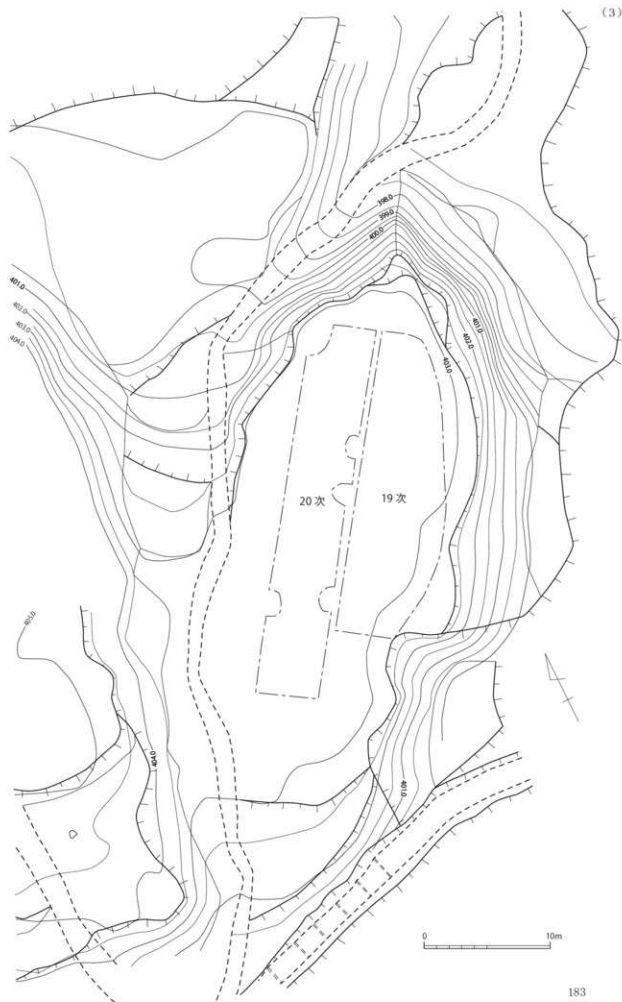


Fig.142 毘沙門地区（19・20次）周辺地形図（1/300）

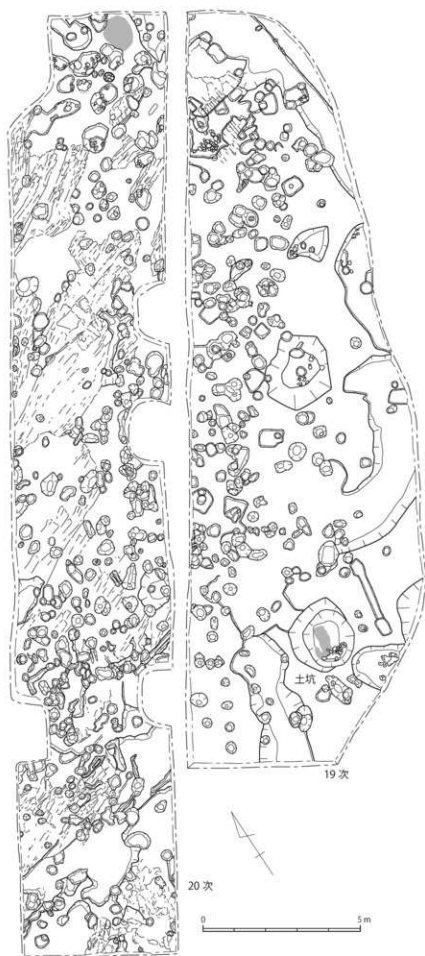


Fig.143 毘沙門地区 (19・20次) 平面図 (1/120)

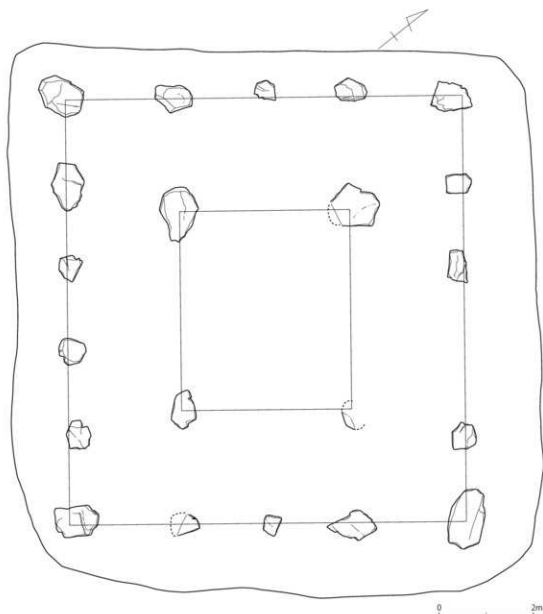


Fig.144 毘沙門地区礎石群 A 平面図 (1/80)

た礎石の全てを確認するには至らず、ここでは岡寺の周辺地形図に、鏡山の建物礎石の実測図を合成した図面を示す (Fig.145)。

建物を構成する礎石は 30 ～ 50cm 程のものが 19 個確認できるほか、小振りな地覆石が列をなす箇所も存在し、その配置から梁行 3 間 (2.97m)、桁行 7 間 (6.93m) の間仕切りのある建物で、柱間は 0.99m (3.3 尺) と考えられる。

間仕切り
のある
礎石建物

ほかの礎石群と礎石の大きさや建物規模、また礎石の配置が異なることから、大野城に付随した倉庫とは異なり、鏡山が指摘したように、小規模な仏殿が想定できる。

9) 前田地区

その他、過去に発掘調査は行われておらず、また現存する礎石も顕著ではないが、重要な建

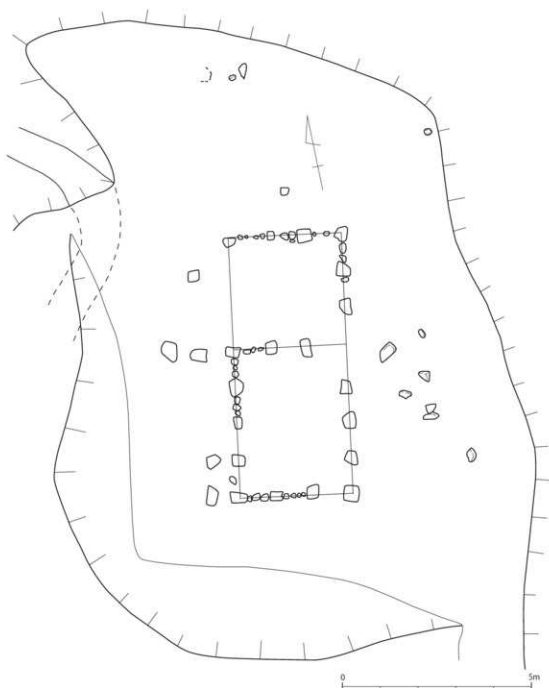


Fig.145 広島天地区礎石建物平面図 (1/100) (鏡山 1968・岡寺 2018 から作成)

物の存在が想定される前田地区についても触れておきたい。

前田地区は、大野城跡のほぼ中央に位置し、現在集落がある一帯を指す。昭和 52 ～ 53 年 (1977 ～ 1978) にかけて、住宅裏側の崖の崩落部から「館」銘の墨書土器や瓦、文様埴が採集されている。文様埴は大宰府政庁や学校院から出土したものと同様であり、その遺物の内容から重要な施設が存在したことが類推される。『太宰府旧蹟全図北』では、主城原地区の建物群について「三ノ丸石スエ」とあるが、前田地区と考えられる箇所には「二ノ丸石スエ」の記述があり、かつては建物の礎石が存在していたことが考えられる。

この前田地区では、現在の集落の北側丘陵の至る箇所でも平地が確認でき、このような場所

に建物建てられていた可能性は高い。また、大日堂では礎石建物一棟分が発見されているという。それら建物の性格は、大野城の役所的機能を持っていた可能性が高く、その実態の解明は今後の調査研究の大きな課題と言える。

(4) その他

大野城跡では上記遺構のほか、古代山城として機能した時期以降のものも多く確認されている。ここではそれらについて主に発掘調査成果を記述するが、発掘調査が行われていないものについても一部、知り得る情報について言及したい。

1) 石組遺構

各建物群では、建物よりも新しい時期の石組遺構が散見された。八ツ波地区ではSX016、SX017、主城原地区ではSX073を確認した。

SX016 (Fig.146, PL.54)

八ツ波礎石群の礎石建物 SB0009 よりも新しい石組である。20cm程の扁平な花崗岩自然石を揺鉢状に組んでいる。現存するのは1段のみであるが、内部に石が落ち込んでいたことから、さらに上にも組まれていたと考えられる。遺物は攪乱をうけ原位置にはないが、鉢の底部が敷石の上面に接していた。墓の可能性も考えられる。

SX017 (Fig.146, PL.54)

概報では遺構番号が付与されていなかったが、今回 SX017 とした石囲い遺構である。八ツ波礎石群 SB0007 の礎石据付穴の上に存在し、明らかに建物より後出する。やや大きめの礫を礎石の上に被るように、2.0m × 3.0 m の範囲に方形に組んでいる。上部は攪乱を受けているため、本来はもっと高くまで組まれていた可能性もある。SB0007 よりも新しい遺構はほかに

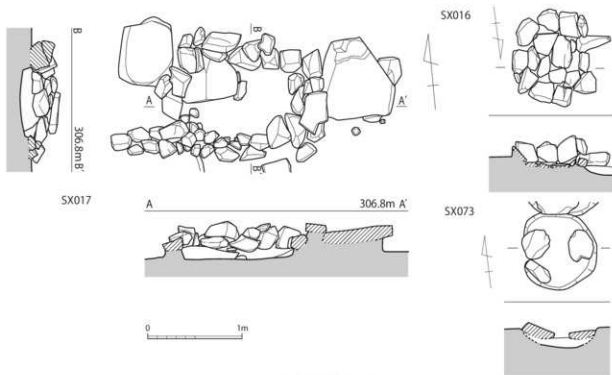


Fig.146 石組遺構実測図 (1/40)

も調査区北西に位置する石列があり、これは建物東側の石積列と平行することから、石積列も後出する可能性がある点は先述したとおりである。これらとSX017との相互の関係は今のところ不明である。

SX073 (Fig.146, PL.54)

主城原礎石群の礎石建物SB0610の礎石据付穴の上に存在し、明らかに建物より後出する。20cm程の礫を浅く掘りくぼめた穴に石を貼り付けるように配置している。

その他、主城原地区礎石群地区のSB0607のトレンチで、20cm程の礫が径70cm程の範囲で並ぶ円形石組遺構を確認したが(Fig.124)、これも上記石組遺構と似た性格と思われる。

2) 炉・土坑・溝跡

城内には焼土や炭を伴った土坑や溝が散見される。火を用いた痕跡と考えられるが、ここではそれらを中心に焼土を伴わない用途不明の土坑も合わせて報告する。

北石垣城壁上の平坦地で行った14次調査のトレンチ調査では(Fig.56)、複数の火を受けた遺構を確認している。その他、猫坂地区や村上地区の建物群でも炉跡を複数確認している。これら遺構は、石垣や建物跡よりは新しいが、詳細な時期は不明なものが多い。

SX075 (Fig.147, PL.55)

焼けた
遺構

14次調査の北石垣城壁上に設定したDトレンチで確認したもので、概ね燃焼遺構としたものである。石垣の縁から2m程内側に位置し、石垣裏込めを切り込んでいる。平面形態は釣り鐘形を呈し、長径2.0m、短径1.6m程、深さは50cm程である。底面はほぼ水平で、底面と壁面は焼けて赤褐色を呈する。底面には10cm程の厚さで炭が堆積し、その上には黄褐色土が埋まっており、50cm程の大きな石を含んでいる。この土からは土師器が出土している。なお、この遺構のすぐ西側には、径80cm程、深さ20cm弱の土坑もある。土坑自体は焼けていないが、埋土には炭が混じっていた。これら遺構の上、また表土下には炭を多く含む土が存在する。

SX076 (Fig.147, PL.55)

14次調査の北石垣城壁上に設定したFトレンチで確認したものである。幅30cm程、深さ15cm程の溝状を呈する。底面及び壁面が焼けており、埋土はほぼ炭のみである。周辺の表土下から遺構面にかけても炭を多く含む土が堆積している。

SD077 (Fig.148, PL.55)

14次調査の北石垣城壁上に設定したCトレンチで確認した溝状遺構である。Dトレンチの北壁断ち割りサブトレンチで確認した落ちもこの一部の可能性がある。石垣から5m程内側にほぼ平行する格好で南北に延び、幅90cm程、深さ50cm程の断面V字状を呈する。焼けてはおらず、埋土にも炭は認められない。すぐ東側には細い溝がもう1条存在する。

SX081

15次調査の主城原南部建物群で確認した径60cm程の円形のピットである(Fig.132)。礎石建物SB0618北西隅の礎石間の位置で、粉末状の炭がびっしりと詰まっていた状態で確認された。建物の遺構面を覆う褐色を帯びた土の上面で検出されたことから、建物よりも後出することが明らかである。底部は硬化しておらず、わずかに赤変する程度であった。炭の中には炭化米30粒程が確認できた。

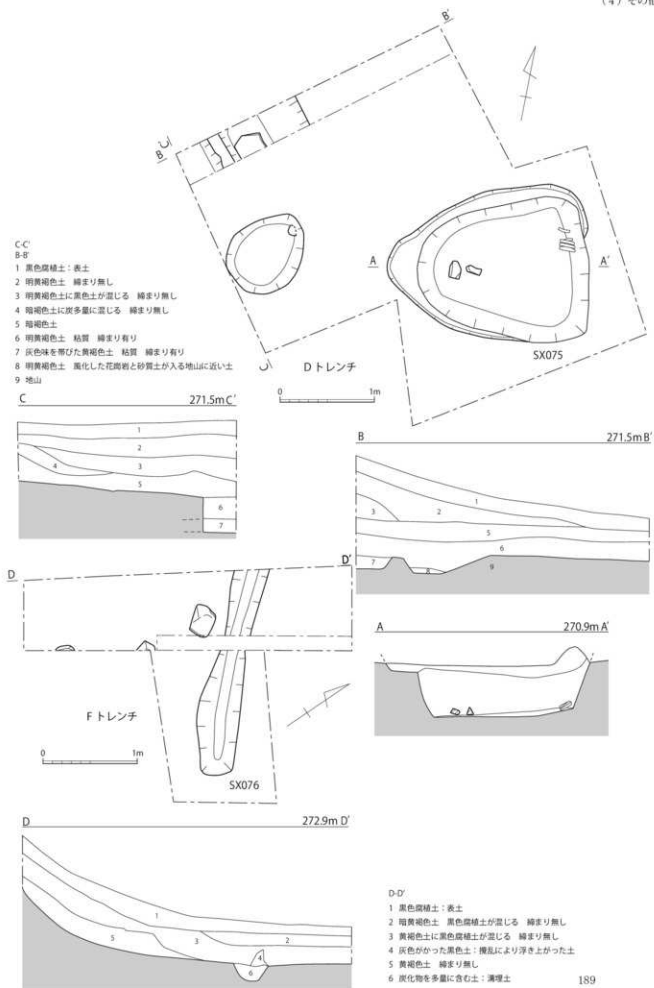


Fig.147 北石垣地区（14次D・Fトレンチ）SX075・076実測図（1/40）

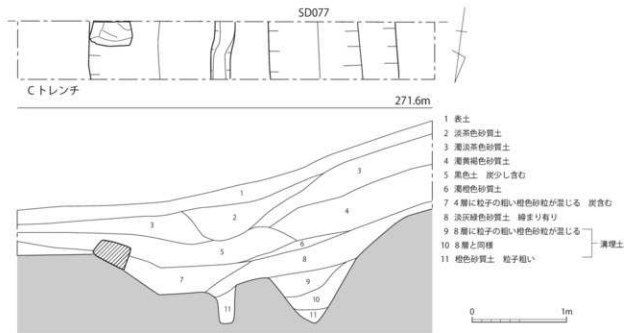


Fig.148 北石垣地区 (14次Cトレンチ) SD077 実測図 (1/40)

SX082

15次調査の主城原地区南部建物群で確認したピットである。概報ではSX081と同様、粉末状の炭が多量に詰まっていたとの記述はあるが、位置が判然としない。礎石建物SX0619南東隅のピットがそれに該当する可能性が高い。

SX055 (Fig.149, PL56)

10次調査の猫坂地区で確認した炉跡である。礎石建物SB0501・SB0502の周囲では計5ヶ所の炉跡状遺構を確認した。雨落溝と切り合うものが多く、建物よりも新しい時期のものである。残存状況の良かったSB0502の北西隅に位置するSX055は、径80cm、深さ47cmであり、壁面は焼けて約1cmの厚さで固く赤変している。埋土の中・上層では炭が特に多く入っていた。

村上地区の炉跡 (Fig.149, PL56)

15・16次調査の村上地区で確認した炉跡である。礎石建物SB0903北側の雨落溝が南に曲がり焼失する地点で確認した。溝跡より新しいもので、径100cm程、深さ30cm程の円形で壁面は赤褐色を呈し固く焼けていた。埋土には炭化物が多く混入していた。

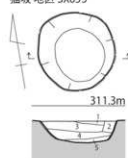
水ノ手口石壁の焼土坑 (Fig.149, PL56)

32次調査の水ノ手口石壁北西側平坦地の19トレンチで確認した焼土坑である。一辺90cm程の隅丸方形プランで深さは35cm程である。埋土は下の方に炭を多く含んでおり、壁面は赤く焼けていた。

北石垣C区1号焼土坑 (Fig.63・149, PL57)

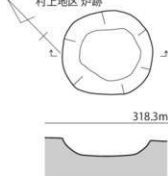
46次調査の北石垣C区崩落部で確認した焼土坑である。平面形態は方形で一辺1m程、深さは斜面上側で25cm程である。埋土の下層で炭を多く含んでおり、壁面は赤く焼けているところが確認できる。

猫坂地区 SX055

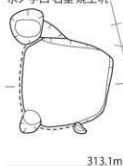


- 1 暗黄褐色土 炭少量混じる
- 2 茶灰色土
- 3 炭
- 4 暗黄褐色土 炭が僅かに混じる
- 5 暗黄灰色土 1より炭がやや多く粘質

村上地区 炉跡

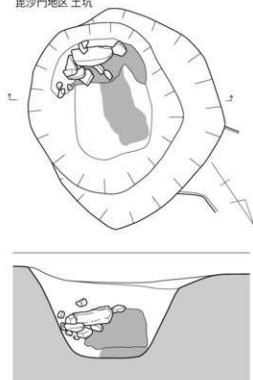


水ノ手口石壁焼土坑

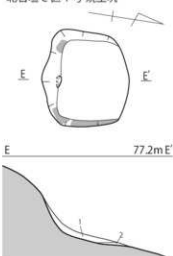


- 1 暗褐色土 炭少量含む
- 2 黒色の炭の粉末を多量に含む

毘沙門地区 土坑

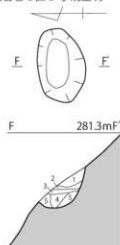


北石垣C区1号焼土坑



- 1 灰黄褐色粘質土に砂粒が混じる
- 2 黒色炭化物層

北石垣C区2号焼土坑



- 1 黄褐色粘砂質土
- 2 灰黄褐色粘砂質土
- 3 黒色粘質土：炭化物増殖層
- 4 暗灰褐色粘砂質土 炭混じる
- 5 白黄褐色粘砂質土

Fig.149 土坑実測図 (1/40)

北石垣C区2号焼土坑 (Fig.63・149, PL.57)

46次調査の北石垣C区崩落部で確認した焼土坑である。土坑は土塁の外被盛土を掘り込んでいる。平面形態は長卵形で長軸80cm程、短軸50cm程である。埋土は底部から20cm程上で厚さ5cm程の炭化物集中層が認められた。

毘沙門地区土坑 (Fig.149)

19次調査の毘沙門地区で確認した土坑である。平面形態は円形で径200～220cm程だが、

西側から北側にかけては浅く立ち上がる部分が多くを占める。断面は揺鉢状を呈し、深さは90cm程である。埋土の下部に炭や焼土塊を多く含み、底面や壁面の一部は焼けている。南側の壁面には石が多く存在し、積まれたような状況を呈している。

クロガネ岩城門 SK01 (Fig.86)

54-2次調査の12トレンチで版築土塁を切り込む格好で確認した土坑である。調査区外に延びるため正確な規模は不明だが、長さ1.25m以上、幅0.58m、深さ0.32mである。焼土や炭は無く、性格は不明である。

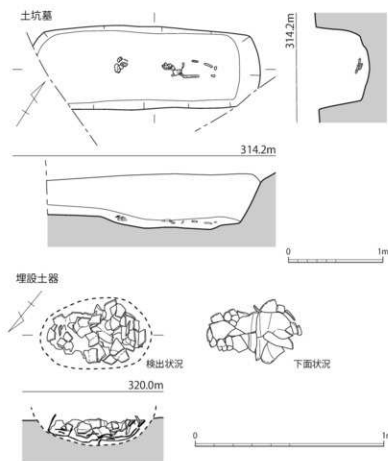
3) 土坑墓

ここでは人骨が伴う土坑を土坑墓として報告する。大野城跡内の明確な墓は現在のところ1基のみ調査されている。

太宰府口東方地区土坑墓 (Fig.150)

30次調査の太宰府口東方地区7bトレンチで確認した土坑墓である。調査区外に延びるため正確な規模は分からないものの、長さは概ね2.4m、幅0.85m程、深さ0.55m程である。床面からは人骨が出土している。時期は中世～近世かと思われる。

4) 埋設土器



以前からよく知られているものとして、太宰府口城門の地鎖具が挙げられるが、ここではそれ以外の人為的なものを取り上げる。

太宰府口東方地区埋設土器 (Fig.8・150)

30次調査の太宰府口東方地区7aトレンチ南西隅で確認した埋設土器である。土塁の上で二つの小型甕が、合わせ口の格好で横位に据わった状態で出土した。

5) 窯跡

大野城内ではこれまで3基の窯跡が調査されており、形態等からいづれも炭窯と考えられ

Fig.150 太宰府口東方地区土坑墓、埋設土器 (1/40・1/20)

る。ただ、時期は明確ではない。これらのうち、平成 15 年豪雨災害の復旧事業に伴う 38 次調査の鮎返り地区、及び 50 次調査の小石垣北方地区 B 区の調査で確認した窯跡については、『特別史跡大野城跡整備事業 V 下巻』にて報告されており、ここでは要点を記す。

鮎返り地区 1 号窯跡 (Fig.151, PL.57)

内野川に流れ込む谷川の北側斜面に位置する。窯の下側斜面の灰原は多くが崩落していたものの、窯本体は残存しており、トレンチを入れて床面と壁面の一部を確認した。その結果、焼成部は平らで、長さ 3 m 程、幅 2.5 m 程の三角プラスコのような形態を呈し、地下式の丸みを帯びたドーム型と想定できた。土層断面で焼けた地山ブロックが何層も確認できることから、何度か天井が崩落したと考えられる。壁面は黒変していたが、硬化してはおらず燃焼温度はさほど高くなかったと考えられる。焚き口の東側側壁には人頭大の角礫を配しており、閉鎖用の石材と思われる。窯のかなり上方で煙道部と考えられる円形の掘り込みを確認した。輪郭には炭素が吸着していた。

小石垣北方地区 B 区 1 号窯跡 (Fig.27・151, PL.58)

崩落部で確認したもので、トレンチを入れおおよその形状を把握した。焚き口から焼成部に向けてはラッパ状に広がる。ピンボールを刺して硬くなる箇所を確認した結果、奥行きは 3 m 程と推定できる。奥壁等の形状は確認できていないが、おそらく平面形態はイチジク状になると思われる。床面は平らで、床面や壁面は黒変している。埋土の最下層では炭化物が集中し、その上には壁体等の崩落土を確認した。斜面の上方を精査したところ、煙道の先端部と想定されるものを確認した。

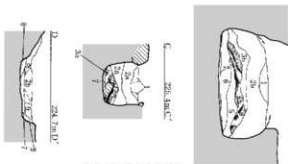
主城原地区窯跡 SX072 (Fig.152, PL.58)

13 次調査の主城原地区 SB0610 の南側で確認した窯跡で、長径 2.3m、短径 2.1m の楕円形を呈する。残存している深さは 0.7m である。床面は焚き口を低く、奥を高くしているが、角度は 10°程と緩い。焚き口に近い部分 1 m 程の範囲は特に窪みをつけている。壁面は青黒く硬く焼けており、窯を構築した際の鋤先のような工具痕と思われるものが確認できた。また床面は壁ほどではないが、焼けて赤黒くなっている。焚き口は幅 0.4 m 程で、両側に石を立て、石の裏には各 1 枚丸瓦片を詰めている。下面には平板状の石と格子タタキの丸瓦を置いている。また最奥部には煙道を設けているが、奥壁の一部を挟み、その前面に別の土を厚さ 10cm 程で垂直に半筒状に作り付け、内径 35cm×40cm の煙突状にしている。煙突正面下部には床面に接して 20cm×10cm 程の煙吸い込み孔を設けている。煙道には厚さ 10cm 程、幅 20cm、長さ 40 cm 程の石が斜めに入っていた。埋土には壁体や天井部が崩れてブロック状になったものが大量に含まれていたが、木炭は残存していなかった。

6) 経塚

大野城が位置する四王寺山は、九州北部における経塚の一大拠点であり、これまで多くの経塚が見つかることでも著名である。それらは四王寺山経塚と呼ばれ、出土した経筒のうち特徴的なものは「四王寺型」と呼称されている。これまで発掘調査が行われた事例はないが、四王寺山出土と伝えられる経筒は実に数十点にものぼる。その中には国の重要文化財に指定されているものも多い。

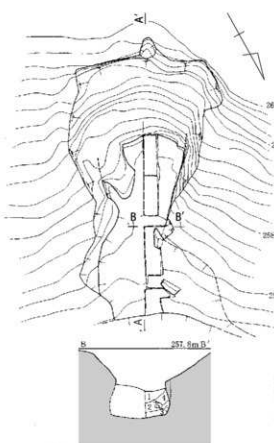
1. 灰褐色粘砂質土、天井崩落後の流入堆積土。
- 2a. 灰褐色粘砂質土に地山の花崗質風化ブロック・地土(壁面側)を含む、天井崩落後の流入堆積土で、壁の躯体が脱落したものか。
- 2b. 黄褐色粘砂質土に地山の緑化花崗岩ブロックを含む、天井崩落後の流入堆積土。
- 3a. 灰黄褐色粘砂質土に緑化した花崗岩(壁体)ブロックを多く含む、天井・壁体の2段階・崩落土。
- 3b. 灰黄褐色粘砂質土に緑化した花崗岩(壁体)ブロック小片を含む、4m幅前後・堆積厚約5mの天井・壁体崩落土か。
- 4a. 黄褐色粘砂質土に緑化した地山ブロック小片を多く含む、位置不明・厚さ約5mの天井・壁体崩落土か。
- 4b. 黄褐色粘砂質土に残った地山ブロックを多く含む、天井・壁体の1段階・堆積土。
5. 灰黄褐色粘砂質土に風化花崗岩ブロックを少し含む、天井崩落後の流入土。



船返り地区1号窟跡



北石垣北方地区B区1号窟跡



毘沙門堂経塚

最も多くの経塚が見つかったのは、現在の毘沙門堂の東であり、毘沙門堂経塚と呼ばれている。これは1927年（昭和2）に、大野城跡土塁線の調査を行っていた島田寅次郎や地域住民が発見したものであり、南北一列に並んだ状態で8基が確認された（島田1927）。経塚の中からは銅製や陶製の経筒、青白磁合子等が見つかり、中には滑石製如来立像が伴っているものもあった。

村上経塚

1932年（昭和7）には、村上にて経筒が発見されており、村上経塚と呼ばれている。これは地元住民が、小山の頂に露出していた石を底石に使用しようと掘削したところ、その下から経筒が見つかったもので、その状況を川上市太郎が聞き取りを行い報告している（川上1933）。それによれば、掘り出した石は室の蓋石

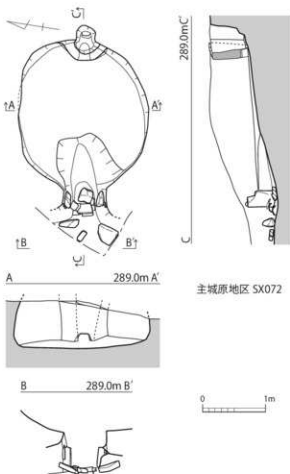


Fig.152 窠跡実測図②（1/60）

であり、その下に丸石で組んだ石室が存在し、その中に青銅製の積上式経筒1基と四王寺型経筒1基、陶製経筒1基が収められていた（Fig.153）。経筒の周りは木炭が混じった土が充填しており、所々に瓦が入れられ、また床面に瓦片が敷かれていた。出土した四王寺型経筒には「妙法蓮華経一部 元永元年十月廿七日 勸請教導」という刻銘が入れられ、積上式経筒の中には経典が残っており、大変貴重な発見となった。

その他の経塚

上記以外にも、発掘調査は行っていないが、50次調査で小石垣北方地区B区の地形測量を行った際に、2つの経塚状遺構を確認しており、『特別史跡大野城跡整備事業V下巻』（2010）でそれぞれ「小石垣北方地区1号経塚」、「小石垣北方地区2号経塚」としている。1号経塚は直径5m程、高さ1m程で、頂部付近に板状の石材が一部露出している状況が見られる。2号経塚は直径2.5m程で、高さは0.8m程と小さいが、人工的な遺構と考えられる。これらのような人工的な地形の盛り上がりは大野城内に散見され、まだ知られていない多くの経塚が存在すると思われる。

その中でも、四王寺山の一峰でもある水瓶山は、多くの経筒が掘り出されていることが確実視される。これら経筒は、かつて行われていた雨乞祈禱の際に用いられていたもので、伝説によると、最澄が水瓶山で掘り出したのがはじまりとされる。

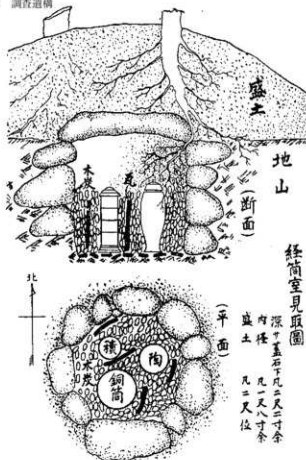


Fig.153 村上経塚模式図 (川上 1933 から転載)

大野城内には大きな円形の窪地が数カ所見られる。

ケイサシの井戸 (Fig.154)

水城口城門の北東の広目天地区に位置し、土手を伴う直径 10m 以上の大きな円形の窪地の底に井戸が存在する。調査は鏡山猛等、九州文化総合研究所によって昭和 34 年 (1959) に実測が行われており、その成果は『大宰府都城の研究』で報告されている。井戸枠は石で方形に近く組まれており、内法は 60cm 程である。石積は深さ 1.5m 程までで、その下は丸太材を組んでおり、底は板敷きである。鏡山は石積の部分とその下の部分是不調和な感じとの所見を示し、石積が後世の補修である可能性を指摘している。年代を決定する良好な出土遺物に恵まれなかったが、井戸の構築が古代に遡る可能性にも言及している。

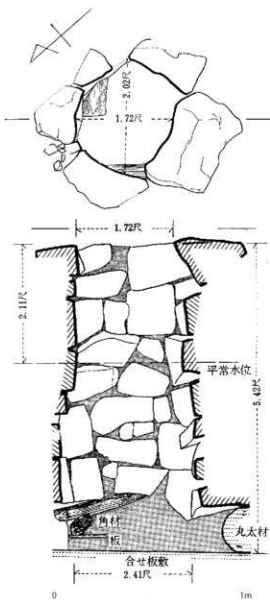
鏡ヶ池

増長天礎石群の南西に位置し、ケイサシの井

その他、経塚は山麓に位置する原山無量寺などでも多く確認されているほか (島田 1926)、四王寺山北西の乙金山に位置する古野遺跡でも発見されており (大野城市教育委員会 2017)、周辺の山麓でも造営が進んだものと考えられる。

7) 井戸・池

大野城内には井戸や池が見られる。このうち確実な井戸跡としては「ケイサシの井戸」と呼ばれるものがあり、唯一調査されている。その他、井戸の存在は不詳ながら、

Fig.154 ケイサシの井戸実測図 (1/20)
(鏡山 1968 から転載)

戸と類似した大きな円形の窪地に現在も水を湛えている。かつて雨乞いの行事が行われたとされる。井戸が存在する可能性もあるが、堆積物が厚く堆積しており、その構造は明らかになっていない。

その他の窪地

鏡ヶ池の北西、15～20m程の箇所に土手状の高まりを伴う直径15m程の大きな円形の窪地が存在するほか、持国天と呼ばれる箇所の山頂にも同様の窪地が確認されている。未だ発掘調査を行ったことはなく、その構造や時期は分かっていない。

参考文献

- 大野城市教育委員会 2017『乙金山地区遺跡群 21』大野城市文化財調査報告書第157集
- 岡寺 良 2018「四王院跡と四王寺山縁塚群」『大宰府の研究』高志書院
- 鏡山 猛 1968『大宰府都城の研究』風間書房
- 島田寅次郎 1926「大野城址」『史蹟名勝天然記念物調査報告書』第二輯 福岡県
- 島田寅次郎 1927「四王寺の来歴と遺物の発見」『史蹟名勝天然記念物』第2集 11号 史蹟名勝天然記念物協会
- 川上市太郎 1933「昭和七年発見四王寺経筒写経と四王瓦」『史蹟名勝天然記念物調査報告書』第八輯 福岡県
- 福岡県教育委員会 1980『特別史跡大野城跡 環境整備事業実施報告書Ⅱ』

第V章 総 括

本書では、大野城跡の過去の発掘調査の成果について、遺構の取りまとめを行ったが、遺構の時期決定や性格付けについては、遺物を含めた考察が必要である。遺物の報告については、後年に刊行予定の報告書で行う予定であり、考察についてもそちらで行うことにしたい。

従って本章では、遺構の詳細な時期については触れないが、発掘調査によって得られた成果について、種別毎に特徴をまとめ、課題の整理を行い総括とする。

(1) 城壁

大野城跡を取り巻く城壁は、基本的には自然の尾根線に沿って土塁を築き、谷を横断する箇所に石塁を築いているが、北石垣では、土塁の外側に貼石垣を施している。本書ではこれら土塁、石塁（石垣）、について、大きく17箇所の地点に分けて報告を行ったが、土塁の多くは平成15年7月豪雨災害復旧事業の調査によるもので、『特別史跡大野城跡整備事業V下巻』で城壁の構造や築造方法について詳細に考察が行われている。本章ではその成果を踏まえ、要点をまとめる。

1) 土塁

土塁は尾根からやや下がった斜面に内托式に築く場所が多いが、東側土塁の尾花地区や南側外周土塁の太宰府口東方地区、南側内周土塁の大石垣上方地区では、夾築式となる部分もある。

多くの箇所で、地山の段切り加工、基礎盛土、堰板柱穴、版築盛土を確認し、土塁の構築方法が明らかとなっている。大石垣上方地区等では、基礎盛土の最下層で焼土や炭化物を含む層が見られ、土塁築造箇所や盛土採土場において、草木等を焼き払った可能性が考えられる。また、地山と基礎盛土の境界部に黒色土はなく、基礎盛土の施工前に表土を除去している可能性が高い。

基礎盛土には茶褐色系統の粘質土が多く用いられるが、これは地山表層部から採取された土を用いたためと考えられる。基礎盛土は層の境界が不明瞭な部分も多く、一つの層の厚さも厚い部分が多い。この基礎盛土は、堰板などを用いる版築の方法をとらないが、北石垣A区では、下段の盛土で例外的に堰板柱の痕跡が認められ、典型的な基礎盛土とはやや異なっている。

基礎盛土により形成された平坦面には堰板柱が掘り込まれる。この柱掘り方は一辺80cm以上と大きいものが多く、深さは様々である。中には1m以上の深さがあるものも存在する。埋土は水平に何層も重ねられている。南側外周土塁の太宰府口東方地区や東側土塁の原地区、また、北石垣A区や北側内周土塁の小石垣東方地区A区では、柱穴の底や上面の柱痕の周囲に石が配され、柱の根固めの可能性がある。柱痕は木質が腐朽し柔らかな土に変わったり、空洞化した状態で確認でき、直径は20～30cm程だったと考えられる。これらは、南側外周土塁の太宰府口東方地区や大石垣上方地区A区、西側土塁の屯水地区F区、また北石垣C区で、版築盛土中に見られることから、堰板柱は版築盛土中に埋め込まれ、堰板は堰板柱の外側に固定されていたことが分かる。この堰板柱は、太宰府口東方地区の柱穴3で約75度の角度で立ち上がるのが確認でき、北石垣C区の柱穴2で約83度、大石垣上方地区A区の城内側の堰板

柱は約80度で立ち上がっていることから、土塁の法面は80度前後であったことが推測される。なお、堰板柱の間隔は一定ではない。規格性に乏しいが、平均すると2m前後になりそうである。この堰板柱は列状に配されるが、北石垣C区等では「折れ」が確認でき、版築盛土自体も「折れ」が存在したと理解される。

基礎盛土の上には版築盛土が築かれるが、各層の厚さは10cm程の箇所が多い。太宰府口西方地区や太宰府口東方地区の30次調査8トレンチでは、城内側に傾斜して積まれる状況が確認できたが、大石垣上方地区B区等では城外側に傾斜して積まれていた。内托式土塁の場合、急斜面に築かれることが多いため外側に傾斜してしまうのか、もしくは浸透した水の処理のためにそうしたのかは検討が必要である。版築盛土に使用する土は、基本的には花崗岩が風化したマサ土を主に用いるが、調査する場所によって異なり、屯水地区B区や小石垣B区で礫が多いのは、近くの河川堆積土も用いたためと考えられる。

版築盛土は、土塁延長方向ではその工事単位を明確に確認できないのも大野城跡の特徴である。ただ、上述した北石垣C区では「折れ」が存在し、その境界に赤褐色粘質土が多く用いられているものの、左右の版築盛土は同時に施工されている。また、北石垣C区や小石垣東方地区A区南壁では、突き棒の痕跡を確認している。北石垣C区では、基礎盛土のやや上の暗褐色粘質土を用いた層に特徴的に見られ、小石垣東方地区A区では、柔らかい状態で突いたためか、数層にわたってその影響が及んでおり、下層にいくほど凹部が広がっている。平面では確認できていないが、土層の断面から突き棒の径は10cm程であったと考えられる。

なお、堰板を固定するための横木痕と思われるものが東側土塁の尾花地区等で確認されている。これは盛土の所々に数多くの小孔を穿った痕跡が見られ、内部は締まりのない土が充填しており、ピンボールを差し込むことで、土塁延長方向に対して直角・水平に深く延びていることが確認できたものである。横木の木質が腐朽した痕跡と考えられるが、大谷東方地区では内托式にも関わらず同様のものが確認できており、中には樹木痕の可能性も視野に入れておくべきかと思われる。

版築盛土の天端には、掘立柱列が確認できた箇所もある。太宰府口東方地区では2列の柱列を確認している。尾花土塁では28次調査で、また増長天西方土塁では52・53次調査で、天端の内側に寄った箇所に柱列を確認したが、本来は2列存在した可能性も否定できない。これらは櫓列や櫓状の建物跡であった可能性も考えられる。

平成15年7月豪雨災害復旧事業の調査では、土塁外側に版築盛土を覆うように積まれた外被盛土を確認したのも大きな成果であった。屯水地区F区、北石垣C区、小石垣B区、大谷東方地区B区で明確に確認でき、ほかでもその可能性があるものを確認できた箇所は多い。これらは締まりは悪いが層状に水平を志向して積まれており、基礎盛土の上で版築盛土を覆う格好で存在している。その機能は、版築盛土の保護のため、もしくは基礎盛土上の平坦面を消去するためとも考えられる。ただ、北石垣C区の外被盛土は基礎盛土の前面にまで及んでおり、この点は特異である。

基礎盛土の上面には石材を配する箇所も見られる。尾花地区の33次調査では列石を確認しており、大石垣上方地区E区では未整形の角礫が並べられているのを確認している。これらは版築盛土に埋没する格好となっている。また屯水地区F区では、版築盛土前面の基礎盛土に小

児頭大の角礫を配し、小石垣東方地区A区や同B区では基礎盛土の上に板石を敷き並べているが、最終的には外被盛土に覆われ、表には見えない状態であったと思われる。

また、小石垣東方地区A区では、上記の基礎盛土上面の石敷背後に、版築土に貼り付けられたような石垣状の構造物を確認した。類例は韓国の山城や岡山県鬼ノ城跡で確認できるが、大野城跡では外被盛土により覆われる点で、やや異なっている。

そのほか40次調査では、尾花地区A区で、修築基礎盛土の基底部と地山の境に、平たい花崗岩礫が数段にわたって積まれていたのを確認しており、基礎盛土の滑り止めの機能を期待したものとも考えられる。

土塁の崩落を修築した痕跡はこのほか、大谷東方地区B区でも確認している。修築した際にも基礎盛土及び版築盛土を行っており、修築部分から採取した炭化物をC14年代測定にかけた結果、築造時期よりも後の年代を示すことが明らかとなっている（小澤2014）。

2) 石垣

石垣は、百間石垣や大石垣、水ノ手口石垣、小石垣B区で、石を縦に積み重ねる「重箱積」の手法が観察され、かつ数石単位（高さ0.8～1m程）で、横目地が通る「層状単位積」も見られる。この層状単位積の石は、小石垣B区では石垣内部にまで及んでいることから、構築の際に上面を描えながら行ったことが想定される。また、小石垣B区や百間石垣では、重箱積の技法ながらやや斜めに凭せ掛けるように積まれる箇所が見られ、『特別史跡大野城跡整備事業V下巻』では「凭せ掛けブロック積」と呼称している。

石垣の基底部は、百間石垣で所見が得られており、南端で大きな板石を敷き並べるように張り出しを設けている事例、また35次調査で岩盤掘削後に板石でテラスを設ける事例、36次調査ではテラスを削り出している事例を確認している。

石垣内部は場所によって異なり、35次調査の百間石垣中央部の石垣3トレンチ北側では、石垣裏込め土のさらに裏側に版築状の積土を確認したのに対し、36次調査の石垣北半では内部に積土は見られず、栗石による空積みを行っている。また、水ノ手口石垣の内部は外面とは異なり、やや小振りの石で乱雑に割石を詰め込んだ状態を確認している。

石垣天端は百間石垣の場合、平坦面を形成しており、平坦部の保護のためと思われる石敷や版築状の積土を確認している。

石垣は谷部を塞ぐことが多いが、大野城跡で明確に水門・排水口を確認できたのは、現状で視認できる百間石垣の南側の谷部や屯水地区の石垣に限られ、ほかには北石垣C区で確認したにすぎない。水ノ手口石垣や大石垣では、基底部の石が雑然としており、また百間石垣では、石垣の下に透水性の高い淡灰色砂礫層が存在し、これら石の隙間や砂礫層から水を排出したと考えられる。

なお、石垣でも北石垣は盛土の外面を石で覆った貼石垣の構造である。基礎盛土の上に層状盛土と外面貼石の施工を行っているが、この部分では堰板柱穴が確認できておらず、詳細な構築方法を明らかにすることはできていない。

3) 城壁外への張り出し

平成 15 年 7 月豪雨災害復旧事業の調査では、城壁の外側に人工的に作り出した可能性のある張り出しや平坦面についても注意が向けられた。具体的には屯水地区 B 区の外側に張り出した平坦面や、谷を挟んだ反対側の尾根の平坦面、北石垣 A 区西側の張り出し等で、ほかに北側外周土塁と北側内周土塁の東側接点の東側の尾根上や、小石垣北方地区、原地区南北の崩落箇所の間や、観世音寺口城門の東側等もその可能性があることが指摘されている。機能としては防衛戦略上の見張り台や横矢掛りなどが想定されるが、朝鮮半島の雉城のような規格的なものではなく、その造成の目的等は今後の課題と言える。

以上、土塁や石垣の構造は各地区の共通性が高い一方、細部については異なる点も見られる。

(2) 城門

城門は、現在までのところ 9 箇所が判明している。それらは大きく南北に分かれるが、これは麓から城へと続く登城路が大きく南北に分かれることに起因する。発掘調査を行っていない城門もあるが、その構造や唐居敷には多様性が見られ、築造時期等に差があったことが考えられる。

同じ城門でも時期的な変遷があったことが明らかなものがある。太宰府口城門や原口城門では 3 時期、観世音寺口城門では 2 時期の変遷が確認され、宇美口城門では、確認された 3 つの唐居敷の形態がそれぞれ異なっていることから、複数回の建て替えがあったことが想定される。このうち太宰府口城門では、Ⅰ期の掘立柱建物からⅡ期の礎石建物へと、その構造が大きく変化している。

城門の幅は、柱穴や唐居敷の柱位置の間隔から、太宰府口城門のⅠ期は 9.0m 程、同Ⅱ・Ⅲ期は 5.25m 程、原口城門のⅠ期は 3.6m 程、水城口城門は 4.7m 程、北石垣城門は 4.1m 程、クロガネ岩城門は推定で 3.8 ～ 4.3m 程と様々である。柱全体の配置が判明しているものは、太宰府口城門のⅠ期が 3 間 × 4 間、同Ⅱ・Ⅲ期、北石垣城門が 4 本柱の 1 間 × 1 間とわずかである。城門の上部構造は不明な点が多いものの、太宰府口城門の場合、接続する城壁の高さが 3m を越えるため、高い構造の建物であったと思われる。2 層以上の建物の場合、上層部が下層部と同じ幅の塔門形式か、上層部が下層部より幅が広い櫓門形式が想定されるが、櫓門形式の場合は柱が城壁の上にも建てられることになる。大野城跡の場合、その部分の柱の有無まで把握できておらず、建物構造の検討は今後の課題と言える。

また、唐居敷も掘立柱用の半円形の刳り込みを持つもの（太宰府口城門Ⅰ期、坂本口城門、水城口城門、北石垣城門、小石垣城門、宇美口城門の一つ）と礎石柱用の掘り込んだ柱座を持つもの（太宰府口城門Ⅱ期、宇美口城門の一つ）があるが、宇美口城門に使用された一つは、方形の柱座を持ち特異である。また、軸掘穴の形状も円形のもの（太宰府口城門Ⅰ期、坂本口城門、水城口城門、原口城門、宇美口城門の一つ）と方形のもの（太宰府口城門Ⅱ期、宇美口城門の二つ、北石垣城門、小石垣城門、クロガネ岩城門）があり多様である。これらのことから、各城門の築造には時期差も想定される（小澤 2018）。

城門と土塁との境界は、調査を行った城門では石積を施している。太宰府口城門では、東側の境界に石積を施し、Ⅱ期からⅢ期への建て替えに合わせて増築を行っている。ほかに、原口

城門や観世音寺口城門、また北石垣城門やクロガネ岩城門でも石積を確認できており、観世音寺口城門では、Ⅱ期に床を石敷にし、内部への通路には石階段を設けている。石敷は原口城門でも確認できており、ほかにクロガネ岩城門でも存在したと思われる。

城門前面についてもその構造は多様である。原口城門や観世音寺口城門は前面が崩落しているため判然としなが、北石垣城門やクロガネ岩城門は、前面に1～2m程の段差が存在するため、城門への進入の際には、段差を乗り越えるための設備が必要な懸門構造であることが明らかである。それに対し、太宰府口城門は、城門への進入部はスロープ状になっている。調査は行われていないが、小石垣城門や宇美口城門などの谷部にある城門もその立地から前面に段差は想定しにくい。

城内に入る際には、上述のように観世音寺口城門では石階段が存在するが、ほかでは真っ直ぐ進めないと思われる箇所も確認している。太宰府口城門の場合、門からの行く手を阻むように掘立柱列が2条存在しており、城内への通路は右側へ曲がり、東側の斜面を登ったものと思われる。またクロガネ岩城門では、城内に斜めに走る石列や溝を確認しており、進入路は左右に分かれることが想定される。そのほか北石垣城門でも、城門を区切る石積に接続すると思われる斜め方向の石積を確認しており、これも城内への進入路の一部を構成すると考えられる。クロガネ岩城門ではそのほかに、土塁に沿って行き来するための犬走り状の平坦面や、城内へ向かうための通路と思われる造作についても一部確認している。城内の通路については、調査を行った事例が少ないが、現在の地形の観察でも土橋状のものが確認できる箇所は多く存在しており、それらの実態解明も今後は必要である。

現在判明している城門の状況は以上だが、南側内周土塁では現在のところ城門が確認できておらず、どこかに存在すると思われる。特に土塁推定線上に窪みや切れ目がある箇所はその可能性が高く、増長天地区西側の内周土塁が切れている箇所は有力な候補と考えられる。ほかにも候補地は存在し、城門の数の確定は、土塁線の位置と合わせて今後の課題と言え、これは各城門の築造目的や役割を考える上でも重要である。北側内周土塁では懸門構造を持つ防御性の高い城門が確認されたが、本来、防御性が重要視されるのは外周土塁であり、築造時期や城門へと至る登城路も含めた検討が必要である。

(3) 建物

城内には、表面観察で確認したものも含めて現在約70棟の建物の存在が明らかになっている。それらは城内各所に群をなし、尾根や斜面を整形した平坦面に築かれている。平坦面は丘陵の高い箇所を切り、低い場所を埋めることで造成していることが表面観察でもうかがえるが、猫坂地区や主城原地区ではトレンチ調査によって、盛土の最下層に焼土や炭化物が存在することを確認しており、刈り取った草木などを燃やして処分し、盛土を施行する前に腐植土を除去して地山を露出させたことが考えられる。盛土は土塁のような手の込んだものではなく、猫坂地区では、地盤の悪い埋めた部分を避けるように建物を建てており、平坦面は単に建物を建てるためではなく、様々な作業空間を確保するためのものでもあったことが想定される。

大野城跡で確認された建物の多くは、これまでに以下のような類型に分けられている（横田1983）。

- ・主城原地区の掘立柱建物跡
- ・3門×5間の礎石総柱建物で外側に掘立柱列があるもの
- ・3門×5間の礎石総柱建物で外側に雨落溝があるもの
- ・3門×4間の礎石総柱建物

以上はこれまでそれぞれ1期～IV期とされ、時期差と理解されている。実際、主城原地区では、掘立柱建物SB0604・SB0605の上に3門×5間の礎石総柱建物SB0606が存在し、ハツ波地区や村上地区、増長天地区では、雨落溝よりも掘立柱列が先行することが確認されている。増長天地区のSB0402では、5～3次調査で雨落溝の外側に掘立柱列を伴う段階の古い雨落溝を確認できたことから、掘立柱列を取り外して雨落溝を内側へ付け替えたことが判明した。また村上地区では、3門×5間の礎石総柱建物が広く造成した箇所に建てられたのに対して、3門×4間の礎石総柱建物は、条件の悪い箇所に存在するものがあることから後出することが考えられ、想定された时期的な序列は妥当と考えられる。

建物の柱間については、これまでも指摘されてきた通り、3門×5間の礎石総柱建物は7尺等間である。それに対して3門×4間の礎石総柱建物の柱間は、7尺を基本としながらもそれに当てはまらないものがあることが指摘されてきた(赤司2014)。3門×4間の礎石総柱建物で7尺等間は主城原地区のSB0619のみであり、主城原地区のSB0610・SB0611・SB0615、猫坂地区のSB0501は7.5尺等間を採用している。また梁行と桁行で異なる柱間を用いる例がかなりあり、猫坂地区のSB502・SB503、村上地区のSB0904、主城原地区のSB0618が「梁行7.5尺、桁行7尺」を、主城原礎石群のSB0602が「梁行7尺、桁行6.5尺」を、村上礎石群のSB0903が「梁行7.5尺、桁行8尺」を採用していると思われる。そのほか、猫坂礎石群のSB0500は7尺と8尺が併用されており、中央2間に7尺、外側2間に8尺を採用する変則的なものである。このように3門×4間の礎石総柱建物の柱間は多様で、これらの差が何に起因するかは現在のところ不明であるが、猫坂地区のSB0501とSB0502の桁方向の柱筋はほぼ通ることから、積極的に時期差を考えにくい。立地等を含めた検討が必要と考えられる。

3門×5間の礎石総柱建物と3門×4間の礎石総柱建物はほかに異なる点がある。礎石列から雨落溝までの距離は、3門×5間の礎石総柱建物は150cm以上離れるものが多いのに対し、3門×4間の礎石総柱建物は100cm以内が多く、軒先の長さに違いがあったことが想定される。また、3門×4間の礎石総柱建物には、主柱の礎石間に小礎石が見られるものが多い。これらは添え用と考えられ、一部は建物入り口の塞に起因することが想定されている(小西・入佐・下原・大淵2018)。

建物の構造について、3門×5間の礎石総柱建物の外側に配された掘立柱列について若干指摘しておきたい。これらは礎石列から概ね6尺離れて建物四周を取り囲むが、細かく見ると、礎石の梁・桁方向の柱筋とはきちんと合わせる傾向があるものの、掘立柱列は多少、柱筋が通らない部分があり、礎石列から外側に6尺という間隔には若干の差が認められ、柱の位置は礎石列を基準にしたと考えられる。

以上の礎石総柱建物は、その構造から大野城の倉庫と想定されるが、城内にはこれらと異なる構造の礎石建物も確認されている。毘沙門地区の礎石建物は内陣を持つ4門×5間のもので、類例から中世の仏殿と想定される。また、広目天地区の礎石建物は、3門×7間の間仕切りの

Tab.3 大野城跡建物一覧

地区名	建物番号 (西)	建物番号 (東)	種類	構造	築年	新行	新行	新行柱間寸法	新行柱間寸法	床版	竪立柱列	備考
八ツ波	SB001	SB001	礎石	軸柱	3間	5間	2.1m (7尺)	2.1m (7尺)	6.3m×10.5m			
	SB002	SB002	礎石	軸柱	3間	5間	2.1m (7尺)	2.1m (7尺)	6.3m×10.5m			
	SB003	SB003	礎石	軸柱	3間	5間	2.1m (7尺)	2.1m (7尺)	6.3m×10.5m			
	SB004	SB004	礎石	軸柱	3間	5間	2.1m (7尺)	2.1m (7尺)	6.3m×10.5m			
	SB005	SB005	礎石	軸柱	3間	5間	2.1m (7尺)	2.1m (7尺)	6.3m×10.5m			
	SB006	SB006	礎石	不明	不明	不明	不明	不明	不明			礎石1個のみ確認
	SB007	SB007	礎石	軸柱	3間	5間	2.1m (7尺)	2.1m (7尺)	6.3m×10.5m			規模は推定
	SB008	SB008	礎石	軸柱	3間	5間	2.1m (7尺)	2.1m (7尺)	6.3m×10.5m			
	SB009	SB009	礎石	軸柱	3間	5間	2.1m (7尺)	2.1m (7尺)	6.3m×10.5m		有	規模は推定
	SB010	SB010	礎石	軸柱	3間	5間	2.1m (7尺)	2.1m (7尺)	6.3m×10.5m		有	
尾花	SB011	SB011	礎石	軸柱	不明	不明	2.4m (8尺)	2.4m (8尺)	不明			
	SB028	SB028	礎石	軸柱	3間	5間	2.1m (7尺)	2.1m (7尺)	6.3m×10.5m			
	SB029	SB029	礎石	軸柱	3間	5間	2.1m (7尺)	2.1m (7尺)	6.3m×10.5m			小礎石あり
	SB041	SB041	礎石	軸柱	3間	5間	2.1m (7尺)	2.1m (7尺)	6.3m×10.5m			
増長天	SB042	SB042	礎石	軸柱	3間	5間	2.1m (7尺)	2.1m (7尺)	6.3m×10.5m			
	SB043	SB043	礎石	軸柱	3間	5間	2.1m (7尺)	2.1m (7尺)	6.3m×10.5m		有	
	SB044	SB044	礎石	軸柱	3間	5間	2.1m (7尺)	2.1m (7尺)	6.3m×10.5m		有	
	SB050	SB050	礎石	軸柱	3間	4間	中央3間: 1.8m (5尺) 外側2間: 1.6m (4尺)	中央3間: 1.8m (5尺) 外側2間: 1.6m (4尺)	6.3m×9.0m			小礎石多い
飯坂	SB051	SB051	礎石	軸柱	3間	4間	2.25m (7.5尺)	2.25m (7.5尺)	6.75m×9.0m			小礎石あり
	SB052	SB052	礎石	軸柱	3間	4間	2.25m (7.5尺)	2.1m (7尺)	6.75m×8.4m			
	SB053	SB053	礎石	軸柱	3間	4間	2.25m (7.5尺)	2.1m (7尺)	6.75m×8.4m			小礎石多い
	SB054	SB054	竪立柱	軸柱	3間	3間	1.95m (6.5尺)	1.4m (4尺)	5.85m×7.2m			
主城原	SB060	SB060	礎石	軸柱	3間	8間	2.4m (8尺)	2.55m (8.5尺)	7.2m×20.4m			石積基礎
	SB061	SB061	礎石	軸柱	3間	5間	2.1m (7尺)	2.1m (7尺)	6.3m×10.5m			石積基礎
	SB062	SB062	礎石	軸柱	3間	4間	2.1m (7尺)	1.95m (6.5尺)	6.3m×7.8m			
	SB063	SB063	礎石	軸柱	3間	5間	2.1m (7尺)	2.1m (7尺)	6.3m×10.5m			
	SB064	SB064	竪立柱	軸柱	3間	7間	2.1m (7尺)	2.15m (6.5尺)	6.3m×17.85m			
	SB065	SB065	竪立柱	軸柱	3間	9間	1.8m (6尺)	中央3間: 1.95m (6.5尺) 両端から2間: 1.8m (6尺) 両端: 1.6m (5尺)	5.4m×16.65m			
	SB066	SB066	礎石	軸柱	3間	5間	2.1m (7尺)	2.1m (7尺)	6.3m×10.5m			
	SB067	SB067	礎石	軸柱	3間	5間	2.1m (7尺)	2.1m (7尺)	6.3m×10.5m			
	SB070	SB070	礎石	軸柱	3間	4間	2.25m (7.5尺)	2.25m (7.5尺)	6.75m×9.0m			規模は推定
	SB071	SB071	礎石	軸柱	3間	4間	2.25m (7.5尺)	2.25m (7.5尺)	6.75m×9.0m			規模は推定
	SB070 ?	SB0615	礎石	軸柱	3間	4間	2.25m (7.5尺)	2.25m (7.5尺)	6.75m×9.0m			規模は推定
	SB078	SB0618	礎石	軸柱	3間	4間	2.25m (7.5尺)	2.1m (7尺)	6.75m×8.4m			
	SB079	SB0619	礎石	軸柱	3間	4間	2.1m (7尺)	2.1m (7尺)	6.3m×8.4m			小礎石あり
	SB080	SB0620	竪立柱	軸柱	3間	7間	2.4m (8尺)	2.04m (6.8尺)	6.12m×16.8m			新行7間は推定 既仕切りあり
村上	SB093	SB093	礎石	軸柱	3間	4間	2.25m (7.5尺)	2.4m (8尺)	6.75m×9.6m			小礎石あり
	SB094	SB094	礎石	軸柱	3間	4間	2.25m (7.5尺)	2.1m (7尺)	6.75m×8.4m			小礎石多い
	SB095	SB095	礎石	軸柱	3間	5間	2.1m (7尺)	2.1m (7尺)	6.3m×10.5m		有	
	SB096	SB096	礎石	軸柱	3間	5間	2.1m (7尺)	2.1m (7尺)	6.3m×10.5m		有	
	SB097	SB097	礎石	不明	不明	不明	不明	不明	不明			小礎石あり
星砂門			礎石	側柱	4間	5間	中央3間: 1.8m (5尺) 外側2間: 1.6m (4尺)	1.8m (6尺)	6.6m×8.0m			内陣を持つ
広日天			礎石	側柱	3間	7間	0.99m (3.3尺)	0.99m (3.3尺)	2.97m×6.93m			両仕切りあり

あるもので、柱間は3.3尺と小さく、中世の小規模な仏殿の可能性が高い。これらは四天王寺の建立以降、四王寺山の宗教活動の場としての機能が強化されていった時代の産物と考えられる。

以上が建物の特徴であり、類型毎の変遷も概ね分かるものの、それぞれの詳細な時期については、出土遺物も含めた検討が必要である。現在のところ、3門×5間の礎石総柱建物は8世紀、3門×4間の礎石総柱建物は9世紀が想定されているが(赤司2014)、3門×5間の礎石総柱建物は、主城原地区の場合、SB0603とSB0601はその位置関係から同時併存は考えにくく、SB0601は石積基礎を持つ点がほかと異なる。石積基礎を伴う礎石総柱建物は、SB0601に先行して3門×8間のSB0600があり、これらの所属時期によって、建物群の変遷や歴史的位置

付けが大きく異なってくる。

そのほか発掘調査は行っていないが、文様塚が出土した前田地区は、大野城跡の中でも重要な箇所と目されている。付近は建物の立地が可能な、造成された平坦面がいくつも存在しており、未だ知られていない建物も存在すると考えられる。

(4) その他

その他の遺構としては、石組遺構や炉跡、土坑墓、埋設遺構、窯、経塚、井戸・池等があり、古代の大野城よりも後出する時期のものが多いと思われる。

ただ、炉跡については古代の烽に關係する遺構の可能性もある。中でも北石垣の上に存在する SX075 やその周辺の焼土を伴った遺構は、時期比定が難しいものの、眺望の良さからも大野城に關係する可能性があり注意が必要である。これまでに古代山城では、同様の遺構は注意されており、岡山県の鬼ノ城では、城内最高所で径 1m 程の被熱赤化した箇所があり、狼煙場跡の可能性が指摘されている（総社市教育委員会 1999）。炉跡については、ほかに猫坂地区や村上地区、主城原地区等でも建物より後出するものが多く確認されているが、性格等はよく分かっていない。

石組遺構についても性格は不明瞭だが、八ツ波地区に存在するものは、概報時から墓の可能性が指摘されている。墓として確実なものは、石は伴わないものの、太宰府口東方地区の南側外周土塁に隣接する人骨が出土した土坑墓が挙げられる。

経塚は調査した事例が少ないものの、これまで多数の経筒が出土していることから、かなりの数があつたことが想定される。四王寺山は、九州北部における経塚の一大拠点として知られているが、現在も山中には不自然に盛り上がる高まりが存在し、さらに多くの経塚が存在することが想定される。墓や経塚等の存在は、四王寺山での宗教活動が盛んになっていったことをよく示している。

そのほか、時期が不明なものに窯跡や井戸・池が挙げられる。窯跡はいずれも 2～3m 程の小さな地下式の平窯であり、炭窯としての用途が想定される。類例是那珂川市の尼寺遺跡群で多数見つかっており、中世に遡る可能性が指摘されている（九州歴史資料館 2017）。

井戸で調査が行われたのは、広目天地区に存在するケイサンの井戸のみである。石積部分は後世の補修と思われるが、当初の掘削が古代に遡る可能性もある。井戸の周囲は大きな窪地になっており、同様の窪地としては増長天地区にある鏡ヶ池が挙げられる。鏡ヶ池は現在も水を湛え信仰の対象となっている。類似する窪地はほかに、鏡ヶ池の北西や持国天の名がある箇所に見られるが、築造時期は明らかでない。いずれも四天王に関する地名がある箇所に存在するのは興味深いところである。

(5) おわりに

以上、これまでの大野城跡の発掘調査で判明した遺構について、その特徴をまとめたが、古代の山城から中世を主体とする宗教活動を示すものまで、長期間に及ぶ様々な遺構の累積があることが判明した。大野城や四天王寺、またその他の宗教活動の実態を考えるためには、それら遺構の変遷を明らかにする必要がある、出土遺物を含めた検討が必要である。

大野城については、築城期の施設として城壁や城門が想定されるが、建物については主城原地区のごく一部の建物が想定されているにすぎず不明な点が多い。また、多くの礎石建物群は8世紀以降の築造が考えられ、類型によって時期差が想定されるが、それぞれの詳細な築造時期は明らかになっているとは言い難い。また城壁についても修築の痕跡が確認され、城門も時期差が想定されるが、それらの変遷の実態も現在のところ不明瞭である。これらは大野城全体の機能の変遷とも関わり、検討の際には各施設間の関係性にも目を配る必要がある。現在大野城跡はうっそうとした木立に覆われているが、当時は視界が開けていたはずであり、視認性の観点も必要になる。また、大野城の変遷は基肆城や水城、また大宰府政庁及び周辺官衙等の変遷とも連動していることが想定されるため、それらの実態も含めた検討が必要である。

そのほか、四天王寺（四王院）についても、その場所や構造、また機能や変遷については不明な点が多い。これらの課題については、出土遺物の報告と合わせて、次巻の報告書で再度検討を行い、課題を整理することにした。

参考文献

- 赤司善彦 2014「古代山城の倉庫群の形成について—大野城を中心に—」『東アジア古文化論攷』2 中国書店
- 小澤佳恵 2014「大野城跡第40次・46次・49次調査出土炭化物の年代測定—土壘中出土炭化材の年代—」『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅷ平成24・25年度』九州歴史資料館
- 小澤佳恵 2018「大野城の統治—城門からみた大野城の機能とその変化—」『大宰府の研究』高志書院
- 九州歴史資料館 2017『五ヶ山田』福岡県文化財調査報告書第258集
- 小西龍三郎・入佐友一郎・下原幸裕・大淵博文 2018「大野城増長天地区の建物」『大宰府の研究』高志書院
- 総社市教育委員会 1999『総社市埋蔵文化財調査年報9』
- 横田義章 1983「大野城の建物」『大宰府古文化論攷』上巻 吉川弘文館

Ono-jo mountain fortress I

Contents

Chapter I Preface

- (1) A special historic site,the Ono - jo mountain fortress
- (2) Research history of Ono - jo mountain fortress
- (3) Excavation progress
- (4) Excavation organisation

Chapter II Location and environment

- (1) Natural environment
- (2) Historical environment

Chapter III Excavation outline

- (1) Survey area and name of remains
- (2) Excavation outline

Chapter IV Features discovered

- (1) Ramparts
- (2) Castle gates
- (3) Post - built structures
- (4) Other remnants

Summary

This volume is the Archaeological features section of a comprehensive report on the excavation of the ruins of Ono-jo mountain Fortress, which has been conducted by the Fukuoka Prefectural Board of Education and Kyushu Historical Museum since 1971.

The ruins of Ono-jo mountain fortress are one of the oldest and largest ancient mountain castles in Japan, and in ancient times, along with the Mizuki Fortifications and Kii-jo mountain Fortress, played an important role in the defense of Dazaifu. In later years, religious facilities were also built, and in the Middle Ages, it played a role as a place of worship.

The excavation did not reveal all of the ramparts lines, but the structure and construction method of the earthen and stone ramparts were revealed. In addition, a new castle gate was discovered, and the actual changes in some of the castle gates were revealed.

In addition, it was found that there were about 70 large size foundation stone building and dug standing pillar buildings within the castle, and their size and structure were also clarified.

The results of these excavations have accumulated knowledge about the role and importance of Ono Castle, but many challenges remain in restoring the changes in the facilities.

During the castle construction period, ramparts and gates were constructed, but only some of the buildings have been confirmed and many points remain unknown. Many of the stone - foundation buildings are thought to have been constructed after the 8th century, and although differences in construction period are thought to exist depending on the type, the exact period of each has not been determined.

Traces of repairs have also been confirmed on the ramparts and it is assumed that there are gates from different periods, but the timing of changes to these facilities is also unclear.

In addition, there are many unknowns about the location, structure, function and changes of Shitenno-ji Temple (Shioin), which was built later. We would like to reexamine these issues in the next volume of the report, along with a report on the excavated artifacts.

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2120261
登録年度 6	登録番号 0004

大野城跡 I

—総括報告書 遺構編 上巻—

令和7（2025）年3月31日

発 行 九州歴史資料館
福岡県小郡市三沢 5208－3
印 刷 株式会社 瞬報社
福岡県福岡市中央区天神2丁目10番7号

